

2016 年度 根力育成プログラム

プロジェクト実習  
活動報告書

2017 年 3 月

茨城大学人文学部

## 巻頭言

人文学部長 佐川 泰弘

茨城大学人文学部は、いろいろな「学び」の場を用意してきました。

入学した一年生が最初に学ぶ教養科目には、英語や未修外国語、人文科学や社会科学の講義、主題別ゼミナールなどがあります。二年生からは専門科目を学び始め、九コース（人間科学、歴史・文化遺産、文芸・思想、言語コミュニケーション、異文化コミュニケーション、メディア文化、法学・行政学、経済学・経営学、地域研究・社会学）での講義や演習等に加え、学部共通科目と呼ばれる授業も多くあり、その内の一つが「プロジェクト実習」です。

2011年度以来、茨城大学では学生の就業力育成支援を目指す教育プログラム「根力（ねぢから）育成プログラム」を展開してきました。PBL技法に基づく授業「プロジェクト実習」は同プログラムの中核に位置づけられています。PBL（Project Based Learning）技法とは「課題解決型学習」とも訳され、昨今その教育効果の高さが注目されているアクティブ・ラーニングの一つです。

社会の現状を分析し、課題を見つけ、その課題を解決するため主体的に行動する。自分の意見を発信し、他人の意見を丁寧に聴き、異なる価値観を持つ人たちとチームを組んで課題に取り組む。そのような“社会人”を育てることが「プロジェクト実習」の目標です。

この授業は、人文学部生だけでなく、教育学部や理学部、さらに単位互換協定を結んでいる茨城キリスト教大学、常磐大学の学生も一緒に学んでおり、授業がまさに一つの“社会”となって、互いに切磋琢磨する場となっております。直近の四年間で、のべ189名が「プロジェクト実習」を履修しました。

茨城大学人文学部は、未来を見据えて成長していきます。「プロジェクト実習」授業運営をご支援くださっている地域の皆様の日ごろのご尽力に深く感謝申し上げますと共に、大学で四年間を過ごして巣立っていく若者たちの成長をうながす本授業自体がこれまでどのように“成長”し、現在どのような姿となっているか、ここに謹んでご報告いたします。

# はじめに

神田 大吾

初めて「他者」と出会う場所。それがプロジェクト実習である。

高校まで、クラスにいるのは自分と同じ人ばかりだった。年齢が同じ、住んでいる場所も同じ県内で、同じ一つの教室で学んでいる。かくのごとく学校は同質社会だが、大学は違う。年上の先輩や県外出身者と机を並べ、入れ代わり立ち代わり、週に一度の授業でしか会わない。学習環境が激変し、新一年生は誰しも戸惑う。そして二年次にプロジェクト実習を履修すると、環境はさらに変わる。キャンパス外での活動に伴い、大学の外の世界で生きている人たちと知り合うことになるのだ。社会の第一線で働いているおとなや、幼い子供と接することになる。立場も違えば、考えも感覚も自分とは全く異なる人たちと、どのように意思の疎通を図ればよいのか・・・

プロジェクト実習の活動はチーム単位である。四月最初の授業で初対面の人とチームを組む。活動テーマは同じでも、描くイメージは十人十色の他者同士が個性の違いを感じつつ、少しずつ距離を近づけながら、キャンパスの外に出ていく。かくして学生は大学の内と外と、異なる二つの世界の他者と一緒に活動することで、自らのコミュニケーション能力を鍛えていくのである。

プロジェクト実習を履修する学生は皆が皆、年度の半ばに「つらい」とか「たいへんだ」とこぼす。しかし一年が終わってみれば、チームメンバーと外部の協力者の方々に惜しみない感謝の言葉を述べる。多くの他者に助けられ、「自分は一人ではない」と実感したからだ。社会人になれば誰しも否応なく体験することを、一足早く在学中に経験した若者たちの成長の記録として、本報告書をお目通しいただければ誠に幸いである。

# 目次

## 巻頭言

## はじめに

## 目次

### I : プロジェクト実習の概要と 2016 年度の授業改善

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| 1 : プロジェクト実習の位置づけと枠組み | 3 |
| 2 : 2016 年度の授業改善      | 3 |

### II : プロジェクト実習と高大連携 ー連携の新段階を目指してー

- |                        |    |
|------------------------|----|
| 1 : 高大連携の「二つの波」とその目指す所 | 11 |
| 2 : プロジェクト実習の設計と高大連携   | 11 |
| 3 : 催事参加型の実績と課題        | 12 |
| 4 : 教育プログラム組込型の実績と課題   | 14 |
| 5 : 直接参画型の実績と課題        | 15 |
| 6 : 連携の新段階を目指して        | 22 |

### III : チーム別活動報告

- |                         |     |
|-------------------------|-----|
| 1 : プロジェクト実習 2016 年度の運用 | 25  |
| 2 : カフェ×まちづくりチーム        | 31  |
| 3 : さとみ・あいチーム           | 47  |
| 4 : E-girls チーム         | 75  |
| 5 : Domaine MITO チーム    | 97  |
| 6 : コミュニケーションチーム        | 137 |
| 7 : こみっとフェスティバルチーム      | 163 |

<b>IV：先進地実地研修</b>	
1：趣旨	195
2：痛恨の片肺運用	195
3：先進地実地研修（近郊） 2016年度産学連携ツーリズムセミナー	196
4：御礼ならびに今後に向けて	214
<b>V：年度末活動報告会</b>	
1：趣旨と経緯	217
2：2016年度活動報告会のテーマ設定とその理由	217
3：2016年度活動報告会の構成	217
4：ミニ・オープンキャンパス	217
5：ポスターセッション	222
6：活動報告会	223
<b>VI：成果と課題</b>	
1：履修人数を巡って	259
2：履修生の多様化の萌芽	260
3：マンパワー問題	260
4：授業改善 ―「教員による実施」から「学生への浸透」へ―	261
5：リフレクション期間の確保	262
6：成績評価手法の未整備	262
7：「その先」の高大連携を目指して	262
<b>VII：資料編</b>	263

おわりに

後記

# I : プロジェクト実習の概要と 2016 年度の授業改善

- 1 : プロジェクト実習の位置づけと枠組み
- 2 : 2016 年度の授業改善

# I :プロジェクト実習の概要と2016年度の授業改善

鈴木 敦

## 1:プロジェクト実習の位置づけと枠組み

プロジェクト実習は、大学生の就業力育成支援を目的に人文学部で開講されている、通年2単位の専門科目である。その背景となる、茨城大学の就業力育成支援事業と根力育成プログラムについては、神田大吾他編『2015年度根力育成プログラム プロジェクト実習活動報告書』根力育成プログラム小委員会2016年3月刊（以下『2015年度報告書』）第I章を参照されたい。

プロジェクト実習を教育技法の面から説明すれば、アクティブ・ラーニングの中でも最も負荷の高いものの一つとされるPBL（Project Based Learning）技法を軸に、その他の各種技法を盛り込んで展開されている授業である。同授業は、本学を構成する他の4学部に対しては勿論、連携関係にある茨城キリスト教大学・常磐大学・常磐短期大学に対しても、単位互換科目として開放されている。2012年の初開講以来、順次体制を整備・拡充しつつ今年度で5年目を迎えた。2016年度の構成を図1に示す。A～Dの別、スタッフ編・リーダー編・メンター編の別、チーム構成の原則や運営体制等についても、同じく『2015年度報告書』第I章に詳述しているので参照されたい。

図1:2016年度プロジェクト実習の構成

授業科目名		プロジェクト実習 A	プロジェクト実習 B	プロジェクト実習 C	プロジェクト実習 D
テーマ		総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
段階	対象 学年				
根力強化 プログラム	2-4年	プロジェクト 実習A スタッフ編	プロジェクト 実習B スタッフ編	プロジェクト 実習C スタッフ編	プロジェクト 実習D スタッフ編
	3-4年	プロジェクト 実習A リーダー編	プロジェクト 実習B リーダー編	プロジェクト 実習C リーダー編	プロジェクト 実習D リーダー編
根力実践 プログラム	4年	プロジェクト 実習A メンター編	プロジェクト 実習B メンター編	プロジェクト 実習C メンター編	プロジェクト 実習D メンター編

## 2:2016年度の授業改善

2012年度～2015年度の授業改善についても、同じく『2015年度報告書』第I章に記している。ここでは2016年度に新たに行った3件の授業改善についてのみ記す。

### (1)プロジェクト課題提案ポンチ絵の導入

プロジェクト実習は通年科目のため、春のシラバス公表後間もなく履修登録ということになる。このため、履修生数増加のためには新2年生に如何に早くその存在を伝えるかが非常に重要となる。2015年度までは春の人文学部2年生向けガイダンスの際に時間を戴き、授業システムをプレゼンした。しかし、2015年度にプロジェクト実習を履修してきた2年生に尋ねた所、「ガイダンスには出席したが、プロジェクト実習の説明は記憶に残っていない」という答えが続発し、大いに落胆した。思うに、延々と続く春のガイダンスの中で僅かな時間で授業の「システム」を説明しても、実際にどのような活動をするのかがイメージし

にくく、記憶にも残らなかったであろう。

この反省を踏まえて、2016年度はプロジェクト課題のご提案を予定して下さっている学外協力者の皆様に、予め前年度末にフォーム(図2)と記入例をお送りし、これに沿ってご提案内容をポンチ絵にしてご提供下さるようお願いした。

年度末のお忙しい時期にも拘わらず、8件のポンチ絵を戴くことができ、例年よりもはるかに「視覚的に伝わる」ガイダンスができたと自負している。一方で、履修者の増加は微増に留まった。引き続き、工夫を重ねて行く必要がある。

このポンチ絵は、プロジェクト実習の第3・4講「企画プレゼンと質問会」(Ⅲ-1-(3))においてもメイン資料として活用された。授業開始後に学生から提案された3件と合わせ、図3に示す。

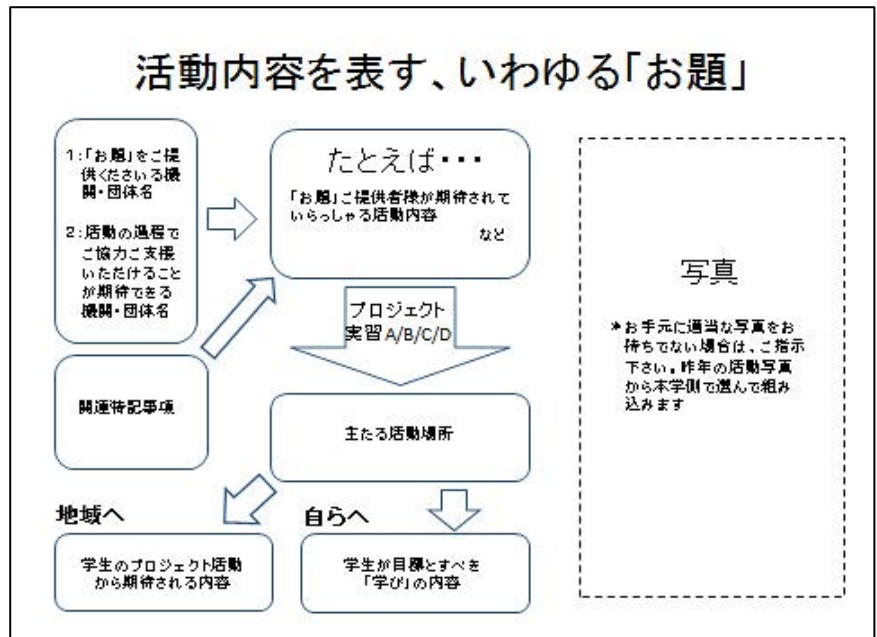
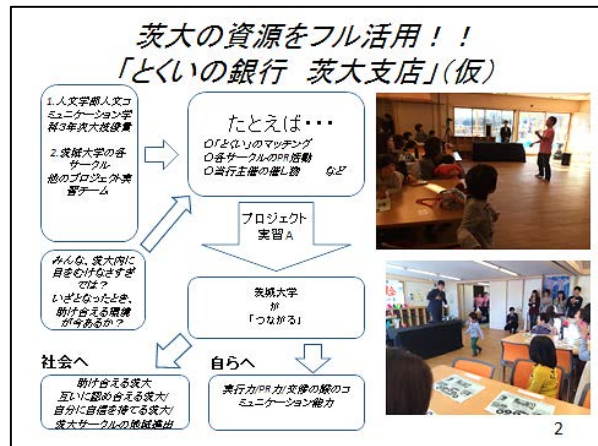
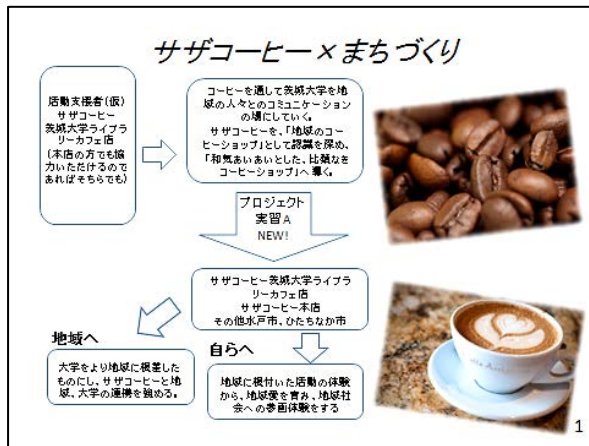


図2: 課題提案ポンチ絵フォーム

図3: 2016年度プロジェクト課題提案 ポンチ絵





### 若者・よそ者で里美の地域おこし活動

**期待されている活動内容**

- ・田川ボタンの栽培と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**プロジェクト実習B Since2012**

**常陸太田市里美地区**

県内各務の  
少子高齢化進捗地域であると  
共に、村おこし熱心なところ

**ユース&トップミーティング**

**期待される協力関係**

- ・田川ボタンの産地と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**新たな協力関係**

- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**地域へ**

- ・6次産業化
- ・観光人口増加
- ・持続可能な地域社会

**自らへ**

- ・需要を知る
- ・地域の課題や課題を知る
- ・里美から日本の「今」を知る

### 異文化交流プロジェクト 2016

**たとえば・・・**

1. 留学生と高校生、大学生が交流するフォーラムを開く など
2. 大学文化祭や小学校で異文化を紹介する など

**プロジェクト実習C Since2012**

**英経リスト報大 (日本人学生と留学生)**

**英経大学の留学生**

**水戸市又は日立市近郊の高校生**

**日立市教育委員会**

**英経リスト報大 (英経会館)**

**地域へ**

- ・高校と大学の連携
- ・異文化理解の促進

**自らへ**

- ・留学生と日本人との交流活動を通して
- ・自らも異文化理解を深める

### 設立した『ワイン造り』株式会社づくりPJ

**たとえば・・・**

- ・ワインメーカー企業立ち上げ・実行
- ・ワインメーカーのニーズ調査
- ・O2C(オーガニック)なワインの経営企画
- ・O2C(オーガニック)なワインの経営企画
- ・O2C(オーガニック)なワインの経営企画

**プロジェクト実習D NEW!**

**泉野会館(水戸市泉野二丁目)**

県内各務産地  
東京都内

**期待される協力関係**

- ・田川ボタンの産地と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**新たな協力関係**

- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**地域へ**

- ・産学連携、産官学連携のモデル化
- ・未来の企業家、起業家育成

**自らへ**

- ・企業経営/起業ノウハウ
- ・実行力/マネジメント力
- ・発想力/お題の知識

### こみっとフェスティバルを開催します!!

**たとえば・・・**

- ・水戸市内で活動するNPO・ボランティア団体などの市民活動団体が、活動展示・発表のほか、相談・体験ができるイベントです!!

**プロジェクト実習D Since2014**

**水戸市内 (各地域での市民活動に参加)**

**期待される協力関係**

- ・田川ボタンの産地と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**新たな協力関係**

- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**地域へ**

- ・産学連携、産官学連携のモデル化
- ・未来の企業家、起業家育成

**自らへ**

- ・企業経営/起業ノウハウ
- ・実行力/マネジメント力
- ・発想力/お題の知識

### 水戸の公共交通を、茨大生が変える

**たとえば・・・**

- ・「あまこに行きたい、さつぱろで行きたい」を考えた生活しています。自分たちの学生生活を豊かにするために、自分のアタマで考え、水戸の未来を創りましょう。

**プロジェクト実習D Since2014**

**水戸市**

または水戸市を中心とする  
県央地域

**期待される協力関係**

- ・田川ボタンの産地と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**新たな協力関係**

- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**地域へ**

- ・自分たちが住む世界を、実際に変えていくための能動的なアクション

**自らへ**

- ・水戸の未来を創造するために自ら「主体的」知識を得ること

### 身近なコミュニケーショントラブルの低減に向けて

**期待される協力関係**

- ・田川ボタンの産地と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**新たな協力関係**

- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**プロジェクト実習D Since2015**

**水戸市**

または水戸市を中心とする  
県央地域

**期待される協力関係**

- ・田川ボタンの産地と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**新たな協力関係**

- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**地域へ**

- ・自分たちが住む世界を、実際に変えていくための能動的なアクション

**自らへ**

- ・水戸の未来を創造するために自ら「主体的」知識を得ること

### 「潤沼」を深化させるのは君だ!

**たとえば・・・**

- ・「特産品(しじみ等)のPR・商品開発
- ・民泊の宿泊者増加にむけて・・・
- ・イベント開催プラン

**プロジェクト実習D NEW!**

**ラムサール条約湿地に登録された「潤沼」の認知度を上げる!**

**期待される協力関係**

- ・田川ボタンの産地と販路開拓
- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**新たな協力関係**

- ・里美の生産・販売戦略の構築と活動
- ・農村に都市の文化＝グリーンツーリズムの発信と実施
- ・わの創想・レスキュー隊
- ・「英検」の合格者を表すプロジェクト
- ・イケてる雇用の構築と実施 など

**地域へ**

- ・6次産業化
- ・観光人口増加

**自らへ**

- ・認知を知る
- ・地域の課題を知り、解決案を考える
- ・インターネットにより美社会との関わりを深める

ポンチ絵と実際に成立したチームの関係は、以下の通りである。

スライド1：カフェ×まちづくりチーム

同5：さとみ・あいチーム

同6：E-girls チーム

同7：Domaine MITO チーム

同8：こみフェスチーム

同10：コミュニケーションチーム

折角ご提案戴いたにも拘わらず不成立となってしまう課題もあり、申し訳なく存じます。

前述の通り、ポンチ絵の発想のスタートは「2年次生への全体ガイダンスにおける効果的な広報」であった。しかし、結果的にプロジェクト実習履修生に対しても、企画プレゼンと質問会の席上で提案の全容



一頃全国的に流行したものの、おしなべて学生の活用度が低迷している電子ポートフォリオと同様に、ルーブリックもまた活用されなければ意味がない。ルーブリック自体の引き続きの改善と併せて、プロジェクト実習の様々なフェーズで、学生が否応なくチェックせざるを得なくなるような「仕掛け」についても工夫していく必要がある。

### (3)社会人特別講義の導入と年度末活動報告会講評の「サンドイッチ」

社会の第一線で活躍されている方をお招きしてお話をして戴く機会は、近年課程内・課程外を問わずかなり増えて来ている。就業力育成支援を第一の目的とするプロジェクト実習においては、とりわけ有効であると思われたが、予算の制約からこれまで実現することが出来ずにいた。

2016年度は幸いにして予算が調達出来たため、漸く実現に漕ぎ着けることができた。プロジェクト実習の特性に鑑み、

- ①コンサルタント系の方に
- ②前期中盤の、チームがプロジェクト構想をまとめた段階でご登壇戴き
- ③「ご講演」と各チームの構想に関する「ご講評」並びにブラッシュアップのために何らかの「ワークショップ的な活動」を組み込んで戴く
- ④さらに年度末の活動報告会にご参加戴き、学生達の「その後」を検証しご講評を戴くことで、チーム発足後間もない段階でのご指導と最終段階でのご指導の「サンドイッチ構造」とし、学生達が年間を通じてご講義の内容を意識し続ける（意識し続けざるをえない）構造とする

という、甚だ欲張った内容で設計した。

設計はしたものの、アカデミック系の経歴しか持たない担当教員にとって「相応しい方を見つけ出して日時指定でご都合を付けて戴く」というのは至難の業である。プロジェクト実習はプロジェクト課題のご提案を始め、学外の沢山の方々に支えられて運用が可能となっているが、ここでも学外協力者にお助けを戴くことができた。2014年度以来毎年プロジェクト課題をご提案戴き、「オトナ会議」(『2015年度報告書』p.9)メンバーとして授業改善にもご参画戴いている、水戸市役所市長公室交通政策課長・須藤文彦様から金原榮先生をご紹介戴いたのである。須藤様のいつもながらのご支援に、篤く御礼申し上げます。

金原先生は、水戸市内で「金原 PR 企画研究所」( <http://www.ichie.jp/> ) を主催され、異業種交流会「一会倶楽部」等を通じて各分野のエキスパートをマッピングしつつ戦略構築、さらにはコーディネートと問題解決に当たられている、正しく今回の設定にうってつけの方である。激務の中、本学側の都合で設定した日時(6月17日第10講ならびに12月10日第26・27講の年度末活動報告会)でのご登壇をご快諾戴けた。加えて、上記③に先立ち6月10日第9講のプロジェクト構想報告会にもボランティアでご参加下さり、それを踏まえての第10講ご登壇という、誠に手厚いご対応を戴け(Ⅲ-1-(3))た。正直、これほどのご対応を戴けるとは思ってもみなかった。金原先生のご支援に、心より御礼申し上げます。

6月17日のご講義では、「あなたのコミュニケーション力を高める継続と1mmへのこだわり」と題する、都合62枚のPPTをご準備戴き、ご講義・ご講評・ワークショップと、極めて密度の濃い90分間をご提供戴いた(図5・6)。



図 5: ご講義



図 6: 学生との活発な遣り取り

ご準備戴いた PPT を全て収載して活用させて頂きたい所であるが、紙幅の制約から果たせなかったことが残念でならない。以下、PPT に沿って主たる項目を列記する。

- ①自己紹介
- ②水戸発・異業種交流会「一会倶楽部」の概要と強さの理由
- ③超一流のプロフェッショナル誕生の背景にある「10,000 時間の努力」を自らの人生にも
  - (i)毎日 3 時間、1 年に 1,000 時間、10 年間継続で 10,000 時間
  - (ii)小さなこだわりを愚直に日々積み重ねる
- ④社会にエントリーしていくアナタに
  - (i)原理原則はいつの時代も同じー具体例提示とガストロフィジック・ワークショップ
  - (ii)選ばれるアナターコミュニケーション能力チェック・ワークショップ
- ⑤「継続」や「こだわり」から導き出されるものによって「自分を知る！」
- ⑥各チームのプロジェクト構想に対する講評とアドバイス  
ー皆さんのプロジェクト構想でクラウドファンディングが成立するか？ー

12 月 10 日の年度末活動報告会では、年末のとりわけお忙しい時期にも拘わらず長時間に亘ってご参加を戴き、プロのお立場から厳しくも暖かいご講評を戴いた (図 7)。ご講評の詳細は、V-6-⑥に収載している。併せてご参照戴きたい。



図 7: 活動報告会にてご講評を戴く

## Ⅱ：プロジェクト実習と高大連携 －連携の新段階を目指して－

- 1：高大連携の「二つの波」とその目指す所
- 2：プロジェクト実習の設計と高大連携
- 3：催事参加型の実績と課題
- 4：教育プログラム組込型の実績と課題
- 5：直接参画型の実績と課題
- 6：連携の新段階を目指して

## Ⅱ：プロジェクト実習と高大連携 ―連携の新段階を目指して―

鈴木 敦

### 1：高大連携の「二つの波」とその目指す所

#### (1) 高大連携の二つの波

この何年か、高大連携の必要性が叫ばれており、高校サイド・大学サイドでの取り組みは勿論、文字通り高校と大学が連携してこの課題について論ずる場も多々設定されるようになった。背景には 2013 年度教育再生実行会議第 4 次提言（ [http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/pdf/dai4\\_1.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/pdf/dai4_1.pdf) ）に基づく、2020 年度の大規模な大学入試改革構想（いわゆる「新テスト」）と、そのバックグラウンドとしての教育方法の大転換、即ち高校・大学におけるアクティブ・ラーニングの全面的な展開がある。高校・大学の双方で従来型の知識獲得型教育から能動的学習への転換が図られ、これとのセットで新テストが準備される中、高大が連携して新体制へのスムーズな対応を目指すという構図である。

しかし、高大連携が叫ばれたのは今回が初めてではない。1990 年代後半からの一時期、高大連携あるいは「高大接続」という名称で、その重要性が盛んに語られた時期があった。この動きの背景にあったのは、大学のユニバーサル化の進展であった。そこから

A：高校生の進路意識の喚起の必要性

B：リメディアル教育を念頭に置いた高校－大学間の情報交換  
といった具体的な課題が抽出され、Aからは

- ①大学教員による出張講義や学内での模擬授業の実施
- ②オープンキャンパスの開催
- ③現役高校生の科目等履修生としての受け入れ

といった活動が、Bからは

- ④高校－大学間での、履修状況に関する情報交換体制の整備
- ⑤大学における、特に理系科目でのリメディアル教育体制の整備

といった取り組みが生まれた。①～⑤は、ややもすれば単発的・断片的な取り組みになりがちという課題を抱えながらも、今やすっかり高校・大学の教育課程の中に根を張ったと言ってよいだろう。

#### (2) 「接続教育」の、その先へ

二つの波に共通しているのは、当たり前ではあるが高校生から大学生への接続点において何が必要かが課題とされたことである。これを大学の側から言えば「高校生たちを学修上の破綻無く大学の教育課程に受け入れていくためには、どういう教育システムを構築すべきか」という点に、議論の軸足が置かれているということである。その意味で、第一の波において「接続教育」という用語が使われ大学側の対応として「初年次教育」が重視されたのは、至極当然のことであったと言えよう。

第二の波においても、「接続点」は非常に重要である。と同時に、第二の波においては「教える」から「学ぶ」への教育方法の根本的な転換への対応という観点から、「接続点」に留まらない、より長いスパンでの教育連携が意識されねばならないだろう。初年次生向けに「接続教育（だけ）」を考える段階から、大学の全学年を対象に「接続教育のその先」をも併せて考える段階が来ている。大学サイドで言えば、2 年次以降の教育プログラムにおいても高大連携の具体的なプログラム構築を模索する段階に来ている、ということになる。

### 2：プロジェクト実習の設計と高大連携

#### (1) プロジェクト実習の設計と現状

プロジェクト実習の位置づけと枠組みについては、第 I 章を参照されたい。

プロジェクト実習は人文学部の開講科目であるが、茨城大学の他の 4 学部の学生に対しては勿論、連携関係にある茨城キリスト教大学・常磐大学・常磐短期大学にも単位互換で開放されている。このような開講

体制で設計した背景には、「所属組織も学年も異なる・様々な専門性を背景とする学生たちが、チームとしてプロジェクトに取り組むことを通じて、化学反応的学びを誘引する」という意図がある（2015年度プロジェクト実習B活動報告会において使用したPPTから、当該部分を切り出して図1に示す）。しかし、過去の履修実績では茨城大学人文学部の学生が殆どを占め、他学部・他大学の学生、特に理系学部からの履修生は極めて限られた存在に留まっているのが現実である。

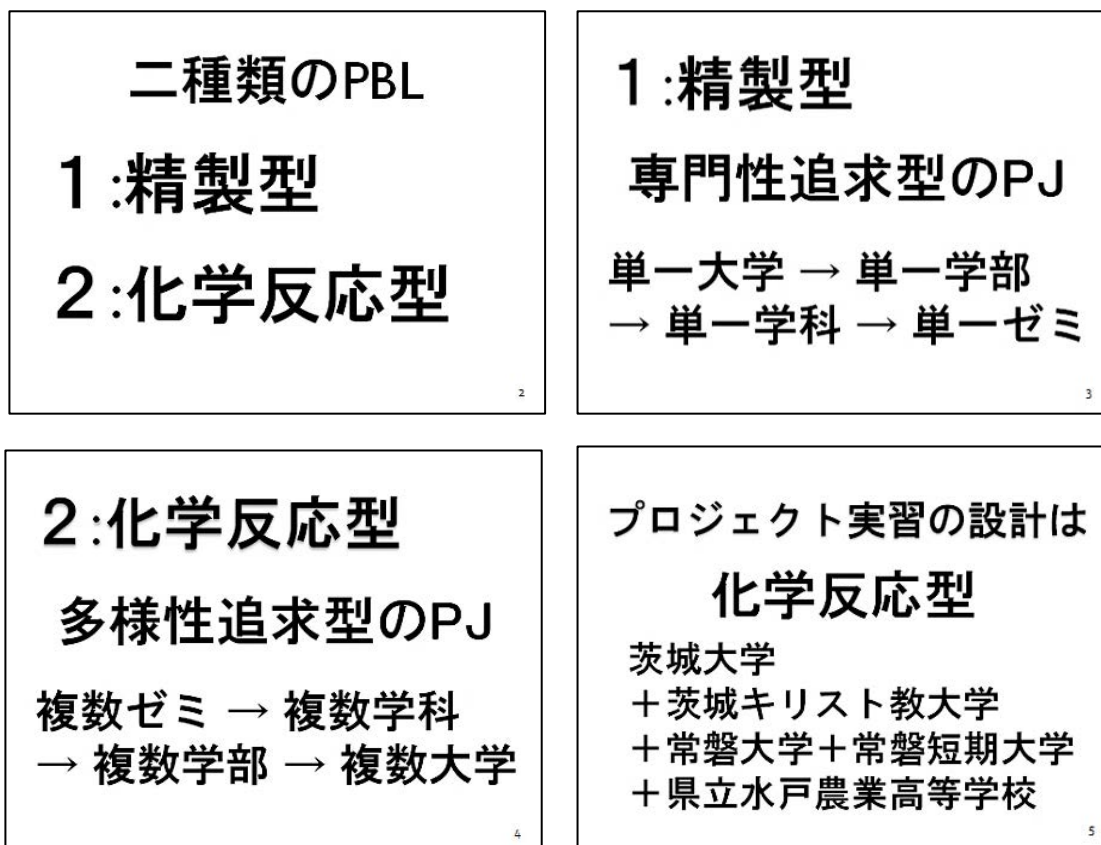


図1:二種類のPBL

## (2)プロジェクト実習における高大連携

「化学反応型」すなわち多様性志向のプロジェクト実習としては、「履修生の所属大学・学部の多様化」と併せて、「高校との連携」を模索することとなる。思うに、プロジェクト実習における高大連携のあり方は、以下の3カテゴリーに区分できよう。

### ①催事参加型

プロジェクト実習の一環として企画した催事に、高校生が「当日の参加者」として加わる

### ②教育プログラム組込型

プロジェクト実習の一環として企画した催事を、高校側が自校の教育プログラムの一つとして組み込み、活用する

### ③直接参画型

高校生がプロジェクト実習の全過程に直接参画し、連携してプロジェクトに取り組む

以下、カテゴリーごとに過去5年間の実績と今後の課題を記すこととする。

## 3:催事参加型の実績と課題

### (1)実績

プロジェクト実習C（国際交流・異文化理解）においては、2012年度の初開講以来、茨城キリスト教大学学生と茨城大学学生の連合チームにより「留学生－日本人学生－近隣の高校生による異文化交流フォーラム」が継続的に開催されてきた。

年度により少しずつ切り口を変えながら現在に至っているが、大枠は以下のようにまとめられよう。

- ①学生チームが企画を立案し
- ②両学に馴染みが深い高等学校に赴き、趣旨説明と協力要請を行い
- ③併せて、両学内で留学生ならびに日本人学生の有志を募り
- ④プロジェクト実習履修の他のチームとも協力して「水戸まちなかフェスティバル」「両学の学園祭」等に出店し、広報と財源確保のための活動を行う
- ⑤②で伺った協力校から参加希望の高校生を紹介して戴き、11～12月頃を目処に異文化交流フォーラムを開催する

学生は②～⑤の間、協力高校で窓口となって下さった先生方と緊密に連絡を取り、細かな段取りを進めて行く。PBL 授業という性格上、教員は極力介入しないように努めるが、節目でのご挨拶や学校間レベルでの調整を要する事柄等については積極的に関与する。フォーラム当日、高校生は概して自校の行事としてではなく自由意志での参加という形を採るが、引率的立場でご参加下さる先生方も多い。結果的に両学のプロジェクト実習担当教員との間で、和やかな情報交換の場が生まれるという副産物も得られる。

## (2)課題

プロジェクト実習 C では、異文化交流フォーラム開催を軸にプロジェクト実習履修生及び担当教員と協力校の先生方との間で連携活動が生まれる。その結果、授業としての第一義的な目的である「就業力育成支援」に有効であることに加えて、プロジェクト実習に高大連携の要素を組み込むという貴重な役割を担ってきた。一方で、高校生の関与という点においては「学生がプロジェクトとして企画したフォーラムに参加する（だけ）」という形である。「留学生・大学生との交流」という催事本来の目的は十分達せられるものの、高大連携としてはそれ以上にはなりにくい。その意味では、前述の「第一の波」で指摘されてきた「単発的・断片的」な取り組みに留まらざるを得ない弱さも併せ持っていると言えよう。

高校生が、フォーラムの企画段階から何らかの形で関与する局面を組み込めれば理想的であるが、これは言うべくして行い難い。大学生より遥かに自由時間が少なく、日々の学習内容もいわゆる「5教科ベースの知識獲得型」である高校生にとって、プロジェクト実習は大学の授業の中でも最も「遠い」存在であると思われるからである。高校生の関与を強めることよりも、寧ろ「催事参加型」の形態はこのままに、これをプロジェクト実習のその他のカテゴリーにも拡大していくことをこそ、目指すべきであろう。

## (3)付記

2011年に、茨城キリスト教大学国際理解センターと本学留学生センターとの間で連携関係が結ばれた。「プロジェクト実習 C」は、これを背景に両センターと繋がり深い学生達が集まって成立したカテゴリーである。今や茨城県全域をカバーする大学・高専コンソーシアムへと発展しつつある両学の連携事業の、出発点となった存在であると言える。スタート時の状況については、鈴木敦他編『2012年度根力育成プログラム プロジェクト実習（スタッフ編）活動報告書』茨城大学人文学部 2013年3月刊（以下『2012年度報告書』）Ⅲ-4「インターナショナルチーム活動報告」を参照されたい。

当初は、プロジェクト実習の他のカテゴリーと同様に、茨城大学人文学部が開講する授業を茨城キリスト教大学の学生が単位互換で履修するという形であった。2016年度は、本学側からの要請にお応え戴き、茨城キリスト教大学においても「プロジェクト実習」という名称で授業を新設して戴いた。加えて、当該授業をご担当の同学文学部長・上野尚美先生に、茨城大学の「プロジェクト実習 C」についても非常勤講師としてご担当戴く形となった。

さらに2017年度からは、茨城キリスト教大学の「プロジェクト実習」履修生と、本学の「プロジェクト実習 C」履修生が、実際の活動において連合チームを作るという形に移行する予定である。事実上の両学共同開講授業であり、大学間連携の実質部分を担うものとして、従来にも増して重要な役割を果たすことになる。2017年度からはまた、新たに茨城キリスト教大学のジャブコ・ユリア先生と本学の杉本妙子先生がこの授業にご参加下さることになっている（V-6-(7)）。お忙しい中、教員にとっても負荷の大きい授業をご担当下さる先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。





## (2)課題

ここに挙げた事例は、プロジェクト実習の催事に参加して下さった高校側の取り組みであり、本学側で設定したものではない。その意味ではこの場に「実績」として記すのは、本来相応しくないだろう。しかしながら、これはプロジェクト実習における高大連携の一つの型として、担当教員としても今後きちんと向き合いコンテンツの一つとして育てて行きたい取り組みであることから、敢えてこのような形で取り上げることにした。

大学に籍を置く者が「プロジェクト実習における高大連携」を考えようとする、つい無意識に「プロジェクト実習に、如何にして高校ないし高校生の参加・参画を求めるか」という方向からばかり考えてしまいがちである。そうすると、前述の通り「大学生より遥かに自由時間が少なく、学習内容も所謂 5 教科ベースの知識獲得型である高校生」にとって、連携は非常にハードルの高いものになってしまう。

しかし、視点を高校側に移し「プロジェクト実習を如何にして高校の教育コンテンツとして活かすか」という方向から考えてみると、状況は一変する。これまでは専ら「来て戴くこと・参画して戴くこと」ばかりを考えていたが、今後は「持って行って戴くこと・活用して戴くこと」についても真剣に考えたい。勿論、相手構わずお願いできることではないが、活動報告会を始めとするプロジェクト実習の催事を高校の教材として活用して戴く方法について、2017 年度以降、現場の先生方とご相談させて戴ければありがたいと思う。

## 5: 直接参画型の実績と課題

高校生がプロジェクト実習の全過程に直接参画し、連携してプロジェクトに取り組む「直接参画型」は、プロジェクト実習における高大連携の理想型である。換言すれば、最も実現可能性の低いオプションであるとも言える。その必要性を意識しながらも実現はハナから諦めていたというのが偽らざる所であったが、茨城県立水戸農業高等学校（以下「水戸農業高等学校」）というパートナーを得て、思いがけず大きな実績を積むことが出来る展開となった。以下、少々長くなるが詳述したい。

### (1)連携開始の経緯

プロジェクト実習が開講 3 年目を迎えた 2014 年 6 月、転機は思いがけない所から訪れた。

かねてよりプロジェクト実習の学外協力者としてご支援を戴いていた、株式会社 JTB 関東法人営業水戸支店・西島佳子様より、水戸農業高等学校食品化学科の新堀俊博先生をご紹介戴いたのである。

プロジェクト実習 B（地域連携・地域貢献）履修の学生チーム「さとみ・あい」は、2012 年度の初開講以来、常陸太田市里美地区の地域振興を目指した取り組みを続けて来た（『2012 年度報告書』及び 神田大吾他編『2015 年度根力育成プログラム プロジェクト実習活動報告書』根力育成プログラム小委員会 2016 年 3 月刊（以下『2015 年度報告書』）ならびに本書Ⅲ-3）。活動の柱の一つとして、同地区の在来作物である「里川カボチャ」のブランド化があり、その一環としてチームメンバーは里川カボチャを使った食品の商品開発に取り組んでいた。学生達は、里川カボチャの特徴にしてブランド化戦略の柱となるものとして、かねてより以下の 5 点に注目していた。

- ①世界企業による農作物種子の寡占が進む中での、「在来作物」としての価値
- ②在来作物の復活と少子高齢化が進む中山間地の振興策というストーリー
- ③日本のカボチャとしては珍しい、ピンク色の果皮
- ④ホクホクとした食感
- ⑤糖度最大 16 度という、フルーツ並みの甘さ

しかし、当然ながら本学人文学部には食品や調理に関する専門知識を持つ教員・学生は存在せず、関係設備も皆無であった。勢い、ブランド化戦略は①②③を軸に構想せざるを得ず、食品としての里川カボチャの本質である④⑤については、重要性は十分自覚しているものの手を出せない状態が続いていたのである。2014 年 7 月 4 日、西島様のお引き合わせで茨城県立水戸農業高等学校に伺い、連携に向けた具体的なお話を始めることができた。

## (2)連携の意義

水戸農業高等学校は、2015年度で創立120周年を迎えた県内屈指の伝統校である。公立の農業高校としては北海道帯広農業高等学校に次いで全国第二位の、約50ha（東京ドーム約10基分に相当）に及ぶ広大な敷地に、食品化学科を始め全8学科の専門的な設備を備えた校舎が点在する「農業教育のスーパーハイスクール」である。生徒はいわゆる「5教科ベースの科目」と共に「農学系教科」を学び、高校生ながら「農」のスペシャリストとしてのトレーニングを受けている。（<http://www.mito-ah.ibk.ed.jp/>）

食品化学科との連携は、上述の「里川カボチャの本質でありながら、プロジェクト実習履修学生にとっては専門外」である④⑤に関して、「専門知識を持つ教員・生徒が、大規模な専門施設を携えてパートナーになって下さる」という、願ってもないお話であった。

加えて、実業高校ならではの「高校での学習がそのまま社会と直結する」というカリキュラム特性は、前述の「入試を中心とした高大の接続点に特化した高大連携」の限界を突破できる可能性を有している。かくしてプロジェクト実習における高大連携としては最もハードルが高いと考えていた「直接参画型」、換言すれば「その先の高大連携」分野において、思いがけず大きな進展を見るに至ったのである。

## (3)連携の経過

以下、時系列に沿って過去3年間の連携実績を略記する。

### [2014年度]

7月4日以降も、直接のご訪問あるいはメールの往復で計画を詰めた結果、2014年度の連携活動の柱として、以下の内容で合意ができた。

①3年生時点の茨城県学校農業クラブ連盟大会プロジェクト発表会での発表を目指し、2014年度の食品化学科1年生有志が、向こう3年間プロジェクト実習Bさとみ・あいチームと連携して活動する

<http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/topics/news/photo/h28/08/0802-3.html>

②以下の4点を連携活動の柱とする。

(i)さとみ・あいチームが取り組む里川カボチャのブランド化プロジェクトの内、特にスイーツの商品開発部分を、水戸農業高等学校食品化学科が直接担当する

(ii)さとみ・あいチームが主催ないし参画する里美地区ならびに水戸市内での催事に、可能な範囲で共同参加する

(iii)水農祭（水戸農業高等学校の学園祭）と茨苑祭（茨城大学の学園祭）において、開発した里川カボチャスイーツの販売を行う（図10・11）の3点を活動の柱とする

(iv)プロジェクト実習B活動報告会で報告を行う

その後さらに、新堀先生からのご提案により、同校農業科の磯野貴志先生・池澤正博先生も、「里川カボチャの水戸農業高等学校農園での比較栽培」というテーマで、来年度以降の連携を構想して下さることになった。

2014年度は、連携の初年度でありかつ実質的な連携活動のスタートが夏からということもあり、万事が後手後手になりがちで、ご迷惑をおかけしてしまった。しかし学生達は水戸農業高等学校にも足軽く伺い、何事につけ生徒達と一緒に活動しようという姿勢が明確だった。生徒達もまた沢山の時間を割いて、里川カボチャの特性を活かせるスイーツを研究し、何種類も試作してくれた（図5）。

スイーツ開発以外にも、さとみ・あいチームメンバーとの里美地区夏合宿、里川カボチャ研究会会長・荷見誠様の畑での草取り・収穫や、開発したスイーツの水農祭・茨苑祭での販売等々、大学生と高校生が一緒になって取り組み、にわか仕立てながら充実した連携活動が展開できた。

2014年度の連携活動のクライマックスとなるプロジェクト実習B活動報告会は、2014年12月7日に里美文化センターで開催された。当日のチラシ・表面の画像を図4に示す。同報告会は「里美から広がる新たな連携の輪」をテーマとし、さとみ・あいチームの活動に連携ならびにご支援を戴いている皆様にご登壇戴いた。以下、ご登壇戴いた順番でご所属（当時）とお名前を記す。

- ・常陸太田市役所少子化・人口減少対策課長 福田洋昭様
- ・新・旧里美地区地域おこし協力隊員 笹川貴吏子様・磯部茉莉様

- ・本学 COC 統括機構 内田聡副機構長
- ・里美ふるさと振興公社代表理事 小林信房様
- ・同・総括支配人 豊田紀雄様
- ・泉町二丁目商店街振興組合 宮本紘太郎様
- ・本学人文学部 澁谷浩一副学部長
- ・里川カボチャ研究会会長 荷見誠様
- ・合名会社山口 山口景司様
- ・内閣官房地域活性化伝道師・総務省地域再生マネージャー 中島淳様

水戸農業高等学校からは食品化学科 1 年生の西島美紀さん・吉井瑞保さん、ならびに農業科の磯野先生が活動報告をして下さった。「知らないおじさん・お婆さん」に囲まれての発表は、高校一年生にとっては大変なプレッシャーであった筈であるが、臆せず、堂々と発表してくれた。生徒たちの PPT を図 5 に、磯野先生の PPT を図 7 に示す。生徒たちがこのプロジェクトのためにいかに努力してくれたかが、ひしひしと伝わってくる内容である。

2014年度  
プロジェクト実習B  
活動報告会

2012年度以来、茨城大学人文学部 PBL 授業プロジェクト実習B「さとみ・あいチーム」は、常陸太田市北部の里美地区を主たる学びの場として、多くの方々のご支援に支えられて活動させて戴いています。お陰様で、様々な方向に新たな連携の輪が広がり始めています。里美地区で3回目の活動報告会となる今回は、学生チームの活動だけでなく、広がる連携の輪の全体像をご報告致します。皆様の御参加をお待ちしております。

**日時** 平成26年12月7日(日) 13:00-16:10  
**場所** 常陸太田市 里美文化センター (一般の参加歓迎)

**茨城大学「プロジェクト実習B」の背景と今後の展開**  
茨城大学キャリア教育部長 鈴木敦

**常陸太田市の支援と今後への期待**  
常陸太田市少子化・人口減少対策課長 種田洋昭

**さとみ・あいチームの軌跡と今年度の活動**  
プロジェクト実習B さとみ・あいチーム

**里美地区地域おこし協力隊の軌跡と今年度の活動**  
行 里美地区地域おこし協力隊 菅川真史子  
理 里美地区地域おこし協力隊 磯部宗利

**地域に学び地域を支える人材教育**  
茨城大学COC統括機構副機構長 内田聡

**ミニ・トークセッション**  
里美ふるさと振興公社 代表理事 小林信房、総括支配人 豊田紀雄  
泉町二丁目商店街振興組合 宮本紘太郎 人文学部副学部長 澁谷浩一

**里川カボチャの復元と里川カボチャ研究会**  
里川町会長 荷見誠

**里川カボチャ焼酎とファーム&キッチン**  
合名会社山口 専務 山口景司

**茨城県立水戸農業高等学校の取り組み**  
水戸農業高等学校教諭 新堀俊博、磯野真志  
生徒 西島美紀、吉井瑞保

**地域に「挑戦」を創出しよう！**  
内閣官房地域活性化伝道師・総務省地域再生マネージャー 中島淳

**PBL 授業とは**  
PBL (Project Based Learning) 技法は、昨今その教育効果の高さが注目されているアクティブラーニングの一種であり、「課題解決型学習」と訳されます。茨城大学では、2010年度以来、学生の就業力育成支援を目指す教育プログラム「戦力 (なぞから) 育成プログラム」の構築を進めており、その中核として PBL 技法に基づく授業を位置づけています。

**会場** 常陸太田市折橋町623  
常陸太田市 里美文化センター  
**主催** 茨城大学人文学部  
常陸太田市  
**共催** 茨城キリスト教大学  
常葉大学  
茨城大学大学教育センター

**お問合せ**  
水戸市文京2-1-1  
茨城大学人文学部 鈴木敦  
☎029-228-8115  
Eメール suzuki@mx.iberaki.ac.jp

図 4: 2014 年度プロジェクト実習活動報告会チラシ (表面)

図 5: 水戸農業高等学校食品化学科生徒による報告用 PPT

里川カボチャ  
～おいしく魅力を引き出そう！～

茨城県立水戸農業高等学校  
食品化学科  
西島美紀 吉井瑞保

商品開発の難しさにぶ・つ・か・る

本当の「里川カボチャ」の魅力って…??

「…甘さ!? …色!? …何!?!」

「初めまして～試食会までの流れ」

月 日	内 容
7月4日	茨城大学 鈴木先生と初対面・趣旨および概要説明
8月4日	茨城大学 さとみ・あいチームと初対面・活動内容説明
8月23日～25日	夏合宿に参加
9月19日	打ち合わせ2回目
9月22日	干しかぼちゃの試作開始
9月30日	かぼちゃのようかんの試作開始
10月1日	かぼちゃのタルトの試作開始 1 回目
10月3日	カボチャのタルトの試作 2 回目
10月9日	かぼちゃのマフィン・スコーンの試作
10月10日	かぼちゃパイの試作

「しさく・シサク・試作…」

「ここから選んでもらおう！」



「試食会～本番までの流れ」

10月12日	試食会（試作品：スコーン・ケンピ・タルト・パイ）
10月19日	カボチャの収穫祭へ参加
10月29日	タイの先生の特別講義（かぼちゃのデザート）
11月4日～7日	カボチャのタルトの試作
11月9日～12日	原材料の価格調査及び原価計算
11月13日	カボチャのタルト作成
11月15日～16日	茨城大学 茨苑祭 水戸農業 水農祭

「たくさんの人に出合ってね…」



「感想…」

- ・入学して早々商品開発をすることとなってビックリした
- ・調理が好きだけでは商品開発ができないことを実感した
- ・大変だったけど充実していた
- ・慌ただしく過ぎて行ってしまった感じ
- ・とっても「甘～い」ことにびっくりした

「考察」





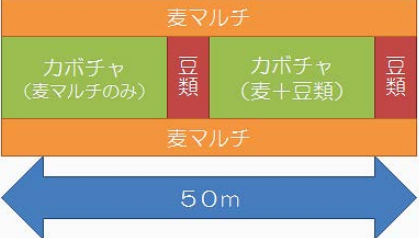





- ・アンケート調査などを実施してより具体的な結果を知る
- ・里川カボチャを利用活用している企業での研修を行う
- ・里川カボチャの商品開発に利用可能な食材を校内で栽培する
- ・長期保存が可能な商品を開発する

図5のスライド8枚目に写っている完成品「カボチャのタルト」は、水農祭・茨苑祭で販売され忽ち完売という大好評を博した。専門知識を持ち、然るべき指導者と生産施設を有するパートナーを得られたことに、改めて感謝の念を強くした次第である。なお、タルトの包装に貼られているシールは、里川カボチャのイメージキャラクターとしてプロジェクト実習履修生の番場有彩さんがデザインした「おさとちゃん」を、同じく履修生の南陽子さんがシール用にデザインしたものである。ハート型を囲んで、水戸農業高等学校と里川カボチャ研究会並びに本学さとみ・あいチームの三者からなる連携の産物であることを、さりげなく盛り込んでいる。スイーツそのものと並ぶ、2014年度の連携の成果物として図6に示す。



図6:水戸農業高等学校—里川カボチャ研究会  
—茨城大学連携 おさとちゃんシール

図 7:水戸農業高等学校農業科・磯野先生の PPT

<h2 style="text-align: center;">野菜専攻2016プロジェクト</h2> <p style="text-align: center;">里川カボチャで何かする？</p> <p style="text-align: center;">by農業科</p>  <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>	<h3 style="text-align: center;">始めに</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>2016（平成28）年度に農業科のルールで野菜専攻はプロジェクト発表を行う（私の着任前に決まっていた）</li> <li>プロジェクトを初めて行う人が中心になる</li> </ul> <p style="color: red;">⇒来年度のうちに発表スライド以外は実行したい（私自身が不慣れなので）</p>  <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>
<h3 style="text-align: center;">栽培品目設定</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>地元産品がよい（那珂カボチャはすでに園芸科でプロジェクトが行われている）</li> <li>できれば、市場流通していない品目</li> </ul> <div style="text-align: center; background-color: #0056b3; color: white; padding: 5px; margin: 10px 0;">             里川カボチャは         </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>地元産品</li> <li>市場流通には不向きな品種</li> </ul> <p style="color: red;">⇒里川かぼちゃは条件に合致</p>  <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>	<h3 style="text-align: center;">プロジェクト内容(予定)</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>里川カボチャと他のカボチャで栽培比較</li> <li>栽培地での比較（里見地区と水農）</li> </ul> <p style="color: red;">⇒収量、糖度 など</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>コンパニオンプランツの活用による労働時間やコストの比較（麦マルチと豆類を活用）</li> </ul> <p style="color: red;">⇒労働時間、コスト、肥料・農薬の使用量</p> <p style="color: red;">※ただし、完全有機で行う予定はない</p>  <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>
<h3 style="text-align: center;">栽培イメージ</h3>  <ul style="list-style-type: none"> <li>圃場内に2か所作る(交雑を避けるため)</li> </ul>  <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>	<h3 style="text-align: center;">圃場の配置</h3> <p>品種ごとに圃場内の離れた場所で栽培する（交雑を避けるため）</p>   <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>
<h3 style="text-align: center;">これからの予定</h3> <p>1月下旬 1年生の選択者が判明（ここでメンバーが決まる）</p> <p>4月 新年度の授業開始(プロジェクト開始)</p>  <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>	<p style="text-align: center;">よろしくお願い致します</p> <p style="text-align: center;">m(_ _)m</p>  <p style="text-align: right; font-size: small;">茨城県立水戸農業高等学校</p>

[2015 年度]

連携も 2 年目となり、1 年目の実績の上に各種催事やスイーツ開発を通じて、さらに活発な連携活動が行われた。また、2015 年度は農業科の生徒有志諸君も活動に加わってくれた (図 8~11)。詳細は、『2015 年度報告書』II-2「さとみ・あい活動報告」、同IV-3「プロジェクト実習 B 活動報告会」を参照されたい。

2015 年度最大の反省点は、2014 年度の中核メンバーと 2015 年度のメンバーとの間で水戸農業高等学校との連携に関する引き継ぎが十全に行われず、2014 年度の連携の拠所であった「高校生-大学生間の直接的な連携活動」が大幅に減ってしまったことである。具体的には、商品開発を水戸農業高等学校側に丸投げしてしまい、生徒たちにあたかも「大学生の下請け」をさせられているかのような感覚を抱かせてしまったことである。

連携のスタートにおいては、全てをゼロから作り上げていくためにどうしても諸事もたつきがちになるという問題があった。しかしこれは同時に、活動の全てのフェーズにおいて大学生が高校生に積極的に働きかけて行く必要があることを意味し、結果的に高校生-大学生の一体感を強めていた。2 年目に入り、連携の大枠が出来上がったことで、学生側に無意識の甘えが生じていたことは否めない。これはまた担当教員である筆者にとっても同様であり、知らず知らずの内に「お任せ」になってしまっていた。体制の安定が作業の効率化と同時に甘えと油断をも招いてしまう危険性については、種々の事例において指摘されていることであるが、果たして先人の轍を踏む結果となってしまった。水戸農業高等学校の生徒諸君に、この場を借りて改めてお詫び申し上げます。



図 8: 2015 年度収穫祭① 3 大学 1 高校揃い踏み



図 9: 2015 年度収穫祭② 試食会



図 10: 2015 年度茨苑祭① さとみ・あいブース



図 11: 2015 年度茨苑祭② 販売した生徒作マドレーヌ

[2016 年度]

引き続き当初の枠組みに沿って、さとみ・あいチームと水戸農業高等学校食品化学科生徒との間で里川カボチャのスイーツ開発と販売をベースとした連携活動が展開された。具体的な活動内容については、本報告書の III-3「さとみ・あい活動報告」を参照されたい。

今年度特筆すべき事は、さとみ・あいと食品化学科との連携が  
 ①プロジェクト実習 A「カフェ×まちづくりチーム」と食品化学科  
 ②プロジェクト実習 D「Domaine MITO チーム」と農業科  
 との間にも広がったことである。

①は、「連携」というよりも「支援」と表現した方が相応しいかも知れない。詳細は、Ⅲ-2「カフェ×まちづくり活動報告」並びに同V-6-(4)「水戸農業高等学校活動報告」に譲るが、まず当初計画が難航していた時点で一度、次いでチームには何ら瑕疵がないにも関わらず連携先のコーヒーチェーンが対応を急変させたことで、プロジェクト崩壊の窮地に追い込まれた時点でもう一度、食品化学科の生徒諸君の支援に救われた。大人でも頭を抱えるような事態に直面したにも拘わらず、短期間でリカバリを果たしたカフェ×まちづくりチームも立派であったが、学生チーム同様にモチベーションを失わせる事態にも拘わらず、最後まで粘り強く協力を続けてくれた食品化学科の生徒諸君の支援があればこそのことである。心より感謝申し上げます。

②は、Domaine MITO チームへのプロジェクト課題提案者である、株式会社 Domaine MITO の宮本紘太郎社長の企画になる、水戸農業高等学校農園でのワイン用ブドウの栽培である。5月27日に農業科の先生方のご指導を戴きながら、農業科生徒、さとみ・あいチームメンバー、Domaine MITO チームメンバーで植え付け作業を行った(図12~15)。2015年度末に設立された株式会社としてのDomaine MITO、ならびにプロジェクト実習D所属のDomaine MITO チームの今後の発展と併せ、数年後が楽しみな新たな連携の芽である。ブドウ苗同様、順調に育って行くことを期待したい。



図 12: 様々な品種のブドウ苗



図 13: まずは農業科生徒の作業を見学



図 14: いよいよ植え付け



図 15: 無事植え付け終了。大きく育て！



2016年度の連携事業最大のトピックは、何と言っても連携が3年目を迎え、当初計画の最初の締めくくりの年を迎えたことである。去る7月26日に茨城県立鉾田農業高等学校を会場に開催された第68回茨城県学校農業クラブ連盟大会プロジェクト発表会では、2014年度の当初計画通り、水戸農業高等学校食品化学科の生徒達がこの3年間の取り組みをしっかりと発表されたと聞く。プロジェクト実習においては、水戸農業高等学校との連携の第一サイクル最終年度ということで、活動報告会のテーマを「高大連携」とし、次のサイクルに向けたスタートと位置づけた。詳細は、第V章を参照されたい。

並行して、2017年度からの連携の第二サイクル突入を睨み、12月22日に水戸農業高等学校に伺って青砥武夫校長先生ならびに新堀先生に2017年度以降の連携継続をお願いした。大学と異なり、数年単位で教員が転勤となる高等学校においては、個人の努力に負う所の大きい事業は常々中断のリスクを孕んでいる。同僚の転勤により、担当内容が大きく変わることも多いと聞く。当該学年を3年間担当され、同じく節目を迎えておられる新堀先生の来年度が非常に気になる所であったが、幸いにして引き続きご協力を戴けることが分かり安堵した。同時に、特定個人のご尽力に依存する部分の多い事業を組織間の事業に高めていく必要性を再認識した。このことは、本学におけるプロジェクト実習の運営体制にとってもそのまま当てはまる。プロジェクト実習の組織的担当体制の整備は2012年の初開講当時から大きな課題であったが、残念ながら丸5年を経過した現在においても依然として課題であり続けている。

## 6: 連携の新段階を目指して

プロジェクト実習は根力育成プログラムを構成する授業であり、開講の第一の目的は学生の「就業力育成支援」である。第一の目的は既に十分果たしているが、本章ではこれに加えてプロジェクト実習が持つ「高大連携を実践する授業」としての機能に着目し、その強化策を考えてみた次第である。

「催事参加型」は、普通高校・実業高校を問わず、最も広汎に高大連携機能を果たすことができるカテゴリーである。

茨城キリスト教大学の「プロジェクト実習」と茨城大学の「プロジェクト実習 C」は、本学プロジェクト実習の基本設計である「就業力育成支援」と「大学間連携」を具現化するものとして、また本学プロジェクト実習に高大連携という要素をも加えるものとして、既に丸5年間に亘る実践経験を蓄積して来ている。2017年度からは、さらに事実上の「二大学共同授業」を実現するものとしても機能することが期待されている（本章3-(3)）。引き続き、プロジェクト実習の牽引役を果たしていつてくれるに違いない。

両学の「プロジェクト実習」「プロジェクト実習 C」に代表される「催事参加型」は、導入が比較的容易であることから、今後はプロジェクト実習 A・B・Dにも広げて行くことを目指したい。従来型の高大連携を担う柱になってくれるものと期待している。その際、例えば「ある催事の枠組みが定まった時点で参加希望の高校生に各種要望を尋ねるアンケートを行う」等、時間的に拘束しない形で高校生の関与の度合いを高めていくことは、試みしてみる価値のあることであろう。それにより「催事<参加>型」から一歩進めて「催事<参画>型」へと深めていける可能性があるからである。

「教育プログラム組込型」もまた、普通高校・実業高校を問わず導入が可能であると思われる。

今年度の活動報告会を通じて思いがけずその可能性に気付くことが出来たカテゴリーであり、この場で多くを書き連ねるには、まだあまりにも日が浅い。2017年度以降、じっくりと構想を練っていきたい。

「直接参画型」すなわち「高校の1~3年生と大学の2~4年次生が年間を通じて活動を共にする」という形は、従来型の「高校と大学の接続点に特化した連携」の、「その先」にある連携形態と言えよう。本章冒頭で述べた通り、この形態は当面実業高校との間でのみ想定しうる限定的なものである。しかし、同じく本章冒頭で述べた通り、高校・大学における授業形態の根本的な変革と、これに対応した入試制度の大幅な改革が推進されつつある現在、比較的近い将来に普通高校との間でもこれに類する連携が可能になるのではないかと期待できる動きも見え始めている(\*)。今後の展開にはなお不確定要素も多いと思われるが、幸運にも得られた水戸農業高等学校との連携を引き続き維持・拡大しつつ、将来のより広汎な連携に向けた実績と授業改善を積み上げていきたい。

\*近隣の例では、2016年4月に常磐大学高等学校に「特進選抜コース」が新設され、新テストへの対応も視野に、地域と連携したアクティブ・ラーニングを柱とする「探究型プログラム」が設定されている。( <http://www.tokiwa.ac.jp/~tokikou/curriculum/ss/index.html> )

## Ⅲ：チーム別活動報告

- 1：プロジェクト実習 2016年度の運用
- 2：カフェ×まちづくりチーム
- 3：さとみ・あいチーム
- 4：E-girls チーム
- 5：Domaine MITO チーム
- 6：コミュニケーションチーム
- 7：こみっとフェスティバルチーム

### Ⅲ:チーム別活動報告

神田 大吾

#### 1:プロジェクト実習 2016 年度の運用

##### (1)履修状況

2016 年度のプロジェクト実習は、茨城キリスト教大学から 4 名、常磐大学から 1 名の参加を得て、6 チーム・総勢 41 名での運用となった。毎年、僅かながらも受講生が増えつつあるのは喜ばしい。引き続き、受講生増加を目指して努力していきたい。

履修学生の氏名と所属については、本章 2～7 の各チーム活動報告の冒頭に記した。

##### (2)授業の構造

「プロジェクト実習」は PBL 授業であり、学生が能動的に学習することを前提としている。このため、

①教員の主導で履修者が一堂に会して行う、通常の「一斉授業」

②学生がチームごとに任意の時間と場所で行う「チーム別活動」

を適宜組み合わせながら運用することとなる。

②は、基本的に教員が同席しない場で行われるため、教員が活動状況を直接把握することはできない。そこで、「活動日」「場所」「参加者氏名」「開始時間と終了時間」「具体的な活動内容」等を定められた書式に従って記入する「議事録・活動記録」を作成し、レナندي（本学の e ラーニングシステム）にアップさせ、これをエビデンスとして教員が点検し、授業時間としてカウントしている。紙幅の制約から全文を掲載することが不可能なため、本報告書では最低限の情報を一覧表にして収載している。授業計画では、第 7、11～12、16～18、22～23、24～25 講を「チーム活動」としているが、実際の活動時期はチームによって前後する。

具体的な活動状況は、次節以降の各チーム報告の「3:活動記録」を参照されたい。

##### (3)授業各回の内容

2016 年度のプロジェクト実習は、シラバスに沿って以下のように運営された。なお、チーム横断的に行われた活動ならびに大学間または高大連携活動（第Ⅱ章）については「活動 1～9」として追記している。

#### 第 1 講:ガイダンス、履修目的の明確化(4 月 15 日)

- ①PPT により、授業の位置付けや特徴を説明した後、ポンチ絵形式で 9 件のプロジェクト課題を提示 (I-2-(1))。
- ②保険加入の確認等、留意事項。
- ③ループリックを紙媒体で配布 (後日、ファイルを学生各自に送信) して説明し、次回 4 月 22 日の授業までに「根力構成要素ループリック」で自己分析し、この授業でどの力(根力)をどのくらい伸ばすかを考え、「個人の達成目標ループリック」(I-図 4)で目標設定(3 項目)しておくよう指示。

#### 第 2 講:自己分析と履修目的の確定(4 月 22 日)

- ①マインドマップの説明。
- ②マインドマップ実習:各人が準備してきた「個人の達成目標ループリック(3 項目)」の内、比重が最も大きい一項目について、実際にマインドマップ(VII-資料 2)を作成。
- ③任意にグループを作って②を互いに披露して、意見交換。
- ④振り返り:③を参考に、「個人の達成目標ループリック」記載の 3 項目について、「項目の選択は適当か?」「各項目の比重は適当か?」等、各人で再検討して完成して次回 5 月 6 日の授業に持参するよう指示。

### 第3～4講:企画プレゼンと質問会(5月6日、13日)

今年度のプロジェクト課題のプレゼン。前述9件に学生有志3件を合わせた12件を二週に分けて提示。発表後は各ブースに分かれる形で、提案者と学生との間で質疑応答。

二回のプロジェクト課題プレゼンを踏まえ、具体的なプロジェクト2つについて、第一希望は400字程度、第二希望は100字程度で「自分がなぜこのプロジェクトに取り組みたいのか」を書いたWord文書を作成し、5月18日までに担当教員にファイル送信するよう指示。

### 第5講:チーム結成と基本的な役割分担(5月20日)

①チーム分け発表～調整：事前提出の文書（前出）を基に、

a：5名以上9名以下なら即OK。

b：10名を超えるプロジェクトは「大チーム-小チーム体制」を指示してひとまず容認。

c：5名に満たないプロジェクトについては、新たなメンバーを勧誘するか、他チームに参加するよう指示。

②役割分担：

a：チームが成立した所から速やかに役割分担作業開始。「最低限、リーダーを確定せよ」と指示。必ず置くのが「リーダー」「副リーダー」「書記」「会計」。他は任意。「渉外」等はチームごとに適宜検討。

b：「事例シナリオ」（Ⅶ-資料5）の説明。

③チームごとに「事例シナリオ」による実習を行い、人間の個性がどのようにチーム活動に影響するかを考えさせた。

### 第6講:プロジェクトの基本構想策定(5月27日)

ブレインストーミングとKJ法（Ⅶ-資料4）を講義した後、この方法を用いてチームごとに基本構想を整理した。

### 第7講:チーム活動

### 第8講:プレ構想報告会(6月3日)

チームごとに活動の素案を報告し、質疑応答が行われた。

### 第9講:構想報告会(6月10日)

前講を踏まえて練り直してまとめた基本構想をチームごとに報告し、質疑応答。その後、金原榮先生から各活動にコメントを戴いた（Ⅰ-2-(3)）。

### 第10講:社会人特別講義(6月17日)

金原先生の講義（「あなたのコミュニケーション力を高める継続と1mmへのこだわりと」）。続いて「皆さんのプロジェクト構想でクラウドファンディングが成立するか？」の観点から、各チーム活動に講評とアドバイスを戴いた（Ⅰ-2-(3)）。

### 第11～12講:チーム活動

### 第13～14講:前期末中間報告会とチームミーティング(7月15日、22日)

二回に分けて、チームのこれまでの活動内容と今後の活動予定を報告し、質疑応答が行われた。その後、チームごとにミーティングを行った。

### 活動1:異文化交流プロジェクト(7月18日)

留学生と県内高校生とが交流する催事を実施した（本章4-(4)）。

#### 第 15 講:前期末リフレクション(7 月 23 日～29 日)

チームごとに分かれ、上記中間報告会を踏まえ、今後の活動内容について議論した。

#### 第 16～17 講:チーム活動

#### 第 18 講:先進地実地研修(近郊)(9 月 23 日)

東京ビッグサイトで行われた「2016 年度産学連携ツーリズムセミナー」を参観した(第 V 章)。

#### 活動 2:水戸まちなかフェスティバル(9 月 25 日)

屋外ブースで活動(ワークショップやワインの販売等)を行った(本章 5-2-(2)、5-4-(3)、7-2-(2)、7-4-(1))。

#### 第 19～20 講:後期キックオフ報告会とチームミーティング(10 月 14 日、21 日)

二回に分けて、第 14 講以降に行われたチーム活動の内容と今後の予定を報告し、質疑応答が行われた。その後、チームごとにミーティングを行った。

#### 活動 3:収穫祭(10 月 15 日)

常陸太田市里川町で里川カボチャ収穫・かかし製作が行われた(本章 2-2-(2)、2-4-(1))。

#### 活動 4:常磐大学学園祭(ときわ祭)(10 月 22 日、23 日)

屋内ブース「さとみ茶屋」を設けて里見地区の魅力発信活動を行った(本章 3-2-(2)、3-4-(5))。

#### 第 21～22 講:チーム活動(企画準備)

#### 第 23～24 講:チーム活動(企画本番)

#### 第 25 講:チーム活動(企画リフレクション)

#### 活動 5:茨城大学学園祭(茨苑祭)(11 月 12 日、13 日)

屋内ブースを設けて展示やワークショップ等を行った(本章 5-2-(2)、5-4-(4)、7-2-(2)、7-4-(3))。

#### 活動 6:豊作祭(11 月 19 日)

渡里市民センターで里川地区ならびに里川カボチャを PR する催事を行った(本章 2-2-(2)、2-4-(2)、3-2-(2)、3-4-(7))。

#### 第 26～27 講:年度末活動報告会(12 月 10 日)

人文学部 10 番教室で活動報告会を実施した(第 V 章)。

#### 第 28 講:年間リフレクション第一回(12 月 11 日～1 月 5 日の間)

チームごとに分かれ、上記活動報告会を踏まえて年間の活動を振り返り、成果や反省点を討議した。

#### 活動 7:小学校国際理解活動(12 月 21 日、1 月 26 日)

日立市立水木小学校・久慈小学校において、小学生を対象に外国文化を紹介し、異文化理解を深める活動を行った。

## 活動 8: New Year's party for international students (1月21日)

留学生が日本の正月行事を体験する催事を実施した。

### 第 29 講: 年間リフレクション第二回(1月6日)

一斉授業形式で、授業のリフレクションを行った。併せて、個人レポート(本章 2~7-6)や報告書原稿の執筆についての必須事項等を最終的に確認した。

### 第 30 講: 年間リフレクション第三回(1月7日~16日の間)

チームごとに分かれ、報告書のチーム別活動報告(本章 2~7-1~5)の分担を決め、各自で執筆した後、リーダーが原稿を集約して1月16日までに提出。但し、こみっとフェスティバルチームについては最重要活動である2月25日の「こみっとフェスティバル」の終了後に提出。

## 活動 9: こみっとフェスティバル 2017(2月25日)

イオンモール水戸内原において、市民団体の活動を紹介するイベントの運営(展示物の説明や、出演者のステージ誘導等)に携わった。(本章 7-4-(3))。

### (4) 各チームの活動報告の掲載方針

以下プロジェクト実習 A~D の順で、チーム別の活動報告を「1: はじめに」、「2: 活動の目的・目標と概要」、「3: 活動記録と会計報告」、「4: 活動トピック」、「5: 年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景」、「6: 最終レポート」の順に掲載する。なお、PBL 型インターンシップを特徴とする D (I-図 1) については、インターンシップレポートを「4: 活動トピック」の最後にまとめて載せる。

人文学部が管轄するインターンシップには、学部インターンシップ委員会が実施するものとプロジェクト実習 D の一環として実施するものの二種類がある。それぞれ事後レポートを課しているが、従来は別々の報告書で公刊されていた。今年度からプロジェクト実習 D のインターンシップレポートを、人文学部インターンシップ委員会編『インターンシップ報告書』茨城大学人文学部 2017 年 3 月刊にも(一人 1 ページに圧縮した上で)収載して載せることとなった。これにより、人文学部管轄のインターンシップの全貌が 1 冊の報告書で把握できるようになり、受講を考えている学生にとって便宜となる筈である。予算逼迫からページ数が厳しくなったにもかかわらず、掲載を快諾してくれた学部インターンシップ委員会に御礼申し上げます。

5 のポスターパネルとは、年度末活動報告会におけるポスターセッション(V-5)で使用したもので、各チームの年間の活動をコンパクトにまとめ、来場された方々にご説明するためのものである。セッション当日は A1 判 2 枚組のポスターパネルにした。1/16 縮小で本章 2~7 の各チーム報告文中の 5 に掲げる。

学生は、年間を通じて少なくとも下記 4 回に亘って PPT を使ったプレゼンテーションを行っている。

- ① 構想報告会 (2016 年度第 8・9 講)
- ② 前期末中間報告会 (同・第 13・14 講)
- ③ 後期キックオフ報告会 (同・第 19・20 講)
- ④ 年度末活動報告会 (同・第 26・27 講)

これを順番に並べて通覧すると、各チームの「構想の深化と実績の積み上げ」並びに「プレゼンテーションとしての技量の向上」が看取でき、大変興味深い。紙幅の制約からそのすべてを掲載できなかったのが残念である。この内、④の年度末活動報告会における最終報告のみ、本書 V-6-(3)に収載し、各報告について頂戴した来賓講評(V-6-(6))と同じ章にまとめた。本節のチーム別の報告文と併せてお目通し戴ければ幸いである。

茨城県立水戸農業高等学校の活動については、ポスターパネルと発表 PPT とを、同校新堀俊博先生のご説明 PPT と一括して V-6-(4)に掲載する。

## 2 : カフェ×まちづくりチーム

### プロジェクト実習A

リーダー	: 岩本 有彩	茨城大学人文学部社会科学科	2年
副リーダー	: 栗原 将也	同 上	2年
書記	: 坂口 芹菜	同 上	2年
会計	: 跡辺 朱理	同 上	2年
メンバー	: 岩出 夏輝	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年

主担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授  
副担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文学部 教授

2016 年度  
茨城大学人文学部 プロジェクト実習 A  
「カフェ×まちづくりチーム」活動報告

1:はじめに

岩本 有彩

私たちカフェ×まちづくりチームは、茨城大学を、より地域に根差したものにするため、大学をプラットフォームとして、地域のカフェ、地域の方々と結び付けるという目標を立てて今年度から学生発案で発足させたプロジェクトである。常陸太田市特産の里川カボチャを使用し、水戸農業高校食品化学科の生徒様たちのご協力のもと作成したスイーツを、カフェを通じて地域の方々に楽しんでいただく活動を中心に展開してきた。

当初は、県内コーヒーチェーン店とコラボレーションし、地域特産品を使用した四季折々のスイーツやドリンクの開発、また茨城県の伝統工芸品である笠間焼を使用した食器でのドリンクの提供を考えていた。水戸農業高校の生徒様の多大なお力添えのもと、秋の商品開発が進んでいた矢先、企業様側のご判断でコラボレーションできないというご連絡を頂戴し、私たちのプロジェクトは振り出しに戻ってしまう。

しかし、実にたくさんの方々のご協力を賜り、常陸太田市の里美地区での里川カボチャの収穫祭や豊作祭への参加や、笠間市のギャラリー「笠間の家」内併設のカフェでの里川カボチャのスイーツを提供させていただきといったリカバリ策を迅速に投じることができた。その背景には、メンバー6人と少ないながらも、皆仲の良いメンバー1人ひとりの力があつたと強く感じる。

波乱の活動1年目であったが、次年度以降は本年度の経験とこのチームワークの上に、地域の方々との間に築いたネットワークにより、より幅広く活動を展開し、茨城大学の代表として地域に貢献していけることを期待する。



## 2:活動の目的・目標と概要

岩本 有彩

### (1)活動の目的・目標

茨城大学をプラットフォーム的な存在とし、地域と地域のカフェとの交流を深め、大学をより地域に根付いたものとする。

### (2)活動の概要

#### ①里川カボチャ：スイーツ開発

目的：特産品である里川カボチャのおいしさをより多くの人に知って頂く  
地域の方々との交流を深める

内容：里川カボチャ 収穫祭へ参加  
常陸太田市 里美地区の農家様より里川カボチャをお譲り頂く  
水戸農業高校 食品化学科の生徒様のご協力で、里川カボチャのスイーツのレシピを考案していただく

結果：里美地区の方々との交流を深めた

かぼちゃのスイーツ 4種(パイ、シフォンケーキ、ミルフィーユ、タルト)のレシピを頂戴した  
反省：レシピの開発や実際の作成には関わらず、水戸農業高校様の一任になってしまった

#### ②豊作祭 with さとみ・あいチーム

目的：里美地区の方々への感謝の気持ちをお伝えする  
特産品を使用したスイーツを、地域の皆様と楽しむ

内容：豊作祭

里川カボチャのスイーツ(パイ、タルト)作成、試食

結果：常磐大学の地域振興系サークル「祭人」の皆様、さとみ・あいチームの皆様、我々のチームの皆でレクリエーションやスイーツの試食をし、楽しいひとときをもった

反省：今回は作成にも関わることができたが、本チーム内での日程調整がうまくいかず、折角の機会であったがあまり参加人数が確保できなかった

#### ③笠間の家でスイーツ提供

目的：地域のカフェとの連結を図り、かぼちゃのスイーツをより多くの方に楽しんでいただく

内容：笠間市のギャラリー「笠間の家」内併設のカフェにて、オーナー様のご厚意にてかぼちゃのスイーツを提供していただく

結果：12月1日より、かぼちゃのタルト2種を提供開始

### (3)プロジェクトを通して学んだこと

県内コーヒーチェーン店とのコラボレーションが中止になるというハプニングを経験したが、「提携先を変える」という形に迅速にシフトし、活動を継続することに成功した。これは持ち前のチームワークと地域の方々からの幅広いご支援の賜物である。

危機に直面した時に素早く頭を切り替え、次の策へと移ることが重要だと学んだ。

### 3:活動記録と会計報告

#### (1)活動記録

坂口 芹奈

	日時	場所	活動内容	出席者
1	6月1日(水) 14:00~16:30	サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店	プロジェクトの構想についての話し合い	岩本、栗原、跡辺、坂口、肥後
2	6月15日(水) 12:30~13:00	サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店	カフェで提供する商品の考案	栗原、跡辺、坂口
3	7月9日(土) 10:00~13:00	笠間の家	笠間焼を用いた商品提供について話し合い	岩本、栗原、跡辺、坂口、岩出、肥後
4	8月25日(木) 10:00~11:00	水戸農業高校	カフェで提供するスイーツの試作依頼	岩本、栗原
5	9月15日(木) 11:00~12:00	サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店	商品開発について話し合い	岩本、栗原、跡辺、岩出
6	9月16日(金) 14:00~15:30	茨城大学人文棟 B502	提携先に関する話し合い	岩本、坂口
7	9月16日(金) 16:30~17:30	水戸農業高校	提携先に関する話し合い	坂口
8	9月22日(木) 15:00~17:00	水戸農業高校	カフェで提供するスイーツの試食会	岩本、栗原、跡辺、坂口
9	10月7日(金) 12:00~13:00	サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店	さとみあいチームとの豊作祭について話し合い	岩本、坂口
10	10月15日(土) 9:00~17:30	常陸太田市里美地区	カフェ提供のスイーツに用いるカボチャについての相談	跡辺、坂口
11	10月18日(火) 12:00~13:00	サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店	豊作祭、笠間の家での商品提供に関する話し合い	岩本、栗原、跡辺、坂口、岩出、肥後
12	10月22日(土) 10:00~13:00	笠間の家	スイーツ提供に関する話し合い	栗原、跡辺、坂口
13	11月4日(金) 8:50~10:20	茨城大学人文棟 B502	さとみあいチームとの豊作祭に関する話し合い	岩本
14	11月7日(月) 8:30~13:30	常陸太田市里美地区	スイーツ提供に関する話し合い	跡辺
15	11月18日(金) 8:50~10:20	茨城大学人文棟 B502	豊作祭について話し合い	栗原、岩出
16	11月19日(土) 10:00~17:00	大枝宅、渡里市民センター	スイーツの製作と提供	栗原、岩出
17	11月30日(水) 10:00~12:30	笠間の家	提供予定のスイーツ試食、提供に関する話し合い	栗原、跡辺
18	11月30日(水) 15:30~16:15	水戸農業高校	活動状況の報告、今後の活動に関する話し合い	岩本
19	12月1日(木) 15:00~15:30	サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店	店長との活動報告会の発表内容に関する話し合い	跡辺

## (2)会計報告

跡辺 朱理

品名	単価	数量	合計	備考
のりパネ	1,000	2	2,000	12月10日最終報告会で使用

担当教員より補足：ここには学生が考え、チームとして使用した物品購入代のみを載せた。他に、常陸太田里美地区での活動に参加するため、バスをチャーターして大学から往復し、これにかかる費用がチーム予算の大半を占めるが、バスの手配等は教員管轄事項なのでチーム会計報告からは割愛した。

## 4:活動トピック

チーム一同

### (1)里川カボチャ スイーツ開発

常陸太田市里川町荷見誠様宅で開かれたかぼちゃの収穫祭に、本チームのメンバーも参加させていただきました。荷見様は常陸太田市特産の里川カボチャを生産なさっていて、「里川カボチャ研究会」の会長様です。プロジェクト実習Bの「さとみ・あいチーム」の活動に長年ご協力いただいています。



図 1.: 収穫祭での活動



図 2.: さとみ・あいメンバーと一緒に



図 3: 収穫祭記念写真



図 4: かかしが二体完成!

そして、この里川カボチャを使ったスイーツ製作について、水戸農業高等学校食品化学科の生徒様たちからもご協力をいただけることになりました。生徒様たちはとても長い時間をかけて里川カボチャを加工し、レシピを作り、四種類もの「かぼちゃスイーツ」を試作してくださいました。シフォンケーキ、パイ、タルト、ミルクレープです。どれもおいしくいただきました。また、「里川カボチャは糖分がとても高く、普通のかぼちゃで作るのに比べ、砂糖の量が三分の一ですんだ」という興味深い制作話もお聞きました。「砂糖の量が三分の一」は、里川カボチャの魅力アピールにつながるのではないかと感じました。



図 5: お作りいただいたスイーツ



図 6: 真剣な意見交換



図 7: レシピを頂戴しました！



図 8: 水戸農業高校食品化学科の生徒様から頂戴したレシピしおりの表紙



## (2) 豊作祭

「さとみ・あいチーム」の企画のもと11月に行われた「豊作祭」に本チームのメンバーも参加させていただきました。頂戴したレシピをもとにかぼちゃのスイーツを作成し、茨城大学、常磐大学のプロジェクト実習履修生や先生方、また常磐大「祭人」の皆さんにふるまい、楽しい時間をもちました。



図 10: 真剣にスイーツを作成する

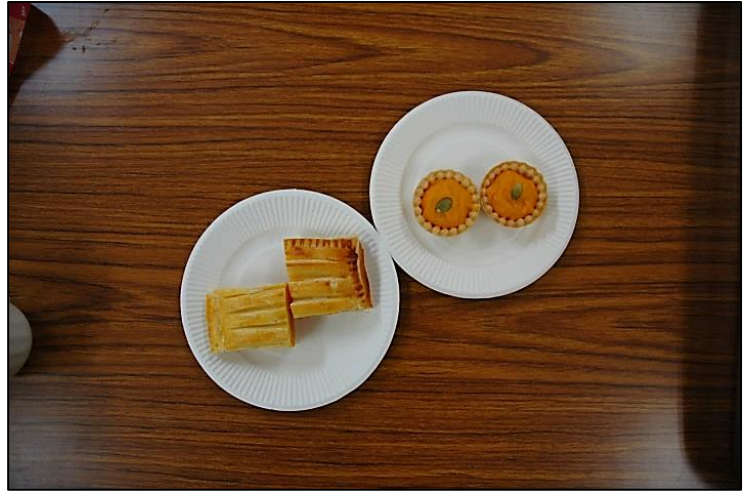


図 11: スイーツ完成



図 12: 開会式



図 13: スイーツ紹介



図 14: 里美のフルコースに舌つづみ



図 15: 豊作祭記念写真

### (3)笠間の家 スイーツ提供

笠間市にある笠間焼ギャラリー「笠間の家」のオーナー田代卓様のご厚意で、「笠間の家」内にあるギャラリー併設の小さなカフェにて、水戸農業高等学校生徒様作成のレシピをベースに、里川カボチャのタルトをアレンジし、笠間焼を使用した食器にて提供していただける運びとなりました。また、里川カボチャを使ったチーズケーキも考案してくださいました。こうして、タルトとチーズケーキを12月1日から2月上旬までご提供くださることになりました。

「笠間の家」( <http://www.city.kasama.lg.jp/page/page005149.html> ) は、日本建築家協会新人賞を受賞(1984年)した、とてもおしゃれな建物です。チーム活動の初期、笠間焼を使ったイベントが何かできないかと模索していた時にアドバイスを戴いた田代様が、今度はスイーツ提供でもご協力くださり、本当に助かりました。篤く御礼申し上げます。また、当初企画の中止にご理解をくださり、レシピのアレンジについても快くご承諾くださった水戸農業高等学校生徒の皆様にも深く感謝申し上げます。



図 16: ギャラリー「笠間の家」田代様とのお話し合い



図 17: 完成したタルト

担当教員より補足:企画が進行途中で突然に中止となったにもかかわらず、このチームはよく立ち直った。一つのプロジェクトを実現にこぎつけた努力を高く評価する。活動報告会で来賓の金原先生からもお褒めの言葉を戴いた(V-6-(6))。窮地に救いの手を差し伸べてくださった田代様に深く感謝申し上げます。また、企画が消えて落胆されたに違いない生徒様を励まし、学生チームとの協力関係の維持にご尽力くださった担任の新堀俊博先生にも篤く御礼申し上げます。

## 5:活動報告会のポスターパネルと発表風景

### カフェ×まちづくりチーム

メンバー 岩本有彩・栗原将也・跡田未理・坂口芹奈  
岩出夏輝・肥後亮志

大学をより地域に根差したものにし、  
カフェと地域、大学の連携を強める。

私たちカフェ×まちづくりチームは、茨城大学を、より地域に根差したものにすため、大学をプラットフォームとして、地域のカフェ、地域の方々を結び付けるという目標を立てて今年度から学生発案で発足させたプロジェクトです。常陸太田市特産の里川カボチャを使用し、水戸農業高校食品科学科の生徒様たちの協力のもと作成したスイーツを、カフェを通じて地域の方々に楽しんでいただく活動を中心に展開しております。

#### 1. 県内コーヒーチェーン店との協力

当初は、某県内コーヒーチェーン店様とコラボレーションさせていただき、地域の特産品を使用した商品開発や茨城の伝統工芸品の笠間焼を使用した食器使用などを企画しました。9月にはスイーツ試作の段階まで進行していましたが、コーヒーチェーン店本社の方より、「自社の商品開発に、外部からの手は入れられないので、一切協力はできない」とのご連絡があり、プロジェクトが振り出しに戻ってしまいました。

#### 2. 里川カボチャを使用したスイーツ開発

常陸太田市特産の「里川カボチャ」を生産しており、同授業の「さとみ・あいチーム」にご協力いただいている、常陸太田市の里美地区の協力農家様のかぼちゃの収穫祭に本チームのメンバーも参加させていただきました。



そして、水戸農業高校食品科学科の生徒様たちにもご協力をいただけることになりました。外活動として里川カボチャを加工し、「レシビを作り、何日もかけて四種類の「かぼちゃスイーツ」を試作していただきました。



#### 1. 豊作祭 参加



同授業「さとみ・あいチーム」の企画のもと11月に行われた「豊作祭」に本チームのメンバーも参加させていただきました。頂いたレシピをもとにかぼちゃのスイーツを作成し、茨城大学、常磐大学のプロジェクト実習履修生や地域振興系サークルの学生の皆さんにふるまい、楽しい時間を持ちました。

#### 2. 笠間の家 スイーツ提供

笠間市にある笠間焼ギャラリー「笠間の家」のオーナー様のご厚意で、「笠間の家」内にあるギャラリー併設の小さなカフェにて、水戸農業高校様作成のレシピをベースに、里川カボチャのスイーツをアレンジし、笠間焼を使用した食器にて提供していただける運びとなりました。12月1日より提供を開始しております。

#### まとめ

当プロジェクトは一年目ということもあり、数々の挫折も経験しましたが、豊作祭や笠間の家でのスイーツ提供など、「提携先を変える」という形に迅速にシフトし、活動を継続することができました。その要因は持ち前のチームワークと、地域の方々からの幅広いご支援の賜物であると考えます。社会では、予測もつかないような危機に直面することがありますが、今回のコーヒーチェーン店様との連携の頓挫は、よい経験になりました。そして、重要なのは、危機に直面した時に素早く頭を切り替え、次の策へと移ることだと学びました。この経験を活かし、次年度以降も、地域に根付いたカフェとの提携など、活動を展開していく予定です。

図 18:ポスターパネル(1/16 縮小)

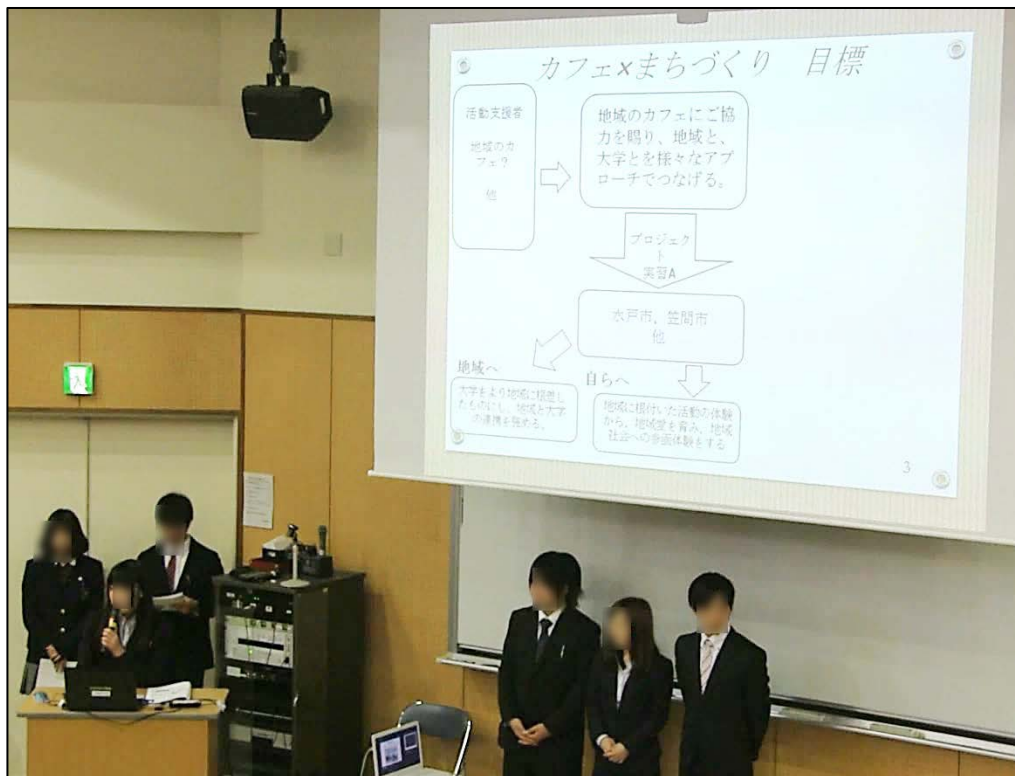


図 19:活動報告会での発表風景



## 6:最終レポート

### まちづくりの輪

#### プロジェクト実習を通して気づいたこと

茨城大学 2年 岩本 有彩

「まちの未来を創るのは若者だ」。私は高校3年生のときに、朝日新聞の読者投稿コーナー「声」に、まちづくりについての意見を投稿した。小さいころから、まちのイベントやお祭りに参加するのが大好きだった私は、そういったイベントに主体的に関われるチャンスをいつも探していた。しかし、高校生の時分はそういったチャンスも少なかったため、私は「地域に根付いた大学に行けば、学生でもまちづくりに貢献できるかもしれない」と考えた。

茨城大学はまさしく「地域に根付いた大学」であり、「地（知）の拠点」として採択されている。入学当初の私の期待は高まった。しかし、普通の座学では、必要な知識は身につけられても、実際にまちへ出てその知識を使って何かをするということではできない。そこで巡ってきたチャンスが、2年次から履修できるこの「プロジェクト実習」であった。

学生が、実際に何かをしようとするときに、学生だけでは本当に何もできない。私たちの年間の活動に、実にたくさんの方々よりお時間とご協力を賜った。甘くない、と分かっているながらも、当初の県内某コーヒーチェーン店様とのコラボレーションが中止になってしまった時には、私の頭も真っ白になってしまったが、コラボレーションに使用しようと開発途中であったかぼちゃのタルト一つにも、たくさんの方々の思いが詰まっている。その思いを届けるのが私たちの役割であり、立ち止まることはできないと思った。

もともと仲の良い友達6人で結成された私たちのチームであったが、年間の活動を通して何度も助けられる場面があった。もともと人に役割を与えるのが苦手な私は、正直に言うところこのプロジェクト実習でも、うまく役割分担ができず、1人でかなりの負担を背負い込んでしまった。しかし、チームが挫折を経験するたびに、メンバーで知恵を出し合ってくれたり、私が体調を崩してしまったときには皆でその穴を埋めてくれたりした。



図:ギャラリー「笠間の家」にて

私の発案から発足した小さなチームがだんだんと大きな輪になっていくのを感じていた。高校生の時の私は、「学生主体」というのは学生が筆頭に立って、というものだと思っていたが、このプロジェクト実習では「学生を中心として大きな輪を作る」というイメージであると思った。また、それほどたくさんの人々に愛されるこの地元、茨城県がもっと好きになった。楽しいことばかりではなかったが、非常に貴重な体験をたくさんさせて頂いた、意義のある1年であったと思う。次年度以降は、今年度の経験とご縁をもとに、より幅広い活動を展開していきたいと思う。

最後に、1年間ともに活動してきてくれたチームメンバー、それから、私たちのチームの活動を支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

## プロジェクト実習を学ぶ意義

### －困難との向き合い方－

茨城大学 2年 栗原 将也

私がこの PBL 授業で学んだことは大きく分けて三つある。先ず一つは、「グループ内の役割分担や情報共有の難しさ」である。これは毎度グループ内の反省でも挙がる事柄なのだが、特に我々のチームではそれが目立っていた。活動の日程が決まっていたとしても、各々の準備がギリギリになってしまう。またそれが疎かになってしまうような場面が多々あったのである。考えられる主な原因としては、「いずれ誰かがやってくれるであろう」という姿勢にあったと感じている。実際に「誰かやってくれる人はいますか」などという文言がチーム内で飛び交うこともあり、ギリギリまで活動に向けて動き出せないという事態を招くことが何度もあったのだ。その結果リーダーに仕事が集中してしまい、チーム全体の活動に好ましくない影響を及ぼしてしまうこともあった。一年間を通して、リーダーに仕事の比重が傾いてしまい、チーム内の役割分担が上手くいかなかったことは私の中でもチーム全体でも大きな反省点となっている。当たり前の話ではあるが、課題に取り組む人が誰もいなければ何も進展しないのである。ここで問題となるのは各々の「責任感の薄さ」であると私は考えた。チームとして協力して進めていこうとしているのに、それぞれが任された仕事に責任が持てなければ意味がないのだ。私はそういった反省から、活動の後半からは積極的に発言をし、意見を求めることや、チームのメンバーに対するアナウンスに努めた。「誰もやらないのなら自ら率先してやってみよう」と意識し、この授業で私は自らの考えを改めるきっかけづくりに成功した。

もう一つは「困難との向き合い方」である。我々のチームでは 9 月に、チームでの活動の存続すら根底から揺るがしかねない出来事が起こった。しかし、そこで活動打ち切りにするわけにもいかないため、「提携先を変えるという方向転換」を強いられる形となった。ほとんどゼロからのスタートとなり、チーム内には動揺が広がり、関係先にも不安を与えることとなってしまった。しかし、チーム内の持ち前の仲の良さやメンバー間でのコ

ネクションを活用し、水戸農業高校食品化学科様より頂いたレシピを県内某コーヒーチェーン様ではなく、以前笠間焼使用の件でアドバイスを頂いた笠間の家様での提供という形で当初の目標と方向転換を達成することが出来た。また、さとみ・あいチームの協力を仰ぎ、豊作祭に水戸農業高校食品化学科様考案の里川カボチャを使ったスイーツの試食コーナーを設定するという形で参加させていただくことが出来た。目標に付随する課題の解決としては他のチームより難しいと感じていたもので、目の前の困難と真摯に向き合いそれを解決するという達成感を味わうことが出来たのは確かである。我々のチームは一年目ということもあり、外部とのつながりがほとんどなかった。そういった状況の中、問題解決の勘所を明確にし、我々が積み上げてきた環境の中で早急なりカバリを達成したというのは非常に大きな成果であり、我々のチームの強みであると思った。大学生として社会に出る前にこのような経験は出来ないと思うので、これを貴重な経験として今後社会に出た際に役立てていきたい。

もう一つは、「協力の喜び」である。前述のように、我々のチームが困難に対峙した際、さとみ・あいチームのご協力があったからこそ豊作祭というイベントにチームとして参加することが出来た。ギャラリー・カフェである笠間の家様のご協力があったからこそ水戸農業高校食品化学科様考案のレシピを地域のカフェで提供することが出来た。この PBL 授業は誰かの協力なしには成り立たないものである。我々のプロジェクトは、県内某コーヒーチェーン様、水戸農業高校食品化学科の皆様、笠間の家様、荷見様、さとみ・あいチーム、そして神田先生、鈴木先生と、数多くの方々の協力のもとで一年間活動することが出来た。チームの外からの協力があったからこそ当初の目標が達成されたということは何にも代えがたい協力の喜びであり、私はこれがプロジェクト実習を履修する意義であると感じている。

## 御縁 ー誰かにつながることー

茨城大学 2年 跡辺 朱理

私がこのカフェ×まちづくりチームへの誘いを受けたのは本当に偶然だった。だが、もともと提携予定だったカフェが好きで、もし少しでも「ひとりの客」としてではなくほかのかかわり方ができるとしたら、それはとても魅力的な誘いなのではないかと思い、迷わず参加の返事をした。初夏にはまだ何も決まり切っておらず、人数が足りずにチームとして成立することすら危うかったこのチームが、なんとかここまで活動を継続できたのは、メンバー各位の周囲の方々・大学の先生方・友人などのご協力を頂けた結果である。私たちのチームは、ほかのチームのように自分たちが主体となって動くチームというよりも、誰かと他の誰かをつなぐ、という活動が多い。だからこそより一層のご理解・ご協力を頂く必要があった。例えば地域のカフェの方には、自分たちの提案の趣旨・内容などを細かく理解し一緒に活動して頂くとした。カフェで提供したいものの案を自分たちで考え、水戸農業高校様にそのレシピの作成をお願いするときも同じように説明させて頂いた。今になって振り返ってみると、きっと概要は伝わっても、私たちがどれだけこのプロジェクト演習に取り組んでいるか、どんな信念をもって活動してきたかということは伝わってなかっただろう。それだけ不安定で具体性に欠けたチームだったと思う。そんな拙い説明でも賛同し惜しみない協力を頂いた方々には心より感謝申し上げたい。ところが、自分の中にあるご協力に対する感謝や、敬意を表すということがまだかなり不出来な部分ではあったと思う。メールでのマナー、言葉遣い、提携先の方へ自分たちから積極的に関わっていく・協力を要請するだけでなくできることは自分たちから協力していく姿勢など、様々な点で反省がすべき点が思い出される。送信したメールを今一度確認すると正しくできたことのほうが少なかったと思う。来年は送る前に文面をよく練り直すという作業を怠らず、丁寧な文面のメールを心がけること、協力してくださる方たちと作業するとき、どうしたら作業しやすいか、今何をしたらスムーズに進むのかを常に考えてながら動いていきたい。そうすることで、相手も私たちもお互いに対していい気持ちで活動できるし、結果よ

りよい結果、例えば来年も今年とほぼ同じ活動を目指す場合、早い段階での実現、よりたくさん種類のメニューの実現、よりハ



図：里川カボチャ収穫祭

イクオリティで高い完成度、今年はメニューをひとつ実現することで精いっぱいで作成できなかったそのメニューの広告・集客など、さらに実りある活動にできることだろう。

特に最後に挙げた広告・集客まで力を入れられなかったことは、ご協力いただいて実現したメニューを生かしていかないという評価にならざるを得ない。これではせっかくご協力いただいた方たちも私たちに協力しようという気持ちが薄くなってしまっても無理はない上に、私たちの活動としてもあまりにも尻すぼみである。もし来年また活動の機会をいただけるとするならば、メニューの開発・提供の依頼だけでなく、本当に私たちが一番主体として行動すべき広告・集客の分野まで気を抜かず行っていきたい。ポスター・フライヤーなどの作成はもちろん、アンケートを設置させていただき、実際に利用していただいた方にご意見をお伺いし、それをもとに改善まで行き、それをサイクル化するところまで成功させたい。ここまで反省点ばかりが上がってしまったが、活動の中で勉強になったことも多々あった。反省点であるメールのマナーなどもチーム発足時より現在は大変改善されたと思うし、先生方もご指摘くださったように、一度失敗してもしっかりと早めのリカバーができたということは私たちカフェ×まちづくりチームの強みとして誇るべきことであると感じている。そのリカバーが可能となったのも、私たちの努力というより、私たちが繋がっていた方たちのおかげという他にないのである。私たちだけではできないことも、だれかと協力すれば可能になるのだということを身をもって理解できたいい経験になった。これからもご縁を大切にすること、つまり人との繋がりを大切にすることを続けていきたい。

## プロジェクトを通して

### ーチーム活動の難しさー

茨城大学 2年 岩出 夏輝

今回のプロジェクトを通して、社会というものをとても身近に感じることができたと思います。大学に入ってから、社会人の方の講演を数多く聞いたり、インターンなどにも行きました。それらは大変勉強になりましたが、与えられた課題をこなすということに終始している感覚がありました。自ら企画し行動することで責任も伴ってくるというところがこのプロジェクトの一番大きなポイントだと思います。いわゆる PDCA を回していくことで企画の成功は得られると思います。

企画書というものも人生で初めて作りました。自分たちの企画の意図、協力してほしい内容の詳細、企画による双方へのメリット。実際に会って話すのではなく、文字だけで伝えなければいけないので、魅力が伝わる表現や内容の事細かな説明がポイントでした。結果的には先方のスケジュールもあり実現することはできませんでしたが、大変勉強と経験になったと思います。

そして今回最も重要に感じたチームでの活動について。私は正直チームの中であまり活躍できたとは思いません。なぜそうなってしまったのか。ひとつは 6 人いるチームの中で予定を合わせることが難しかったことです。誰かの予定に合わせて誰かが参加できないというのは当たり前ですが、チーム活動においては一番の障害でした。この障害を乗り越えるためには、この日だけは絶対に集まろうという日を前々から決めておくこと、LINE などを通して現状を報告しあうことなどが有効だと感じました。

もう一つは、リーダーなど頼れる人間に頼ってしまうことです。チームではそれぞれ役割分担があります。この役割に惑わされてはいけないと感じました。私はチームの中で自己委譲する際の役割がありませんでした。そうするとなんとなくではありますが、リーダーや副リーダー、書記など肩書のある人のほうが上に思っ

ています。そこが大きな勘違いだったと思います。今思えば、前半の講義の中で先生がこのことを指摘しておられたように思います。肩書はあくまで肩書であって、プロジェクトの活動に移ってしまえば、その肩書では処理しきれないほどのやるべきことがあり、その中で自分の得意と生かした役割を見つけていかなければならなかったと反省しています。

最後に、活動をしてきた中で、1年という期間はとても短く感じました。さとみ・あいさんはもう 5 年くらい続いています。本来それが普通なのではないかと思えます。活動の中で、はじめは何もなかった状態から、多くの方々とつながり、活動の幅が増え、おそらくこのまま続けていけばどんどん広がっていくと思います。だからこそ 1 年は短いしもったいないと感じます。そういう意味でも、協力してくださった方々に感謝をしたいと思っています。



図：豊作祭

## 7:おわりに

栗原 将也

当プロジェクトは一年目ということもあり、数多くの挫折を経験してきたが、このチームのメンバーや関係者の方々だからこそ成しえたものは大きいとメンバー全員が感じていることと思う。何もかもが初めての経験であったため、様々な艱難の中、それぞれが頭を抱えた日々もあったことであろう。しかし、地域の方々からの幅広いご支援とご声援により、一年間様々な課題を乗り越え、設定した目標に向けて進んでいくことが出来た。それが故に、危機に直面した際のチームワークや地域とのネットワークの大切さを重ねて痛感した。

我々は「地域のカフェと大学を結び、地域愛を育み、地域社会への参画を体験する」ということが活動の目的となっていたが、私自身もこの活動を通して様々な学びを体験し、今まで知らなかった知識や新たな出会いを作る素晴らしいきっかけとなり、地域愛がより一層強まったと感じている。この一年間の活動を通してチーム内の目標だけでなく、個人の掲げた目標との相乗効果によってメンバー一人ひとりが大きく成長することが出来たと強く思っている。

最後にこの場をお借りして、これまでお世話になった皆様方に心より深く御礼を申し上げます。当初お世話になっていた、県内某コーヒーチェーン様、スイーツのレシピの考案や作成でお世話になった、茨城県立水戸農業高校食品化学科の生徒の皆様並びに新堀先生、スイーツの提供や笠間焼に関するアドバイスでお世話になった、ギャラリー「笠間の家」代表田代様、里川カボチャの提供やイベントの企画でお世話になった、荷見様および常陸太田市里美地区の皆様、さとみ・あいチームの皆様、そして最後に我々を一年間温かくご指導して下さったプロジェクト実習の担当教員である神田先生、鈴木先生。多くの方々のお力添えにより、無事一年間このプロジェクトを続けることが出来ました。これらは全て皆様のご支援の賜物と存じます。本当にどうもありがとうございました。

# 3 : さとみ・あいチーム

## プロジェクト実習B

### 大チーム「さとみ・あい」

#### 小チーム「里美の野菜を主体とした魅力発信」

リーダー :	大枝 俊貴	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	3年
副+会計 :	田島 彩花	同上	2年
書記 :	榎田 桃子	常磐大学総合政策学部経営学科	2年
メンバー :	南 陽子	茨城大学人文学部社会科学科	4年
メンバー :	山口 菜穂	同上	4年

#### 小チーム「里美わら納豆プロジェクト」

リーダー :	助川 実咲	茨城大学人文学部社会科学科	3年
書記 :	岩崎 彩	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
会計 :	豊田 琢登	同上	2年
メンバー :	箭内 淳美	茨城大学人文学部社会科学科	4年
メンバー :	山口 未来	同上	4年

主担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文学部 教授  
副担当教員 : 岩佐 淳一 茨城大学教育学部 教授  
副担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授

2016 年度  
茨城大学人文学部 プロジェクト実習 B

「さとみ・あいチーム」活動報告

1:はじめに

大枝 俊貴

茨城大学人文学部プロジェクト実習 B は、地域連携・地域貢献をテーマに活動している。この枠組みの中、私達「さとみ・あい」は結成された。「さとみ・あい」はプロジェクト実習開講初年度に結成されて以来、毎年受け継がれている。今年度で 5 年目の活動となる。初年度より、茨城県常陸太田市里美地区を主なフィールドとして活動している。

茨城県最北端に位置する常陸太田市里美地区は、中山間地域であり、少子高齢化・過疎化がすすむ地域である。現代日本の未来の姿であると揶揄されることもしばしば。この地区は、在来作物の「里川カボチャ」や古民家「荒蒔亭」に代表される誇るべき地域資源・環境資源を有しながら、それらを外部の人を同地区に呼び込むことにつなげられていない側面がある。そこで、学生の視点で地域の魅力を発信することを活動の主軸とした。

2015 年度は、「学生視点での里美地区の PR」「里美地区と自分たちの暮らす水戸市をつなげる」を目標に活動を行った。昨年度は、大チーム「さとみ・あい」の下部チームとして、「さとみ力伝え隊」と「泉美・ゆう」を置いた。それぞれのチームが、ピーク行事を定め、互いに助け合いながらプロジェクトに取り組んだ。「さとみ力伝え隊」は、常磐大学・茨城キリスト教大学・水戸農業高等学校と合同で「里川カボチャ収穫祭」を行った。また、さとみ・あい考案の里美地区 PR キャラクター「おさとちゃん」を使用したグッズの試作を行った。「泉美・ゆう」は、水戸市内の交流施設泉町会館、水戸まちなかフェスティバル、茨苑祭（茨城大学文化祭）での里美を基調としたワンデイカフェを開催した。ワンデイカフェでは、泉町二丁目商店街振興組合・水戸農業高等学校食品化学科・里美ふるさと振興公社協力のもと、里美地区特産品を使用したメニューを提供した。さらに、泉町二丁目商店街と里美地区をつなげることをコンセプトとし、リーフレットの作成に取り組んだ。

2016 年度は、「活動の周知と学外メンバーの拡張」「里美の魅力を実感する」「里美地区地域資源のブランド化の補助」を目的に掲げ活動を行った。活動の前半は、里美地区の視察と観光資源の発掘、実感を主にした。自分たちで行程を設定し、なるべく地域の方々と交流できるよう旅程を設計した。後半は、前半の活動で得た知見を活かし、水戸農業高等学校食品化学科・里美地区ふるさと振興公社の協力のもと、発信するイベントの実施に至った。また、全体を通して、里美倶楽部の皆様、教育学部岩佐淳一教授のご協力のもと、収穫で出るわらを水戸名物わら納豆に使用する「里美わら納豆プロジェクト」を行ってきた。これは、高齢化と機械化で希少となり高騰しているわら納豆用のワラを、学生たちが手刈し、ブランド化していくというものである。今年度はそのモデルケースを作るべく小規模で行った。

今回は、「さとみ・あい」を大チームとして、それを構成する形で小チームを立てた。それぞれ、「里美の野菜を主体とした魅力発信」を軸と置いたチームと「里美わら納豆プロジェクト」を軸と置いたチームに分かれた。構成は、両チームともリーダー編 1 名、スタッフ編 2 名、メンター編 2 名となっている。

チーム全体としての主な活動は次の六つである。

- ①里美満喫デイ
- ②味覚祭
- ③「さとみ茶屋」@ときわ祭
- ④里川カボチャ豊作祭 2017
- ⑤わら納豆プロジェクト
- ⑥すてきな田んぼにキテ ミテ プロジェクト

## 2:活動の目標・概要

チーム一同

### (1)活動目標

「活動の周知と学外メンバーの拡張」

さとみ・あいの活動を学外に周知し、関係先を更に多方面に拡張する。

「里美の魅力を実感する」

メンバー自身が里美地区の観光資源・地域資源を体感し、自身の言葉で語れるようにする。

「里美地区地域資源のブランド化補助」

里美地区の地域資源の周知を目指す。地域資源の売り出し方について考案し、実施する。

### (2)活動の概要

チームはプロジェクト実習 B（地域連携・地域貢献）のカテゴリーに属する。スタッフ編 4 名、リーダー編 2 名、メンター編 4 名の計 10 名で大チームを構成する。本年度で、継続して五年目の活動となる。昨年度と同様、「さとみ・あい」を大チームとして置き、それを構成する小チームとして、里美地区の野菜をベースとしたチーム、里美地区の田んぼをベースとしたチームをそれぞれ置いた。これらの小チームは、それぞれにプロジェクトを設定し、相互にフォローしつつ推し進めた。

以下、主な活動とその概要について述べていく。

#### ※全体での活動

##### ①里美満喫デイ（里美地区視察）

2016 年 5 月 30 日、里川町／大中町にて実施。

里美地区に既に行ったことがあるメンバーが里美地区の一日ツアーを企画。里美地区の地域資源・観光資源の実感を目的とし、里美地区在来作物“里川カボチャ”の植苗体験や魚釣り、温泉など里美を満喫した。

また、里川カボチャ研究会会長荷見誠様から、里美地区の歴史や里川カボチャについての解説を頂いた。さらに、さとみ・あいチームとしての活動を学び、踏襲するべく、昨年度までメンバーとして活動していた OG を招き、勉強会を開いた。

##### ②味覚祭

2016 年 11 月 5 日／6 日、里美ふれあい館イベント広場にて実施。

里美地区で開催された「味覚祭」に参加した。「味覚祭」は、毎年 11 月上旬に里美地区にて「かかし祭」と同時開催されているイベントである。里美地区の特産物の即売会や芸能発表会などが二日間に亘って行われる。今年度は、出店する地域の方々のお手伝いという形での参加だった。交流をさらに深めるとともに、実際に加工、販売に携わることによって、里美地区在来作物「里川カボチャ」の特色等に関して理解を深化させた。

#### ※里美の野菜を主軸とした活動

##### ③「さとみ茶屋」@ときわ祭

2016 年 10 月 22 日／23 日、常磐大学にて実施。

常磐大学の学園祭である「ときわ祭」で、里美地区特産品販売ブースを出店した。「さとみ茶屋」と銘打って、里美の特産品を提供した。里美地区の在来作物「里川カボチャ」を利用したカステラ、里美地区の野菜を使用した「ポテトサラダ」の提供を行った。

ブースの形態として、屋内にて里美地区やさとみ・あいの活動についての展示を行いつつ、飲食スペースを設置した。販売した里川カボチャカステラやポテトサラダは、それぞれ水戸農業高等学校様と里美ふるさと振興公社様のご協力のもと、メンバーも同伴で調理した。また、カステラやサラダを製作する様子を撮影しておき、「さとみ茶屋」内に設けた展示ブースで公開した。



成果の度合いを確認するため、ブース内で食事をされた方々を対象にアンケートを実施した。

#### ④里川カボチャ豊作祭 2017

2016年11月19日、渡里市民センター（水戸市）にて実施。

当初は、里美地区での開催を予定していたが、参加者の足の確保や負担などを考慮した結果、水戸市内にある渡里市民センターを会場とした。ときわ祭にて顔合わせを行ったプロジェクト科目「祭人」の皆様や、プロジェクト実習A「カフェ×まちづくり」チームにも、当日協力を仰いだ。会の主な流れとしては、「開会式」「ワークショップ」「実食コーナー」とした。

「開会式」では、里川カボチャ研究会荷見誠様より頂いた言葉を読み上げた。さらに、里川カボチャを紹介したテレビ番組の上映をおこない、紹介と権威付けを図った。また、豊作を祝うという意味を込め、プロジェクト科目「祭人」様の獅子舞演舞の様子を上映し、その様子について解説を頂いた。

「ワークショップ」では、アイスブレイクとして「地図完成ゲーム」と、里美地区について理解を深化させるべく「里美クイズ」を実施した。

「実食コーナー」は、プロジェクト実習Aの「カフェ×まちづくり」チームにプロデュースしてもらった。彼らは、カフェと地域の連携についてのプロジェクトチームで、今回の趣旨に賛同しプロデュースの要請を快諾いただいた。内容は、里美地区のフルコースとした。里川カボチャのスイーツから、飲むヨーグルト、里美のお米を使ったセルフサービスおにぎりまで、多様なものとなった。

一般の学生の参加を含め、計15名での実施となった。

#### ※里美の田んぼを軸とした活動

##### ⑤おだ掛け（わら納豆プロジェクト）

2016年9月22日、里美倶楽部豊田紀雄様の水田にて実施。

水戸の特産物であるわら納豆の、“わらづと”を作る藁の値段が高騰しているということを新聞記事で知った。同記事によると、高齢化とそれに伴う機械化により、藁の生産が困難になっているという。ここに、大学生が入り込み、収穫・生産ルートの開拓を行うことで、里美地区での藁をわらづと用としてブランド化、モデルケース化しようというもの。これらを「わら納豆プロジェクト」として立案した。位置づけとしては、さとみ・あいという大プロジェクトの下部に位置する小プロジェクトといったところである。

今年度は、学生でおだ掛けを行い、この模様は茨城新聞でも紹介された。このプロジェクトは初年度ということもあり、里美倶楽部様のご協力のもと、小規模におこなった。また、生産ルートの開拓については現在模索中である。次年度以降の本格化を目指している。

##### ⑥すてきな田んぼにキテ ミテ プロジェクト

第一弾 2016年5月30日

第二弾 2016年8月28日、それぞれ大中町にて実施。

里美地区の魅力を“田園風景”という切り口で、若者向けに発信する小プロジェクト。わら納豆プロジェクトを行う上で、並行して行った。

第一弾は、「田んぼの生き物」をテーマとし、写真撮影とSNSへの投稿を行った。第二弾は、「田んぼのある風景」をテーマとし、学生が風景をスケッチした。大学生が田んぼを本気でスケッチする異様な光景を撮影した。これらのスケッチは、上記の「さとみ茶屋@ときわ祭」にて内装として使用した。里美の雰囲気演出に一役買った。

以上の他に、幾度か里美地区訪問や里川カボチャの手入れと収穫を行っている。

### 3:活動記録と会計報告

#### (1)活動記録

梶田 桃子・岩崎 彩

	日時	場所	活動内容	出席者
1	2016年5月24日 9:00~10:15	茨城大学人文学部 C406	今後の方針決定、構想発表会の打ち合わせ、自己紹介	箭内、山口未来、南、大枝、助川、岩崎、田島、豊田、梶田
2	2016年5月27日	水戸農業高等学校	水戸農業高等学校で葡萄の苗木植え	箭内、山口未来
3	2016年5月30日 9:00~18:00	常陸太田市里美地区	荷見氏農地にてカボチャの種まき、振興公社様へご挨拶、里美倶楽部様所有の水田見学	箭内、山口未来、南、大枝、助川、岩崎、田島、豊田、梶田
4	2016年6月10日 10:25~12:15	茨城大学人文学部 C406	中間発表の反省会、今後の活動に関して	助川、田島、岩崎、梶田
5	2016年6月17日 10:30~11:15	茨城大学人文学部 C406	今後の活動に関して、水戸農業高等学校と連携、わらプロジェクトに関して	大枝、助川、田島、岩崎、梶田
6	2016年6月20日 9:00~11:30	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	さとみ満喫Dayに関して	南、大枝、助川、豊田
7	2016年6月22日 13:30~14:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	今後の活動に関して、ときわ祭、里美訪問について	大枝、助川、田島、岩崎
8	2016年6月24日 9:30~10:30	茨城大学人文学部 C406	今後の活動に関して、さとみ満喫Day、ときわ祭	南、山口奈穂、大枝、田島
9	2016年7月1日 9:30~11:30	茨城大学人文学部 C406	水戸農業高等学校との連携に関して	大枝、助川、田島、岩崎、梶田
10	2016年7月8日 8:55~11:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	さとみ満喫Day、わらプロジェクトに関して	大枝、岩崎、田島、梶田
11	2016年7月15日 10:30~12:00	茨城大学人文学部 C406	さとみ満喫Dayに関して、カフェ×まちづくりチームとコラボ提案	箭内、大枝、助川、田島、岩崎、梶田
12	2016年7月17日 9:00~18:00	常陸太田市里美地区	さとみ満喫Day、魚釣り、カボチャ畑で薫敷、常陸太田市教育委員会文化課エコミュージアム推進室大部武史様・井上紗希様のご講演	箭内、南、山口未来、大枝、助川、岩崎、田島、梶田
13	2016年7月22日 10:00~11:30	茨城大学人文学部 C406	今後の活動に関して、道の駅視察の話し合い	大枝、田島、岩崎、梶田
14	2016年7月29日 10:00~11:30	茨城大学人文学部 C406	今後の活動に関して	大枝、助川、田島、岩崎
15	2016年8月5日 9:00~10:50	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	里美訪問の打ち合わせ、収穫祭に関して	大枝、岩崎、豊田、梶田
16	2016年8月28日 9:00~18:00	常陸太田市里美地区	里美地区訪問、道の駅訪問並びにカボチャ畑見学、里川カ	箭内、山口未来、大枝、助川、岩崎、田島、梶田

			ボチャ農家荷見様のお誕生日お祝い	
17	2016年9月11日	常陸太田市里美地区 里美ふるさと振興公社	里美ふるさと振興公社高星様・かよ様と、ときわ祭で販売するポテトサラダの打ち合わせ	大枝、助川
18	2016年9月18日 10:00~13:30	ガスト茨城大学前店	ときわ祭に関して、収穫祭の役割決め	箭内、山口未来、大枝、助川、岩崎、田島、梶田
19	2016年9月22日 9:00~18:00	常陸太田市里美地区	里美倶楽部様所有の田んぼで稲のおだ掛け、里美ふるさと振興公社総括支配人豊田紀雄様のお宅で昼食、茨城新聞社 常陸太田担当長洲光司様の取材を受ける	大枝、岩崎、田島、梶田
20	2016年9月23日	茨城大学人文学部 C406	収穫祭に関して、水戸農業高等学校との連携に関して、ときわ祭に関して	大枝、助川、岩崎、梶田
21	2016年9月27日 13:00~14:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	水戸農業高等学校との連携に関して、ときわ祭で販売するメニュー考案	山口未来、大枝、助川、岩崎、梶田
22	2016年10月3日 18:00~21:00	大枝宅	ポテトサラダの試食	箭内、大枝、岩崎、梶田
23	2016年10月7日 9:00~11:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	ときわ祭に関して、検便、料金回収、水戸農業高等学校との連携に関して	箭内、南、山口未来、大枝、助川、岩崎、田島、豊田、梶田
24	2016年10月12日 16:30~17:45	水戸農業高等学校	カボチャカステラの試食	箭内、山口未来、南
25	2016年10月14日 10:00~11:30	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	最終報告会の役割決め、豊作祭に関して	大枝、助川、岩崎、田島、豊田、梶田
26	2016年10月15日 9:00~18:30	常陸太田市里美地区	カフェ×まちづくりチームと合同訪問、荷見様農地でカボチャ収穫、かかし祭出展の準備、茨城大学大学院農学研究科地域環境科学専攻緑環境システム科学地域計画学研究室木納勇佑様と交流	箭内、山口未来、南、田島、豊田、岩崎、梶田
27	2016年10月19日	常陸太田市里美地区 里美ふるさと振興公社	ポテトサラダの調理	南、山口未来、大枝、助川、岩崎
28	2016年10月21日 8:30~22:00	常磐大学 水戸農業高等学校	ときわ祭の準備、水戸農業高等学校でカボチャカステラの調理	箭内、山口未来、南、大枝、助川、田島、豊田、梶田
29	2016年10月22日 ・23日（ときわ祭 1日目・2日目） 各 8:30~17:00	常磐大学	常磐大学サークル「祭人」様にご挨拶、小笠原尚宏教授と名刺交換、常磐大学プロジェクト科目(常磐大学ファームプロジェクト)担当教員松原	箭内、山口未来、南、大枝、助川、岩崎、田島、豊田、梶田

			哲哉教授と名刺交換	
30	2016年10月24日 9:00~11:00	常磐大学	ときわ祭の後片付け	箭内、山口未来、岩崎、 梶田
31	2016年10月25日 9:30~10:20	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	豊作祭に関して	大枝、助川、豊田、岩崎
32	2016年11月9日 9:30~10:30	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	豊作祭に関して、 茨苑祭の打ち合わせ	大枝、助川、岩崎、梶田
33	2016年11月11日 9:00~18:30	茨城大学	茨苑祭準備日、キャッチコピー制作	箭内、山口未来、南、 大枝、助川、岩崎、田島、 豊田、梶田
34	2016年11月12日 8:30~17:00	茨城大学	茨苑祭	箭内、山口未来、南、 大枝、助川、岩崎、田島、 豊田、梶田
35	2016年11月17日 10:30~12:10	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	豊作祭に関して広報方法や レクリエーション内容	山口未来、大枝、助川、 梶田
36	2016年11月18日 9:00~11:30 15:00~19:00	茨城大学人文学部 C406	カフェ×まちづくりチーム と豊作祭の打ち合わせ、当日 の流れ確認	箭内、山口未来、南、 大枝、助川、岩崎、田島、 豊田、梶田
37	2016年11月19日 9:00~20:00	水戸市 渡里市民センター	豊作祭、収穫された米の脱穀 と分配	箭内、山口未来、大枝、 助川、岩崎、田島、梶田
38	2016年11月20日 9:00~18:30	常陸太田市	常磐大学松原哲哉教授主催 の常磐大学プロジェクト科 目報告会に参加。 名刺交換：中部日本観光開発 株式会社横堀智毅様・実験動 物中央研究所泰順一様	田島
39	2016年12月1日 13:00~14:00	茨城大学	ポスター原稿プリントアウト	大枝
40	2016年12月2日 9:00~12:30	茨城大学	のりパネ作成	大枝、助川、岩崎、田島
41	2016年12月8日 13:00~15:00	茨城大学人文学部	製本作業	大枝、助川、岩崎、田島、 豊田、梶田
42	2016年12月9日 16:00~19:30	茨城大学	最終報告会の会場設営	箭内、山口未来、南、 大枝、助川、岩崎、田島、 豊田、梶田
43	2016年12月10日 8:00~18:00	茨城大学講義棟 10 番	最終報告会	箭内、山口未来、南、 大枝、助川、岩崎、田島、 豊田、梶田
44	2017年1月20日 12:00~13:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	コミットフェスティバルの 打ち合わせ	箭内、山口未来、南、 大枝、助川、岩崎
45	2017年2月25日 8:30~18:00	イオンモール水戸内 原	コミットフェスティバルに 参加	箭内、山口未来、大枝、 助川、岩崎、田島、梶田

## (2)会計報告

田島 彩花・豊田 琢登

品名	単価	数量	合計
養成テープ	261	2	522
のりパネル A1	1,282	2	2,564
クレヨン 12色	648	1	648
DVD	1,624	1	1,624
画用紙 A3	594	1	594
色画用紙 A3	972	1	972
バーガー袋	648	1	648
ラミネート紙 A4	1,317	1	1,317
米袋 1kg 用	622	1	622
		総計	9,511

予算運用の自由度を高めるため、2つの小チームごとの予算を合算して使用した。このため、本報告も大チームさとみ・あいとして行う。

チーム予算支出内訳（小チームごとの予算：40,000円）×2＝80,000円

\*担当教員より補足：ここには学生が考え、チームとして使用した物品購入代のみを載せた。他に、常陸太田里美地区での活動に参加するため、バスをチャーターして大学から往復し、これにかかる費用がチーム予算の大半を占めるが、バスの手配等は教員管轄事項なのでチーム会計報告からは割愛した。

#### 4: 活動トピック

チーム一同

##### (1) 第一回里美地区訪問（里美満喫デイ）

<日時> 2016年5月30日 9:00～18:00

<場所> 常陸太田市里川町、大中町

<活動内容> 2016年度最初の里美地区訪問は、昨年度の活動でお世話になった方々へご挨拶し、新しいメンバーに里美地区を案内した。

主な活動としては、始めにさとみ・あいチーム発足当時から畑をお借りしている荷見誠様・カツ子様宅を訪問した。そこでは今年譲っていただき、使用させていただく里川カボチャの種まきを行った。荷見カツ子様の手料理を昼食としていただき、その後里美地区と里川カボチャの歴史や特徴を学び、今後どのようにPRしていくかを話し合った。

里美ふるさと振興公社様では昨年度お世話になった豊田紀雄様にご挨拶をし、今年から新たに活動することとなる「わらづと納豆」の藁を生産する水田に案内していただいた。水田は教育学部岩佐淳一教授をはじめとする里美倶楽部様からお借りし、そこで今の若者へ向け、農業に関心を持ってもらう活動を行うことにした。



図 1: 里美地区での活動

## (2)第二回里美地区訪問

<日時>2016年8月28日(日) 9:00~17:20

<場所>常陸太田市里川町、大中町

<活動内容> 今回の訪問での主な活動は、10月に収穫予定の里川カボチャの経過観察(図2)と水田に関連した活動である。荷見様宅では7月に藁とマルチを敷いたとき以降の里川カボチャの成長の様子を観察し、カボチャの受粉の様子やすでに実を付けているカボチャを見る事が出来た。水田では、その魅力を発信し若者に農業に対して興味を持ってもらう企画「すてきな田んぼにキテ ミテ プロジェクト」を立案し、農業と若者である私たち自身が水田でふれあうことにより、農業に対する敷居の高さを減少させ、農業に興味を持ってもらうという計画を実行した。今回は第二弾として水田のスケッチを私たちが行い、成果物をのちの活動で展示した。(第一弾は7月に行い、チームメンバーが水田と触れ合う様子を撮影し、SNSで広めるという活動を行った。)

また前回の訪問で訪れることが出来なかった場所、“道の駅ひたちおおた～黄門の郷～”と“うぐいすの郷”を訪れた。(図3)



図2:荷見様宅での経過観察



図3:道の駅ひたちおおたにて

(3)「わらづと納豆」おだ掛け体験

<日時> 2016年9月22日(木) 11:00~16:00

<場所> 茨城県常陸太田市折橋町 里美倶楽部豊田紀様の水田

<活動内容> コンバインによる稲刈りの台頭により減少しつつある「わらづと納豆」のわら。本チームは今年度、里美倶楽部様からのご提案で「わらづと納豆」のわらの生産の一過程、おだ掛けを体験した。おだ掛けとは、刈り取った稲を束ね、くみ上げた木製の柵(おだ・おだあし)に稲の束をかけることで天日干しを行う過程である。

当日の天候は雨天であり、作業は慣れないメンバーには少々過酷なものとなった。しかし、水田をお借りした豊田様とそのご兄弟によりあらかたの作業は終えられ、メンバーはおだあしに稲の束をかける作業を主とした。また、このとき茨城新聞様からおだ掛けの風景を取材していただき(図4)、10月1日の記事に活動を報じていただいた。私たちの今回の活動で「わらづと納豆」の生産が再び活発になることは望めないが、その過程を体験・PRすることで、使用できるわらの不足や「わらづと納豆」の存在・価値を周知させることができた。

本県名産の「わらづと納豆」に使うわらを作るつと、茨城大と常磐大の学生ら

## 納豆向けのわら作り

常陸太田 大学生ら「おだ掛け」



が、常陸太田市折橋町の水田で稲穂を天日干しする「おだ掛け」をした。

おだ掛けする大学生「常陸太田市折橋町」

活動は就職活動中や就職後に役立つ力を身に付けるべく、茨城大文学部が学外と連携し常磐大、茨城キリスト教大の協力を得て取り組んでいる授業の一環。同市里美地区では、地域おこしを目指し、2012年から住民とともに特産の「里川カボチャ」を使った商品開発などを進めている。

わら作りは、稲作農家の高齢化や作業の機械化などでわらづと納豆のわらが不足していることから、今年度新たに始まった試み。学生たちは地元農家の手助けを受けながら、これまで水田の除草作業などに当たってきた。この日はあいにくの雨模様。参加した学生5人はぬかるむ田んぼに足を取られつつ、農家が稲刈り機で刈り取った稲を、一束ずつ丁寧に竹のさおに掛けていった。

今後は出荷に向けて農家や納豆メーカーと調整していく。茨城大3年の大枝俊貴さん(20)は「これをきっかけに、(納豆の)わらが足りないということを知って多くの人に知ってもらえれば」と話した。(長洲光司)

図4:2016年10月1日付 茨城新聞 21面(掲載許可取得済み)



#### (4)第三回里美地区訪問

<日時> 2016年10月15日(土) 9:00~18:00

<場所> 常陸太田市里川町、大中町

<活動内容> 今回は二つの最終企画に向けて里川カボチャの収穫を行った(図5)。今学期は、毎年開催している収穫祭(今回は豊作祭)に加え、常磐大学でのPR活動を行う。また更なる里川カボチャの知名度の向上のため同講義のカフェ×まちづくりチームと協力し、収穫のお手伝いをさせていただいた。収穫を行ったのはさとみ・あいチームがお借りする畑のカボチャではなかったが、のちにそのカボチャを使用した料理を荷見カツ子様よりいただき、その味を堪能した。

また毎年里美ふれあいイベント館で開催される味覚祭・かかし祭に向けてチーム独自のかかしも製作した(図6)。不要となった衣類・装飾品を集めて、竹で作成した骨に飾り付け各チーム1体ずつ出品した。



図5: 収穫作業(左)と収穫した里川カボチャ(右)



図6: 製作したかかし

(5) 「さとみ茶屋」@ときわ祭

<日時> 2016年10月22日(土)・23日(日) 9:00~15:00

<場所> 常磐大学(茨城県水戸市見和1-430-1)

<活動内容> 今回、昨年度とは変更し茨城大学で開催される茨苑祭には参加せず、常磐大学のときわ祭に参加することとなった。理由としては、里美地区のPRを主眼とする中で常磐大学の学生がチームに所属しているため、里美地区の紹介をした展示や里美地区産の食品を使った料理と里川カボチャのスイーツの販売を行うことにより、さらに常磐大学の中で里美地区のPRをすることができないかと考えたためである。その結果、里川カボチャのスイーツを味わった人へのPRや訪れた人との新たなつながりを生むことができた。

販売した里美地区産の食品を使った料理に関しては、里美地区産の食品が使いやすく、加工により食べやすいという案から、ポテトサラダに決定した。製作は里美ふるさと振興公社様に依頼し、共同してメンバーも製作を行った。また、振興公社様のご提案で数種類の味を用意した。里川カボチャを使ったスイーツに関しては、水戸農業高等学校食品科学科様に品目の提案をし、品目の決定・レシピの作成などを依頼した。スイーツはカボチャカステラに決定し、メンバーが前日に水戸農業高等学校食品科学科の生徒さんたちと調理を行った。また同時に製作の様子と生徒さんによるメッセージを収録したVTRを撮影した。

当日はポテトサラダ、カボチャカステラともに1つ(ポテトサラダは3種)200円で販売し、共に200食分用意した。購入者に飲み物を提供し、「さとみ茶屋」として、食べながら展示を見たり、撮影したVTRを鑑賞したりすることができる内装にした。(図7~10)



図7:ポテトサラダ



図8:カボチャカステラ



図9:集合写真



図10:イートスペース

## (6)味覚祭

<日時>2016年11月5日・6日 9:00~15:30

<場所>里美ふれあい館イベント広場（茨城県常陸太田市大中町 3417-1）

<活動内容> 昨年度に引き続き、秋の味覚祭に荷見様のお手伝いとして参加した。イベント広場の1つのテントの中で里川カボチャで作られたコロッケや焼酎、カット里川カボチャの販売のお手伝いをさせていただいた。会場にいらしていたお客様のカボチャの知名度は高く、両日ともあっという間に販売終了した。

ステージでは千人鍋コーナーや常陸太田市太鼓連盟演奏会「おたの太鼓まつり」、そして歌謡ショーが行われていた。広場には複数のテントが張り出され、里美の特産物即売会や、里美の食材を使った料理が販売されていた。

また、秋の味覚祭ではかかし祭も開催されていたため、ステージではかかし祭の表彰式が行われ、広場には様々な方が応募したかかしが展示されていた。その中に、さとみ・あいとプロジェクト実習A「カフェ×まちづくりチーム」が10月の里美訪問の際に作成したかかしも展示されていた。(図11・12)



図 11: かかし祭で展示したかかし



図 12: 味覚祭にて販売

## (7)豊作祭

<日時>2016年11月19日(土) 13:30~17:00

<場所>渡里市民センター(茨城県水戸市堀町466-7)

<活動内容> 10月に収穫した里川カボチャの豊作を祝うと同時に、里川カボチャを使用したスイーツを提供することにより里川カボチャのPRを目指す。加えて里美倶楽部様の水田で収穫した米を使用しておにぎりとして実食し里美地区の食品を味わってもらおう。また参加者にクイズを通して里美地区の紹介を行い、実食した里川カボチャの生産地である里美地区を知ってもらう。この豊作祭ではクイズを行うことによりPRも行うが、「里美インフルエンサー」として里美地区を知るもの、伝えるものを誕生させていくことも目的である。

冒頭では本チームが行ってきた活動を報告し、連携先である荷見誠様の今回の豊作祭に関するメッセージ、里美地区および里川カボチャの紹介がなされたTV番組のVTRを視聴した(図13)。その後は参加者が3つグループに分かれ、アイスブレイクを含んだ里美クイズを行った。高得点のグループには里美地区の食品(里美ジェラート・里美ヨーグルト・里美倶楽部様の水田で収穫した米)を景品とした。次に里川カボチャを使用したスイーツ(図14)を同プロジェクト実習チームのカフェ×まちづくりチームと準備し、参加者に提供した。このスイーツはカフェ×まちづくりチームが依頼し、水戸農業高等学校食品化学科様がその後ご提案したレシピを参考にしている。また景品とはほかに里美倶楽部様の水田で収穫した米を事前に炊いて用意し、参加者自らの手で握る形で「おにぎり」を実食した。その後豊作祭参加者全員に独自に作成した「里美インフルエンサー」としての免許を配布し、閉会した。



図13:豊作祭



図14:里川カボチャを使用したパイ(左)とタルト(右)

## 5: 年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景



メンバー: 大枝優貴・助川実咲・岩崎彩・田島彩花  
豊田琢登・樹田桃子・箭内淳美・南陽子  
山口未来・山口菜穂

常陸太田市里美地区の地域振興を目指し、  
里美地区の魅力を発信する、「里美を愛する」学生たち


**活動内容**

**里美茶屋:** 常磐大学在籍のさとみ・あいメンバー樹田が架け橋となり、常磐大学文化祭「ときわ祭」での出店が実現した。その名も、「里美茶屋」。

里美の魅力を販売・PRした。水戸農業高校食品化学科様のお力添えで、「里川カボチャカステラ」・里美ふるさと振興公社様のお力添えで、「里美野菜のポテトサラダ」の販売を行った。

**豊作祭:** 里川カボチャの豊作を祝う会を主催した。「参加者を里美ファンにする」を合言葉に、企画を練った。里美地区に関して知ることのできるクイズや、里美フルコースの提供を行った。里川カボチャ研究会・荷見誠会長からのお言葉、常磐大学プロジェクト科目「祭人」様の獅子舞演舞の映像、プロジェクト実習△「カフェ×まちづくり」チームプロデューサー・里美フルコースの提供など、重層的な会となった。

**わら納豆プロジェクト:** 近年、高齢化による農業の機械化で、わら納豆の価格が高騰している。里美倶楽部様・教育学部岩佐淳一教授・里美ふるさと振興公社豊田紀雄様のお力をお借りし、「学生が手刈りした地元の藁を藁苧にする、モデルケース」を目指す。現在、絶賛進行中・・・。



**2つのキーワードと、学び**

○「理念の継承」

「さとみ・あい」は、プロジェクト実習の中でも、最占参のチームのひとつである。活動は、今年で5年目をむかえる。今年度は、活動の最初に、さとみ・あい OG であり、現在、常陸太田市役所勤務の井上紗希様に『さとみ・あいの軌跡』と題した講義を頂いた。活動理念のバトンタッチは、難しく、しかし重要なことであることを学んだ。また、講義の中で、チーム発足当時のメンバーと連携先の熱い思いに触れた。関係先の皆様がどのような気持ちで私達と連携してくださっているのか、それを考えながら活動する必要があることを強く感じた。

○「潮目を創る」

今年度の活動の特徴として、メンバー9人が、それぞれ活躍したことがある。例えば、メディアについて学ぶ者は、「ときわ祭」にて“プロモーションビデオ”を作った。これにより、里川カボチャカステラができるまでのストーリーを可視化できた。料理のできる者は、フルコースの考案、調理を行った。人の心をつかむには、まず胃袋から。里美ファンの獲得に一役買った。また、サークルで舞台に立つ者は、「豊作祭」での司会を見事に成し遂げた。自分たちで、足りない「権威」や獅子舞演舞といった「ワザ」を外部に求め、「豊作祭」はできあがった。多様な人々が集まる「潮目」を創ることが、目的遂行の鍵になるということ学んだ。社会に出ていく、私達学生、特に人文学部が学ぶべきことのひとつは、ここにあるのではないだろうか。

To be continued・・・

図 15: ポスターパネル(1/16 縮小)



図 16: 活動報告会での発表風景

## 6:最終レポート

### 私の成長

#### －3年間のプロジェクト実習を通して－

茨城大学 4年 南 陽子

気が付けばもう大学 4 年生。楽しくてあっという間だった大学生活。その中でも、プロジェクト実習を受講していた 3 年間はとても思い出深い。自分を大きく変えられた気がする。この個人レポートでは、プロジェクト実習の活動を通して、私がどう変わったか、成長したかについて振り返る。それを大きく 4 つに分けた。

1 つ目は、良い意味で心配性になったことである。別の表現をすると、準備を入念に行えるようになったということである。以前は、とりあえずやってみて、何かあったらその時考えようというタイプだった。しかし、経験を積むごとに、それではいけないということを実感した。「備えあれば患なし」という言葉の大切さを知ったのだ。念のために持っていった物が案外大活躍することもある。本番やもしも、を想定して準備できるようになった点は成長したと思う。また、しっかりと計画・準備した上で、それが上手くいく達成感も心地良かった。

2 つ目は、感情をコントロールできるようになった点である。プロジェクト実習では、自分たちで立てた計画が思い通りにいかないことも多々ある。そんな時、先生は必ず「良い経験になったね」と言ってくれた。それが、私の心にどんなにしみたことか。落ち込んでいる時間ももったいない。失敗を生かすか殺すかは自分次第。反省をしっかりとし、次につなげる。自分をコントロールすることで、時間を有効に使い、得られるものが多々あることに気付けた。また、やるときはやる！（遊ぶときは遊ぶ！）という ON/OFF のスイッチを自分で管理できるようになったのも成長の証である。

3 つ目は、自分中心で考え、行動できるようになった点である。誤解を招くかもしれないがこれは、自分勝手に行動するということではない。例えば、人をフォローする時に、自分が手伝いたいから手伝うという考えを持つということである。私自身もそうだが、人に頼るのが苦手な人もいる。その場合、「手伝ってあげようか？」と言われるととっさに「大丈夫だよ」と言ってしまう。迷惑がかかると考えるからだ。しかし、自分が手伝いた

いからという一見相手のわがままかのように言われると素直に頼れるのだ。他人に尽くす行動を、なりたい自分になる為の行動だと思えるようになった。

4 つ目は、取捨選択できるようになった点である。プロジェクト実習でありがちなのは、イベントごとを沢山計画してその結果疲れてしまうというものだ。その際、関わった人たちにも迷惑がかかってしまう。信頼を得るのは時間がかかるが失うのは一瞬である。相手方のためにも、中途半端な返事はせず、丁寧に断ることも大切だと学んだ。大人になるにつれ、選択が自分だけのものではなくなる。関わる責任が生じるからだ。今後の人生の中で、取捨選択する場面は多くあるだろう。そのような時にも、自分だけでなく周りの人への影響も考え、後悔しない道を選んでいきたい。

最後に、この授業でお世話になった先生方、活動に協力して下さった地域の方々や関係者、そしてチームメイトに厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。そして、これからも「さとみ・あい」の活動を応援しています。



図 1:さとみ・あいの看板



図 2:収穫祭で取れた里川カボチャ

## 授業の枠をこえて

—さとみ・あいから得たもの—

茨城大学 4年 箭内 淳美

「なんで今年もまたプロジェクト実習とってるの？」  
今年度で3年目になる「さとみ・あい」での活動だが、この言葉を友人に何度か投げかけられた。人文学部の4年生といえば、就職活動や卒業論文のために1年を過ごすことが大半である。そのなかで他の講義よりも自由度が高い分、活動が多岐にわたり大変な部分も多いこの活動を今年度も続けていることに周りに驚かれることがあった。実際、自分自身でこの質問の答えはあいまいで、(単位が取れるからという理由はもちろん1番最後である)明確な答えが出せずにいた。しかし活動を続けていた中で、「今年度は履修しない」という理由がなかったと気づいた。続ける理由は、活動の中で得られる様々な方々とのふれあいや、つながりがあったからである。それがただ単に年度が替わるというだけで、やめるという気持ちにはならなかった。実際に、今年度もまた続けてよかったと感ずることができている。昨年度はリーダーという形で中心となって活動をしていたが、今年は4年生ということで活動の中心からは身を引き、後輩たちを支えるという形で活動に参加した。昨年度から継続して活動しているメンバーに加え、新しく参加した2年生がどんどん積極的に活動していくので、うれしくあった。一方で自分としては活動に受け身になってしまったという印象があった。

今年度の活動の特徴としては、様々な形でプロジェクト実習の他のチームと「里美」を通じて関わる機会が多くあったことである。新しく成立した他チームとは異なり「さとみ・あい」は長年続けてきたことでの様々なつながりや基盤がある。他のチームから提案を頂けたことは、チームとしての強みが活かせたのではないだろうか。

その一方で、自分たちの活動していることは、「誰のため」であって、「なにがいいのか」、ほんとうにこの活動はいいことなのだろうか、お世話人っている方々にとってメリットはあるのだろうか、いい効果をもたらしているのだろうかという疑問がいつも付きまとっていた。3年間活動を続けも未だにわからない。地域おこしは答えがないという言葉を目にすることがあるが、自分のし

ている活動に不安や疑問を抱きながらも、目の前の物ごとに向き合っていかなければならない。活動を通じて学んだことの一つである。自分自身が迷っていたとしても、チームは動いていくし、関係者それぞれの時間も都合もある。万全な体制で臨めれば最高だろうが、その時その時で自分のすべきことをやっていく必要があると学んだ。

昨年度、チームのリーダーとして活動していて干からびていたころは気が付かなかったが、少し身を引いて全体を落ち着いてみるができるようになっていくつか気が付いたことがある。一つは周りで支えてくれるメンバーの存在である。ちょうど干からびていたときに気が付かなかったというのは失礼な話だが、周りがなかなか見られない時期があった。困っているとき、どうしようもなくなったときに助けてもらった。自分もそのような心遣いをしていきたいと思う。また、報告会の際に、大勢の方がお越しくださり、「あ、〇〇さんだ!」と気づく場面が多くあった。それだけ多くの方にお世話になっていることを改めて確認できた。嬉しいことだと心から思う。

プロジェクト実習は、受け身ではいけない。誰かに任せきりになるのではなく、自分自身がどんどんと動いていかななくてはならない。これは他のことにも当てはまる。大学生活のほとんど中心となった「さとみ・あい」そしてそこから得たつながりや、学びは、年度が替わったからといって、スパッと消えるものではないように、卒業したからといって消えるものではないと信じているし、これからも大切にしていきたい。



図:味覚祭

## それぞれの役割

### —先輩・後輩という視点から—

茨城大学 4年 山口 未来

今年で2年目となるさとみ・あいでの活動だが、今年は4年生ということで「隠居」という立場で活動に参加してきた。他にも2人、計3人の「隠居」の主な活動内容は後輩にアドバイスをしたり、イベントごとの際、自分の役割が多く、自由に動けない後輩たちの代わりに動いたりすることであった。昨年度は自分の役割でいっぱいになってしまい、周りが見えていないということも多かったが、今年度は昨年度よりは落ち着いて周りを見渡しながらかつ活動することができたと思う。このように実働役の後輩として1年間、補助役の先輩(隠居)として1年間活動してきて、それぞれの役割において、そのやり方や関わり方にも重要なことがあるということ学んだ。

まず昨年度の活動を振り返ってみて思うことは「もっと素直に先輩に頼ればよかったな」ということである。後輩であり、実働役であったことから、まずは自分たちの力のみで行ってみることは必要なことだった。しかし、もしそこでつまづいてしまったとしても、周りが見えなくなっていたり、遠慮の気持ちがあったり、迷惑をかけているという思いから素直に相談することがなかなかできなかった。今年度、その相談される隠居役になって思うことは「どんどん頼ってほしい」ということだった。昨年度の先輩方が私と同様の思いを抱いていたかはわからないが、逆に後輩だけで話が進んでいく様子を見ると、なんだか寂しいような気持ちがあったり、活動に参加しづらいような気持ちがあった。頼られたり仕事を与えられたときの方が嬉しかったことを覚えている。しかし、先輩から突然「頼れ」と言われても後輩としては困ってしまう。私も後輩の立場でそんなことを言われたらどうしていいかわからなくなってしまうだろう。だからこそ、先輩として活動した今年度の反省としては、「もっと積極的に関わりに行くべきだった」ということがある。昨年度の反省として遠慮の気持ちで相談しづらかったということを挙げたが、これは「相手が忙しいのではないか」「こちらの都合で頼み事をしてもいいのだろうか」という考えから生まれたものだった。もし普段からプロジェクト実習の活動はもちろん、それ以外でも関わりがあれば、ふとしたときに声がかかりやすくなる。自分が「頼りたい」という思いがあるならば、相手がそうしやすいような状況や雰囲気自分から作っていくべきであったと思う。

また、後輩・先輩それぞれの視点から見たときに必要

なこととしては、後輩ならば「今までの慣例にとらわれすぎない」、先輩としては「新たな発想を柔軟に受け入れる」ということがあるのではないかなと思う。さとみ・あいは今年で5年目という、プロジェクト実習のなかで一番の古株チームということもあり、すでに毎年のように開催しているイベントや関わらせていただいている方々とのつながりがある。そしてそれらは毎年独自の活動を行うことでまた増えていく。今までやってきたこと全てをそのまま行おうとすればパンクしてしまうのは目に見えている。そこで継続して行っている活動のなかでは今までの反省を活かした、活動の取捨選択が重要になってくる。例えば今年度は茨城大学の学園祭である茨苑祭への出店を諦め、代わりに初めて常磐大学の学園祭である「ときわ祭」に出店をした(図)。これは今年度初めて常磐大学から参加してくれるメンバーがいたということで、新たな繋がりづくりという点でも、今のさとみ・あいに必要なのはどちらかを見極めたうえで決定したことである。これは新たな取り組みではあったが、重要なことであったと思う。このように日々の活動のなかでは、なななあではなく、今までの反省を活かして改善していくために「変化」が必要になる。後輩としてはそれを積極的に発信していくべきであるし、先輩としては今までの自分たちの活動に愛着があったとしても、それに固執するべきではないと思う。そうしなければ意味のある活動を行うことは出来ないと考えためである。

今回は2年続けて活動に参加して感じた「先輩・後輩の役割分担」について焦点を当てたが、さとみ・あいでの活動のなかで学んだことは他にもたくさんある。つながりの大切さや自分たちがただやりたいというだけでなく、求められることを行う重要性、臨機応変なスケジュール調整などがそれに当たる。今年で大学を卒業し、さとみ・あいでの活動に直接参加できないことは残念だが、今後はさとみ・あいで得たことを社会人生活に活かしながら、日々の課題に打ち勝っていききたいと思う。



図:ときわ祭



## 人文学部

### ープロジェクト実習を通してー

茨城大学 3年 大枝 俊貴

これから分不相応で、たいそれた事を言う。「若造が何を言う」と一笑に付して欲しい。ただ、これは私が確かに感じたことである。二年間プロジェクト実習を受講してきて、紛れもなく自分の手で掴んだひとつの気づきである。少々お付き合い願いたい。

私が言いたいこと。それは、「人文学部とは、潮目の重要さとその作り方を学ぶ学部である」ということだ。ここでいう潮目とは、様々な事象に対して多様な人が関わり深化させていくといった様子を表現したい。暖流と寒流といった異なる性質を持ったものが混ざり合い、良い漁場を形成するという様子は、どこことなく社会の様子に似ている。誰かの受け売りだったような気もするが、原典ははっきりしない。ご了承願う。なぜ私がこのようなことを考えるに至ったか、大学一年生の夏休みにさかのぼる。

大学一年生の夏休みのとある日、出身高校の先生から電話が来た。高校生の前で、大学生活について話して欲しいという。恩師の頼みを断りきれず、壇上に立った。大学についての話を早々に済ませ、質疑応答の時間に入った。そこで、在校生たちに問われたのが「人文学部とは何をする学部なのか？」ということであった。答えに窮した。私自身、人文学部に入学することを決めたとき、学部に対する印象は大変漠然としたものであった。どう答えたものか悩んだ。実際、大学一年次の前期は様々な教養科目を受講しており、とらえどころがなかった。この時は「様々な選択肢のある学部です。」というようなことを言って、お茶を濁した。後悔した。この問答のせいで、人文学部が将来を決めあぐねている人を迎え入れる「受け皿」のような印象を与えてしまったようだった。違う。そうではないはずなのに、適切な答えが見つからなかった。それ以来、この「人文学部とは何をする学部なのか？」という問いは常に自分の中にあった。

この問いに対する答えが、「プロジェクト実習」にあったと思っている。「人文学部とは、潮目の重要さと、その作り方を学ぶ学部である。」このことは、プロジェクト実習の活動の端々で感じていたことだが、特に意識

したのが、今年度行った「里川カボチャ豊作祭 2017」の準備時であった。チーム内で打ち合わせを重ねる中で、私たちの活動には限界があることをつくづく感じた。それは、物理的にも、観念的にもである。時間が限られているということはもちろんのこと、私たちには権威がないし、突出した技術もなかった。出来ると思っていても、クオリティに限りがある。これらを補うため、里川カボチャ研究会の会長の言葉を取材したり、大手マスメディアのコンテンツを利用したりした。また、盛り上げにかけると思い、獅子舞の演舞をお願いしたり、カフェについて詳しいチームに実食コーナーのプロデュースをお願いしたりした。メンバーも、それぞれが生活や専攻に即した活躍をし、ひとつのイベントが出来上がった。持っていないものを持った相手が互いに交わったことで、そこに潮目ができたのだ。潮目の重要性を実感した。

ただ、潮目を作るまでには苦難がつきまとう。例えば、協力を仰ぐ際、プレゼンテーション能力が重要となる。「これがしたい」だけでは、人は動かない。「なぜそれがしたいのか。」「それを行うことでそのようなメリットがあるのか、成果があがるのか。」この辺の論理の組み立てを行っておかねばならない。これらに付随して、どれだけ組み立てた内容を相手にうまく伝えられるかということもある。資料を作るのか、パワーポイントを使用するのか、どのような言葉を使用するのか。少し考えただけで、学ぶべきことは大いにある。このような手段を専門的に学ぶのが人文学部なのではないだろうか。

もう一度、あの問いを受けたとき、自信を持って答えられる。プロジェクト実習がくれた、プロジェクト実習から掴んだこのひとつの気づきを大切にしていきたい。プロジェクト実習という潮目に集まってきた魚の一員として、社会にとって美味な存在になりたい。今度は、私自身が大きな潮目を作り、沢山の魚を集められたらとも思う。社会という大海原を泳ぎながら。

## 二年目のさとみ・あい

### －昨年度と比較して感じたこと－

茨城大学 3年 助川 実咲

2年目のさとみ・あい。正直なところ、今年度も継続してプロジェクト実習を履修するべきか悩んだ。就職活動に向けての準備や勉強を進めていきたいという気持ちがあり、昨年度の活動を振り返ると、あまりに負担が大きいのではないかと考えたからである。しかし、昨年度の努力を無駄にしたくないという思いと、せっかくだきた繋がりを大切にしたいという思いが募り、今年度は「無理なく」を自分のテーマとし、引き続き履修することを決めた。

今年度のプロジェクト実習の活動を振り返ると、課題や反省はまだまだ残っているものの、昨年度と比較して良くなったこともある。その中でも特に印象に残っていることを、ここで述べることにする。

まず一つ目は、自分たちが地域について知る機会が多かったことである。昨年度は、私は水戸での活動をメインとする小チームにいたこともあり、里美について知る機会が少なかった。もちろん、実際に里美に行って農作業をさせていただいたり、美味しいものを食べたりと、里美の魅力については理解しているつもりであった。しかし、実際に外に向けてPRするとなると、自分が発信することに対して他人が興味をもってくれるのか、自信がなかった。それに比べて、今年度の活動の前半では、例年通りの農作業などに加えて、さとみ・あいのOGにこれまでの活動や歴史についてお話を聞かせていただいたり、田んぼに腰を下ろしてスケッチをするなど、地域に向き合う時間がたくさんあった。これまであまり気にすることもなかった里美の空気や時の流れを存分に感じ、とても有意義な時間を過ごすことができた。里美の魅力について理解が深まったことで、より多くの人に魅力を伝えたい、知ってほしい、という思いも以前より強くなった。

二つ目は、ゆとりのある計画が立てられたことである。昨年度は、毎月のようにイベントがあり、ずっと忙しい状態が続いていた。うまく進まない焦ってイライラし、メンバーの関係がぎくしゃくしたこともあった。そういった失敗を踏まえて、今年度は力を入れるべきポイント

を絞り、メリハリのある活動をすることができた。さとみ・あいの活動は、どうしても収穫期である秋にイベントが多いが、それを見越して参加の可否を決めたり、展示品についても、使いまわしできるように考慮した。イベント直前にバタバタすることはあったが、昨年に比べると余裕があり、メンバーも焦りながらも楽しく活動することができたように思う。

以上のように、昨年度の反省点を活かし、さとみ・あいは年々パワー・アップしている。しかし一方で、地域との付き合いが長くなった分、甘えが生じている事実もある。先輩方が築きあげてきた信頼を無駄にしないように、これまで支えてきてくださった方々への感謝の気持ちを忘れてはいけない。来年度以降も、新たな試みや出会いがあると思うが、原点に立ち返って本来の目的を見失わないように取り組んでいきたい。

最後に、貴重な経験をさせていただいた地域の皆様や先生方、そしてリーダーとして引っ張ってくれた大枝くんをはじめチームの皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。



図：里美の田んぼのカエル

## 向き合うということ

—さとみ・あい 2016—

茨城大学 2年 岩崎 彩

私は大学 2 年生になって、一年生のころから続けてきたサークル活動のほかに違う活動を加えてやってみたく考えた。なぜなら一年生のうちにやってきた活動で、自分の見聞が広まり、忙しくはなろうともさらに人とふれあい、いろいろなことを経験して学んで見たいと考えたからだ。そこで参加を決定したのがこのプロジェクト実習であった。もともと地域振興やそれに関わる人々に興味があったので、このさとみ・あいチームを希望した。

最初に里美地区に伺って、とても驚いた。5年の歴史を持つこのチームは、プロジェクト実習で最も多いと言ってもよいほどたくさんの人とかかわりがあった。その日は去年このチームがお世話になった連携先の方々にお会いし、ご挨拶するということと私を含め初めて里美地区を訪れるチームメンバーが里美地区を知るという内容が主だった。ほとんど連れて行かれるままでいると、出会う人一人一人が里美地区にかける思いや、「今年はどうしたい」「去年はこうだったから、今度はこうしたい」という自分の地域・活動に対しての意気込み・希望をよく話されている方が多かった。

私は自分が生まれた地域に関して大学に入るまであまり考えたことがなかった。こうなったらいいな、これやってみたいなという漠然とした希望はあったものの、実行に移さなかったり、妥協したり、流されたりして自分の希望をかなえたことはあまりなかった。里美地区を訪れた初日から活動をしていたこの時期までずっと感じていたのは、人が何かに向き合うということだった。その日出会った人々は里美地区という自分の住む地域に向き合い、自分が持つ希望に向き合っていた。それはただ思うだけで実行に移さないのではなく、本気でそう思い、信じて疑わず実行に移してしまうことだ。同時に私はこの本気で向き合う人々と本気で向き合う必要があるということに気づいた。また、自分の希望にすら向き合えないのに、私にできるのだろうかともとても不安になった。

活動が本格的になりメンバーと一緒にいろいろな活

動をした。何度も里美地区を訪れ、目的達成のために必要なことを考えた。中でも、10月22日・23日に参加したときわ祭では、商品のひとつであるカボチャカステラ(図)を、水戸農業高校様のお力をお借りして自分たちの手で作ったことがあった。今まで経験したことのないことであり、商品として不出来ではないか、自分たちで作ったものがちゃんと食べてもらえるか不安になった。結果は予想もしない盛況ぶり、「おいしい」という感想をいくつもいただいた。里川カボチャを使ったスイーツを食べて、その味を知ってほしいという、自分の望んだ目標が本当に実現するという実感をし、小さなことであったかもしれないが、感動した。



図:ときわ祭で販売したカボチャカステラ

失敗を重ね何度も迷惑をかけたが、向き合うということに関して、先輩方の姿勢に学ぶことがたくさんあった。豊富な経験を活かして失敗をカバーしたり、私にアドバイスを授けてくれたりした。一人では向き合えず、妥協しそうになっても、先輩方やほかのメンバーと協力していくことで、さとみ・あいとして向き合うことができたこともいくつかあった。

私が大学生になって関わってきた活動は、必ず誰かが向き合ってきたことであり、私はそれに関わる以上、同様に向き合わなくてはいけない。その厳しさを知り、同時に各々が向き合ってまとまった結果、チームで向き合うことができるということが分かった。この経験を活かし、自分からも逃げださず向き合うことができるようになりたい。

## たくさんの初めて

### —新たな経験の中で成長できた私と後悔した私—

茨城大学 2年 田島 彩花

私は今年度、初めてプロジェクト実習を履修した。きっかけは、1年生の時、バイト先の先輩とサークルの先輩がこのプロジェクト実習を履修していたことだった。先輩方がどのようなことをしているのか、詳しくは分からなかったが、充実した良い時間を過ごせるのではないかと興味を持った。

活動は初めてのことばかりだった。まず初めに、活動の方向性を私たちが自ら決め、外部の方々との連絡も私たちがすべてとり行わなければならないという点だ。今まで私が参加してきた活動の中ではこのような経験は稀だった。さとみ・あいの先輩方は全員がさとみ・あい2年目以上であったため、そういった点には慣れており、私は1年後、同じように連絡をとることが出来るようになるのか、不安だった。そんな不安を持ちつつ、活動を続けていたが、10月15日に行った、ふるさと振興公社でのかかし作りに際して、その場所の確保の担当になった。ふるさと振興公社に連絡をし、交渉を行うことは緊張したが、無事に交渉を終えることができたと同時に、少し、自分が大きくなれた気がした。

次に、高校生と活動を共にしたことだ。さとみ・あいは県立水戸農業高等学校と連携をし、食品化学科の高校生に里川カボチャを使ったスイーツの考案を行っていただいた。高校生が食品開発を行っているということに驚きを感じたとともに、日程が合わず、ときわ祭前日のカステラづくりでしか高校生と関わりを持つことが出来なかったことを後悔している。自分とは違う世代と語り合うことは、自分の考え方を広くしてくれると感じたからだ。また、この連携は3年目で、当時1年生だった高校生が3年間、さとみ・あいとともに活動を行ってきたということもあり、先輩方と絆があった。そのため、連絡や作業がスムーズにとり行われていき、私は環境に恵まれているなど再確認した。

しかし、環境に恵まれているからこそその甘えもあったように感じる。3年生以上のメンバーは全員がさとみ・あいとして2年以上活動を行ってきた。そのため、

知識が多く、活動の進め方、連絡の取り方など、すべてのことにおいて先輩方が行ってくれた。しかし、他のチーム、特に今年チームが新たに結成され、2年生のみで活動を行わなければならなかったチームの2年生と比較すると、私はこの1年間、何をしていたのかと思うほど何もできていないのではないかと感じた。恵まれた環境の中でも自分ができること、自分がやらなければならないことがあったのではないかと後悔している。初めての年だから、わからないから、という言い訳は通用しないと感じた。先輩方と同じように動くことが出来なくとも、何もかもが初めてだ、という点でもっと意見を出し、新たな風を吹き込むことが出来たのではないかと後悔している。

最後に、他の学校の文化祭に出店したことだ。さとみ・あいは今年、常磐大学の文化祭であるときわ祭に出店をした。違う場所で慣れないこともあったが、たくさんのお客様に里川カボチャのカステラや、里美の野菜を使ったポテトサラダをおいしいと言ってもらい嬉しく感じた。しかし、完売したものの、里美やさとみ・あいの周知はあまりうまくいかなかったように感じた。

さとみ・あいの活動が1年間、いつも楽しかったわけではない。うまくいかず、失敗したこともたくさんあった。後悔もたくさん残っている。けれどもさとみ・あいとして活動を行えてよかった、楽しかったと、今、感じる事が出来ているのは、さとみ・あいメンバーや里美の方々をはじめとしたたくさんの人と出会い、語り、お世話になり、人の温かさを感じる事が出来たからではないだろうか。皆様、本当にありがとうございました。



図:収穫祭にて

## さとみの魅力を知った一年

—さとみ・あいの活動を通して—

茨城大学 2年 豊田 琢登

私は2年次に初めてプロジェクト実習を受講し、約一年間さとみ・あいのメンバーとしてプロジェクト活動を行ってきた。この一年間のプロジェクト活動を通して、私なりに里美の魅力をどうインプットし、またアウトプットしていくかを学ぶことが出来た。プロジェクト活動を開始した当初は、さとみ・あいのメンバーとして何も分からなかった私だが、先生方、先輩方のアドバイスを受けていく中で徐々にさとみ・あいとは何なのか、どのような活動をしていくのかということを経験しながら理解することが出来た。さとみ・あいでは数多くの活動が行われた。私はすべてに参加できたわけではないが私が参加した里川カボチャの収穫や里美の田んぼでのおだ掛け、そして、ときわ祭でのカボチャカステラや最中ポテサラダの販売など多くのことを経験することが出来た。特に、私はときわ祭での「茨大 さとみ茶屋」での体験が心に残っている。なぜなら、実際には私は商品を作ることが出来なかったが、「茨大 さとみ茶屋」に来てくださった多くの方々から「美味しい」「他にもやらないの？」などうれしいお言葉をくれたからである。また、私たちさとみ・あいの活動についても熱心に聞いてくれた方が多かった。ここで私はさとみ・あいチームとして今までやってきたことをまとめた紙だけで完結するのではなく、さとみ・あいとはなにか、どんな活動をしているのかを知らない人にかに自分の言葉でアウトプットできるのかということの大切さを改めて気づくことができたので一番良かったと考えている。

私は今回会計という役割を任せられたが、今まで歴代の先輩方がためてきたお金を管理するという責任感がすごくあった。また、先生にさとみ・あいで使うものを頼む面でも先輩方に私が作成したものを添削してもらったりと、多くの助けを得ながらやり遂げることが出来たと感じている。反省点としては、先輩方に頼り過ぎてしまう面があったことである。私は先輩方から頼まれたことをしていたが、会計についても削減できる面なども考えて提案が出来ればよかったのではないかと今になって考えている。

私は初めてのプロジェクト実習ということで、今回色々な活動を通して先輩方の姿を見ながら活動を行ってきた。しかし、それがいかに大変かを活動を通して痛感させられた。私がさとみ・あいのメンバーとして活動しようとしたきっかけは地元へ貢献したいというところから始まった。里美の現状・問題点など、初めは全然

分からなかった。しかし、今回2年次にプロジェクト実習を行ったからこそ知ることが出来た。これは、これから地元の問題点を解決していく上で、きっと役に立っていくと考えている。

また、前期は別の授業とかぶってしまったためほとんど授業には参加することが出来なかった。その分話し合いやその他の活動に参加した。後期は授業に参加することができ、中間報告という重大な役割を助川さんと共に行った。しかし、私は発表を上手くできず先生から色々アドバイスをいただいた。中間報告を終えて先生からのアドバイスを考え、やはり私が体験したことを自分の言葉で伝えることが大切だと考えた。このことは、これからの発表にも生かせるのではないかと考えた。その上で最終報告会での大枝さんやその他のチームの発表のうまさに驚き、いかに聞いている人を私たちの発表に引き込んでいくのか各チームの発表を聞き参考にしたいと考えた。

私はプロジェクト実習を通し、その大変さ以上に何かをやり遂げた時の達成感が私の中で多くを占めていた。さとみ・あいメンバーになったからこそ新たな出会いが生れ、経験値を高めることが出来た。また、2年次にこのプロジェクト実習が出来たことも私の中で大きいと思う。早い段階でチームの皆と協力し何かを達成させることや今まで体験できなかったことをすることで経験値を高めていくことが出来たことは将来必ず生かせると思っている。

最後に、初めてのことで不慣れな私を一年間支えてくれたさとみ・あいのメンバー・そして、私たちを支えてくれた多くの方々に感謝したい。



図：里美の田んぼでおだ掛け

## 一年間の学び

### － 1 歩踏み込んで得たもの－

常磐大学 2 年 榊田 桃子

私がプロジェクト実習を知ったきっかけは、昨年度のさとみ・あいのイベントに参加したからだった。大学入学後は、様々な活動に参加し視野を広げていきたいと考えていた。また、他大学の学習がどのようなものかも気になっていた。イベントに参加し、学生主導で活動する姿を見て自分も参加してみたいと思った。他大学で一年間の講義となると少し迷う部分もあったが、今だからできることをしたいと思い履修した。

私がさとみ・あいで担当した役割は、書記と常磐大学での活動・連絡である。常磐大学からの履修者は私が初めてであり、今年度は常磐大学へ向けてのアピールを強めたいというのがチームの希望であった。私自身も茨城大学と常磐大学との交流を深めてプロジェクト実習外でも活動の輪を広げるというのが一つの目標だった。そこから、ときわ祭への出店を目指すことになったのだが、これがとても大変だった。チームを結成した 5 月末には、すでにときわ祭の打ち合わせや資料提出が始まっていた。チームを結成したばかりで出店内容は決まっていない。その上、大学が離れているため空き時間に集まることもあまり出来ず週一回の会議で決定していく。慌ただしく案を決めていった結果、書類の提出期限を過ぎてしまうことや決定後の変更が多くなってしまった。さらに、販売品を提供して頂く水戸農業高等学校さまとのやり取りも少数メンバーに負担がかかった。他にやることがあったとはいえ、資料作成などにはもっと踏み込んでいくべきだったと反省している。この点に関しては、チームに情報を伝える前にあらかじめ整理しておくことと迅速に対応することが必要だったと思う。そして、特に反省すべきものがある。ときわ祭の出店場所である。より多くの人にさとみ・あいのことを知ってもらうには屋外出店が最適だった。だが、書類提出の期限に焦っていたことと今から書類提出しても良い場所を確保できないだろうと判断した結果、屋内出店を選択した。結局、屋内を選択しても書類提出が遅くなったため出店場所は奥まった棟になってしまった。中々堪えたのだが、チームメンバー内では「屋内でやるのならさとみ・あいの



図:ときわ祭

紹介動画が作れる。いっそ茶屋にしてみてもどうか」と前向きな意見が出された。これには、一つのことに落ち込んでいないで、ならばどう活かしていくのかを考えさせられた。祭当日、とても不安だったが行列ができるほど賑わい茨城大学目当てで来店された方もいた。さらに、意見に出された展示物と茶屋システムもお客様に喜んでいただけた。

このプロジェクト実習を通して、県北の魅力と今後の課題を知った。山奥の自然は新鮮なものだった。月に一回ほどあった里美地区訪問では、里川カボチャの美味しさから魚やそば、美しい景色まで体験することが出来た。だが、それと同時に人口減少と高齢社会の問題にも気づいた。また、ときわ祭出店をきっかけに常磐大学の活動団体と交流が生まれた。さらに、学生が主体的に行う活動に参加することで積極性や自信がついた。プロジェクト実習の初めの段階に個人の達成目標を立てた。ここで私は、話す力・対応力・ストレスコントロール力を選んだのだが、まさに一年を通して合致した目標だった。会議の際の積極的な意見交換と書記としての議事録作成で話す力が鍛えられ、急な変更にも最後まで落ち着いて対応する力が身についた。これらは、チームメンバーの支えがあって得られたものだと思う。辛い時期も沢山あったが、支え合うことで乗り越えることが出来た。チームメンバーには、感謝の気持ちでいっぱいである。

## 7:おわりに

大枝 俊貴

いつも問われることがある。「なぜ里美で活動するのか？」ということである。大抵、そう聞かれたとき「典型的な中山間地域」で「日本の人口減少・少子高齢化の縮図」とも揶揄される里美だからと、答える。しかし、活動を進めている中で実はもっと小さな部分をモチベーションにしているのかもしれないと思うようになった。「かぼちゃが好きだから」「里美の人たちに惚れて」などなど。「さとみ・あい」のメンバーの多くが、決して、楽ではないPBL型学習をリピート受講する所以はここにあるのかもしれない。

いつも問うていることがある。「本当に自分達の活動が里美地区の力になれているのか？」ということである。里美地区は2016年現在、大手メディアに取り上げられるなど、周囲からの注目度の高まりを見せている。私たちが関わる前と昨今では、比較して大きな躍進をはたしているといえるだろう。しかし、その中で私たちが果たした役割というのは証明できない。実際、私達の活動の成果は本当に微々たるもので、住民の皆様の活躍がほとんどであることは自明である。ただ、「里美は確実に元気になっている」「いつもみんなが来てくれるおかげだ」と言ってくださる地域の方々の声の聞くたび、一助にはなれているのかなと救われた気持ちになる。ただひとつ、確実なのは、大学-地域間の関係を築き継続させることができているということだ。このことを、ひとつの「成果」として誇りに思う。

さて、ここからは目標と照らし合わせ、今年度の活動について考えていきたい。今年度の活動は「活動の周知と学外メンバーの拡張」「里美の魅力を実感する」「里美地区地域資源のブランド化補助」を目標とした。特に、「学外メンバーの拡大（関係先の拡大）」は、前年度以前からの関係先継承とのバランスで悩み多き部分であった。しかし、活動を今後強化していくためには必須だと信じ、推し進めた。常磐大学のプロジェクト科目の皆様との新たな連携は、お互いの活動を共有するだけでなく、共同でイベントを行うなど手応えのあるものとなった。来年度以降、もし、さとみあいが続いていくのならば、この上ない財産になるのではないだろうか。相互に有用で、友好的な交流が続いていくことを願うばかりだ。

目標の中で、「里美地区地域資源のブランド化補助」は反省が残る点である。うまく成果の判定ができなかった。前年度代表を努め、今年度メンターとして参加した箭内は昨年度の最終報告書で「企画の実行だけではなく「何が地域のためになるのか」ということを常に考え続けていきたい。」と述べた。これは私たちの代でも課題となった。成果を確認できなかった一因であろう。一過性のイベントを開催する意義が果たしてあるのか。あるとすれば、フィードバックにこそあるはずである。しかし、私たちはここを疎かにしがちであった。来年度のここに同じことが書かれることのないよう、引き継ぎを強化させたい。イベントではなく、「プロジェクト」を実施しているのだという意識を大切にしたい。

最後に、ひとつ問いを立ててみた。「さとみ・あいのプロジェクト実習を一言で表したらどのような言葉がふさわしいだろうか？」というものだ。メンバーはこれを、「ふれあい」という言葉で表現した。

「ふれあい」には以下のような意味が込められている。「触れあい」実際に触れてみる。様々な皆様のご協力を頂きながら、実際にカボチャを収穫し、お米を収穫する。また、その加工にも参加する。これほどまでに、実状に触れることが出来るのは、さとみ・あいとしての重要な特色であるといえよう。「ふれ愛」地元愛にふれる。活動を行う中で、自分たちの地域のために思索し活動する方々に大勢お会いする。その中で、なんとなく、自分の故郷にも思いを馳せるようになる。故郷のために動く人たちの近くにいることで、ふるさとの大切さを再確認できる。「ふれ相」相互に助け合う。誰かが過重で苦しんでいるとき、自然と手を差し伸べることができる。そのようなことを先輩が自然と行っている。後輩たちはその背中を見て学ぶことが出来る。このように考えていくとき、諸先輩方が考案し、受け継いできた「さとみ・あい」というチーム名の、その意味深さに驚嘆する。この名前を引き継ぎ守ることができたことを大変光栄に思う。

末尾になりましたが、今年度の活動にあたり、多大なるご支援をいただきました常陸太田市里美地区をはじめ常陸太田市の皆様、水戸農業高校の皆様、また各イベントにお越しくくださった皆様、そして活動にご支援いただきましたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

# 4 : E-girls チーム

## プロジェクト実習C

メンバー :	鈴木 美緒	茨城大学人文学部社会科学科	3年
メンバー :	安藤 沙彩	茨城キリスト教大学文学部現代英語学科	2年
メンバー :	飯村 祐美	同 上	2年
メンバー :	大野 愛恵	同 上	2年
メンバー :	高場 菜央	同 上	2年

(リーダー等の各役職は活動ごとに輪番)

主担当教員 : 上野 尚美 茨城キリスト教大学文学部 教授  
副担当教員 : 神田 大吾 茨城大学人文学部 准教授



## 「E-girls チーム」活動報告

### 1:はじめに

鈴木 美緒

異文化交流プロジェクトは、2011 年度に茨城キリスト教大学の国際理解センターと茨城大学の留学生センターとの間で連携関係が結ばれたことに始まる（Ⅱ-3）。翌 2012 年度に結成された国際ナショナルチームを基盤として、2013 年度の Cross Cultural Project チーム、2014 年度の International Cultural Exchanges チーム、2015 年度の Link チームと Department of Contemporary English チームといったように、毎年、前年度の活動を引き継ぎつつ、発展させて活動してきた。毎年、「異文化交流会」の開催をメインの活動として継続・発展させつつ、それに加えて、毎年独自の新たな活動をそれぞれのチームが企画し、行ってきたのである。

今年度の私たち E-girls チームが取り組んだ活動は、先ず茨城県内の高校に声を掛け、異文化交流に関心のある高校生と、茨城キリスト教大学・茨城大学の留学生がレクリエーションやゲームを通して交流し、理解することを目的とした。これに加え、今年度のチーム独自の活動として、日立市内の小学校に赴いての国際理解活動と、茨城キリスト教大学・茨城大学の留学生を招待しての New Year's party for international students を企画した。最初の異文化交流活動は、先輩たちが毎年行っている「異文化交流会」をそのまま踏襲して同じように開催するのではなく、より良いものにできるように、かつ私たちのオリジナルの部分も出せるように企画する必要がある。また、二番目の小学生対象の国際理解活動と、三番目の New Year's party for international students は今年度からの活動であり、参加者を集めるための周知から、当日必要になるものの準備などなど、すべて一からであったため、苦勞することも多かった。今まで実行したことのない活動にチャレンジすることは大変なことも多くあったが、それだけに得ることも多く、やりがいや楽しさを感じることもできた。

私たちの一年間の活動をここにまとめ、この最終報告を通して異文化交流に関心を持つ人がもっと増えていって欲しいと思う。

## 2:活動の目的・目標と概要

鈴木 美緒

### (1) 活動の目的・目標

文部科学省は、グローバル化の進展の中で、国際共通語と言われている英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要であると提言している。また、2020年に東京オリンピックが開催されることになり、日本に多くの外国人が訪れることが予想され、グローバル化も急速に発展していく中で、外国人に対応できる人材を育成しなければならない状況にあるといえる。

このような状況を受けて、本活動では、高校生と小学生を対象として、異文化に興味・関心を持つきっかけとなるように、留学生との異文化交流や異文化理解活動を行うことを目的とした。

### (2) 活動の概要

#### ①異文化交流プロジェクト

日時：平成28年7月18日(月・祝)

対象：茨城県内高校生

目標：茨城キリスト教大学・茨城大学の留学生と茨城県内の高校生が、フリートーク、ゲーム、レクリエーションを通じて交流し、異文化交流の楽しさを知ってもらう。

#### ②小学校国際理解活動

日時：(1)平成28年12月21日(水)

(2)平成29年1月26日(木)

対象：日立市内小学生

目標：異文化を知る第一歩として、外国の紹介やクイズを通して、外国について楽しく学んでもらう。

#### ③New Year's party for international students

日時：平成29年1月21日(土)

対象：茨城キリスト教大学・茨城大学留学生

目標：留学生に対して、日本のお正月行事を紹介し、実際に体験してもらうことで日本文化への理解をさらに深めてもらう。

### 3:活動記録と会計報告

#### (1)活動記録

安藤 沙彩

No	日時	場所	活動内容	出席者
1	2016年5月12日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 シオン館 208 教室	異文化交流プロジェクトのスケジ ュール協議。	安藤・飯村・大野・ 高場
2	2016年6月2日	茨城キリスト教大学 シオン館 208 教室、 上野先生研究室	Skype で会議。挨拶状作成、高校へ の挨拶日程。	安藤・飯村・大野・ 高場・鈴木
3	2016年6月3日	茨城キリスト教大学 図書館、入試広報部	プロジェクト内容の話し合い、留 学生文書作成。	安藤・飯村・大野・ 高場
4	2016年6月6日	茨城キリスト教大学 図書館、学生ラウン ジ、入試広報部	プロジェクトの詳細について、高校 への連絡など。	安藤・飯村・大野・ 高場
5	2016年6月9日 17:00~17:30	県立日立第二高等学 校	高校挨拶。	安藤・高場
6	2016年6月10日	茨城キリスト教学園 高等学校、水戸第二 高等学校	高校挨拶。	安藤・鈴木
7	2016年6月13日 12:15~12:30	茨城キリスト教大学 国際理解センター	留学生にダンス依頼。	飯村・大野・高場
8	2016年6月16日 12:40~17:30	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	プロジェクトの詳細を決める。 Skype 会議。	安藤・飯村・大野・ 高場・鈴木
9	2016年6月17日 16:00~17:00	茨城キリスト教大学 学生ラウンジ	高校へ電話、プロジェクトについ て。	安藤・大野・高場
10	2016年6月23日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	プロジェクトの準備、後期の実習に ついて協議。	飯村・大野・高場
11	2016年6月27日	茨城キリスト教大学 学生ラウンジ、 国際理解センター	プロジェクト当日の流れ確認、留学 生の現状確認。	安藤・飯村・大野・ 高場・鈴木
12	2016年6月30日	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	プロジェクトの詳細決め。	安藤・飯村・大野・ 高場
13	2016年7月7日	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	プロジェクトの詳細決め、小学校訪 問について会議。	安藤・飯村・大野・ 高場
14	2016年7月8日 10:00~12:00	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	イベント当日の確認。	飯村・大野・高場
15	2016年7月14日	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	当日のプログラム作成、装飾作成。	安藤・飯村・大野・ 高場
16	2016年7月16日 8:00~12:30	茨城キリスト教大学 学生ラウンジ、図書 館 PC 室	台本作成、当日スケジュール確認、 買い出し。	安藤・飯村・大野・ 高場
17	2016年7月17日 15:30~19:30	スターバックス常陸 多賀店	当日の確認、配置図作成。	大野・高場
18	2016年7月21日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	反省会。後期の活動について、アン ケート集計。	安藤・飯村・大野・ 高場

19	2016年9月22日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	後期の活動日時の設定、小学校国際理解活動、シオン祭参加について。	安藤・飯村・大野・高場
20	2016年9月29日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動について。	安藤・飯村・大野・高場
21	2016年10月6日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	購入希望品、国の紹介方法を検討。	安藤・飯村・大野・高場
22	2016年10月12日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	活動報告会、小学校国際理解活動。	飯村・大野・高場・鈴木
23	2016年10月13日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室、図書館	小学校国際理解活動。	安藤・飯村・大野・高場
24	2016年10月19日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室、図書館	小学校国際理解活動。	安藤・飯村・大野・高場
25	2016年10月22日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動、活動報告会の準備。	安藤・飯村・大野・高場
26	2016年10月25日	茨城キリスト教大学 高等学校、茨城キリスト教大学国際理解センター	高校へ活動報告会の案内、留学生にインタビュー。	安藤・高場
27	2016年11月9日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	活動報告会の準備。	安藤・飯村・大野・高場
28	2016年11月10日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	ポスターセッションの準備。	安藤・飯村・大野・高場
29	2016年11月16日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	ポスターセッションの準備、購入品の確認。	安藤・飯村・大野・高場
30	2016年11月24日 12:40~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動、活動報告会、後期予算の検討。	安藤・飯村・大野・高場
31	2016年11月30日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動、ポスターセッションの準備、高校への連絡。	安藤・飯村・大野・高場・鈴木
32	2016年12月1日 12:40~16:10	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動、イベントで撮影したビデオの直し。	安藤・飯村・大野・高場
33	2016年12月4日 14:00~21:00	スターバックス常陸 多賀店	発表用PPT作成。	大野・高場
34	2016年12月7日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	活動報告会の最終調整。	大野・高場・飯村・鈴木
35	2016年12月8日 12:40~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	活動報告会、小学校国際理解活動。	安藤・飯村・大野・高場
36	2016年12月14日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動と New Year's party for international students の打ち合わせ。	安藤・飯村・大野・高場
37	2016年12月15日 12:40~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動と New Year's party for international students の打ち合わせ。	安藤・飯村・大野・高場
38	2016年12月21日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	New Year's party for international students の打ち合わせ	安藤・飯村・大野・高場

			せ。	
39	2016年12月22日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	New Year's party for international students の打ち合わせ。	安藤・飯村・大野・高場
40	2017年1月11日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	小学校国際理解活動と New Year's party for international students について打ち合わせ。	安藤・飯村・大野・高場
41	2017年1月12日 12:40~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室、 国際理解センター	小学校国際理解活動、当日のスケジュールを詰める。	安藤・飯村・大野・高場
42	2017年1月13日 9:00~10:30	マルト大甕店	イベントの買い出し。	飯村・高場
43	2017年1月14日 14:30~17:30	スターバックス常陸 多賀店	活動報告書の原稿作成。	大野・高場
44	2017年1月15日 15:00~19:30	スターバックス常陸 多賀店	活動報告書の原稿作成。	大野・高場
45	2017年1月16日 12:40~14:10	茨城キリスト教大学 図書館	小学校国際理解活動の準備。	安藤・高場
46	2017年1月18日 14:20~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	New Year's party for international students について打ち合わせ。	安藤・飯村・大野・高場
47	2017年1月19日 12:40~15:50	茨城キリスト教大学 上野先生研究室	New Year's party for international students について打ち合わせ。	安藤・飯村・大野・高場
48	2017年1月19日 16:00~18:00	日立市立久慈小学校	小学校国際理解活動実施。	安藤・高場
49	2017年1月23日 18:20~19:30	日立市立久慈小学校	小学校国際理解活動実施。	安藤・高場

## (2)会計報告

飯村 祐美・高場 菜央

品名	単価	数量	合計
ラミネートフィルム (A4)	972	11	10,692
ラミネートフィルム (A3)	1,836	2	3,672
吊り下げ名札	712	6	4,272
油性ペン	162	5	810
万国旗	648	4	2,592
画用紙 (赤)	168	2	336
画用紙 (レモン)	168	2	336
画用紙 (桃)	168	1	168
画用紙 (水)	168	1	168
画用紙 (黄緑)	168	1	168
画用紙 (山吹色)	168	2	336
画用紙 (雪)	168	2	336
シール	1,004	1	1,004
シール	216	2	432
羽子板 (羽根付)	572	4	2,288
ぼち袋	400	4	1,600
折り紙本	1,404	2	2,808
通常はがき	302	1	302
朱肉	918	4	3,672
画材 (パールイエロー)	864	1	864
画材 (パールオレンジ)	864	1	864
画材 (パールレッド)	864	1	864
画材 (パールバイオレット)	864	1	864
画材 (パールブルー)	864	1	864
画材 (パールグリーン)	864	1	864
のり付きパネル	1,000	2	2,000
		総計	43,176

#### 4: 活動トピック

大野 愛恵・高場 菜央

##### (1) 異文化交流プロジェクト

日時：平成 28 年 7 月 18 日（月・祝）

場所：茨城キリスト教大学 3 号館

将来、海外留学や海外で活動することを目指す高校生に、日本に留学している留学生と共に異文化を体験してもらうことを目標に企画した（図 1）。茨城キリスト教学園高等学校様、日立第二高等学校様、水戸第二高等学校様にお声掛けし、33 名もの高校生にご参加いただいた。

異文化交流プロジェクト 企画書	
①日程	平成 28 年 7 月 18 日（月・祝）
②場所	茨城キリスト教大学
③対象	水戸第二高等学校様、日立第二高等学校様、茨城キリスト教学園高等学校様（合計 25 名程度）
④スタッフ	茨城キリスト教大学・茨城大学日本人学生（11 名） 茨城キリスト教大学・茨城大学所属の留学生（合計 20 名程度）
⑤目標	自分とは異なるバックグラウンドをもつ人と交流することで、異文化にふれ、貴重な経験を得ること。 参加者同士が、プロジェクト後も続くような関係を築き、豊かな人間関係を構築すること。
⑥内容	12:30～12:40 受付、ネームカード作成 12:40～13:00 開会式 13:00～13:20 アイスブレイク 13:25～14:25 フリートーク 14:40～15:40 ダンス 15:50～16:00 アンケート記入・回収 16:00～16:30 閉会式・写真撮影 (当日オープンキャンパスは 10:00 から実施しております。)
⑦その他	・参加費は無料です。 ・参加者の方には、全員当日限り有効のイベント保険（無料）への加入をお願い致しております。 ・保険のご用意は、こちらでさせていただきます。

図 1: 異文化交流プロジェクト企画書

当日、学園内ではオープンキャンパスが実施され、ポスター（図 2）やチラシ（図 3）を用いて告知を行い、参加者にはパンフレット（図 4）を配布し、留学生（図 5）と交流することとした。

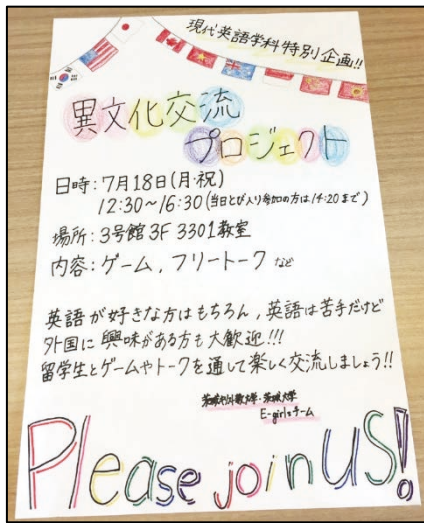


図 2: ポスター

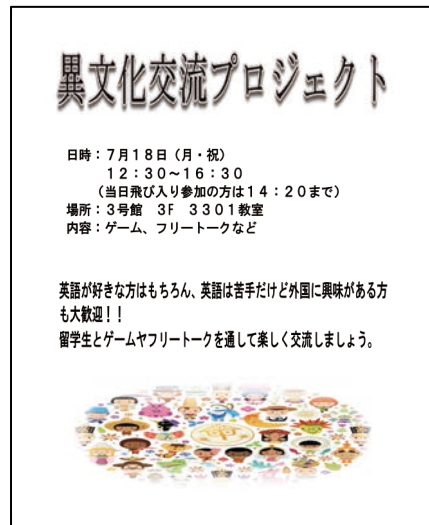
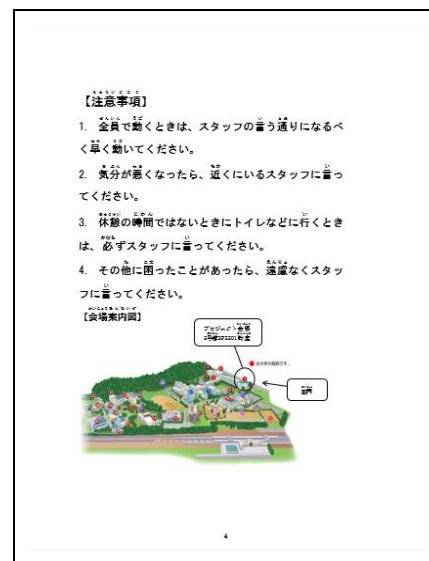
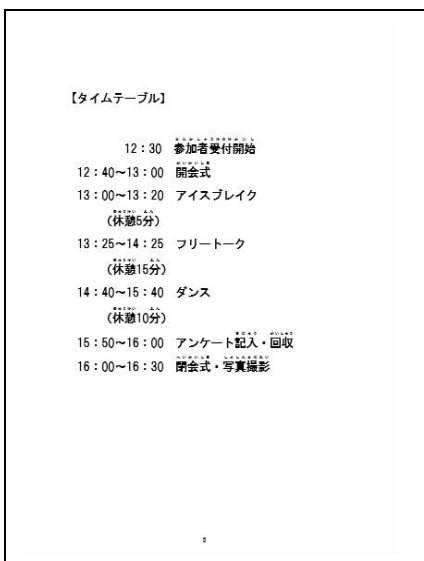
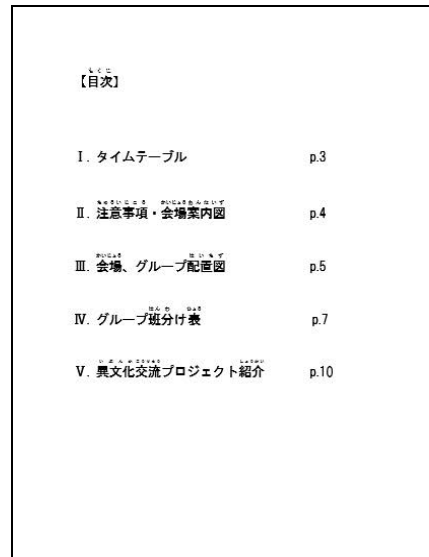


図 3: チラシ





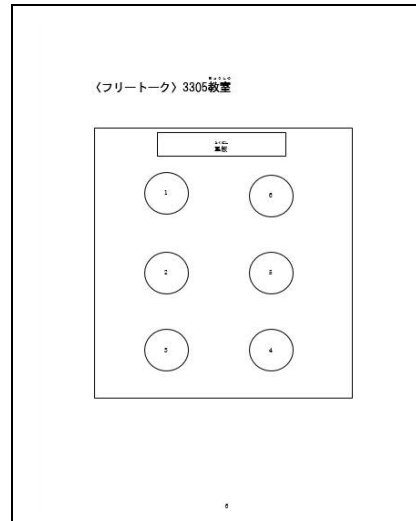
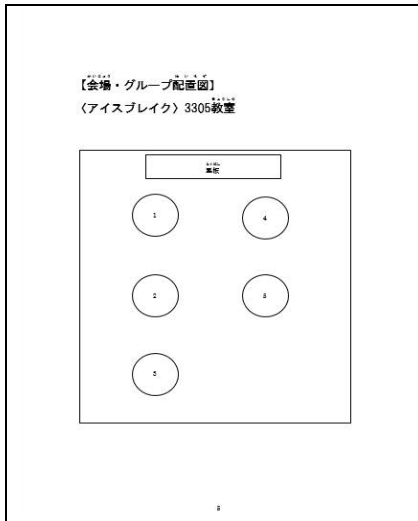
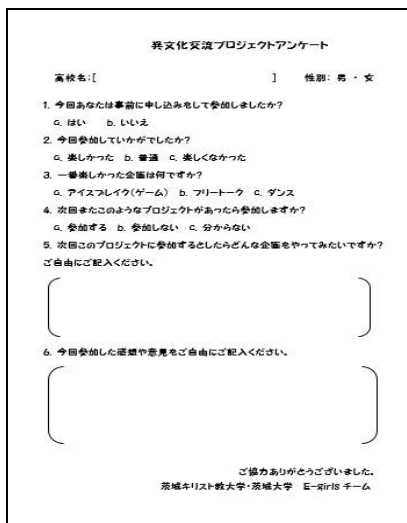


図 4: 異文化交流プロジェクトパンフレット

図 5: 留学生



参加者に対してアンケート (図 6) を実施した。

イベントに参加しての感想は、回答者全員から「楽しかった」との回答をいただいた。楽しかったイベント内容に対しては、「フリートーク」の回答が最も多く、留学生との言葉の壁を感じることなく、積極的に話したいと考える高校生が多いことが分かった。

今後このようなイベントに参加したいか、という質問に対しては回答者のほとんどが、「参加したい」という回答であった。

図 6: 実施したアンケート



図 7:アイスブレイク

高校生と留学生をランダムに組み合わせて5つのグループを作り、アイスブレイクを行った(図7)。高校生と留学生が初めて交流する場で緊張している様子だったが、徐々に緊張が解けていき、楽しく交流している様子が見られた。

5つの国(アメリカ、インドネシア、韓国、中国、ベトナム)の留学生が、自国での生活や習慣を紹介したり、高校生の質問に答えたりした。積極的に留学生に話しかける高校生が多く見られ、海外への関心の高さを実感した(図8)。



図 8:フリートーク



図 9:ダンス

留学生が創作した振り付けでダンスを踊った。チームごとに分かれ、高校生は留学生からダンスを教わり、最後はチームごとのダンスをつなげ、ビデオ撮影を行った。踊っているときの楽しそうな笑顔が印象的であった。留学生と高校生が一つになれた瞬間である(図9)。



図 10:集合写真

留学生と高校生が楽しそうに交流する姿を見て、喜びを感じた。この異文化交流プロジェクトを通して、高校生と留学生が国際交流の輪を広げるサポートができたのではないかなと思う。企画や運営に関しては反省点が多かったので、その反省点を踏まえ、今後の個々の活動に活かしていきたい(図10)。

(2) 小学校国際理解活動

第1回小学校国際理解活動

日時：平成28年12月21日（水）

場所：日立市立水木小学校

対象：日立市立水木小学校6年生（68名）

第2回小学校国際理解活動

日時：平成29年1月26日（木）

場所：日立市立久慈小学校

対象：日立市立久慈小学校3年生・4年生（51名）

外国語活動が必修化され、外国に触れる機会が増した小学生に異文化を知ってもらうことを目標に活動した。



図11: 使用した教材の一例

一目で見て分かりやすいよう、画像をA4サイズ用の紙に印刷し、一枚ずつに説明を加える形で発表した。内容は主に、国の基本情報(国旗・位置・人口・通貨)、食文化、生活である。また、その国の言葉(ありがとう・ごめんなさい・こんにちは・さようなら)を画用紙に書き、発音した(図11)。

ウクライナ人講師も同行し、発表に参加した。小学生の興味をより一層、集めていた。



図12: 発表

実物投影機を使用し、発表した(図12)。小学生たちはそれぞれ様々な反応を見せ、初めて知ることに関心を持っている様子が見られた。

発表後には、クイズの出題と質問を受け付ける時間を設け、そこでも積極的に活動に参加する小学生たちの姿が印象的であった。

(3) New Year's party for international students

日時：平成29年1月21日（土）

場所：茨城キリスト教大学国際理解センター

対象：茨城キリスト教大学・茨城大学留学生

留学生に日本の伝統的な風習である羽根つきや年賀状作成、かるたなどのお正月文化を体験してもら

うことを目標に企画した（図 13）。

## New Year's party for international students

### 企画書

- ①日程 平成 29 年 1 月 21 日（土）
- ②場所 茨城キリスト教大学
- ③対象 茨城キリスト教大学・茨城大学留学生
- ④スタッフ 茨城キリスト教大学・茨城大学日本人学生（6 名）
- ⑤目標 留学生に日本のお正月文化を体験してもらおうと同時にこれまでプロジェクトに携わってくれたことへの感謝の意を伝える。
- ⑥内容  
13:30～13:35 開会式  
13:35～14:45 お正月紹介プレゼン・折り紙・お餅会食  
14:45～15:45 年賀状作成（芋版）  
15:45～16:15 羽根つき  
16:15～16:30 休憩・かるた

図 13: New Year's party for international students 企画書



図 14: 留学生が作成した年賀状と芋版

特にお餅会食は予想以上の人気があり、留学生に非常に気に入ってもらえたようであった。日本のお正月を体験してもらおうと共に、これまでプロジェクトに協力してくれたことへの恩返しができると感じる（図 15）。

芋版では、イラストだけでなく漢字を掘る留学生もいて、様々な芋版が完成した。

年賀状を送る相手のことを考えながら、思いの詰まった一枚を作成することができた（図 14）。



図 15: 集合写真

## 5: 年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

IC×IU=E-girls チーム 安藤沙彩・飯村祐美・大野愛恵・鈴木美緒・高橋菜央

### 私たちは 留学生と高校生が国際交流の輪を 広げるためのサポートをしています

～異文化交流プロジェクト～



7月18日(月・祝)茨城キリスト教大学にて、～異文化交流プロジェクト～を行いました。茨城県内の高校生を集め、様々な活動を通して交流を深めました。高校生・留学生共に、お互い積極的に活動に参加する姿が印象的でした。

～参加してくれた留学生～  
今回のイベントにはICとIUから10名の留学生に参加していただきました。アメリカ、インドネシア、韓国、中国、ベトナムそれぞれの国の魅力や特徴、高校生からの疑問に丁寧に分かりやすく答えました。また、このイベントのメイン企画であるダンスでは、10名留学生に振付してもらいました。



～フリートークの様子～  
5つの国(アメリカ、インドネシア、韓国、中国、ベトナム)に分かれてそれぞれ自由の留学生が高校生の疑問や生活、流行などをノートに書いたりして、ジェスチャーをし、高校生と楽しくトークをしました。

IC×IU=E-girls チーム 安藤沙彩・飯村祐美・大野愛恵・鈴木美緒・高橋菜央

### ～ダンスの様子～

留学生が創作したダンスを参加者全員で踊りました。曲は岸田来未さんの「It's a small world」を使用しました。どのチームも時間一杯使って留学生からダンスを教わっていました。最後には全体でチームごとのダンスをつなげ、ビデオ撮影を行いました。確実に留学生と高校生が一つになれた瞬間でした。




＜参加者の声＞

- 異なる文化を持った人に触れるだけでも楽しかったです。そして、英語を日常会話レベルで話せるだけでもっと楽しめるのではないかと思いました。また、英語を極めたいと思いました。
- 様々な国の方とお話することができて良い経験になりました。
- 国は違っても言葉が通うだけだと感じた。私も英語をもっと頑張る、とても楽しい企画ありがとうございました。

まとめ  
異文化に関心を持っている高校生と留学生が、一緒になって楽しむ、距離を縮めることができるような異文化交流プロジェクトを目指し、準備を進めました。性別や年齢はもちろん、国籍も違う参加者が多く集まるプロジェクトだったので、当日のレクリエーション内容やその進め方に注意をし、工夫しながら決めました。当日は不安な部分もありましたが、プロジェクト終了後に高校生と留学生の両方から楽しかったとの声も頂くことができました。異文化交流プロジェクトを通して、企画運営をした私たちも異文化交流の楽しさや楽しさを感じることができ、とても有意義な経験ができました。

今後の活動  
12月～1月にかけて小学校への訪問授業を予定しています。茨城県内の小学校を対象に、異文化への理解を深めることを目的とした内容の授業を行います。また異文化に興味のない小学生でも楽しめるように写真を使用したり、クイズを実施したりするなど、楽しい授業を計画しています。この授業をきっかけに、小学生の異文化に対する興味や理解が少しでも深まればと考えています。

図 16:ポスターパネル(1/16 縮小)



図 17:活動報告会での発表風景

## 6:最終レポート

### 二年目で感じたこと

#### ～異文化交流チームでの活動を通して～

茨城大学 2年 鈴木 美緒

私は二年次からこのプロジェクト実習に参加し、今年で二年目の活動となった。プロジェクト実習を履修したのは自分の中で成長を実感したい、何か変わりたいと強く思ったことがきっかけであった。当時大学に入学して一年が経ち、これまで何となく学校生活を過ごしてきてしまったと感じていた。何かやりがいのあることを見つけない、何か成し遂げたいと感じていたが、自分には何ができるのか、何がしたいのかが分からず、残りの大学生活や自分の将来に対して漠然とした不安を感じていた。そんな時に見つけたのがこのプロジェクト実習の授業であった。この授業では自分たちで何がやりたいのかを考え、テーマを決めなければならない。自分たちで問題点を考え、情報収集を行ったり、現地へ赴いたり、関係者の話を聞いたり、イベントに参加したりと、アクティブに活動する。

また私が大学で今まで履修してきた授業は半年のチームで行われるものがほとんどであったが、このプロジェクト実習は一年間を通して行われる授業であるため、同じメンバーで一つのことに携わることができる。昨年度は水戸市役所公共交通課の方達に協力して頂き、水戸市の公共交通の活性化を軸に、一年間活動を行った。一年目の活動は、わからないことも多く、メンバー内でも意見が割れ、衝突することも多くあった。しかし、自分たちで問題点を考え、それに向けて活動した一年はとても充実していて、実りの多いものとなった。

二年目であった今年は、あえて去年とは全く異なるテーマで活動したいと思った。授業を通して、自分の興味のあることをテーマにし、関心を深めていきたい。

今年度発足された異文化交流チームは、茨城キリスト教大学の学生との合同チームとなり、茨城大学から私が一名、茨城キリスト教大学からは四名の学生が集まった。学年や学部、専攻、そして大学すらも異なる五名での活動は、去年の活動では問題とならなかったようなことも、課題となったりした。特に一番大きかったのは、なかなか顔を合わせて活動することができなかったことであ

る。大学が異なっていると、授業の開始時間や終了時間が微妙に異なり、またキャンパスの場所が離れていたため、毎週の授業の度にどちらかの大学へ、赴くことが困難であった。



図:異文化交流プロジェクト

最初は、昨年と活動との違いに戸惑ったりすることもあったが、そんな時こそ、メンバー内でよく話し合ったり、先生方や先輩たちにアドバイスを頂きながら、対処することができた。なかなか会って話すことができないという課題も、アドバイスを参考にし、スカイプやライン電話などの SNS を利用することで解決することができた。

二つの大学から、学年も専攻も、興味や関心を持っている分野も異なる五人での活動は、話し合いの度に自分が予想もしていなかったような意見やアイデアが飛び出し、本当に様々な考え方を知ることができた。色々な考えや意見に触れていくなかで、自分の考えもまた深めていくことができたと感じた。

去年に引き続き、今年はこのプロジェクト実習を履修し二年目であったが、毎年異なる課題や問題点があり、それを解決するために、去年とは全く異なるアプローチで、解決策を考える必要があった。そのため、もちろん苦労も多くあったが、得られた事もその分沢山あり、大きく成長することができた一年であったと感じる。

## プロジェクト実習を通して学んだこと

～新しいことに挑戦してみて～

茨城キリスト教大学 2年 安藤 沙彩

私がこのプロジェクト実習を履修したきっかけは、何か新しいことに挑戦してみたい、という気持ちからでした。

私は現在大学2年生ですが、1年生のころ、慣れない生活に必死に慣れようと必死でした。なにか新しいことに挑戦するわけでもなくて、ただ学校とバイトをする毎日でした。自分でも変わらなきゃいけないと思って毎日過ごしていたところに、このプロジェクト実習に出会いました。プロジェクト実習は社会的に必要なスキルを学べる力を育成する、さらに他大学との連携、異文化交流を促進させる活動を行うと普通の授業とは少し違うということに魅力を感じて履修することを決めました。

最初に行った「異文化交流プロジェクト」では、自分たちでイベントを企画、実行する大変さを学びました。イベントには近隣の高校生を募集して、留学生と交流の機会を与えようと企画しました。最初は何をすればいいのかわからずただ時間だけが過ぎてしまいました。少しずつ段取りが決まったころにはイベントの日まで二週間もありませんでした。それでも私たちは急ピッチで作業を進め、ぎりぎり間に合わせることができました。当日の反省点はありますが、高校生と留学生が楽しくダンスをする等、笑顔が絶えない良いイベントになりました。イベントでは多くの人に協力していただき、実施することができました。何事も筋道を立てて、周りの人と話し合いを重ねて、完成させる達成感を学ぶことができました。

難しかったことは、この授業が茨城大学との連携授業なので、なかなかメンバー全員が集まるということが出来なかったことです。このことにより、メンバーの役割に偏りができてしまったことが反省点に挙げられました。後期のイベントに向けてこの点をどのように克服するか、話し合いを重ねました。その中で出てきた解決案がビデオ通話です。ビデオ通話を活用することにより、話し合いに茨城大学の方の参加が可能になり、効率よく会議を進めることができました。しかしメンバーそれぞれが忙しい時期もあり、その時は LINE を活用して話

し合いました。こうして一つの解決方法に絞るのではなく、状況に応じて柔軟に考えていく力をつけることができました。

後期には「小学校国際理解活動」と「留学生向けのお正月イベント」の二つを企画しました。

「小学校国際理解活動」では小学生を相手とするので、発表内容をどのようにしたら面白いのかを考え、留学生の力を借り、作り上げることができました。この活動を通じて、文化の違いというものは面白いなということを実感しました。

「留学生向けのお正月イベント」では前期の反省点を生かしてもう一度行いたいと自分たちで企画したイベントです。準備をする期間が少ないなかグループで集まり、企画を固めていきました。前期ではなかなか内容の案が出てこなくて、時間がかかってしまったので、今回はみんなが思いつく限りの案を出して、そこから絞っていくことにしました。その結果考えられないほどの案が出てきました。言いたいことが言えずに話し合いが進まないより、たくさんの案を出して検討をしていくほうブレンストーミングのほうが効率がよいことを学びました。

私はこのプロジェクト実習を履修してよかったと思います。これから社会人になるうえで大切なスキル、コミュニケーション能力だけでなく、予期せぬ事態に対応する力、インターネットを活用する力、多くのスキルを身に付けることができたからです。このプロジェクト実習で学んだことを今後の学生生活に生かして、いろんなことに挑戦していきたいと思います。



図:異文化交流プロジェクト

## プロジェクト実習を通して学んだこと

～仲間がいたからできたこと～

茨城キリスト教大学 2年 飯村 祐美

プロジェクト実習の履修説明に参加した時、私は留学を終え帰国したばかりでした。留学先で国際交流の楽しさを学んだ私は、私が体験したこの感覚を誰かに伝えたい、共感してほしいという思いでいっぱいでした。また、私自身ももっと国際交流に積極的に取り組みたいと考えていました。そんな矢先に、プロジェクト実習Cの「異文化交流プロジェクト」という授業に魅力を感じ、すぐに履修することを決めました。この授業で私のやりたいこと、何か新しいことに挑戦できると思うと本当に楽しみでした。また、他大学との交流、社会人の疑似体験など他にも多くのことを学べる良い機会だと思いました。

茨城大学と茨城キリスト教大学の学生で結成されたチームでの最初の活動は「異文化交流プロジェクト」でした。このイベントは高校生を対象に国際交流、異文化理解を深めることをテーマにしたものです。今まではイベントに参加する側だったため、今回初めての企画側を体験し、思ったことは本当に難しかったということです。白紙の状態からそこにどんどん内容を詰め込んでいき、内容も、どのような企画をすればこのイベントに魅力を感じ興味を示していただけるのか、異文化を楽しく分かりやすく理解していただくにはどのように伝えればいいのかなど、参加して下さる方々のことを思ってイベント作りに励みました。企画中には全くアイデアが思い浮かばず物事が思い通りに進まない時や、思いもよらないハプニングがありました。でも、そこで心の支えになってくれたのは共に活動してきたメンバーでした。自分一人では抱えきれない困難も仲間がいることで、仕事を分け合い、助け合いながら最後まで諦めずに自分達が納得のいくまで企画を練ることができました。私はこのメンバーに出会え、一緒に活動できたことを心から誇りに思っています。このイベントを良いものにしたいというメンバー全員の思いがあったから、妥協を許さず、困難も一つ一つ乗り越えて来られたのだと思います。また、このプロジェクトを進めていく中で、イベントとはたくさんの方々の協力があってこそ成り立つものなのだと感じました。当日使用する場所の手配一つ取ってみても本当にたくさんの方に関わっていただきました。また、そこからアポイントをとる時の日程調整や、目上の方とお話をする時の言葉遣いなども学ぶことができました。

このようにして私たちが試行錯誤を繰り返し、準備を進めてきた「異文化交流プロジェクト」は成功裏に終わられたと思っています。当日の内容を細かく見ていけば、

課題が残る点も少々ありました。ですが、高校生に異文化理解・国際交流の楽しさを伝えるというこの目標は達成することができました。イベント中、参加して下さった学生、留学生の皆さんが壁を作ることなく、自ら積極的に話しかけていく様子を見てみると、私達自身も国際交流の素晴らしさに改めて気づくことができました。

「出会えば友達」という言葉通り、話す言葉が違っていても、文化・習慣が異なってもお互いのことを知りたいと思う気持ちがあれば国を超えて友情を築くことは難しいことではなく、気軽に楽しめるものが国際交流なんだということを参加者の皆さんに知っていただけたことが何よりも嬉しかったです。準備期間中、先が見えずに途中で投げ出したくなることもありましたが、参加してくれる人達のことを思うと自然と頑張ることができました。誰かのために何かをすることの難しさ、喜びを教えてくれたこのイベントに感謝しています。

さて、私達は現在、次に行われるイベント **New Year's party for international students** に向けて準備を進めています。このイベントは、茨城キリスト教大学の留学生に日本のお正月を体験してもらいたいという思いから企画をしました。お正月の食べ物、遊び、年賀状作りなど様々な案が出てきたのですがこれらを留学生にどう体験してもらおうかが今回のイベント企画で悩んだところでした。ここでも、前回のイベント企画で学んだ、自分が相手の立場になった時、どんなことをしてもらえたら分かりやすいかを考えながら作成しています。留学生の心に残るような日本のお正月を提供できたらいいと思っています。私達が作り上げる最後のイベントを絶対に良いものに仕上げたいと思います。

最後に振り返ってみると、私自身、気を利かせて行動することができず、周りの皆さんには迷惑をかけたことも多かったと思います。でも、そんな私でも受け入れて最後までチームの一員として信頼してくれたメンバー、私達を様々な面からサポートして下さった先生方には本当に感謝しています。チームの皆さんが頑張っているから私も頑張ってこられましたし、先生方のご指導があったからこそ私達が活動することができました。授業の中で人へ感謝することが多くありました。基本的なことですが、この授業を通して私自身が小さなことにも感謝できる人間に成長できていたらいいです。私の学生生活の中で貴重な経験をさせてくれたプロジェクト実習にも感謝しています。



## プロジェクト実習を履修して

～今だからできること～

茨城キリスト教大学 2年 大野 愛恵

私がプロジェクト実習の履修を決めたのは、「他の人とは違うことに挑戦したい。そして、成長したい。」という気持ちがあったからだ。この一年間、プロジェクト実習での活動を通して私は、成長できたと実感している。しかし、反省すべき点が心に多く残る。ここではその反省点を中心に、一年間の活動を振り返る。

私たちのチームは、茨城大学と茨城キリスト教大学の二大学の学生からなる連携チームだ。二大学間には物理的な距離があるし、授業時間の関係で、メンバー全員が同じ時間に1つの部屋に集まることは大変難しかった。そのハンデに対して私たちは、毎回のミーティング内容を綿密に記録し、メールとSNS (LINE) で小まめに連絡を取り合い、情報共有に努めた。加えて、一か月に1度はメンバー全員で顔を合わせてミーティングをする時間を設け、メンバー間のコミュニケーションが取れるようにした。このようにして、私たちができる最善の対応を取ったつもりであったが、それでもメンバー間で情報の差が出てしまうことがあったり、誤った形で情報が伝わっていて、勘違いを招いたりすることがあった。年間を通して感じた情報共有の難しさから、どんなに小さなことであっても、メンバー間で情報を共有することがいかに大切かを学ぶことができた。次に、私たちのチームには計画性が欠けていた。活動を進めるにあたって、大まかなスケジュールも立てずに活動をしていた。そのため、催しの直前はかなり詰めて活動し、リハーサルの時間を取ることができなかった。また、急なミーティングも多くあったので、参加できるメンバーが限られたり、各メンバーの活動量に大きな差が出てしまったりと、メンバー全員が納得しながら活動を進めることができなかった。メンバー全員で、活動の振り返りと反省をし、次の活動につなげていけていたらよりよくできていたのではないと思う。しかし、催しの直前に詰めて活動をした時、時間がないからと手を抜くのではなく、自分たちが納得のいくまで活動ができたことは、嬉しく思う。

一年間の活動を通して、私の心には反省すべきことが多く残るが、それだけではない。プロジェクト実習を履修して学んだことや、履修したからこそできた貴重な経験がある。外部の方々へ送る資料を作成した時には、資料の作成方法や正しい言葉の使い方を学ぶことができたし、電話で連絡を取った時には、電話をする時のマナーを学ぶことができた。先生方とのメールのやり取りでは、メールのマナーを学ぶことができた。資料の作成や

敬語をはじめとするビジネスマナーは大学の講義で学んでいるので、ある程度は身につけていると思っていたが、実際に使用すると、自信を持って使用することができなかった。まだまだ学習が必要だと痛感した。もしプロジェクト実習を履修していなかったら、身に付いているようで身に付いていなかったビジネスマナーに気が付くことはできなかったと思う。貴重な経験としては、先進地実地研修や活動報告会への参加、イベントの企画と開催が挙げられる。先進地実地研修や活動報告会へ参加して、他の学生の取り組みはとても刺激的であったし、それぞれのチームの発表方法から学ぶことが多くあり、有意義な時間を過ごすことができた。イベントの企画と開催では、それまでは参加する側であったイベントを自分たちで一から作り上げるということで、楽しんでもらえるイベントを作り上げたいという気持ちと、自分たちで本当にイベントが作り上げられるのかという不安が入り交じり、なかなか思うように進まず歯がゆい思いをたくさんしたが、イベントの参加者からの楽しかったとの感想をいただいたときは、この上ない達成感を感じた。あの喜びは、私の心の中に生き続けると思う。

この一年間で私は、「今だからできること」をたくさん経験することができた。失敗してしまうこともあったけれど、それを引きずるのではなく、次にどう活かしていけばよいのかを考えればよいのだ。このように考えられるようになったのは、プロジェクト実習を履修したからだと思う。

最後に、一年間私たちにご指導とご支援を下さった先生方や先輩方をはじめとする関係者の皆さまにお礼を申し上げたいと思う。お世話になりました。またご縁がありましたら、どうぞよろしくお願ひ致します。ありがとうございました。



図:異文化交流プロジェクト

## 自分自身を成長させたプロジェクト実習

～社会への一歩を踏み出す～

茨城キリスト教大学 2年 高場 菜央

この一年間、プロジェクト実習を受講したことで、自分自身を見つめ直すことができ、成長させることができました。この授業の魅力的なところは他の授業と違って、座学でなく、アクティブラーニングと言われる自ら考え、行動する授業であることである。そのため、自分たちが動かなければ何も始まらない。自分たちで裁量することができる反面、プロジェクト一つ一つに対して責任があり、行動に責任を持つ必要がある。しかし、そこで得たものは数知れず、学生ではなかなか踏み入れることができないような会計や渉外など授業の背景にあるものを体験することができ、自分自身が今後社会に出る際に役に立つようなビジネスマナーや思考力を養うことができた。また、資料作成に必要なパソコンのソフトウェアなど社会人として求められるスキルを学ぶこともできた。反省点としては二大学連携がうまくいかなかったことが挙げられる。本授業は2016年度、新たに茨城キリスト教大学で開講され、茨城大学と連携しながらプロジェクトを進めることになっていた。しかし実際にプロジェクトを進めるにあたって水戸と日立という離れた場所に位置する二大学間で連絡を取り合うことに不都合を感じた。話し合いもなかなか予定が合わず、茨城キリスト教大側で準備を進めてしまっていることが殆どでskypeやlineなどのSNSを積極的に利用し、連携を図るべきであった。

前期に行われた異文化交流プロジェクトでは、約二ヶ月間という短い期間の中で企画から運営まで様々なことを行った。どうすれば楽しんでいただけるのか、効率よく進めるにはどのような順序が良いのかなど、相手の求めているものを考え、よりよいものを生み出そうと努力できた。一方、準備を進める中で、ある程度の妥協も大切であることを感じた。後期に開催したNew Year's party for international studentsの準備では実際に留学生に餅つきを体験してもらおうという企画をしていたが、衛生上の問題により実施が困難だと判断された。自分たちにとって目玉企画で自信があり、正直、悔しい思いがあったが、安全性を考えるとやはり諦めなければ

ならないのだと感じた。私は一度何かを決めたとき、変更となるとなかなか切り替えができないことがあった。しかし、このような経験から、何か一つのことを諦めずに貫き通すことも大切だが、様々な背景からある程度妥協することも大切であることに気づいた。自分の個人の達成目標ルーブリックで挙げた一つである「傾聴力」に関して改善できた部分があるのではないかと思う。

このプロジェクト実習を通して、メインに活動するのは私たちではあるが、その背後には多くの方々からご支援いただいていることも実感した。たとえば、異文化交流プロジェクトで私は渉外の担当で高校を訪問したが、そこで担当してくださった先生方が高校側に私たちのプロジェクトについて職員会議で説明して下さっていたり、大学のオープンキャンパス開催を担当されている方はパンフレットに掲載する手配をしてくださった。そのような存在があったからこそ、プロジェクトに打ち込むことができたし、反対に、よりよいものを作り上げなければならぬという使命感に燃えることができたのではないかと考える。ご協力くださった全ての方にこの場をお借りして、感謝申し上げたい。

このプロジェクト実習を受講し、前述したように「傾聴力」について多少なりとも改善できた。私は普段から人の話を聴くという行為が苦手で、自分の意見を貫き通そうとすることが多くあった。しかし、プロジェクト実習を受講してから、自分の意見も踏まえつつ、相手の意見も取り入れてまとめるということが以前よりもできるようになった。今後も継続できるようにこの点について意識していきたいと思う。

一年間を通して、プロジェクト実習を受講したことでこれまでにない貴重な経験をすることができ、自分がグループ内ではどんな存在なのか、グループにどんな影響を与えているのかなど様々な視点から自分を見つめ直すことができ、自分の強みや未熟さを知った。また今後社会人となる上で重要な基礎知識など様々な知識を習得できた。今回の活動で得たものや反省点を今後の活動に活かしていきたいと思う。

## 7:おわりに

鈴木 美緒

今年度の活動を振り返ってみると、三つの活動を企画し、忙しいながらも充実した一年であったと実感している。しかし、茨城キリスト教大学と茨城大学の学生による二大学での合同授業は、苦勞する点も多くあった。それぞれの大学の授業の開始時間や終了時間が微妙にずれており、お互いの予定を合わせることは容易ではなかったが、Skype や LINE 通話などの SNS を使い、何とか顔合わせを行うことができた。その後も Skype や LINE 電話を使った話し合いを行ったが、電波の影響でうまく接続できないこともあった。また、連携が十分だったとは言えないために、担当する仕事量の配分がうまくできず、特定のメンバーの負担が大きくなってしまったこともあった。茨城キリスト教大学と茨城大学の学生による、二大学での合同授業であるがゆえの課題が多くあり、ほかのチームとはまた異なる難しさを感じた。

また、異文化交流プロジェクトは、2012 年から続き、今年で五年目の歴史ある活動である。先輩たちが築いてきたこの活動を守っていかなくてはいけないというプレッシャーと、今までの活動と同じものではなく、何か新しいことを企画していかなくてはという思いを抱えながらの一年だった。またメンバー内で上手く連絡を取りながら準備していても、いざ実行する段階になると、スムーズにいかないことも多々あった。しかしその都度工夫し、改善していくことを心がけ、この積み重ねで少しずつ課題を解決することができた。

この一年、異文化交流の発展を目標に、高校生や小学生を対象にした活動を行ってきたが、これらの活動を通して、私たちメンバー自身の異文化交流に関する興味や関心を深めるきっかけにもなったと感じる。異文化交流の楽しさを少しでも伝えることが出来ればと思い活動してきたが、逆に私たちが学ぶことが多くあり、今まで自分の持っていた考えが改まる場面も多くあった。一年間の活動を通して、メンバーそれぞれ感じるものがあり、興味や関心も深まったと思う。この活動を通して、考えたこと、感じたこと、学んだことを忘れずに、今後の自分の専攻や人生に生かしていきたいと思う。

最後に、この活動を行うにあたって協力して頂いた、茨城キリスト教大学上野尚美先生、茨城大学鈴木敦先生・神田大吾先生、茨城キリスト教学園高等学校大川通昭教頭先生・皆さま、日立第二高等学校坂本八穂先生・皆さま、水戸第二高等学校谷萩淳子先生・皆さま、茨城キリスト教大学入試広報部の皆さま・国際理解センターの皆さま、茨城キリスト教大学と茨城大学の留学生の皆さま、そのほか私たちの活動にご尽力いただいたすべての方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

# 5 : Domaine MITO チーム

## プロジェクト実習D

リーダー	: 鈴木 勇希	茨城大学人文学部社会科学科	2年
副リーダー	: 石橋翔太郎	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
書記	: 飯塚子都香	同 上	2年
会計	: 佐野 智太	茨城大学人文学部社会科学科	2年
メンバー	: 高山 直人	同 上	2年
メンバー	: 長澤 賢司	同 上	2年
メンバー	: 三角 佑斗	同 上	2年

主担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文学部 教授  
副担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授

2016 年度  
茨城大学人文学部 プロジェクト実習 D  
「Domaine MITO チーム」活動報告

1:はじめに

鈴木 勇希

我々 Domaine MITO チームは、2016 年度に新規に立ち上がった学生によるプロジェクトチームである。前年度に起業した Domaine MITO 株式会社と様々な活動を通して、水戸の中心商店街の活性化を行ってきた。Domaine MITO 株式会社は茨城県で採れた葡萄を、水戸の中心商店街（泉町 2 丁目）へ運び、街の中でワインを造る会社である。京成百貨店や近隣の飲食店において、醸造したワインの販売を行っており、東京への販路拡大を目指し活動している。また、Domaine MITO 株式会社は一般のワイナリーとは違い、様々な醸造過程に一般の方が参加できる。すなわち、街の中のワイナリーが地域の人々の交流の場になっており、地域活性化の一役を担っている。

本年度のプロジェクトチームは、街の中でワイン造りを行うという珍しい活動を通して、水戸の中心商店街を活性化したいという、茨城大学生 7 人のメンバーによる活動であった。

この 1 年間の活動を通して、我々は様々な課題に直面した。これらを通して、チームとしても、また個人としても成長することができた。新規チームならではの問題もあり、1 年間だけでは時間が足りないというのが率直な感想である。それらの失敗点・反省点を含め、本年度の活動を報告書としてここに記し、来年度以降の我がプロジェクトチームの継続・発展、他の新規チームのアドバイスに繋がることを願っている。

## 2:活動の目的と概要

高山 直人・佐野 智太

(1)活動の目的：街の活性化の拠点としての **Domaine MITO** のまちなかワイナリーという場をみんなに知ってもらうこと。

### (2)活動の概要

#### ①ランドネきたかんマルシェ

日時：2016年9月18日（日）から20日（火）10：00～20：00(最終日は17：00)

場所：新宿駅西口広場イベントコーナー

目的：水戸のまちなかワイナリーと水戸のまちなかワインの周知を図る。また、約1週間後に開催を控えた水戸まちなかフェスティバルのPRも行い、イベントに来てもらう。

内容：ボトルワイン（鯉淵赤、鯉淵ロゼ）の販売、まちなかワイナリーや水戸まちなかフェスティバル宣伝用のフライヤーの配布

結果：水戸フェス用の広告フライヤーに興味を持っていただけたお客さまにお配りできた。

アンケート結果：アンケートを取ったうちの68%の人が「水戸に行ってみたい」と答えてくれた。

また、アンケートを取ったうちの90%の人が「**Domaine MITO**の体験会に参加したい」と答えてくれた。

お客様の声：ロゼワインが飲みやすかった など

反省：(i)試飲の量に見合った効果を挙げられなかった。

(ii)それぞれの仕事が多岐的であり、お客様との信頼関係が築きにくかった。

(iii)初日に商品の特徴やワインに対する知識が曖昧でうまく魅力を伝えられなかった。

#### ②水戸まちなかフェスティバル

日時：2016年9月25日（日）10：00～16：00

場所：水戸市中心市街地国道50号

目的：正式リリースを目前に控え、**Domaine MITO**のワインを水戸の地でもっと多くの人に知ってもらう。また、葡萄収穫体験、醸造体験に多くの人に参加してもらう。

内容：グラスワイン、ボトルワインの販売、ぶどう収穫体験バスツアー（つくばワイナリー、新規の笠間ワインを楽しむ会の畑）、ワイン醸造体験（葡萄踏み、葡萄の破碎・除梗作業）

結果：グラスワイン329杯、ボトルワイン2本。体験参加者つくば9人、笠間14人、醸造のみ5人。

反省：(i)それぞれがワインの特徴についてある程度理解した状態で販売ができた

(ii)それぞれの仕事の専門化がされており、お客様がスタッフを「〇〇担当の人」と認識することができた。

(iii)それぞれが事前に知識をつけるなどの準備できた。

(iv)ランドネきたかんマルシェでの反省点を生かして活動することができた。

(v)バスの添乗員など、初めてのことが多い中でうまく対応しながら活動することができた。

#### ③茨苑祭

日時：2016年11月14日（土）から15日（日）

場所：人文講義棟23番教室（こみっとフェスティバルチーム、さとみ・あいチームと合同）

目的：**Domaine MITO** チームとしてこれまで行ってきた活動を多くの人に知ってもらう。加えて、**Domaine MITO** 株式会社のパンフレットを配布し、まちなかワインを多くの人に知ってもらう。

内容：活動の内容を記したパネルと、活動の写真を貼り付けたコルクボードの展示。**Domaine MITO** のパンフレット2種類の展示。ワイン（つくば2015の赤と白、鯉淵ロゼ）とワインボトル（鯉

渕赤、鯉渕ロゼ、八千代赤)の展示。

結果：展示に興味を示してくれる方が見られ、質問をしてくれる方もいた。

反省：(i)展示を見てくれている方に積極的にパンフレット等を渡すことができた。

(ii)その一方で、他のチームの展示のお手伝いに夢中になりすぎて、展示の説明がおろそかになった部分がある。

#### ④笠間焼プロジェクト

日時：2016年9月29日(木)(最初の打ち合わせ)～

目的：Domaine MITOのワインの新たな販売方法の考案。

内容：市場の分析(ワイン、お酒全体)、SWOT分析によるDomaine MITO株式会社と、水戸の分析、ターゲット設定、デザイン要素の考案

反省：(i)分析を行い、その結果に合った商品を提案する大切さを理解した。

(ii)拙いながら、企画書という形に仕上げることができた。

(iii)分析に時間がかかってしまい、計画通りに企画が進まなかった。

(iv)会議を行う際に、チームメンバー全体にきちんと内容を分かりやすく伝えるということがあまりできていなかった。

#### ⑤Domaine MITO チームサイト作成

日時：2016年10月27日(木)から2017年1月6日(金)

場所：茨城大学、プラスデザインズ・カワノベ事務所

目的：Domaine MITOが体験型であることを強調するとともに、体験できる内容を知ってもらいDomaine MITOに興味を持ってもらう。最終的には一口オーナーになってもらう。

内容：体験可能な活動を学生視点で紹介

結果：サイトのリリースに成功し、話し合いの結果修正を加えた。

反省：(i)内容にストーリー性をもたせようとしたが、体験内容の詳細性を両立させることができず、どちらも中途半端なものになってしまった。

(ii)サイト作成に当たって情報共有の遅れによりプロジェクト進行に支障をきたした。

(iii)短期間で行ったため、プロジェクト期間内に完成度を目標まで高めることができなかった。

#### ⑥茨城大学学生地域活動発表会 2016〈はばたく！茨大生〉

日時：2016年12月21日 14:30～17:10

場所：教育学部D棟201番教室

内容：茨城大学生の諸活動を自治体の方々に向けて発表する。

結果：社会連携センターの方々をはじめ、様々な地方自治体の職員の方々にお集まりいただき、Domaine MITOの活動について知ってもらうことができた。

反省：(i)地域の様々な方と交流することができた。

(ii)茨城大学で他に行われている活動について知ることができた。

#### (3)プロジェクトを通して学んだこと

チームメンバー間での連絡が大切だと感じた。仕事を分担することで、作業の効率化や個人の負担の軽減につながった一方で、連絡が十分に行われず作業を個人が行うことになったり、必要な情報共有が行われなかったりしたことが何度かあったからだ。

### 3:活動記録と会計報告

#### (1)活動記録

飯塚 子都香

	日時	場所	活動内容	出席者
1	5月27日(金) 13:30~15:30	水戸農業高校	葡萄苗の定植作業	鈴木、三角、佐野、高山、飯塚
2	5月29日(日) 14:00~18:00	茨城大学人文学部棟 C406	今後の日程確認、6/1会議の事前ミーティング	鈴木、高山
3	5月31日(火) 12:00~12:20	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	第一回会議の内容伝達、第三回会議までの課題確認	鈴木、石橋、高山、三角、飯塚
4	6月1日(水) 12:00~12:50	茨苑会館談話室	ワインの造り方、次回会議の質問事項の確認	鈴木、石橋、三角、佐野、高山、長澤、飯塚
5	6月1日(水) 12:55~16:00	泉町会館	自己紹介、Domaine MITO 株式会社の紹介、ワインについて	鈴木、石橋、三角、佐野、高山、長澤、飯塚
6	6月3日(金) 1限終了後~ 10:20	茨城大学人文学部棟 C406	今後のミーティングの確認、他チームとの連携に関する話し合い	鈴木、石橋、三角、佐野、高山、長澤
7	6月5日(日) 9:45~23:00	東京豊洲、清澄白河	日本ワイン MATSURI の見学、都内視察：フジマル清澄白河	鈴木、三角
8	6月6日(月) 12:00~12:50	茨城大学図書館2階 共同学習エリア	プレゼンの直し作業	石橋、三角、佐野、長澤、飯塚
9	6月7日(火) 16:30~17:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	外部予算についての話し合い	鈴木、高山
10	6月8日(水) 13:00~17:30	図書館1階共同学習 エリア、人文学部棟 A219	茨城県の補助金に申請するための書類作成に関する話し合い	鈴木、石橋、佐野、高山、長澤、飯塚
11	6月9日(木) 16:20~18:00	茨城大学人文学部棟 C406	申請書作成・Domaine MITO の方向性に関する話し合い	鈴木、石橋、長澤
12	6月9日(木) 19:00~21:00	鈴木宅	申請書の最終まとめ	鈴木、高山
13	6月10日(金) 10:20~12:00	茨城大学人文学部棟 C406	申請書完成に向けての作業、茨苑祭に関する会議	鈴木、高山、三角、飯塚
14	6月12日(日) 9:30~13:00	ケーズデンキスタジアム水戸	PRの実施、試飲、フライヤーの配布	鈴木、石橋、佐野、長澤
15	6月15日(金) 13:00~17:30	茨城大学人文学部棟 A214	広告に関する話し合い	鈴木、高山、佐野
16	6月22日(水) 13:00~17:30	茨城大学人文学部棟 A213	県の補助金に関する話し合い	鈴木、石橋、佐野、長澤、三角、飯塚
17	6月26日(日) 15:30~16:00	茨城県三の丸庁舎3階 共用A会議室	県の補助金の二次審査に参加	鈴木、佐野
18	6月27日(月) 12:00~13:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	企画についての話し合い、これまでの活動の確認	鈴木、高山、飯塚
19	6月28日(火) 12:00~12:50	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	企画のプレゼンについての話し合い	鈴木、石橋、佐野、高山、飯塚
20	6月29日(水) 12:00~12:50	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	茨苑祭会議についての話し合い	鈴木、佐野、高山、長澤、三角



21	6月29日(水) 13:00~17:00	つくば市役所会議室	いばらきワイン産業連絡協議会 の役員会に参加	鈴木、佐野
22	6月30日(木) 12:00~12:30	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	7月の日程の確認	鈴木、石橋、佐野、長澤、 飯塚
23	7月1日(金) 9:00~16:15	人文学部棟 B502、図 書館2階グループ学 習室	水戸フェスについての話し合い	石橋、佐野、鈴木
24	7月2日(土) 14:00~17:00	茨城県三の丸庁舎3 階 共用会議室A	県の補助金の事業説明会	鈴木
25	7月6日(水) 12:40~14:40	茨城大学図書館2階 グループ学習室	水戸フェスで行うイベントに関 する話し合い	鈴木、佐野、長澤、 (高山、飯塚)
26	7月20日(水) 13:00~16:30	泉町会館	機材の搬入、やりたいことの確 認、ランドネきたかんについて	鈴木、石橋、佐野、高山、 長澤、三角、飯塚
27	7月21日(木) 16:20~17:50	茨城大学図書館2階 グループ学習室	夏休みの日程確認、インターンシ ップについて	鈴木、石橋
28	7月29日(金) 12:00~12:40	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	インターンシップに関する話し 合い	鈴木、石橋、高山、飯塚
29	8月3日(水) 12:40~12:50	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	名刺の配布	鈴木、石橋、佐野、高山、 長澤
30	8月8日(月) 12:10~12:20	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	名刺の配布	鈴木、飯塚
31	8月14日(日) 14:00~16:00	泉町会館	インターンシップの具体的な内 容に関する話し合い	高山
32	8月20日(土) 8:00~17:30	泉町会館	開所の記念式典、醸造	鈴木、長澤、佐野、高山
33	8月25日(木) 8:00~17:45	泉町会館	醸造、座学、ワークショップ (インターンシップとして)	石橋、佐野、長澤
34	9月6日(火) 9:00~17:00	泉町会館	座学、ワークショップ (インターンシップとして)	鈴木、石橋、佐野、長澤、 飯塚
35	9月11日(日) 16:00~18:00 21:00~25:00	ケーズデンキスタジ アム水戸、スターバッ クス水戸エクセル店	試飲に参加 ランドネきたかんマルシェに関 する打ち合わせ	鈴木、佐野
36	9月12日(月) 14:00~16:00	泉町会館	いばらきワイン産業連絡協議会 第三回役員会に参加	石橋、高山、長澤、三角
37	9月15日(木) 13:00~20:00	泉町会館	NHKの取材に同席、ランドネきた かんマルシェの準備	鈴木、三角
38	9月15日(木) 24:10~25:25	泉町会館	瓶詰め作業	鈴木、佐野
39	9月16日(金) 9:00~16:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	ランドネきたかんマルシェにて 配布用のビラの作成	石橋、高山、三角
40	9月17日(土) 13:00~25:00	泉町会館	醸造作業、瓶詰め、荷詰め	鈴木、佐野
41	9月18日(日) 7:30~20:30	新宿駅西口広場イベ ントコーナー	ランドネきたかんマルシェでの 販売	鈴木、石橋、佐野、高山、 長澤、三角
42	9月19日(月) 6:15~20:30	新宿駅西口広場イベ ントコーナー	ランドネきたかんマルシェでの 販売	佐野、三角
43	9月20日(火)	新宿駅西口広場イベ	ランドネきたかんマルシェでの	佐野、三角

	10:00~18:00	ントコーナー	販売	
44	9月25日(日) 8:00~18:00	泉町会館前	水戸まちなかフェスティバルへの参加	鈴木、石橋、佐野、高山、長澤、飯塚
45	9月27日(火) 13:30~13:20	泉町会館、常陸太田市	個人インターンシップ(3日目)	飯塚
46	10月1日(土) 13:00~14:30	宮本酒店	笠間焼会議第1回	高山
47	10月2日(日) 6:00~12:30	つくばワイナリー 泉町会館	葡萄の収穫、醸造	石橋、長澤、飯塚
48	10月5日(水) 12:20~14:00	茨城大学茨苑会館1階 談話室	笠間焼企画についての話し合い	鈴木、高山、佐野、長澤、飯塚
49	10月6日(木) 12:00~13:00	サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ	ランドネきたかんマルシェ、及び水戸まちなかフェスの反省会	石橋、佐野、高山、三角、長澤、飯塚
50	10月11日(火) 15:00~18:00	泉町会館	個人インターンシップ(3日目)	高山
51	10月13日(木) 12:10~12:55	茨城大学人文学部棟A205	予算に関する話し合い	鈴木、佐野
52	10月20日(木) 16:30~18:30	水戸市役所三の丸庁舎3階	ランドネきたかんマルシェの会場全体のデータの取り寄せ	高山、飯塚
53	10月26日(水) 12:00~13:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	ホーリーホックファンを対象とした事業プランについての話し合い	鈴木、石橋、佐野、高山、長澤、三角、
54	10月27日(木) 15:00~16:00	プラスデザインズ・カワノベ事務所	サイト作成についての会議	佐野
55	10月31日(月) 15:00~16:00	茨城県庁舎	水戸市長表敬訪問	佐野
56	11月2日(水) 12:00~13:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	京成百貨店での催事、葡萄農家の方への取材についての話し合い	鈴木、高山、佐野、長澤、飯塚
57	11月3日(木) 10:30~14:00	泉町会館	Domaine MITO 解禁イベントへの参加、会場設営等	鈴木、佐野、高山
58	11月3日(木) 14:00~16:00	京成百貨店、ケーズデンキスタジアム水戸	笠間焼会議/ワインの搬入	高山
59	11月7日(月) 15:30~16:00	茨城県庁舎	茨城県知事表敬訪問	佐野、長澤
60	11月8日(火) 13:00~16:30	茨城大学人文学部棟B502	ビラ作成会議	鈴木、佐野、高山、長澤、飯塚
61	11月9日(水) 12:00~13:00	茨城大学図書館2階 グループ学習室	事業プランについての話し合い	鈴木、佐野、高山、長澤
62	11月10日(木) 17:00~17:30	ミニストップ	茨苑祭用の写真印刷作業	鈴木、高山
63	11月11日(金) 13:00~13:30 14:30~18:00	プラスデザインズ・カワノベ事務所、茨城大学人文学部棟B502	依頼した広報用の冊子の回収、茨苑祭用の展示物作成作業	鈴木、石橋、佐野、高山、長澤、飯塚
64	11月12日(土) 8:30~16:00	茨城大学人文学部講義棟	茨苑祭への参加	鈴木、佐野、高山、長澤、飯塚

65	11月13日(日) 8:30~17:00	茨城大学人文学部講 義棟	茨苑祭への参加	鈴木、石橋、佐野、長澤
66	11月17日(木) 15:30~16:30	プラスデザインズ・カ ワノベ事務所	サイトの内容決定に関する話し 合い	佐野
67	11月20日(日) 12:00~16:30	ケーズデンキスタジ アム水戸	ワインの販売	鈴木
68	12月23日(水) 8:50~16:00	茨城大学人文学部棟 A205	笠間焼企画、HPに関する話し合 い	鈴木、石橋、佐野、高山、 長澤
69	12月25日(金) 24:00~27:00	各自宅	HP作成に関する話し合い(電話 による会議)	鈴木、佐野、高山、石橋、 長澤
70	12月29日(火) 10:30~13:30	泉町会館	サイトに関するミーティング	鈴木、佐野、高山
71	1月6日(金) 13:30~15:00	プラスデザインズ・カ ワノベ事務所	サイトの修正についての話し合 い	佐野

(2)会計報告

佐野 智太

Domaine MITO チームは、大好きいばらき県民会議 ( <http://www.daisuki-ibaraki.jp/> ) の「女性若者企画提案チャレンジ事業」補助金に応募して採択されました(本節(6)(7))。お陰様で全ての経費をこの補助金で支払うことができ、インターネットサイト作成を始め、考えた通りの活動を行うことができました。ありがとうございました。

女性若者企画提案チャレンジ事業補助金

品名	単価	数量	合計
A4クリップボード	108	6	648
エプロン	216	6	1,296
ノック式ボールペン黒 10本セット	108	1	108
色画用紙 A4 版	398	1	398
写真印刷費	20	33	660
画鋏セット	348	1	348
ハイマッキー12本セット	1,180	1	1,180
コルクボード L サイズ	1,280	1	1,280
インターネットサイト	91,800	1	91,800
冊子	108	30	3,240
銀行振込手数料	864	1	864
インターネットサイト改装	30,000	1	30,000
銀行振込手数料	648	1	648
		総計	132,470

## 4:活動トピック

高山 直人

### (1)醸造作業

破碎・除梗作業、搾汁、ろ過、瓶詰め作業など、学生が多くの工程を体験した。実際にワイン作りをしていくことで、ワインについての様々な知識を得ることができた(図1・2)。



図1: 压榨機に葡萄を投入



図2: 压榨

### (2)ランドネきたかんマルシェ

Domaine MITO のボトルワインを新宿で先行販売した。我々学生も販売のお手伝いをさせていただき、フライヤー(図3)とアンケートを作成し、Domaine MITO 株式会社のまちなかワイナリーをPRした(図4)。

～水戸町中フェスティバルのご案内～

9月25日に水戸駅周辺にて水戸町中フェスティバルが10時から16時の間に開催されます。フェスティバルでは様々な企画団体が参加しており老若男女すべての人々が楽しめる内容となっております。この度のフェスティバルに私たち DomaineMITO も参加することになり、主にワイン作りの体験会とグラスでのワイン販売を実施します。是非ともお越しください。体験会の詳細は以下の通りです。

1. 体験会の参加料  
畑への往復送迎費、当日仕込んだワインのプレゼント料金合わせて5,000円になります。グループでお申し込みの場合、二人目から2,500円となり大変お得です。また醸造体験参加のみの場合、参加料金は不要です。
2. 体験会の作業内容  
①醸造体験一仕込みが済んでいるブドウを搾る作業を11時からと12時から2回に分けて行います。  
②収穫・醸造体験-10時30分に泉町会館を出発します。そこで空間とつくばの2班に分かれて葡萄畑に行きブドウを収穫し、帰途後に泉町で醸造体験を実施します。また、作業をする際に服が汚れる恐れがあるので当日は汚れてもいい格好でお越しください。

問い合わせ先



泉町会館

千波湖

水戸駅

水戸中央郵便局

常備銀行

カンカス

京成百貨店

水戸芸術館

118

549

110

50

4

図3: 当日配布したフライヤー(石橋翔太郎作成)

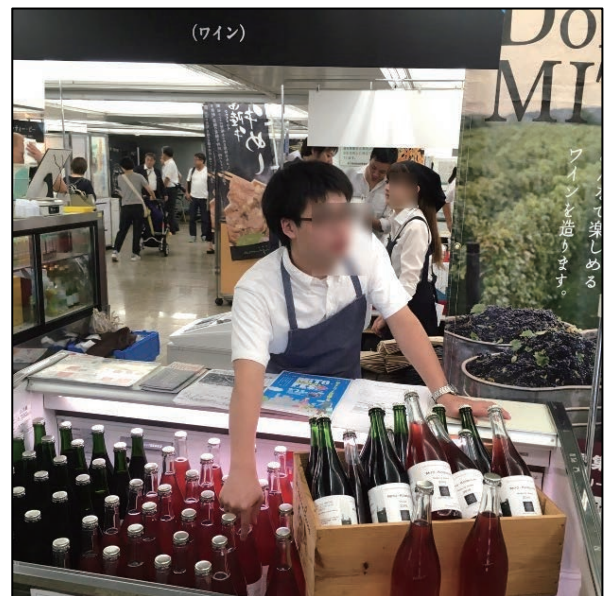


図4: 販売活動

### (3)水戸まちなかフェスティバル

水戸まちなかフェスティバルでは、収穫体験バスツアーの添乗員、グラスワインの販売スタッフ、醸造体験のスタッフとして学生が活動させていただいた（図5・6）。



図 5: 収穫体験バスツアー(笠間)



図 6: 醸造体験

### (4)茨苑祭

Domaine MITO のこれまでの活動をパネル（図7）と写真を貼ったコルクボード（図8）にまとめ、展示した。また、本物のワインを展示することで見る人に興味を持ってもらいやすくした（図9）。



図 8: 活動紹介ボード



図 9: ワイン展示

(5) 笠間焼プロジェクト

学生自ら、企画書の作成を行った。また、ワインを入れる笠間焼のボトルのデザインについて、SWOT分析を基に検討した (図 10)。

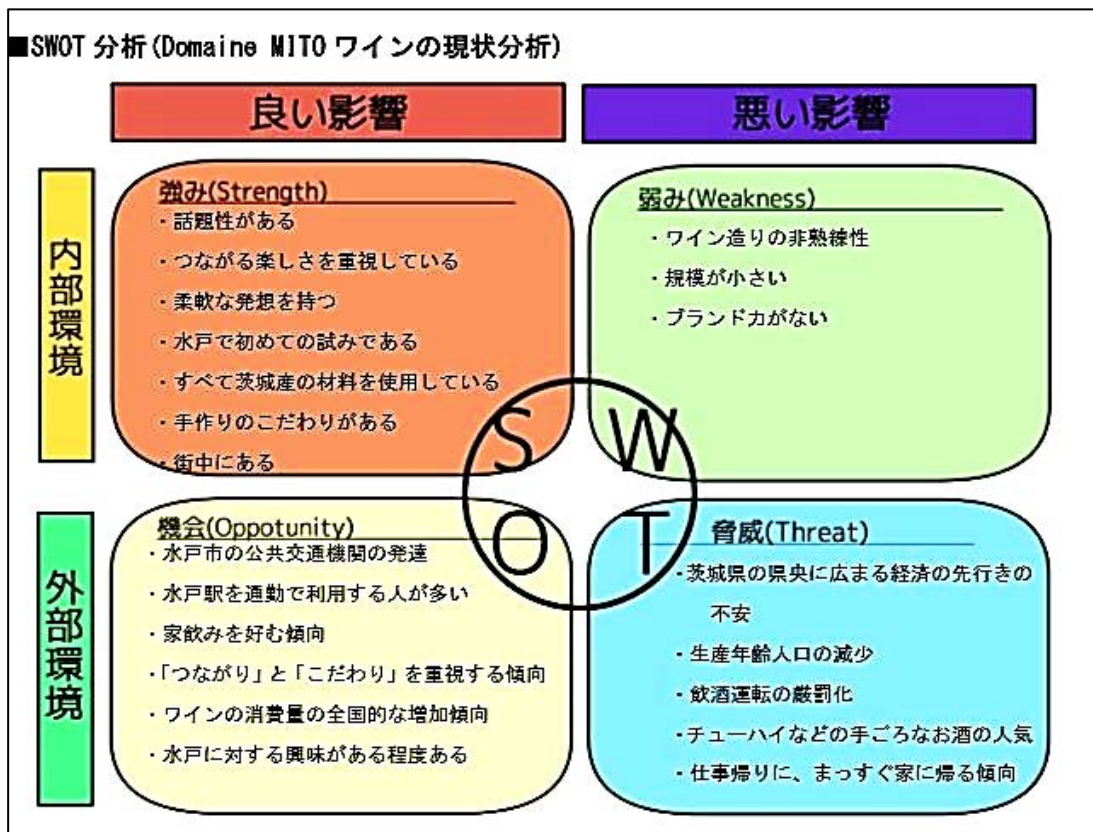


図 10: 企画書の一部 (高山作成)

## (6)サイト作成

Domaine MITO 株式会社の魅力は、ワインを作る工程の多くを一般の人々が体験できるという点なので、これまでワインの醸造作業を行ってきた学生目線でこの魅力を紹介するページを作ろうと考えた。

ページ作成に関わる資金は、鈴木先生に紹介して頂いた公益社団法人茨城県青少年育成協会主催「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」(<http://www.daisuki-ibaraki.jp/notice/post-12903.html>)に「事業名：みんなで創るシンボル、それが水戸のまちなかワイナリー『Domaine MITO』プロジェクト」として応募した(図 11)。幸いにして採択していただき、必要経費 13 万 5 千円を全額賄っていただいた。チームで意見を出し合っってサイト案をまとめ、PlusDesigns 社様に製作していただき、Domaine MITO 株式会社のサイトを実現することができた(図 12)。

Domaine MITO <http://domaine-mito.jp/index.htm>

学生製作部分 <http://domaine-mito.jp/ibadaiproject/ibadai-project1.html>

補助金をご紹介いただきました鈴木先生、事業計画の添削等でご協力いただきました宮本紘太郎様ならびに、公益社団法人茨城県青少年育成協会様のご支援に感謝申し上げます。

### 事業名

みんなで創るシンボル、それが水戸のまちなかワイナリー『Domaine MITO』プロジェクト

### 事業の内容

#### <目的>

みんなで創るシンボル、それが水戸のまちなかワイナリー『Domaine MITO』である。

ワイナリー運営企業と学生がコラボレーションをする。

街の元気の象徴として、また街を元気にする起爆剤として、Domaine MITO を活用したい。元気な街とは人がたくさん集まるところと仮定し、Domaine MITO に人を集めることで、元気な街をリードする存在にし、周りに広げていく。

#### <内容>

【新規】「知名度を上げるための告知」

- ① まだまだ知名度が低いため、イベントに参加してフライヤーを配付したり、ポスターセッションを掲示したりして周囲に認知させていく。また、キャラクターを公募し、積極的な参加を促していく。

【新規】「知っている人から知らない人へ伝えてもらい、輪を広げて行くための活動」

- ② 興味を持ってくださっている方に、実際の活動に加わっていただくための仕掛けとして、Domaine MITO と共同で開催する体験会に招待し、楽しさを味わっていただく。校外にある醸造所では普段できないような貴重な体験が可能であり、体験者からの口コミで広げることができる。

【新規】「多数の人に参加してもらうための活動」

- ③ 体験会を含めた、ワイナリー設立過程の様子などを Facebook、Twitter 等を利用して配信していき、関心を持つ学生や水戸市民を中心に共有していくことで、アーカイブとして多くの人に見てもらえるようにすることで、更なるファンを獲得する。

これらの活動により、Domaine MITO 株式会社を通して水戸の活性化を図る。



図 12: Domaine MITO 株式会社サイトのスクリーンショット

(7) 「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」活動報告会に参加

2017年1月28日、水戸市の茨城県三の丸庁舎において、「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」(図11)の活動報告会が開催され、2016年度に選定された他の39団体と共に報告を行った(図13・14)。

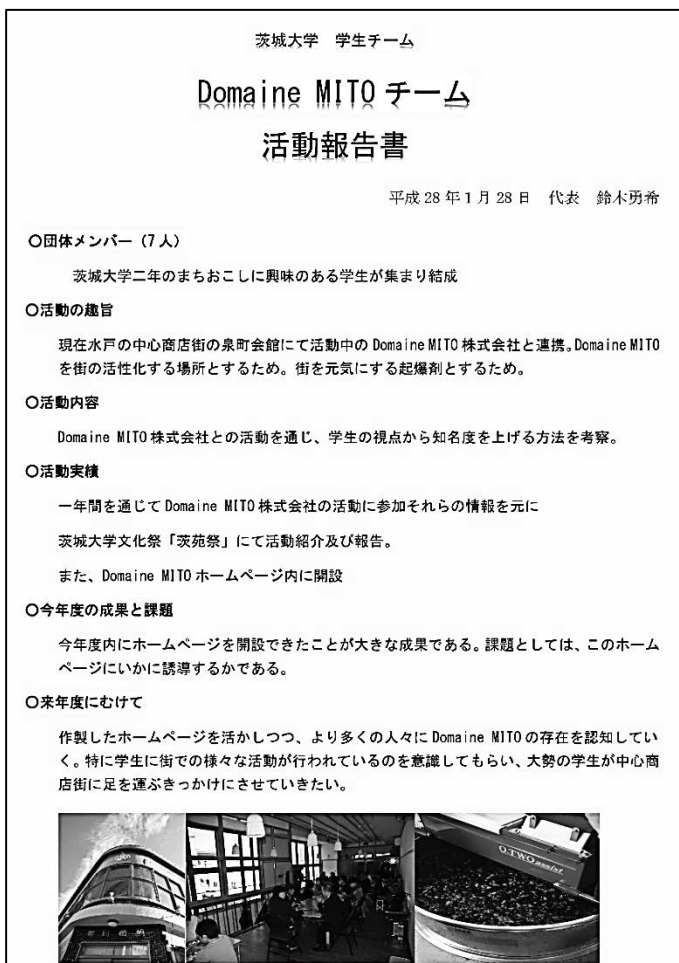


図 13: 活動報告会ポスターパネル(1/16 縮小)





図 14: 活動報告会(左:会場全景 右:説明風景)

(8)正式リリース (ワインお披露目会)

11月3日には、Domaine MITO 株式会社のまちなかワインが正式にリリースされる記念として、ワインお披露目会が催され、チームメンバーが会場設営のお手伝いをした(図 15)。



図 15: お披露目会記念写真

# 自分を知ることができたインターンシップ

Domaine MITO 株式会社

2016年9月6日、9月18日

鈴木 勇希(2年)



## 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私が、プロジェクト実習を履修したのは、ストレスコントロール能力を身に付けたいと考えたからである。プロジェクト実習は、目標に向かって自分で考え、行動していくというアクティブラーニング型で、極端な負荷をかけることが出来る授業である。そのような極端なストレスをコントロールする能力は、社会に出て働く上で必要になる能力であり、社会に出る前に身に付けておきたいと考えたため、この授業を履修した。

その中でも、プロジェクト実習 D は、企業とのインターンシップを行うということで、社会に出て就職をするような、より実践に近い形で自身に負荷を掛けられる点に魅力を感じた。また、働くということが具体的にどのような事なのかを実際に体験する絶好の機会だと考えた。

## 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、Domaine MITO 株式会社と共に、水戸のまちなかワイナリーのさらなる認知を広めることや、それを通じて水戸中心街の活性化を行うものである。具体的な活動として、イベントでのワインの PR 活動、ワイン販売のためのイベントや商品の企画、ワインの醸造のお手伝いなど様々だ。私は、当プロジェクトにおいて、特に担当というものはないが、これらの様々な活動に参加をした。

## 3. 派遣先の概要

Domaine MITO 株式会社は、宮本紘太郎様を代表取締役とし、泉町会館のワイナリーにてワインの醸造を行うため設立された。また、ワイナリーでのワインの醸造に加え、販路確保のため、ワインの PR 活動も同時に行っており、水戸を中心とした各地のイベント等に参加している。

## 4. 派遣先での活動内容

1 日目は、9 月 6 日に泉町会館にて座学を行った。具体的には、マーケティング戦略についてである。また、京成百貨店と水戸駅内のワイン販売箇所を見学し、分析を行った。

2 日目は、9 月 18 日から 20 日にかけて新宿駅西口広場のイベントコーナーで行われたランドネきたかんマルシェというイベントでの販売活動に同行させていただいた。具体的には、お客様の呼び込みや、商

品の説明、作成したアンケートの配布などをさせていただいた。また、伊勢丹新宿店への営業にも同行させていただいた。

### 5. エピソード

ランドネきたかんマルシェでの販売活動では、慣れない販売活動にとっても戸惑ってしまった。お客様に自ら話しかけに行くときには、あまり積極的にできなかったと感じる。特に、商品の特徴を自分の言葉でうまく説明できなかった。また当日にアンケートを配布したが、目的が曖昧なまま制作してしまったため、当日にお客様から聞きたかった情報が得られなかった。

また、昼休みの時間に伊勢丹新宿店への営業に同行させていただいた。昼休みをフルで使い、勝負時には休む暇などないと感じた。

### 6. わかったこと、学んだこと

私が、このインターンシップで学んだことは2つある。1つ目は、事前の準備の大切さである。事前にどのような事が起きるのかを予想し対策を練ることは、当日の仕事をスムーズに行うことができる。さらに、予想外な出来事に対しても、余裕を持って対処することができる。

2つ目は、チーム内の意識を統一させることの大切さである。これは、イベントをやる際には特に重要なことであり、最終的な目標をチームとして明確にしとかないと、行動の質やモチベーションへの問題になるからである。

### 7. 後輩へのアドバイス

インターンシップを通じて、実際の企業の具体的な仕事や、職場の雰囲気を感じることができる。それだけではなく、実務上に必要なスキルや知識を把握することができる。普段の学生生活の中では、社会に出てから必要になるものを気づき、自分を変えることは難しい。また、時間があるのは学生であるうちである。時間のある今だからこそ、今後必要になる知識やスキルを把握して、習得することができる。さらに、自分の能力の限界を知ることは、自分に合った就職先を考えることに非常に役に立つ。これは、自分のライフスタイル確立には非常に大切なことだ。

インターンシップは、自分を知ることができる絶好の機会です！皆さん思い切って参加してみましよう！



図:9月18日 ランドネきたかんマルシェにて  
高橋靖水戸市長がお越し下さいました！

# 仕事とは何かを知れたインターンシップ

Domaine MITO 株式会社

2016年8月25日、9月17日、25日

石橋 翔太郎（2年）



## 1. プロジェクト実習Dを受けた動機

前々から根力育成プロジェクトに関係している授業を受けたいと思っていたこと、またインターンシップを通じて来る就職活動に備えておこうと思ったからである。さらにはこの授業で行われるであろう、たくさんの人たちとのコミュニケーションによって社会に出た後も役に立つ力をつけるためである。

## 2. 派遣先の概要

自分の派遣先である Domaine MITO 株式会社は元々宮本酒店を運営していらっしゃる宮本紘太郎様が事業拡大のために作ったワインを製造、販売する株式会社である。主な活動場所は泉町会館であり、ここでワインの製造を行っている。茨城県のケーズデンキスタジアムや新宿で行われるイベントに参加するなどPR活動も熱心に行っている。

## 3. 派遣先での活動内容

8月25日の活動内容は主に2種類の座学をおこなった。1つ目は会社を運営するのに必要な人材とは何かについて講義形式で行った。2つ目の座学は Domaine MITO 株式会社様と茨城大学を対象としてSWOT分析を行い、これらの対象の強みを生かすには何が必要かをアクティブラーニング形式で話し合った。

9月17日は新宿駅で行われたランドネきたかんマルシェの販売サポートを行うために東京まで赴くことになった。ランドネきたかんマルシェとは簡単に言うと北関東で作られたものを集めた物産展である。販売サポートの具体的な活動は看板を持つての客引きとお客さんからの質問に答えるなどの接客業が中心であった。努力もむなしくあまり売り上げは芳しくはなかったが水戸にもワイン製造所があるということを東京に住んでいる人たちに知ってもらうことができた。

9月25日のインターンシップは水戸まちなかフェスティバルで行われた。Domaine MITO チームのメンバーは2つのグループに分かれることになった。1つ目は醸造体験をサポートするグループ。もう1つはグラスでのワイン販売を行うグループである。自分はワイン販売を行うグループに割り振られた。フェスティバル当日は比較的陽気がよかったこともあり冷たくされたワインはとても売れ行きがよく、きたかんマルシェの時とは打って変わって大忙しであった。またフェスティバルの来場者は年齢層が広く様々な年代の人達との会話を通して Domaine MITO の存在を広めることができた。

### 4. 学んだこと

インターンシップに行ったことでたくさんのことを学ぶことができた。中でも大事だと思ったことはスケジュールの管理能力である。今までは何かをする約束をしたとしても相手が友達や家族など、多少時間が遅れたりしても多めに見てくれたが社会に出た後はそうはいかない。仕事に遅れが出たりしてたくさんの人に迷惑をかけるということを学んだ。実際にプロジェクト実習の活動において自分はスケジュールに参加できないことが多く他のチームメンバーに負担をかけることが多くなる時が多くなってしまったこともあった。これからの生活でもスケジュール管理については改善していきたいと思った。

またもう一つ気づいたのは連絡の重要性である。プロジェクト実習では先生や派遣先の人たちとかなりこまめにメールで連絡を取らなければならない。その頻度は今まで自分がしたことのあるメール頻度の数倍上をいくものであった。自分は連絡はかなりおそいほうであり、一日に10通以上のメールが派遣先からきていた時はメールを開くのを数分間ためらっていたことを思い出した。上にかいたスケジュールについてもそうである。インターンシップの日程がたいていの場合メールで送られてくるのでメールのチェックを怠ると埋もれていってしまい、うまく日程を合わせられないこともあった。

これら2つのこと以外にも社会に出るうえで必要な能力をまなぶことができた。

### 5. 後輩へのアドバイス

インターンシップに行くことになるのは多くが三年生になってからだと思う。しかしプロジェクト実習Dの授業をとおして早いうちからインターンシップに行くことで、実際の仕事に必要な能力が何なのか、またどうすれば必要な能力が身につくのかを考える機会を得ることができる。また普通の生活をする上では絶対に出会わない人たち、例えば伊勢丹でワインセラーをしている人やNHKの記者さんなどのお話を聞くことなどができ、様々な人の意見を聞くことができた。このように大学生活だけではできないことをインターンシップに行くことで体験できるので是非ともお勧めしたい。



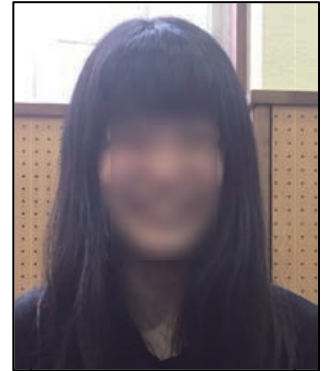
図: ワイン醸造後の集合写真

# 社会でプロとして働くということ

Domaine MITO 株式会社

2016年9月6日、25日、27日

飯塚 子都香(2年)



## 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

今回初めて、プロジェクト実習を履修したのは、能動的に活動していく、という点において自分を高めていくために最も優れている授業なのではないか、と考えたからである。新しいタイプの授業なので、今まで経験したことのないような事に触れることができ、やらなければならないことが多くある分、やりがいを感じられるのではないかと思った。また、外部の方が提案して下さったプロジェクトであるため、多くの人と関わることができ、普段の生活の中だけでは得られない多くの学びがあるのではないかと考え、履修した。更に、授業の一環としてインターンシップを体験できるということも大きな魅力の一つだった。

## 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、設立したての『ワイン造り』株式会社を立ち上げていく、というものである。ワイナリーの設立やワインの醸造をするだけでなく、泉町会館で醸造する「まちなかワイナリー」であるため、それによる、商店街の活性化や水戸のPRを目指している。茨城県産の葡萄を、水戸にあるワイナリーで醸造する、ということも魅力の一つである。近年東京などで話題になっている「まちなかワイナリー」が水戸の商店街にあることで、街を元気にしたい、と目標を立てた。しかし実際に活動していくと、醸造等、実際の作業に取り組むことが多く、この一年で目標を達成させることは難しく、Domaine MITO が”街のシンボル”となるような過程を作ることができたら、と考えている。私自身はグループで書記を担当している。

## 3. 派遣先の概要

Domaine MITO 株式会社は、昨年10月に設立し、水戸の商店街にある泉町会館にて、ワインの醸造を行っている。現在、つくば、笠間等、茨城の葡萄を使って醸造を行っている。「まちなかワイナリー」は県内で初であり、地元葡萄によるワインの生産者としては、二軒目である。「ひとくちオーナー」を募集しており、葡萄の栽培・収穫や醸造体験などに参加することができる。造りたてのワインをまちなかで飲むことができる。話題性があり、様々な可能性がある、地域に根付いたワイナリーである。

#### 4. 派遣先での活動内容

計三日間にわたって、インターンシップを行った。一日目は、泉町会館にて座学を行い、売り上げや金利、広告等、会社の経営に関わる所を学んだ。その後、水戸にあるいくつかのワインの売り場を見学し、その中で気付いた点をまとめ、それぞれの店舗の経営方針を含めた特徴を学んだ。

二日目は、「水戸まちなかフェスティバル」というイベントでの活動である。私たちのグループは、水戸フェスで体験会の受付・誘導をした後、グラスワインの販売をする班、笠間での収穫の添乗、つくばでの収穫の添乗の3班に分かれ、活動した。私は、同じチームの高山君と班を組み、つくばの収穫に参加し、現地に着いてから、担当者の方と連携を取り、収穫体験に参加してくださった方々と葡萄の収穫を行った。また、水戸に戻ってきてからは参加者の醸造体験を手伝い、自分自身も醸造体験をさせていただいた。

三日目は、まず泉町会館の醸造所において、醸造機械を調達した株式会社オーツーアシストの担当者様との打ち合わせに同席した。その後、ワインを醸造するにあたって、毎日しなければならない作業の一つを体験させていただいた。作業後、更に、常陸太田市の生産農家さんとの打ち合わせにも同席させていただいた。

#### 5. エピソード

三日目は、実際に外部の方との連携の仕方を垣間見ることができた。株式会社オーツーアシストの担当者様との打ち合わせに参加させていただいた際、宮本様と担当者様、二人の会話が全く理解できなかった。打ち合わせが終わった後、分からなかった点などを宮本様に教えていただいた際に、宮本様自身も、かつて会社に就職してすぐの頃は、会議において専門用語が分からず、内容に全くついていくことができなかつたために苦労した、という話をしてくださった。専門用語や同業者の方々のお話など、二人の中で完全に会話が成り立っているのは、経験を踏まえた、多くの知識があるからこそだと感じた。このようなことは、働く上で必要になる壁でもあり、仕事をする、“プロとして働く”、ということは自分の分野に責任を持ち、人との関わりだけでなく、対象となる物を大切にすること、という事でもあるのだと感じた。

また、三日目に葡萄農家の方を訪れた時は、二日目での収穫体験も含め、二種類の葡萄畑の形態を見たことで、その違いを知ることができた。葡萄に関する様々な工夫も、長年葡萄農家としてやってきたからこそできるものだと感じた。

#### 6. わかったこと、学んだこと

インターンシップ一日目、様々なワインの売り場を見学した際、売り場によって様子がかなり違っていた。ワインを売る、という同じ目的であっても、その方法は様々であり、置かれているワインの種類、価格帯など、多くの点で、大きく異なっていることに驚いた。ただ一店舗の様子を見ただけでは気付かなかつただろうが、いくつかの店舗を見ることで差がある事に気付かされた。そして、各店舗のワインを売る意図や、会社の方針などが見えてきて、非常に興味深かつた。

二日目の水戸フェスにおいて、体験会の参加者は、葡萄の収穫をした後、自分で収穫した葡萄を実際に醸造することになっていた。しかし、つくばの収穫体験では、連日続いた雨のせいもあり、収穫体験として設けた時間の中で醸造に必要な量の葡萄を収穫し終えることができなかつた。そのため、今回一緒に参加した、同じ班のメンバーが参加者と共にバスで水戸に戻り、私は現地に残り、醸造ができる量になるまで収穫を続けることになった。天候によって収穫できる量にかなり変化が出てしまうこと、当たり前であ

るがそのことも考慮したうえで対応していかなければならないのだと改めて考えさせられた。また、収穫した葡萄が水戸の醸造所に到着する時間が一時間遅くなってしまったのであるが、当初の予定とは異なっても、現状を見て、目的を達成し、参加者に喜んでもらうために、臨機応変に対応し、行動する大切さを改めて感じた。

### 7. 後輩へのアドバイス

今回、連携先の方にインターンシップをお願いする、ということで、お忙しい中、自分のために時間を割いていただいた。日程や、内容を決める際など、より一層、連携先の方との連絡が密になる。連携先の方の負担にならないためにも、素早い対応が必要になる。気をつけるべき点として、早め早めに連絡をとることで、活動する時間も有意義なものになると感じた。

また、インターンシップでは、実際に会社がどのようなしくみになっているのか、などを学ぶことができる。これからどのような職種に就きたいのか、私自身まだ分からずにいるが、非常に重要な経験となった。“インターンシップ”という少し構えてしまいがちであるが、自分自身の学びに繋がるだけでなく、今後について考えるきっかけにもなる。社会人として働く、というのはどういうことか、知ることができる。これからどうすべきか、迷っているならば尚更、挑戦すべきだと感じた。



図：醸造体験



# インターンシップから学んだこと

Domaine MITO 株式会社

2016年8月20、25日、

9月12、16～20、26日

佐野 智太(2年)



## 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

社会科学科の授業にはアクティブラーニングの要素を多く取り入れているものは少なく、外部の方と関わったり、社会の常識を身につけたりする機会がほしいと私は思っていた。これらの機会を得ることのできる、アクティブラーニング中心の授業ということで、私はこの授業を履修することに決めた。

Domaine MITO 株式会社様へのインターンのうたい文句は、ざっくり言って「起業したてのまちなかにあるワイナリーと一緒に作っていく」というものであったが、社会科学科の経済・経営学コースに所属している私にとって、起業という言葉はプロジェクト実習 D を履修するのに十分な理由となった。

## 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、水戸市の泉町 3 丁目にある泉町会館の中にワイナリーを作り、水戸の中心市街地を盛り上げることを目指したものである。さらには、今年起業し、当時まだワインを造るための免許すら取得していない会社が一つのワイナリーになるまでの工程を私たちも体験できるというところが醍醐味となる。主な活動として葡萄の収穫、ワインの醸造、ワインの試飲、販売などを手伝えること、またそれらを通して学生の力によってできる、ワインを用いた町の盛り上げ方を模索していくことに取り組んでいる。私はチームの会計を担当している。

## 3. 派遣先の概要

Domaine MITO 株式会社は、水戸のまちなかを盛り上げるべく作られた会社である。コンセプトとしては、水戸で作られた葡萄を使用して、水戸でワインを造り、そして会社帰りの人などに水戸で飲んでもらう、という地産地消の代名詞のようなものである。ワインの販売はもちろん、醸造体験、ブドウの収穫体験などのイベントも行っている。

## 4. 派遣先での活動内容

インターンの日数は 8 日、この数字は夏休みを終えてのひとまずのくりであるので、まだ終わったわけではない。8月20、25日、9月12、16、17日はワインの醸造作業や企業に関する座学、試飲による広報に参加させていただいた。具体的な作業工程は 5 つある。葡萄を破砕除梗機にかけて葡萄を実と房にわけ、その過程で葡萄の実を破砕すること。白ワイン、ロゼワインを造るためにジュースのみを取り

出す作業。ワインの原液に酵母をいれて混ぜる作業。発行したワインの元をろ過していきワインにする作業、瓶詰する作業、である。

## 5. エピソード

これまでワインの作り方など全く分からなかったわけであるが、醸造作業が力作業だとは全く想像もしなかった。機械を使っているのにもかかわらずの力作業に、これがすべて手作業だったらと想像してしまった。また、イベントへの出店に関しては、水戸まちなかフェスティバルでの1日の売り上げが、ランドネきたかんマルシェの3日間の売り上げを上回った。文明の利器のすばらしさと、販売において場所によって、客層によつての売り上げの変化を身に染みるように感じ取ったインターンとなった。

## 6. わかったこと、学んだこと

私はこのインターンシップを通して、自己主張の大切さを学んだ。全体を通して、はっきりとした意見をもって物事に取り組まなければ、学ぶこともできないし、関わってくる人々ともより良いコミュニケーションがとれない。また、主体的でなければ、自分の意見など通らないのである。当たり前であるといえればそれで終わりだが、そんなことを学んだインターンとなった。

## 7. 後輩へのアドバイス

インターンシップに行くことで、様々な経験ができる。それは自分が想像していたものから、そうでない意外なものまで。実際、業務には普段我々の見えない部分という部分が必ずある。そういった部分について深く見て体験することができるのがインターンシップの良いところである。それらを通して、各々得るものがあると思う。それが、自分の目指す職業へのモチベーションであったり、社会人の心構えであったり、礼儀であったり。私の場合は積極性を得られた。周りからしたら気にも留めない程度の変化かもしれないが、私にとっては大きな変化である。そういった自分にとっての大きな変化を得るためにもインターンシップへ行くべきである。



図 1: 新宿ランドネきたかんマルシェ出店



図 2: 水戸まちなかフェスティバルにて



図 3: 醸造場での作業

(Domaine MITO 株式会社 HP

<http://domaine-mito.jp/concept.html> より)

# 自分を知ることができたインターンシップ

Domaine MITO 株式会社

2016年9月18日、9月25日、10月11日

高山 直人(2年)



## 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がプロジェクト実習を履修したのは、問題解決の能力を身に付けたいと考えたからである。プロジェクト実習は、目標に向かって自分で考え、行動していくというアクティブラーニング型の授業である。そのような自分で考える能力は、社会に出て働く上で必要になる能力であり、社会に出る前に身に付けておきたいと考えたため、この授業を履修した。

その中でも、プロジェクト実習 D は、企業とのインターンシップを行うということで、社会に出て就職をするような、より実践に近い形で問題解決を行える点に魅力を感じた。また、働くということが具体的にどのような事なのかを実際に体験する絶好の機会だと考えた。

## 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、Domaine MITO 株式会社と共に、水戸のまちなかワイナリーのさらなる認知を広めることや、それを通じて水戸のさらなる活性化を行うものである。具体的な活動として、イベントでのワインの PR 活動、ワイン販売のためのイベントや商品の企画、ワインの醸造のお手伝いなど様々だ。私は、当プロジェクトにおいて、特に担当というものはないが、これらの様々な活動に参加をした。

## 3. 派遣先の概要

Domaine MITO 株式会社は、宮本紘太郎様を代表取締役とし、泉町会館のワイナリーにてワインの醸造を行うため設立された。また、ワイナリーでのワインの醸造に加え、ワインの PR 活動も同時に行っており、東京と、水戸を中心とした各地のイベント等に参加している。

## 4. 派遣先での活動内容

1日目は、9月18日から20日にかけて新宿駅西口広場のイベントコーナーで行われたランドネきたかんマルシェというイベントでの販売活動に同行させていただいた。具体的な活動としては、お客様の呼び込みや、商品の説明、作成したアンケートの配布などをさせていただいた。

2日目は、9月25日に行われた、第5回水戸まちなかフェスティバルでの販売活動に同行させていただいた。具体的な活動としては、つくばワイナリーでの収穫体験バスツアーの添乗と泉町会館醸造所で行われたワインの醸造体験のお手伝いをさせていただいた。

3日目は、Domaine MITO 株式会社と広告代理店である株式会社茨城読売 IS の方との打ち合わせに同行させていただいた。この打ち合わせでは、ワインの宣伝の具体的な方法について話し合われた。

### 5. エピソード

1日目の、ランドネきたかんマルシェでの販売活動では、慣れない販売活動にとても戸惑ってしまった。お客様に自ら話しかけに行くときには、あまり積極的にできなかったと感じる。特に、商品の特徴を自分の言葉でうまく説明できなかった。また当日にアンケートを配布したが、目的が曖昧なまま制作してしまったため、当日にお客様から聞いたかった情報が得られなかった。

2日目のつくばワイナリーへのバスツアーの添乗の際には、時間内に、予定していた収穫量に届かなかったり、ツアーの後に予定されていた、ワインの醸造体験が事情により早まり、ぶどうの到着が遅れてしまいそうになったりした。しかし、「ワイナリーに残って収穫を手伝う」という同行していた飯塚さんの柔軟な対応や、こまめな連絡によりどちらも予定通りに間に合わせる事ができた。

3日目の会議に同行させていただいた際は、広告代理店とは具体的にどのような仕事を行っているのか、ということをお客様の方から直接聞くことができ、大変有意義であったと感じた。

### 6. わかったこと、学んだこと

私が、このインターンシップで学んだことは2つある。1つ目は、事前の準備の大切さである。お客様への販売や、アンケートの作成において、自分の想像するようにはなかなかいかないと痛感した。商品の特徴や接客の仕方についてのおさらい、目的の確認によってこのような失敗は防げていたのではないかと考える。

2つ目に、想定外の事態への対応力の大切さである。2日目の経験から、想定外のことはいつでも起こりうるのだと学んだ。しかしその一方、想定外の事態が起こっても、冷静かつ柔軟な発想でこれに対処することは可能であるということも学んだ。

今回のインターンシップでは、このような今自分に足りない能力について知ることができた。

### 7. 後輩へのアドバイス

インターンシップを通じて、実際に企業と活動を共にすることで、その企業や仕事の具体的な内容や、職場の雰囲気などを自分の目で見て知ることができる。しかし、それだけではなく、実際にその企業で働いてみることで、自分がそこで仕事をするために必要な能力や知識は何か、ということも知ることができると考える。通常ならば、自分に必要な能力は仕事をしてゆくうちに気付くことが多いだろうが、それを学生のうちから気付くことができる利点は大きいと考える。このようなことは、普段の学生生活では気付くにくく、それだけに、インターンシップに参加することは自分のスキルアップのきっかけになるのだ。

インターンシップは、自分を知ることができる絶好の機会です！皆さん思い切って参加してみてください！



図：9月18日 ランドネきたかんマルシェにて  
中央は高橋靖・水戸市長

# 多くのことを学んだインターンシップ

Domaine MITO 株式会社

2016年9月18日、9月25日

長澤 賢司 (2年)



## 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がプロジェクト実習を履修したのは、インターンシップを経験し、社会人としての最低限のマナーをはじめとした就業力をしっかりと身に付けたいと考えたからである。プロジェクト実習は自らプロジェクトのお題を選択し、自主的に活動していくアクティブラーニング型の授業であり、その活動の中で様々な大学外部の方々と接することで、大学卒業後に社会に出て働くのに必要な力を得られると思い、履修することに決めた。中でもプロジェクト実習 D を履修したのは二年生のうちに企業インターンシップを経験しておきたいという思いが強かったからである。

## 2. プロジェクトの概要と担当

私たち Domaine MITO チームのプロジェクトは、今年、水戸市にまちなかワイナリーを設立した Domaine MITO 株式会社の活動を学生の視点で PR、まちなかワイナリーを通して水戸市の活性化に貢献するという目標のもとこれまでの活動を行ってきた。その目標のもと行ってきた各種イベントでの PR 活動、醸造作業のお手伝い、企画立案などが Domaine MITO チームの主な活動である。また、私はプロジェクトチームにおいての担当は特になかったが、様々な活動に参加した。

## 3. 派遣先の概要

Domaine MITO 株式会社は去年に設立され、今年の 8 月に泉町会館に水戸で初のワイナリーをオープンした。Domaine MITO 株式会社はワインの製造・販売に加え、収穫、醸造などの体験会の開催や様々なイベントでの PR 活動を行っている。

## 4. 派遣先での活動内容

1 日目は、9 月 6 日に泉町会館にて、座学で Domaine MITO 株式会社の現状についての SWOT 分析、実際に水戸市内のいくつかのスーパーに行き、ワインの売り場がどのように展開されているかを見学し、それぞれの特徴について話し合った。

2 日目は、9 月 18 日から 9 月 20 日の三日間にわたって新宿駅西口イベントコーナーにて、北関東 4 市によって共催で行われた物産展「ランドネきたかんマルシェ」での Domaine MITO 株式会社のワインの先行販売に同行させていただいた。私たちの主な活動は、お客様に対しての商品の説明、呼び込み、自分たちのチームで製作したアンケートの実施などであった。

3日目は、9月25日に行われた水戸まちなかフェスティバルでの販売活動に同行させていただいた。主な活動は会場でのカップワインの販売、笠間での収穫体験ツアーのバスの添乗員、ワイナリーで行われた醸造体験のサポートだった。

### 5. エピソード

1日目の座学では、SWOT分析を行い、Domaine MITO 株式会社の外的環境と内的環境を強み、弱み、機会、脅威の4つのカテゴリで要因分析し、Domaine MITO 株式会社の現状について分析した。SWOT分析をすることによってDomaine MITO 株式会社はほかに比べてどこが違い、何が強みなのかを明らかにすることができた。

2日目の「ランドネきたかんマルシェ」は自分たちにとって初めての販売活動であったためか、最初のうちは積極的にお客様とコミュニケーションをとることができなかつたように思う。また、製品、ワインについての知識が浅かつたためお客様に製品を魅力的に感じてもらうような説明があまりできなかつたとも感じる。

3日目の「水戸まちなかフェスティバル」では、笠間でのぶどう収穫ツアーの添乗員の業務が中心だった。ツアーに参加した方々との会話を通してまちなかワイナリーのすばらしさを再認識することができた。また、販売したカップワインの売れ行きが非常によく、Domaine MITO 株式会社の注目の高さを感じた。

### 6. わかったこと、学んだこと

今回のインターンシップでは販売活動をさせていただく機会が多く、お客様と直接コミュニケーションをとる機会が非常に多かつた。その中で、どれだけ自分たちの提供するものについてよく理解することが大切かを学んだ。これは当然ことだと思われるかもしれないが、基本的な情報はもちろん、その商品ができるまでどんな物語があつたか、その商品の良さなどを自分で考えることによって相手にうまく伝えたいことが伝わるのではないかと感じた。

### 7. 後輩へのアドバイス

インターンシップを通じて、実際に企業の活動を間近で見ることができたり、体験したりすることができる。自分が想像してなかつた業務もあるかもしれないがそれも含めて仕事をするということだと思ひ、その中で自分に足りない能力や知識を知ることにもつながる。それに対して大学生のうちに何をすべきか考えることができるのはインターンシップに参加する大きな意義だと思ひ。また、インターンシップでは様々な人と会う機会も多く、社会人としてのマナーや礼儀なども身に付けることができるチャンスでもある。

普通に大学の授業を受けていて経験できない貴重な経験ができるのは間違いないのでインターンシップに参加することに不安をもっている人も、少しでも興味があり、自分を成長させたいという気持ちがあるのなら、参加してみるべきだと思ひ。学べることはきっと多いはず！



図：9月18日 ランドネきたかんマルシェにて  
高橋靖水戸市長・宮本社長と一緒に

# 多くのことについて知ったインターンシップ

Domaine MITO 株式会社

2016年9月18日、9月19日、

9月20日、9月25日、

三角 祐斗(2年)



## 1. プロジェクト実習D履修の動機

私が、プロジェクト実習を履修したのは、社会に出る前に多くのことを経験したいと思ったからである。社会に出てからやりたいことを成すには多くの経験と知識が必要であると自分なりに調べて言うて分かった。そのためプロジェクト実習で自分の経験したことのないことを経験したいと考えていたからである。

プロジェクト実習Dを選んだ理由は、企業とのインターンシップでありまた、今年で来たばかりというめったに経験できない特徴を持つインターンシップがあったからである。そのため多くのことが学べると思いこのプロジェクト実習を履修した。

## 2. プロジェクトの概要と担当

私はこのプロジェクトの中において特に担当というものはないが、プロジェクトの中でワインの醸造施設の設置や醸造、販売活動など多くの活動に参加をした。

## 3. 派遣先の概要

Domaine MITO 株式会社は、宮本紘太郎様を代表取締役とし、泉町会館のワイナリーにてワインの醸造を行うため設立された。新しくできたばかりのワイナリーであるため醸造だけでなく、ワインのPR活動にも力を入れており多くのイベントに参加し、PRを行っている。

## 4. 派遣先での活動内容

9月18日から9月20日までの3日間に新宿駅西口のイベントホールにて行われた、ランドネきたかんマルシェというイベントの販売活動に同行させていただき、そのための商品の準備から最終日の撤収までの多くの工程を経験した。主にお客様への呼びかけや商品の紹介を行いながら、同時にDomaine MITO株式会社のPR活動も行った。

## 5. エピソード

ランドネきたかんマルシェの1日目である9月18日、私はイベントでの初めての販売活動ということもあり、戸惑いながら準備を行った。いざ、イベントが始まると自分の中でお客様にどのように声掛けを行い、興味を持ってもらえるか考えて用意していたものが緊張で崩れてしまい、しっかりと対応することができなかった。けれども、お昼休憩の際に自分の中でどのような人が興味を抱いてくれていたかなどをまとめ、

## Internship

---

チームメンバーと話し合いを行ったことで午前中よりは動くことができました。その日の夜はチーム内でできなかったところの指摘を行うと、思っていたよりも課題が多く見つかったため、次の日も参加した私と佐野はその課題をどのように解いていくか考えた。

2日目と3日目は、新しく販売活動を手伝ってくださるメンバーが加わり、販売活動の手際の良さに驚いた。お客様の興味を持たせるような話から入り、販売コーナーに足を止めてもらうことで先日よりも多くのお客様に立ち寄ってもらい多くの技術を学べた3日間だった。

9月25日の水戸まちなかフェスティバルではワインの収穫・醸造ツアーでのバスの添乗員と醸造のお手伝いを行った。この日はランドネきたかんマルシェでの反省を生かした販売活動ができており、チーム内でみんなが満足の結果が出せた。

## 6. わかったこと、学んだこと

今回のインターンシップで私が学んだことは1つ目に何を行うにしても、事前の準備は何日も前からしていないと本番の際に安心して行動することができず、良い成果を上げることができなくなることです。そのため、イベントにしても企画にしても行う前に多くのことについて考え、実践する際の障害などについても予想をして対策を考えておくことが大切であると考えました。

2つ目に、何かを行う際に、その企画などを行ったことのある人にアドバイスをいただくなど経験者の協力を得ることで円滑に進めていくことが可能であるとわかり、次回からの活動に生かすことができるということです。

## 7. 後輩へのアドバイス

インターンシップはその企業だけでなくその周りにある環境についても詳しく学ぶことができます。もちろん、その企業の内情の一部などを自分の目で見て肌で感じるためその企業についてよりよく知ることができる。

大学二年生のこの時期に良い経験を積めるということはかなり大きいメリットであると考えている。

自分の夢が決まっている人はその内容についてよく知るいい機会です！

自分の夢が決まっていない人には自分について知り、将来について考えられるよい機会です！

インターンシップ、参加してみることは良いことですよ！



図：9月18日 ランドネきたかんマルシェにて  
高橋水戸市長（中央）・宮本社長（右）と



5: 年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

## Domaine MITO チーム

メンバー：鈴木勇希・佐野智弘・高山直人  
長澤賢司・飯塚子都香・三角祐斗  
石橋翔太郎

**ワイン造りを通して、水戸まちなかの活性化**

私たち Domaine MITO チームは上記の目的を達成するために、昨年度立ち上がったベンチャー企業の Domaine MITO 株式会社様とタッグを組みました。そして、水戸のまちなかでのワイン造りを通し、水戸のまちなかに人を呼び込む活動を行いました。

- 1. ワイン醸造体験**

学生が実際にワインの醸造体験をさせて頂き、改めて「まちなかワイン」の魅力を認識することが出来ました。また、実際に体験することによって、あやふやであったイメージを固めることが出来ました。


- 2. ランドネきたかんマルシェ**

9月18日～20日にかけて、新宿駅西口のイベントコーナーにてワインの販売をお手伝いしました。その後、お客さんの分析を行い、より販売数を増やすにはどうすればいいのかについての会議が行われました。


- 3. 水戸まちなかフェスティバル**

9月25日の水戸まちなかフェスティバルにおいて、泉町二丁目商店街振興組合様のブースにて、Domaine MITO 株式会社様のワイン販売をお手伝いしました。また、Domaine MITO 株式会社様が主催したブドウ園への収穫ツアーに添乗員として参加しました。


- 4. 水戸ワインリリースパーティー**

11月3日に開かれたワインのリリースパーティーに参加しました。その時に様々な方から Domaine MITO 産ワインの感想を頂き、チームで行っている活動にフィードバックすることが出来ました。



**まとめ**

「まちなか」で「ワインの醸造」といった、思いもつかない単語の結びつきに、水戸のまちなかを活性化させる可能性を感じました。今年初めて成立したチームと、起業した際のベンチャー企業とのタッグだった為、初めてのことが多く戸惑うこともありましたが、そういった状況でも冷静に行動し、「今、求められている行動は何か」ということを常に考えることが社会では求められているのだと学びました。しかしながら、企画・提案を行う際には、経験不足な面があり、せつかくの「まちなか」での「ワインの醸造」というプロジェクトの長所を最大限に生かし切れていなかったことが課題です。今年度、うまくいかなかった部分の原因を分析し、来年度以降の活動や、新規のプロジェクトに生かしていけるよう努力して参ります。

図 16: ポスターパネル(1/16 縮小)



図 17: 活動報告会での発表風景

## 6:最終レポート

### 1年間で身に染みたこと

#### 一言葉にすることの大切さ

茨城大学 2年 鈴木 勇希

今回のプロジェクト実習を1年間続けていくつものことを学んだ。それらすべてを書き残すことはできないので、その中でも特に書き残したいことを書き記す。このチームを他チームと比較して特徴を挙げるのであれば、インターンシップ的活動がかなりの比重を占めていることであろう。このことは、チームメンバーの自主的かつ積極的な活動を阻害することになってしまった。このプロジェクト実習は学生の主体的な活動ができると聞き参加した。特に、水戸市の地域活性化ができることで、このチームに参加した。しかし、結果論から言えば、そのような活動よりもインターンシップの活動が多いように感じた。このことが徐々に分かり、チームメンバーの士気は大幅に下がった。最終的に、チームは3人しか活動に積極的に参加しなくなり、事実上チームは崩壊したままこの活動が終了した。チームリーダーとしてどうすれば未然にこのような事を防げたのかを考察した。そして、一番重要なことは、たとえ相手がかかっていることも言葉にし、相手とコミュニケーションをとることであった。

Domaine MITO 株式会社とは、民間の企業である。これは、さとみ・あいチームの地域住民との連携と大きな違いである。何か活動するにしても、ご厚意に甘えて相手の利益が出ない活動をする事ができない。企業にとって利潤を出すことが活動する時の大前提であり、利潤が見込めないことは活動しにくい。この大前提に我々が気づくのが遅れてしまった。そのため、なぜ、学生の考えた活動が行うことができないのか分からなかった。また、チームメンバー間の意思疎通についても同じことが言える。同じチームだから何も言わなくても分かるという思い込みが、チーム内の空気を悪化させた。

また、自分のことを相手に伝えることも重要である。自分が普段の生活を色々犠牲にしてチームの活動を進めたのだから、他のチームメンバーもそうあるべきという決めつけをしてしまった。自分の厳しい状況を相手に伝え、手伝ってもらえるか打診をするべきだった。さらに、「きたかんマルシェ」の活動の時、風邪をひき始めていたが無理に活動に参加した。参加できる活動は極力参加しなければならないと思い参加したのであるが、終わってから2日間寝込んでしまった。活動中にもし倒れてしまっていたらと思うと、参加するべきではなかったと思う。自分が今、風邪をひいていて、活動に参加するのが厳しいとメンバーに相談するべきだった。さらに、この八方塞がりの状況でチーム内の空気が悪くなってしまい、私自身もふさぎ込んでしまい、不登校が2週間ほど続いてしまった。

空気を読んで行動することは大切である。相手の嫌がることを避けるのは上手く世渡りをする上で必要不可欠なことである。しかし、周りを気にするあまり、自分の体が心身共に限界を迎えてしまうことがある。時には声を出して相手に伝えることが、自分の身を守る方法である。

正直に言って、この1年間の活動は納得できないことが多く残りながらに終わってしまった。つまり、まだ、今回の失敗についての分析が足りていない。ゆっくり事実に向かい合うことで、より多くの反省点が今後発見できると思う。この1年間の活動での、目に見える形での成果を見出すことは難しいが、目に見えない部分で多くのことを学び身に付けているはずだ。これからの活動に十分生かせるよう頑張りたい。

## プロジェクト実習を行って

—たくさんの学び—

茨城大学2年 石橋 翔太郎

今日ここに至るまでの間にたくさんの障壁にぶつかってきた。この授業を受ける前はまさかこんなに大変な授業であるとは夢にも思いもしなかった。活動をしている最中に、もう少し冷静に活動を選べばよかったなあと思うこともあったように思う。自分は **Domaine MITO** 株式会社様というワインを醸造、販売する会社の方々はこの授業でお世話になった。自分はこの会社の町中ワイナリーというコンセプトとここ数年で設立されたばかりの新しい会社であるという真新しさに魅かれこの活動を選んだ。このチームでの活動はなかなか過酷なものであった。まず今年初めてできたチームであったので経験者に頼るということが不可能であった。こういった理由から自分のチームは手探りで活動をおこなっていくしかなかった。そんな状況の中でチームは結成してからすぐに動き出した。チーム結成後、初期の活動は一週間に一度以上の頻度で会議を行うことから始まった。会議の内容は主にこれからの活動で何をしたいのか、またその活動にはどんな目的があるのかということチームのメンバー同士で話し合った。この会議がなかなか自分にとって過酷なものであった。この会議は **Domaine MITO** 株式会社の方も出席することも多々あり、その方のアドバイスを交えて進行していくことになるのだが、せっかくいただいたアドバイスの意図を完全にくみ取ることができず、見当違いなアイデアを出してしまい、話し合いが振り出しに近い状態まで戻ってしまうという事態も起こってしまった。会議を続けているうちに夏休みになり会議だけでなく、ワインの醸造や各種イベント手伝いという活動も新たに加わることになった。今までチームの活動といえば会議が主だったこと、ワインの醸造という今まで体験したことのない活動に胸がおどったということは今でも思い出せる。実際に作業を行ってみるとなかなかの肉体労働であり大変な場面もたく

さんあったが、今までの会議で頭しか使っていなかったので体を動かしての醸造作業は苦しかったが楽しいものであった。醸造作業以外にも東京の物産展が行われた際にお手伝いをしたり、醸造体験会のサポートをしたりと過酷なこと以外にも様々な活動をおこなった。

ここまでマイナス方面のことも書いてきたが、もちろんそれと同じくらいたくさんの良い点があることは間違いない。例えば普段話す機会のない大人の方々と話すことが多いという点だ。自分はこの授業をうけるまで真剣に大人の人たちの意見を聞くことや、会議で話し合うということがほとんどなかった。あまり話さない大人の人たちの意見を聞くというのはとてもタメになり、大学生視点では気づけないようなことを適切にアドバイスしてくれるのは、経験者のいない自分のチームにとって大きな支えとなったということも忘れてはならない。

最後にこの授業最大の反省として仕事を任せきりにしてしまったということを書いていきたい。自分は副リーダーという立場にありながら全くその役割を果たすことができなかった。本来は自分が手伝わなければならないような仕事も、ほとんどの場合チーム内の決まった人に押し付ける形になってしまい、一人一人が負う仕事の量が明らかに偏ってしまっていた。そのような状況は最後まで変わることはなかった。今思えばもっと活動に積極的にならなければならなかったと思う。今後チームでの活動が間違いなくあると思うが、自分の役割を把握してきっちりと責任を果たさなければならないと思った。

この授業には本当にたくさんの学びがあったと思う。そして自分に足りないことが多くあるということを確認した。大変なことが多い授業であったが、そのぶん充実出来ることもあった。いいこと、悪いこと含めて受けてよかったと思える授業だった。

## 挑戦から学んだこと

### ープロジェクト実習を通してー

茨城大学2年 飯塚 子都香

私がプロジェクト実習を受講したのは、大学生活で様々なことに挑戦したい、と思っていたからである。また、何かに挑戦したときに問題を解決し、物事を進めていく力を身につけたいと考えた。Domaine MITO チームを選んだのは、設立したての株式会社ということで、やるべき事がたくさんあり、今までに関わったことのない分野であったことが大きな理由の一つである。とにかく大変そうな活動をやり遂げたい、と思った。

全体を通して振り返ると、反省すべき点は多くあった。実際に一年間、進めてきた活動は、当初思い描いていたものとかかりかけ離れたものだった。しかし、チームとしてやりたいことの方角性が変わるのとは当然である。その中でもどのように対応していくか、ということが重要だったのだと思う。しっかりとチームの現状を確認し、状況に惑わされずに、柔軟に対応していくことの大切さを学んだ。

また、議事録の役割や、本来のチームの目的を確認することの大切さも感じた。私は書記を担当していたため、活動報告を作成する際に、これまでの議事録を確認したことで、当初我々が考えていたチームの方角性を思い出すことができた。共有した議事録を皆で確認することで、それを踏まえて次の会議に繋げることができる。報告のためだけの議事録ではないのだと気付かされた。それは、チーム発足当時から、何度も会議を重ね、チームの意識を一つにしたにも関わらず、それぞれの会議を、次の会議につなげ、活かすことができなかつたという反省点の解決策ともなり得るだろう。

上で述べたように私は、書記という役割だった。しかし、自分自身、活動や話し合いに参加できないことが多く、議事録を他のメンバーに任せることが多かった。しかし、話し合いや活動の進捗状況など、連絡として行き届かないことが多くなってしまい、チームの状況をメンバー全員が把握することができないまま活動が進むことが多かった。もっと早い段階で、チーム全体が進むべき方向に迷ってしまったときに、これまでの議事録を確認して活動に活かしていたら、メンバー全員が、もっと共通した意識で活動に取り組んでいたのではないかと。

また、このプロジェクト実習を受講するにあたって、活動を通して身につけたい根力を三つ選び、活動の振り返りの基準の一つとしていた。個人の達成目標ルーブリックの内容から活動を振り返ると、正直に言えば、この一年で身につけることのできなかつた力の方が目立ってしまう。しかし、今年達成したいと考えていた目標の中でも、“自分の意見を伝える力”は、この活動を通して得ることができた力であると言える。チームとして活動を進めていくためには、自分がどのように考えているかを、チームに発信していく力が重要になるということがよく分かった。その上で、その考えをどのように進めていくのか、または改善する必要があるのか、状況を変えていくために必要になる発信力は、成長させることができたと感じる。

主体性と実行力という残りの目標は、この一年の活動では達成できなかった。他の活動がある中でもスケジュールを管理し、プロジェクトを進行させることの難しさも感じた。しかし、今回の活動を通して感じた反省点は社会人として、何かを成し遂げる際に必要になる力だろう。それがまさに自分に足りていない力だということをも、身をもって感じ、今後の授業や生活で身につけていくべき自分の課題に、改めて気付かされた。

社会人を身につけるための授業である、という点から考えると、この授業を受講したことは、非常に大きな意味があったと思う。経営する際に必要な力や、商品に関するものだけでなく、全体を通した調整力も必要だと感じた。また、先程述べた自分自身の弱みでもある力、それはビジネス力にも繋がっていると感ただけでなく、その力が動く様子を間近で見ることができた。一つの企業に関わって活動してきたが、様々な分野に関する学びを得ることができた。普通の授業を受講するだけでは得られない、貴重な経験だったと感じた。一年を通しての活動であるということで、生活していてもプロジェクト実習をやりきらなければならない、という責任は大きかった。そのような中でも、最後までやり通さなければならない、という経験は、まさに根力を養うことにつながったと思う。

## プロジェクト実習を通して

### —活動で学んだ3つのこと—

茨城大学 2年 佐野 智太

私は、アクティブラーニングの要素を多く取り入れている授業に興味を持っていたため、プロジェクト実習を受講することに決めた。私はプロジェクト実習Dを履修し、Domaine MITO 株式会社様のもとヘインターンすることとなったが、Domaine MITO 株式会社様も、私の所属するチームも今年度が初ということで、1年間の前半はチーム内ではそれぞれの立場がわからず、また、チーム内で連絡がうまく行き渡らず、プロジェクトの進行に支障をきたしてしまいかねないようなことが多々あった。また、社会人としてのマナーをわきまえた人も少ないためにDomaine MITO 株式会社様に失礼なメールを送ってしまうことも多々あった。私達は多くの活動をする中で、幾度となくチーム内での情報共有がうまく行かなくなったり、失礼なメールを送ってしまったり、また、実際の活動がまとまったものにならなかったりということがあったが、私はそのような中で、情報をうまく伝えることの大切さを学んだ。情報をうまく伝えるに当たって大切なことは3つある。

1つ目は、連絡はリマインドなども含めて何度も行い、相手が確認したことを自分が確認することである。私はプロジェクトの中でのサイトの作成の責任者となった。その中で時にチームに意見を求め、時にチームに進行状況を伝えた。そういった連絡はメールやLINEで行うのだが、私ははじめのうちは連絡したらそのままにしていた。しかし、情報を流してそのままにしていると、情報が流されたことに気が付かない人、情報に対して無関心なままな人が出てきてしまう。私はそういった事によって、何度かプロジェクトの進行において、独断で行動しなければならぬ状況や、自分以外の意見が求められる中で他人の意見がわからないために先に進むことができないという状況が生まれてしまった。チームの全員がしっかりと把握してくれるのが一番であるが、それぞれが忙しく、大変な時にそのようなことは難しい。そういった時に、自ら確認を積極的に取っていくことで情報

の共有の遅れを防ぐことができる。

2つ目は情報を簡潔でわかりやすくすることである。情報は詳細にしようとするほどに理解するのに時間がかかってしまう。一方で情報が少なすぎれば理解できなかったり、誤解が生じてしまったりしてしまう。そういったことにならないために、簡潔でわかりやすい文章にすることが大切である。私は先程書いたとおり、情報を流すことが多いため、どうしても相手を受け取る情報が多くなってしまふ。特に相手が忙しくなればなるほど相手には理解しがたいもの、読みたくないものになってしまう。おそらく、私の情報共有がうまく行かなかった理由のうちの一つがこの長くわかりづらい文章にあったのだろう。文章をできるだけ簡潔にまとめることを心がけることによって文章量を減らしているが、難しいものである。

3つ目は自分の主張をはっきりと伝えることである。私は夏季休暇期間、醸造作業を行わせて頂いた。その中には、分からないことや疑問に思うことがたくさんあり、また催事では自分の役割決めや役割の仕事初めてながらこなさなければならないことも多かった。そういったとき、自分がどうしたいのか、どうされたいのかということをはっきりと主張することが大切である。はっきりと主張することで、短い時間で物事を決めることができ、決まったことに対して対応していくことでより具体的な行動が伴うようになる。私は現在に至るまでこの行動が十分にできてはいない。しかし、課題としてぜひ克服していきたい。

プロジェクト実習を通して、私は様々なことを学んだが、克服できず、課題として残ったことも多い。私の挙げた3つの大切だと思うことだけでなく様々である。こういったことをすぐに克服することは難しい。しかし、この授業はそういった課題をたくさん見つけることができた、有意義な物となった。

## 初めてのプロジェクト実習

### －活動で得られた経験・成長と課題－

茨城大学 2年 高山 直人

私は今年、初めてプロジェクト実習を受講した。プロジェクト実習は、課題解決型学習を行うということで、私たち学習者自らが課題を提起し、その課題の解決に向けてチーム一丸となって取り組むことが特徴の授業である。そのため、活動を通じて普段の授業では得られない経験ができたと共に、自分自身の成長や自分の弱点について知ることができた。

私が活動によって伸ばすことができたと考えられる能力は、コミュニケーション能力である。チームの活動では、自分の考えをチームメンバーの前だけでなく、公の場においても発表しなければならないことが多かった。プロジェクト実習を初めて間もない頃は、人前で意見を述べるということに苦手意識を持っていた。加えて、論理的な展開を意識して話をするのも苦手であり、相手にわかりやすく伝えることがあまりできなかった。しかしながら、様々な人と繰り返し意見の交換を行いながら、自分の苦手な部分を改善しようと意識したことで、それらの苦手意識が徐々に薄れてきたように感じる。特に意識をしたことはアイコンタクトであり、話をする際に、相手の目を見て話すということが以前よりできるようになったと感じる。また、論理的な展開は会議の資料や企画書を作成することで意識するようになり、その際は、常に「どうしてこうなるのか」を考え、論理的に矛盾なく、聞く人が分かりやすいものを作成するように心がけることができた。

一方、活動を行って来て今まで気が付かなかった自分の課題が見えてくることもあった。その一つが、状況を理解し、それに応じてうまく行動する力である。私たちのチームは、三回ほどイベントのお手伝いに参加したが、それらのイベントでは、常に場に応じた様々な対応が求められた。例えば、ワインリリースのお披露目の時は、受付の仕事の合間に、人手の足りないワインを注ぐ作業を手伝ったり、不在だった案内係のスタッフに代わって瓶のラベル貼り体験を行っている醸造所までお客様を案内したりと担当の仕事以外にその場に応じていくつも仕事を行わなければならなかった。そうした際に、私

は焦ってしまい、必要のない仕事をしてしまったり、あたふたして他のスタッフの方に指摘されたりすることが何度かあった。イベントのお手伝いは慣れない仕事であるが、そうした場でも常に冷静を保ち、今すべきことは何かを考えて行動するという力がまだまだ足りないのだと痛感した。

また、自分の限界を把握し、無理のないスケジュールを立てる能力をつけることも活動を通じて気づいた課題である。私たちのチームでは、10月の初旬から、11月初旬にかけて、やるべき仕事が多く、とても忙しい期間であった。その中で私は、これまであまり活動に参加できなかった反省から、もっとチームに貢献しようとの思いで企画書の作成に加え、茨苑祭の出し物の作成や新たにチームで行うプロジェクトの計画・実施、イベントの反省会に用いるたたき台の作成など多くの仕事のお手伝いをし、気づいたときには、自分の限界を超える量の仕事を抱えてしまった。そして、こなせなくなってしまった仕事を他のメンバーに押し付けることになってしまい、チームに貢献するつもりがチームに迷惑をかけたしまった。無理のあるスケジュールを立てたことが、自分だけでなく、チームの他のメンバーにも迷惑をかけるしまうという結果を招く。自分に合ったスケジュールを立てることの大切さを実感した出来事である。

この一年間のプロジェクト実習では、多くの人が社会人になってから経験するであろう出来事について、学生の自分が主体となって経験できるということが非常に魅力的であると感じる。企画を任されたり、バスの添乗員を任されたり、会議を自分主体で進めることもあった。これらは、なかなか経験することのできない体験であり、大変だと思えることもあったが、とても思い出が強く、そこから学ぶことも多かった。また、活動を通して、チームメンバーのみんなに助けられ、困っているときには手を差し伸べてくれたことで、解決できた課題も多く、チームメンバーのありがたさを学んだ。苦しいときも支え合って、乗り越えてきたチームメンバーのみんなに感謝を述べたい。ありがとう。

## プロジェクト実習での学びと反省

### ーチーム活動の難しさー

茨城大学 2年 長澤 賢司

私は Domaine MITO チームの活動を通して様々な活動を行ってきた。この一年間のプロジェクト活動では様々な反省点や学びがあり、貴重な経験も多くあった。

私が今年度、プロジェクト実習の授業を履修したのは、大きく三つの理由からである。一つ目は、プロジェクト実習ではインターンシップを経験することができるからである。実際に企業の活動を間近に見て、その一部を経験することで就職へのイメージを膨らませることができる。また、現時点での自分に足りない能力や知識は何かを知るきっかけになると思った。二つ目は、社会人として必要な基礎的マナーを身に付けることができると思ったからである。例えば、メール一つをとってもプロジェクト実習を履修するまではとても自分のメールのマナーや知識に不安を持っていたが、一年間で学外の方々や先生方とメールのやり取りをする機会が多くあり、その中で基本的なマナーなどは身に付けることができたと思う。三つ目は、自分は公の場でのプレゼンや積極的な意見の発信が苦手だという自覚があったので、自分で能動的に学修するアクティブラーニング型の授業でその力をつけたいと思ったからである。また、Domaine MITO 株式会社プロジェクトを選んだのは、ベンチャー企業の立ち上がり初年度の業務に参加することがなかなかできない経験だと思ったことと、ワインづくりができることが単純に面白そうで興味深かったのが大きな理由である。

私たちは活動の序盤の段階で茨城県の「女性若者企画提案チャレンジ事業補助金」の獲得にチャレンジした。この補助金の獲得には申請書の提出とプレゼンテーションを経たわけだが、チームとしてかなり時間をかけた、序盤の山場となった作業であった。申請書を作成する段階で Domaine MITO チーム活動の目的や年間スケジュールなどの今後の活動の方針を決定する重要な活動もあった。結果としては補助金をいただくことができ、

チームとしても個人としても達成感を得ることができたと感じる。

私たち Domaine MITO チームは今年度、発足したチームであるため、チーム活動を円滑に進めるノウハウやアドバイスをくれる先輩がいないというのがチームの大きな特徴でもあり、その中でチーム、そして自分自身のプロジェクト実習へのかかわり方にも反省すべき点が多くあったのも正直な感想である。チーム結成の際にチーム内での役割を決めたのだが、個人的にそこに甘えてしまい、チーム内での仕事の分量にかなり偏りが出てしまい、プロジェクトを進めていく上でプロジェクトの責任者になってくれたメンバーにはとても負担をかけてしまったと思う。私たちのチームは他と比べて活動時間が長く、一回一回の活動がやりっぱなしになってしまったとも感じる。その都度、チームの皆で反省会などを開きコミュニケーションをとるべきだったと思う。また、チームとしての意思決定にもっと全員が積極的に責任をもってかかわることが必要だったと思う。また、チームとして情報共有がうまくいってなかったと感じる場面も多々あった。情報共有の段階で各々がそれに目を通すことはもちろん、チーム内の情報共有の段階で改善点などを出し合いチームの総意として案を出し、プロジェクトを進めていくべきだったと反省している。これらは一年間の活動の大きな反省点である。

一年間の活動では、多くの社会人の方々との出会いなど、プロジェクト実習での出来事は大学内での授業では経験できない貴重なものばかりで、反省すべきことも多くありながらも、やる価値があったプロジェクト実習だったと感じる。また、時間的にも精神的にも一年間の多くの部分を占めたプロジェクト実習だったが、その分、自分にとって得るものはとても多かったし、新たな課題も見つかった。ここで得たものは今後の大学生活や就職活動にも必ず役立てたい。

## この1年間に学んだこと

### —できること・できないこと—

茨城大学 2年 三角 祐斗

この1年間に学んだことは自分のできること、できないことをしっかりと理解しておくことが大切だということだ。最初にこの活動に参加する際に、自分はこのチームはほかのチームに比べて多くの初体験ができるので、その経験を自分の糧にしていこうと考えていた。新しい体験は貴重なものであるからだ。そのため最初の頃はやれることをすべてやろうという意気込みで多くのイベントや話し合いに可能な限り参加していた。そして、県外のイベントへの参加を通して今まで関わることのなかった様な職種の方々から多くの話をしていただける機会を得られた。また、自分たちの参加する企業と似たようなことをしている所にも見学に行くことで、同じようなことをしていても環境の違いや目的の違いでどのような差が生まれるのかを知ることが出来た。

けれども、テスト期間に入りチームメンバーとの連絡をとる頻度や顔を合わせて話し合う時間も減り、メンバー間での連絡の行き違いなどが起こるようになってきた。その時期に東京での先行販売のお手伝いをさせてもらえるということがあり、あまり参加出来なかった分、多く参加しようと意気込んだが、体調管理を疎かにしてしまいそのイベントの後日熱をだして寝込むということになってしまった。そのイベント以降は自分のほかの活動が忙しくなり精神的にも体力的にも最初の頃のように積極的に参加出来なくなり、チームのことをリーダーやいつも積極的に参加しているメンバーに任せきりになってしまった。その結果、疲労が溜まってしまったのか、自分以外にも体調を崩してしまうメンバーがでた。最終的にはやりたかったことに手を出すことはできず、多くのことについて中途半端で終わってしまった。

この1年間活動して、できていなかったことは、自分がどれだけの事をする事ができるか理解しておくということだ。このことが出来ていれば自分に無理をして活動し、体調を崩してしまうことやメンバーが体調を崩

すことはなかった。また、もっと自分のやりたいことに力を注ぐことができたであろう。協力させていただいている企業の方からもこちらの拙い点について指摘され、チーム全体としても後半は暗い雰囲気の中活動することが多かった。

このようにマイナスのことが多くあったが、プラスなことも多くあった。一つは現在自分の住んでいる茨城県についてよく知ることが出来たということだ。水戸で採れたぶどうを使って水戸の街中で醸造したワインということもあり、多くの水戸の方々とお会いすることができた。そして水戸にはどのような店が存在しており、どのような人が住んでいるのかも知ることができた。もう一つは私の将来の夢への前身ができたことだ。私の将来就いて働きたい職業は一つの事ではなく様々なことについて知識を持って経験を持っている方が有利となれる。そのため、今回のこのプロジェクト実習はかなり自分にとって身のあるものとなった。今まで経験したことのないこと、初めて顔を合わせた人たちとのチームでの活動、ぶどうの苗木植え、ワインの醸造作業、ワインの詰め作業、市役所や税務署でのやりとり、市や都内でのイベントへの参加、広告・広報活動や広告会社についての学習などと新鮮なことであふれていた。また、発表会の機会も何度もあり、社会に出てからのプレゼン能力の向上にも役に立ち、メールマナーについても学ぶことができた。以前の自分はできることとできないことの判断が下手であった。けれどこの一年間の活動を通して、自分の能力を知り、また向上させることでできることを増やすことができた。これらの活動を私の将来に上手く生かしていくことがこの講義においては大切だと思う。そのため、このチームで学んだ自分の能力を知ることや、連絡を密に取り合うことの大切さというものを忘れず、これからの将来に生かしていきたいと思った。



## 7:おわりに

石橋 翔太郎

今回のプロジェクト実習ではチームメンバーが頭を抱えるような場面が多くみられた。理由の一つとして今年からできたチームであり他のチームのように先輩からアドバイスをもらうことができなかつたり、どのような活動をすればいいのかわからず全く先が見えないまま活動をせざるを得なかつたりしたことが挙げられる。またチームメンバーのスケジュールがうまく合わず、メンバー全員で活動することができないという場面も多々見られた。さらにチーム内で作業がバランスよく配分することができず、特定のメンバーにかかる負担が多くなってしまった。しかし大事な場面ではチームメンバーで協力し、しっかりと仕事を終えることができたと思う。一人一人の存在と協力のおかげでここまでプロジェクト実習を続けられたというのは間違いないことである。ワインの醸造と販売という普段ではしないような貴重な体験をすることにより新しい知識を得たり、ワインを扱ったイベントに参加することでたくさんの人と触れ合ったりすることができた。このような体験を経て今まで気づくことができなかったことに気づけるようになり、自分たちの視野の広がりを感じることができた。また最初にたてたチームの目標を完全に達成できたという訳にはいかないがメンバーの一人一人がこの授業を通して成長できたというのは疑う余地のないことである。活動をしていくなかでたくさんの苦勞があったがそれを含めてもやる価値があると思えるような授業内容であったと思う。

最後にこの場を借りてお世話になった皆様へお礼を申し上げます。いつもお世話になりました **Domaine MITO** 株式会社の宮本紘太郎様皆様、**JA** 水戸営業販売部営農課大澤政道様、**JA** 水戸営業販売部販売課佐久間智之様皆様、株式会社はなわ園芸塙博光様、いばらきワイン産業連絡協議会会長西村勝男様、**L'IVRESSE** イヴレス大澤大樹様、ワイン&チーズ **Kirsch** 長谷川恭夫様、明利酒類株式会社常務取締役酒類販売部長大久保敏正様、茨城県議会議員加藤明良様、プラスデザインズ・カワノベ川野辺悦子様、プロジェクト実習の担当教員である鈴木先生・神田先生、本当にありがとうございました。たくさんの方々の支えがあってこのプロジェクトを終えることができました。重ねてお礼を申し上げます。

# 6 : コミュニケーションチーム

## プロジェクト実習D

リーダー	: 森本 真由	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
副リーダー	: 森 遥香	茨城大学人文学部社会科学科	3年
書記	: 波崎 大知	同上	2年
会計	: 入江 美穂	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
メンバー	: 佐藤 宇輝	茨城大学人文学部社会科学科	2年
アドバイザー	: 猪狩 彩夏	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	4年
アドバイザー	: 磯貝 麻菜	同上	4年

主担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文学部 教授  
副担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授

2016年度 茨城大学人文学部  
プロジェクト実習D  
「コミュニケーションチーム」活動報告

1:はじめに

森本 真由

私たちが取り組んだ「コミュニケーション・トラブルをなくそう」プロジェクトの源流は、2015年度にNTTコミュニケーションズ株式会社アプリケーション&コンテンツサービス部門第五グループ（第二チーム）担当課長吉川昌吾様、同じく第五グループ（第二チーム）川口高弘様からいただいたテーマに始まる。一年の活動をしていく上での基礎となる「お題」をいただき、個人で調べた結果を持ち寄ってチームで議論を重ね、さらにPBL型インターンシップを通して課題解決を目指す。

このプロジェクトが発足して2年目となる2016年度は、昨年度のリーダー1人に、今年度から参加するメンバー4人を加えた5人で活動してきた。だが、私たち5人だけで活動したのではない。昨年度のメンバーだったアドバイザーの磯貝様と猪狩様、テーマ提供者である吉川様と川口様、さらにプロジェクト実習担当教員の鈴木先生と神田先生、その他このプロジェクトに参加しなければお会いできなかったたくさんの方からお力添えをいただきながら無事に1年間活動することができた。

この最終報告書がいままでご協力いただいた方々に私たちの活動が伝わると同時に、私たちがこの1年間で何を学び、何に反省して、どう成長できたかが伝われば幸いである。

## 2: 活動の目的・目標と概要

チーム一同

### (1) 活動の目的・目標

活動の目的として、メールにおけるコミュニケーショントラブルの減少を掲げる。主な対象は茨城大学1年生から3年生であり、アンケートといったデータから明らかになったことを踏まえ、Webを軸にした広報活動を行い、これから社会でコミュニケーションをとる上で必要となるメールマナーの周知を目標とする。

### (2) 活動の概要

私たちはこのプロジェクト実習を履修して、先生など目上の方とメールする機会が多くなった。その際、上手にコミュニケーションが取れず、失礼な表現をしてしまうことがあった。そういった経験から同じ茨城大学の学生もメールマナーを十分に理解していないのではないかとすることに思い至った。大学生304人に向けてアンケートを実施し、その結果を基にして考察を行った。

続いてその結果や考察を受けて、注意喚起を目的としたリーフレットを作成し、茨城大学の学生に配布した。また、大学生が多く利用しているTwitterを利用した広報活動を行った。また、これらは私たちが作成したWebに誘導するため、QRコードを掲載した。はじめに「Webを軸にした」と述べたのはそういった意味である。Webは学生生活の様々な状況を想定し、大学生がメールを見るときに気軽に見ることができるサイトをイメージして作成した。具体的には、英語のメールも掲載されていることなどである。

活動の達成度としては、QRコードからWebを見た方は想定より多かったが、アクセス数は少なかった。結果をどのように測定するところがはっきりしていなかったのではないかと思う。Webを軸とするならばアクセス数を目標に定め、回遊率の高さといった分析ができたかもしれない。この点を課題に次回の活動に生かしたい。

### 3:活動記録と会計報告

#### (1)活動記録

波崎 大知

日時	場所	活動内容	出席者
2016年6月2日 9:00~10:00	人文学部棟 C406	顔合わせ 役職決定	森本、佐藤、入江
2016年6月3日 8:50~12:00	人文学部棟 C406	プレ構想発表 来週の構想発表打ち合わせ	森本、佐藤、入江、 波崎
2016年6月10日 8:50~12:00	人文学部棟 C406	構想発表 吉川様との顔合わせ準備	森本、佐藤、入江、 波崎
2016年6月17日 8:50~12:00	人文学部棟 C406	金原様の講演 吉川様との顔合わせ準備	森本、佐藤、入江、 波崎
2016年6月24日 8:50~12:00	図書館2階グループ 学習室	吉川様との顔合わせ	森本、佐藤、入江、 波崎
2016年6月29日 13:00~15:00	図書館1階共同学習 エリア	チーム話し合い アンケートづくりについて	森本、森、佐藤、入 江、波崎
2016年7月1日 8:50~10:30	図書館1階共同学習 エリア	アンケート作成	森本、佐藤、波崎
2016年7月5日 16:20~16:25	人文10番教室	アンケート実施 対象者 社会人入門受講 者237人	森本、佐藤、入江、 波崎
2016年7月8日 8:50~12:00	図書館1階共同学習 エリア	アンケート集計	森本、佐藤、入江、 波崎
2016年7月11日 18:00~19:30	図書館1階共同学習 エリア	中間報告に向けたPPTの作成	森本、波崎
2016年7月12日 18:00~20:00	図書館2階パソコン エリア	中間報告に向けたPPTの作成	森本、佐藤、波崎
2016年7月13日 8:50~10:30	図書館1階共同学習 エリア	中間報告に向けたPPTの作成 チーム打ち 合わせ	森本、佐藤、入江、 波崎
2016年7月15日 8:50~10:30	人文学部棟 C406	中間発表会	森本、佐藤、波崎
2016年7月22日 8:50~12:00	人文学部棟 C406	中間発表会 チーム打ち合わせ 成果の発信 について	森本、入江、波崎
2016年8月8日 13:00~15:00	図書館1階共同学習 エリア	吉川様との打ち合わせ準備	森本、佐藤、入江、 波崎

2016年8月9日 12:30~14:00	図書館2階グループ 学習室	吉川様との打ち合わせ 今後の方向性、イ ンターンシップの内容	森本、森、佐藤、入 江、波崎
2016年8月18 日、19日	グランパークタワ ー4F 402 応接（会 議室）	インターンシップ	森本、森、佐藤、入 江、波崎
2016年9月1日 10:00~15:00	図書館1階共同学習 エリア	チーム打ち合わせ（リーフレット、Web 作 成）	森本、入江、佐藤、 波崎
2016年9月2日 10:00~15:00	図書館1階共同学習 エリア	チーム打ち合わせ（リーフレット、Web 作 成）	森本、入江、佐藤、 波崎、磯貝
2016年10月5日 15:00~18:00	図書館1階共同学習 エリア	中間報告2に向けたPPTの作成	森本、佐藤、波崎
2016年10月14 日 8:50~10:30	人文学部棟 C406	中間報告会2	森、入江、佐藤、波 崎
2016年10月19 日 15:00~17:00	図書館1階共同学習 エリア	チーム打ち合わせ、リーフレット発注	森本、森、佐藤、波 崎
2016年10月21 日 8:50~10:30	人文学部棟 C406	中間報告会2	森、入江、佐藤、波 崎
2016年10月21 日	人文学部棟 B502	リーフレット納品	波崎
2016年11月1日 ~9日	各教室	リーフレット配布	森本、森、佐藤
2016年12月10 日	人文講義棟 10 番教 室	最終報告会及び反省	森本、森、佐藤、入 江

(2) 会計報告

入江 美穂

品名	単価	数量	合計
コピー用紙	430	1	430
リーフレット印刷代		3,000	15,933
のりパネル	1,000	2	2,000
		総計	18,363

#### 4:活動トピック

チーム一同

##### (1) インターンシップ 2016年8月18、19日

2日間にわたり、NTT コミュニケーションズ株式会社様のビルのある田町のグランパークタワーでインターンシップを行いました（図1・2）。

1日目(8/18)	担当	内容
13:15	吉川様・川口様	・集合 グランパークタワー到着⇒4F受付（402応接会議室）
13:15-13:30	吉川様・川口様	・オリエンテーション ・自己紹介
13:30-15:30	川口様	・会社案内 -NTTコミュニケーションズとアプリケーション&コンテンツサービス部の事業について ・「通信仕組み」（概要）
15:30-16:15	吉川様	・「ソリューション事例紹介」 -ComグループのCSRソリューション事例
16:15-17:15	吉川様・川口様	・意見交換 -仕事やキャリアの考え
17:15		・解散

図1:インターンシップ1日目日程

1日目は、NTT コミュニケーションズ株式会社について、通信業界について、また、ソリューション事業についてのお話をさせていただきました。また、「なりたい自分になるためのキャリア設計書」を考えてくるという課題をいただき、人生の目的や将来なりたい自分について考えるきっかけをいただきました。

2日目(8/19)	担当	内容
9:30-10:30	吉川様・川口様	・グループ課題 -リーフレット/Web等で訴求する内容について議論
10:30-12:00	川口様	・「周辺業界研究」（概要）
12:00-13:00		・昼食
13:00-14:00	吉川様	・Webマーケティングの基礎
14:00-15:30	吉川様・川口様	・グループ課題 -Web等での訴求方法、今後の実施内容、スケジュール確認
15:30-17:00	吉川様・川口様	・意見交換 -発表（5分程度）を受け、お互いにコメント -自己PRのアドヴァイス
17:00		・解散

図2:インターンシップ2日目日程

2日目は、グループディスカッション（図3・4）です。課題について考える時間をいただき、ホワイトボードや付箋などを使いながら、「メール・マナーの周知」をどのように行っていくか、Web、リーフレット、Twitter を今後どうしていくか、また、それぞれの立ち位置についてチームメンバーで話し合いをしました。密度の濃い話し合いができました。また、Web を製作する際に参考となる Web マーケティングの基礎のお話をさせていただき、今後の活動に役立てることができました。最後には、インターンシップ1日目の時にいただいた「なりたい自分になるためのキャリア設計書」についてチームのメンバーがそれぞれ発表し合いました。

2日間のインターンシップを通して、今まで知らなかったことを学ぶことができ、また、吉川様、川口様と直接話しながら、今後の活動をどうしていくかなどを、アドバイスをいただきながら、話し合うことができ、とても有意義な、勉強になる時間を過ごすことができました。



図3:グループディスカッション

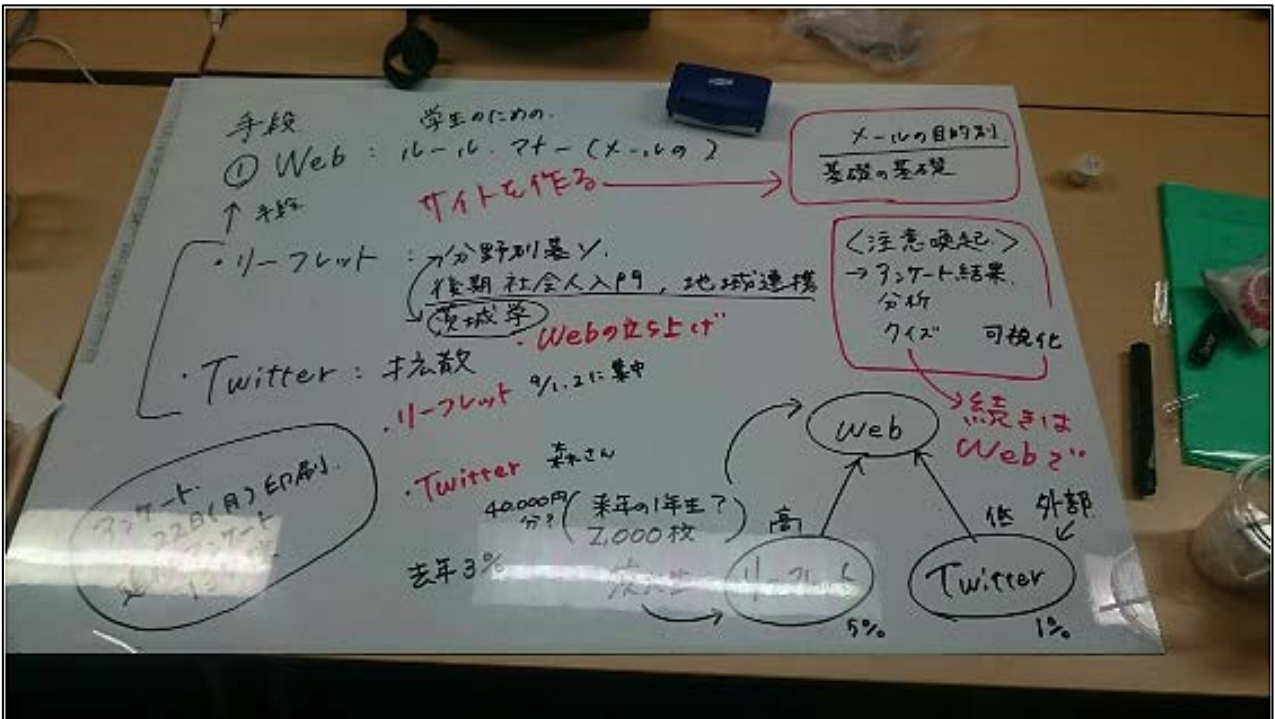


図4:ディスカッションで使ったホワイトボード


(2)リーフレット

Web に見てもらえるように制作したリーフレット (図 5) です。A4 判両面刷り・2 ツ折りで作成しました。裏表紙に Web に繋がる QR コードが載っており、Web に簡単にアクセスできるようになっています。読者の不安を掻き立てるためにリーフレットの配色は黒メインにしました。また、不安になる根拠が必要ということで、アンケートの結果を載せました。このリーフレットは、大学 1~3 年生の講義で配布しました。理由としては、無差別にいろんな人に配るのではなく、確実に私たちが注意喚起の対象としている人に配るためです。



ここでちょっと力試し！  
**～メールマナークイズ！～**

**Q1. 複数の相手に電子メールを送る際、他の受信者にメールアドレスは通知されないのはどっち？**  
 ア) CC  
 イ) BCC



**迷ったあなた今すぐQRコードをチェック！**  
**答えはQRコードで確認しよう！**

参考：NTTコミュニケーションズ株式会社 (2013)  
 『NTTコミュニケーションズ インターネット検定.com Master BASIC 公式テキスト 第2版』 p.205

コミュニケーションチーム  
とは？

茨城大学の学生5人がNTTコミュニケーションズ株式会社様と協同で進めているプロジェクト。茨城大学で開講されている「プロジェクト実習D(スタッフ編)」の一環。「コミュニケーション・リスクを減らす」のテーマのもと、学生のメールマナーの向上を目的として、活動している。

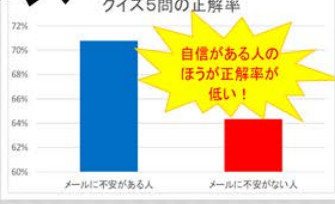
あなたはこんなメール送っていませんか？

TO: 鈴木先生  
 CC:  
 BCC :  
 件名 :  
 添付：期末課題

木曜4限の授業の課題を提出します。

**事実その1** 茨大生304人に聞いた、メールマナークイズ！


クイズ5問の正解率



自信がある人のほうが正解率が低い！

知らず知らずのうちに失礼なメールを送っているかも…。

誰にメールを送りますか？

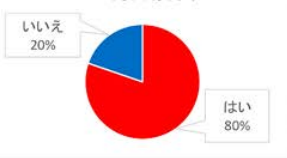


学生が先生に送ると思われるメールの内容  
 ・欠席/遅刻の連絡  
 ・課題提出 など

やはり欠席連絡など、大学生らしい用件が多いのがわかります。でもネットで例文を調べていても ビジネスメールの例文ばかりではありませんか？

**事実その2** 同じ304人にアンケートを取りました！！

メールに不安はありますか？



**不安な要素ランキング**

1. 敬語
2. 構成
3. 決まり文句

～大学生のメールの不安あるある～

外国人の先生に英語でメールを送らなきゃだけど…英語で…？

普段メールなんて送らないし、どう書き出せば失礼じゃないの…？

ネットを見ても、ビジネスメールの例文ばかりで大学生用がない…何を参考にすればいいの…？

**8割の学生が不安を持っている！**  
**自信がある2割の学生も間違っている可能性がある！**

大学生のためのサイト用意しました！  
 これを見れば表紙の間違いもわかります！




図5:リーフレット

(上：表紙と裏表紙 下：本文)

143

### (3) ツイッター

Web の広報活動のためにアカウントを作りました (図6)。



図6: ツイッターホーム画面

### (4) Web

Web サイトを立ち上げそこでメール・マナーについて発信することで、大学生にメールを送る時のマナー、ルールを分かり易く伝えることを目的とし、製作しました (図7)。大学生は、レポート課題を提出したり、研究室などで教授に連絡を取る機会ができる、ということで、分かり易く、場合分けをしました。



図7: Webホームページ

リーフレットやツイッターの広報活動のおかげもあり、ユニークアクセスといい、ホームページを閲覧した人数は 221 人、ホームページ内をクリックした数 (トータルアクセス) は 818 回という成果を収めることができました。

## 大学とは違う環境で

NTT コミュニケーションズ株式会社

2016年 8月18日～19日

森本 真由 (2年)



### 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がプロジェクト実習 D を履修した一番の動機は、インターンシップがあるからである。まだ 2 年生だった私は、このプロジェクト実習を受け始めた当時は、就活やインターンシップに対して何も考えていなかった。漠然とした不安はあったものの、だからと言って何から対策をすればいいかわからずじまつた。しかし、なぜか当時は自分の中には「民間企業で働きたい」という想いだけはあった。そんな中、プロジェクト実習 D ではインターンシップに参加できると知り、しかもその中の 1 つのプロジェクトの中に NTT コミュニケーションズ株式会社様の東京本社に 2 日間インターンシップに参加させていただけると知った。就活やインターンシップを何も知らなかった当時の私にとって、この機会を逃してはいけないと思い、迷わず選んだ。

### 2. プロジェクトの概要と担当

NTT コミュニケーションズ株式会社様の吉川様・川口様と進めていたプロジェクトの大きなテーマは「コミュニケーション・リスクをなくす」である。これは吉川様・川口様から与えられたテーマであり、ここから私たち学生が自分たちでテーマを絞って 1 年間進める。

私たちは「コミュニケーション・リスク」として「メールマナー」を挙げた。というのも、スマートフォンが普及し、LINE などが若者のコミュニケーションツールになっている今、スマートフォンが普及する前と比べて、メールを利用する頻度が激減していることは誰もが感じることができるだろう。私たちはそこに着目し、メールで連絡を取ることに慣れていないのではないか、メールマナーを知らないが故に、知らず知らずのうちに相手に対して失礼なメールを送っているのではないか、という学生が抱えそうなメールに関する不安やトラブルを解消するために何かできないか、と考へ「メールマナー」をテーマに決めた。

### 3. 派遣先の概要

1992 年、NTT コミュニケーションズ株式会社は、日本電信電話株式会社の分社化に伴い、長距離・国際伝通信事業を展開する会社として設立された。同社は、企業または個人向消費者向けに、主に国内長距離通信、国際通信、IP 電話サービス、インターネット・サービス・プロバイダ、国際電気通信等の各種サービスを行っている。

### 4. 派遣先での活動内容

1日目は最初にオリエンテーションや自己紹介などした後、川口様から会社案内として、NTT コミュニケーションズとアプリケーション&コンテンツサービス部の事業について説明していただいた。その後「ソリューション事例紹介」として Com グループの CSR ソリューション事例について説明していただいた。また次の日までの宿題として、仕事やキャリアについて考えるために、自分たちの強みや弱みについて「棚卸し」したものを用意してくることになった。

2日目は、川口様から IT 関連の他業界の特徴などの説明をしていただいた。その後は、吉川様や川口様などの社員の方々と昼食をご一緒させていただいた。昼食後は吉川様から Web マーケティングの基礎についてご講義頂いた。そのあとは私たちが水戸で進めているメールマナーについてのプロジェクトを進めるため議論する時間をいただいた。二日間の最後には、前日に出された宿題を発表し、吉川様と川口様のご意見をいただいた。

### 5. エピソード

1日目の NTT コミュニケーションズとアプリケーション&コンテンツサービス部の事業やソリューション事例紹介の説明では、それまで知ることのなかったことを、学校ではなく、その場で働くプロの方からお話を聞かせていただくことができた。正直私は IT 産業や通信についてあまり知識がなかった。そんな私がついていけるかと不安だったが、お二人は導入をわかりやすくしていただき、本格的な話にもすつと入ることができた。今回でももちろん IT や通信について学ぶことができたが、それに加えて人にわかりやすく説明するコツを学んだ。

2日目の午前中は1日目と内容は異なるが、形式としては同じ講義形式だった。2日目で一番印象に残ったのは最後に行った、自分の強みと弱みを棚卸しし、それを基に自分の人生やキャリアについて考え、発表するという時間だった。前日に用意したものを発表し、吉川様と川口様からご意見をいただいた。民間企業に勤務する方から、自分が想像する人生やキャリアに対してご意見をいただくことは貴重な機会であったと共に、とても自分の為になるご意見をいただけた。



図 1: 吉川様ご講義



図 2: グループディスカッション

### 6. わかったこと、学んだこと

今回のインターンで学んだことは、知識面と技術面に分けることができる。

まず、知識面としては、言うまでもないが、インターンに参加する前と比べて、圧倒的に IT 産業や通信の知識が増えた。インターネット業界の構造など、今まで知ろうと思わなかったことを知ることができ、おかげでそれまで少々苦手意識を持っていた IT 系の産業に興味を持つことができた。3年生になってからのインターンや4年生での就職活動でも、IT 産業を受けてみようと思う。

技術面としては、プレゼンテーションや自分の説明を人に納得させる時のコツだ。今回のインターンシップでは全体の半分が講義形式であり、パワーポイントを使った講義をしていただいた。今まで大学で過ごしてきて、民間企業に勤務する社会人の方から、プレゼンテーションを聞く機会がなかったからかもしれないが、吉川様と川口様によるプレゼンテーションはとても新鮮に感じた。その一番の理由が、視聴者を納得させるために、グラフや表などの数字を載せたスライドが多かったところだ。数字を扱うことはビジネスの世界では当然のことであり、私もインターンに参加する前から、そのくらいは知っていた。だが、おそらくスライド全体のおよそ70%~80%がグラフや表のスライドのプレゼンテーションはほぼ初めて聞いた。当たり前だが、大学では、教授や学生の研究結果を説明するプレゼンテーションが多いが、まだ2年生だったということもあるが、スライド全体の70%~80%がグラフや表のプレゼンテーションは少なくともそれまでほとんど聞いたことがなかった。そして吉川様と川口様の数字を多用したプレゼンテーションを聞いた私が説明に納得できたのは、そのグラフは表がきちんと説明の根拠となっているからだとして理解でき、いかに数字が説得力を持つのかということを感じ知らされた。これは、私たちが進めているプロジェクトに限らず、いずれ取り組むことになる卒業論文で必要になってくるものだと感じ、これからも生かしていこうと思う。

## 7. 後輩へのアドバイス

授業の一環でインターンに参加できたことは、まだ2年生だった私にとって、とてもありがたい機会だった。多くの方が4年生の就職活動に向けて、3年生の時にインターンシップに参加する。もちろん2年生の時点ですでにインターンシップに参加している学生もいると思う。しかし、私はインターンシップの申し込みやその準備について何もわからずにいたので、プロジェクトと一緒に進めてきた仲間と、プロジェクトのご協力していただいているNTTコミュニケーションズ株式会社様でインターンシップに参加できたことは、とても安心できた。また、これからは一度インターンシップに参加したことがあるということ自信に他のインターンシップに参加してみようと思えた。

このプロジェクト実習という授業を受けようとしている人、あるいは受けている人ならば、その意思を持ったままインターンシップがあるプロジェクトを選ぶことを、私は強くお勧めしたい。もちろん私のように2年生で必ずしもインターンシップに参加する必要はないと思うが、このような環境でインターンシップに参加できることはとても貴重な機会であるとともに、大変ありがたい機会だと強く感じたからだ。

今の学生生活を変えたい人、何か特別な経験をしてみたいという想いが少しでもある人、思い切ってインターンシップに参加してみるのはいかがでしょうか。

## 自分を変えた2日間

NTT コミュニケーションズ株式会社

2016年8月18日～19日

入江 美穂 (2年)



### 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がプロジェクト実習 D を受講した理由は、プロジェクト実習 D がインターンシップ型であるからである。提携先の企業に実際赴いてインターンシップを行えることはこのプロジェクトの大きな魅力の一つであると感じる。また、この授業は「課題解決型学習」と言われており、課題の発見そして解決能力、プレゼン資料の作成など社会人になる上で必要な能力をつけることができるのではないかと考えたため、このプロジェクト実習 D を受講した。

### 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは「コミュニケーション・リスク」をなくすことを目標として活動している。私たちの生活の中に数多く存在する「コミュニケーション・リスク」の中から、私たちはメールによって引き起こされる「コミュニケーション・トラブル」に着目して活動を行うことにした。その中でも大学生への正しいメールマナーの周知のため Web ページ、リーフレットの作成に取り組んでいる。私は、チームの会計としてチームの予算の管理を行っている。

### 3. 派遣先の概要

NTT コミュニケーションズ株式会社は、日本電信電話株式会社 (NTT) の分化に伴い設立された長距離・国際通信事業を行う電気通信事業会社である。同社は、クラウド、ネットワーク、セキュリティ、コンサルティングなど各種サービスの提供を通じてグローバルビジネスの手助けをしている。

### 4. 派遣先での活動内容

1 日目には、NTT コミュニケーションズ株式会社について、通信の仕組みさらには Com グループが行っているソリューション事例の紹介をしていただいた。2 日目には、IT 関連業界の特徴を教えてくださいととも、Web ページの作成という今後の私たちの活動に必要となっていく Web マーケティングについても教えていただいた。また、2 日目は 1 日目のような講義形式の活動だけでなく課題と活動方針の見直し、今後の私たちの活動の核となっていくリーフレット、Web ページで発信したい内容についてや今後の自分のキャリアについて考え、グループで意見交換や話し合いを行った。

## 5. エピソード

1 日目は、講義形式による活動が主なものだった。通信産業については今まであまり調べたことがなかったためとても興味深いお話が聞けた。その中でも Com グループが行っているソリューション事例の紹介については、IT の技術が医療や限界集落での害獣の罠などの様々な分野に応用されていることがわかり、IT 技術が私たちの生活に入り込んでいることを改めて実感できた。

2 日目には、1 日目のような講義形式の活動に加えてグループ活動も行われた。このグループ活動では私たちが取り組もうとしているメールマナーの周知の方法について再検討をした。私たちはもともとの「コミュニケーション・リスク」の減少というテーマを忘れ、Web ページの開設が最終目標となってしまうていた。そのことにグループワークで気が付くことができ、きちんと話し合う中で大学生がメールを送る際に参考にできる Web ページを開設し、「コミュニケーション・リスク」を回避することとした。



図 1:グループディスカッション

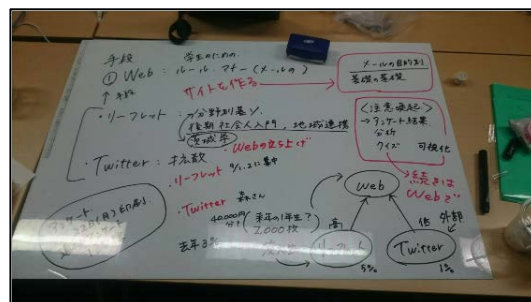


図 2:グループディスカッションの記録

## 6. わかったこと、学んだこと

私は、このプロジェクトを履修するまで通信業界についてなにも知らなかった。しかし、このインターンシップに参加し、通信産業について知ることができた。また、2 日目に行った、自分のキャリアについて考えることについては、今までは、将来どのようになりたいかに重点を置いて考えていたため漠然とした不安を感じることはできなかった。しかし、今回のインターンシップで最終目標の決定後、近い将来の目標から順々に決めていくという手法を教えていただいた。最終目標を決めてから今何をすべきか明確にすることで今自分がすべきことを着実にこなすことができるため、目標に向けて一步一步進んでいるという実感が持てるようになり自分のやることに自信を持てるようになった。

## 7. 後輩へのアドバイス

私はこのインターンシップを経験して、今まで知らなかった通信業界について少しではあるが知識を得ることができた。また、自分のキャリアについて考える良いきっかけとなった。これらからも言えるように、私は、インターンシップを通して自分の視野を広げることができたと感じている。さらに、就職について意識するきっかけにもなった。

2 年生はまだ進路について決めかねているという私のような人も多いと思う。しかし、インターンシップは自分を変える第一歩になる。この企業に就職したいという目標を明確に定めてインターンシップに臨むことも大切かもしれないが、自分を変えるために思い切って一歩を踏み出すことも大切だと思う。是非思い切ってインターンシップに参加してもらいたい。

## 貴重な体験

NTT コミュニケーションズ株式会社

2016年8月18日～19日

波崎 大知 (2年)



### 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私がこのプロジェクト実習 D の履修を決めた大きな理由はインターンシップを経験できるということである。このプロジェクトは大企業である NTT コミュニケーションズ株式会社様の本社へインターンシップに行けるという魅力的な要素があった。これも私がインターンシップ型のプロジェクト実習 D を履修するきっかけとなった。

### 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、「コミュニケーション・リスクをなくそう」というテーマに基づいて活動を行った。私たちはそのテーマのなかでも特にメールマナーに着目して、学生のメールマナーの向上を目的にプロジェクトを進めている。まず、学生のメールマナーに対する意識を調査するためにアンケートを行った。そしてその結果を踏まえてメールマナーの啓発を目的としたリーフレットの作成やメールマナー改善を促すために Web の立ち上げを行っている。私はチームの書記を務め、話し合いの際の議事録を作成する。

### 3. 派遣先の概要

NTT コミュニケーションズ株式会社は、日本電信電話株式会社の分社化に伴い 1999 年に設立された。同社は長距離・国際通信業を展開する世界有数のグローバル企業であり、IP 電話サービス、インターネット・サービス・プロバイダー事業、国際電気通信、付加価値アプリケーション等のサービスを提供している。

### 4. 派遣先での活動内容

一日目は前半に NTT コミュニケーションズとアプリケーション&コンテンツサービス部の事業について、通信の歴史や仕組みについて教えていただいた。後半はソリューション事例紹介をしていただいた後、仕事やキャリアの考え方、自分の強みや弱みを棚卸しするよう、二日目への課題が出された。

二日目は前半周辺業界研究ということで IT や情報通信産業の特徴について学んだ。また、Web マーケティングの基礎についても教えていただいた。後半は私たちのプロジェクトの課題を進め、最後に一日目に出された課題を基にお互い仕事やキャリアの考え方について話し合った。



### 5. エピソード

二日間という短い期間であったが東京で働いているという気分で過ごすことができた。一日目は早く着いたのでインターンシップ先であるグランパークタワーで社員に囲まれながら昼食をいただいた。二日目は朝、通勤ラッシュを体感しながらオフィスに向かった。お昼は社員の方と共に昼食をいただき色々な話を聞くことができた。

二日目、私たちのプロジェクトの課題を進めているとき、学生同士の話し合いで何を話しているのか方向性が見えなくなってしまうことがあった。そのとき、社員の方に話し合いの進め方や物事の決定の仕方を教えていただいた。そのあとの話し合いではチームで一つの目標に向かって意見交換や話し合いをすることができて有意義な時間を過ごせた。

話し合いの中で衝撃的だったことがあるのだがその前に補足として私たちのチーム施策を説明する。私たちは大学生にメールを送る際のルール、マナーを分かりやすく伝えるために Web サイトを立ち上げそこでメールマナーについて発信するという目的があった。それをよりたくさんの人に見てもらうための手段として Web サイトの QR コードを載せたリーフレットを配布する計画を立てていた。このように何か施策を行うときにはその効果と予測をしなければと教えていただいた。リーフレットを 1000 枚配布したとしよう。私はそれをするのでリーフレットから Web に到達する者が 30%はいるだろうと予測した。しかし、私の予想は大きく裏切られた。私にとっては衝撃的だったのだが、このような手段で広告することで成果が表れるのはだいたい 3~5%が普通だということだった。

このように、これから私たちが身に着けていかななくてはならない知識を実際に社会で働いている方々と関わることで学ぶことができた。

### 6. わかったこと、学んだこと

このインターンシップを通して興味を持っていたが知らなかった IT、通信業界や Web マーケティングについて学ぶことができた。これからの時代、どの分野でも情報通信技術が利用される情報社会がどんどん進んでいくということを知ることができたので自分の将来についてこういった社会の流れもつかんで決めていきたいと思った。また、Web デザインを学ぶことができたので、プロジェクトでの Web 立ち上げに役に立った。仕事やキャリアについて考えること、働いている方々の話を聞くことができて貴重な体験をすることができた。

### 7. 後輩へのアドバイス

二年生のうちにインターンシップを体験できる。しかも NTT コミュニケーションズ株式会社のような大企業でインターンシップができることは本当に貴重な機会です。インターンシップだけでなく、企業の方とメールをやり取りするなど一年を通して色々な事が学ぶことができるのでプロジェクト実習の履修に迷っている方はぜひ取り組んでみてください。

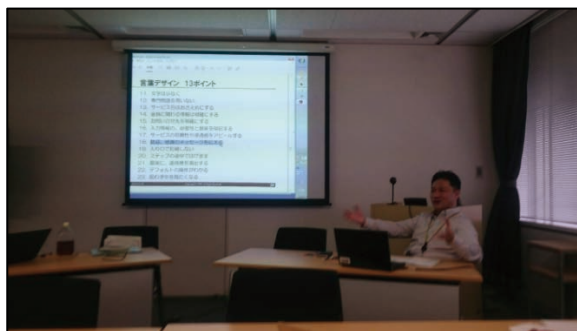


図: 吉川様ご講義

5: 年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

### コミュニケーショントラブルをなくそう

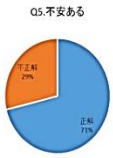
メンバー:  
森本真由・佐藤宇輝・入江美穂  
森遥香・波崎大知・猪狩彩夏・磯貝麻菜

茨城大学の1～3年生に向け、社会でコミュニケーションをとる上でのメールマナーの周知

大学生は課題を提出する、研究室訪問をするなどメールを使用する機会が増えます。私たちコミュニケーションチームはそんな大学生のために、活動をしています。上記の目的を達成するために活動してきたことを紹介します。


1. アンケート、クイズ結果  
メール利用に関する大学生の意識調査を茨大生男女304人対象に行いました。

Q5. 「正しい敬語に変えよ」というクイズをだしました。不安がある人より不安がない人のほうが正答率が低いという興味深い結果が出ました。



Q5 不安ある  
不安あり 73%  
不安なし 27%


2. インターンシップ  
このプロジェクトを提供してくださったNTTコミュニケーションズ株式会社の本社にインターンシップに行かせていただきました。通信業界などのお話をいただきました。二日間、貴重な体験をすることができました。




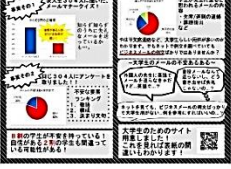
Q5 不安ない  
不安なし 43%  
不安あり 57%

結果3.リーフレット  
リーフレットは3000部作成！  
来年度の一年生にも配れるようになりました。

QRコードをつけることによってすぐにサイトへ到達できるようにしました。



結果4. Webによるメールマナーの周知  
大学生がメールを使う状況を考えてテンプレートを作成。  
「Webを見た人がすぐ使える」がコンセプト！  
2016/11/28現在、トータルアクセス数は818になりました。

まとめ  
「コミュニケーショントラブル」とはなんだろうという疑問から始まり、ゼロから何かを作り上げていく難しさを、身をもって学びました。企業の方とメールでやり取りを交わすことで私たち自身のメールマナーの向上につながりました。また、打ち合わせやインターンシップを通して主張を通すためのノウハウや話し合いの進め方、物事に対する考え方など社会人になってからも役に立つスキルを学ぶことができました。まだまだ、メールマナーについて不安を持っている茨大生はたくさんいると思います。引き続き、作成したリーフレットやWebを利用して大学生にメールマナーの周知ができればと思います。

図 8: ポスターパネル(1/16 縮小)



図 9: 活動報告会での発表風景

## 6:最終レポート

### リーダーとしての1年

茨城大学 2年 森本 真由

私は、1年間のプロジェクト活動をリーダーとして活動してきた。だが、このリーダーという役職は本意なものだった。もともと、役職が決まるまでは書記を希望していた。しかし、メンバー全員が揃わないまま始まってしまった初めての話し合いの結果、私になってしまった。決まった瞬間、ものすごい不安が押し寄せたのを今でも鮮明に覚えている。そもそも、この役職を決める話し合いにも全員揃わず、担当教員の鈴木先生の呼びかけで何とか集まった状態だった。こんなバラバラなチームをまとめてプロジェクトを進めることができるのだろうか、そもそもチーム全員と話したことがないのに私がリーダーになっていいのか、など考えてしまい、どうしたらいいかわからない状態だった。

それでもプロジェクトは進めなければならなかった。だが、役職が決まったその日にすぐ壁にぶつかった。それは、リーダーとしてお題提供者であるNTTコミュニケーションズの吉川様と川口様に挨拶のメールを送らなければならなかった時である。友達でも、家族でも、先生でもない学外の方にメールを送るということが私にとって初めてのことで、どうしたらいいかさっぱりわからなかった。だが、初めてなりに、これはきちんと調べて送らなければならないと感じていたので、複数のメールマナーについてのサイトを読んで、1時半以上かけてメールを完成させた。メール1通送るだけでこんなに大変なのにこのままやっていけるのかと、さらに不安になった瞬間だった。

だが、結果的にこの不安が私たちの活動の軸となった。今年度の活動目標が「大学生のためのメールマナーの周知」になったのだ。これは、私が発案したものがベースとなっており、もちろん先ほどの苦勞から考え付いたものだった。残念ながらこの目標が決まった時の話し合いにも、チーム全員が揃わなかったが、もう進めるしかない、という想いで本格的にプロジェクトを開始した。リーダーとして大変だったことはたくさんあるが、一番はチーム全員の適性を判断して役割分担をするというこ

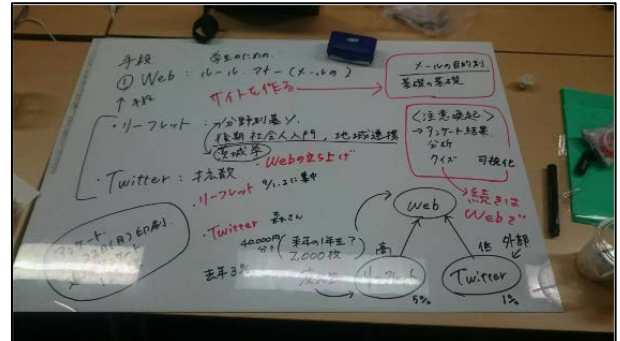


図:グループディスカッションの記録

とだった。もともと、このチームのメンバーは全員初対面だった。だから一からメンバーがどういう性格で、何が得意で何が不得意かなど、大まかにでも把握する必要がある、そのうえで仕事を指示しなければならなかった。最初は、指示するより自分でやった方が早いと考えてしまい、チームを頼らずに一人で活動している状態になっていた。案の定、抱え込みすぎて精神的に不安定になってしまったそうだったが、「これで私が倒れてしまったら、リーダーになった意味がない」と考え直し、少しずつチームにお願いするようになった。そこから徐々に精神的に楽になっていき、チームでの活動も増えていった。ここで強く感じたのは、メンバーの適性を考える際は、自分の頭で考えるより、まず何か仕事や役割を与えて、その人がどう取り掛かるかを見てから判断したほうがわかりやすい、ということだ。冷静に考えると、当たり前のことだが、当時はその手段さえもわからず、自分で抱え込んでいた。だが、その抱え込んでいた経験も含めて、これらの経験は、たとえ自分がリーダーにならなくてもこれからの活動で活かせるのではないかなと思う。

1年を振り返ってみると、リーダーという役職を少し気負いすぎた気もするが、このプロジェクトに参加し、さらにリーダーになったからこそ、経験できたことがたくさんあった。これらを2年生のうちに経験できたことを強みにして残りの大学生活を過ごして行きたい。

## 2年目のプロジェクト実習

茨城大学3年 森 遥香

私は、2年次からプロジェクト実習Dを履修し、NTTコミュニケーションズ株式会社様がお題を提供し、一緒に連携して行うチームに所属してきた。2年目に参加しようと思ったきっかけは、1年目に参加した時に、他の授業では学ぶことのできない、プレゼンの仕方、外部の方とのメールでのやり取りを学ぶことができ、成長することができたからである。また、1年目にNTTコミュニケーションズ株式会社様と提携するのが初めだったということや、その時のチームのメンバーが全員プロジェクト実習を履修するのが初めてだったこともあり、右も左も分からないような状態で上手く課題を進めることができず、成果をあまり出せなかったことからもう一度このチームの課題を解決したい！挑戦したいと思ったからである。

私は、1年目ではチームのリーダーを担当した。リーダーとしての役割は、自分が先頭に立ってチームを誘導したり、役割分担をしたり、チームをまとめるといった役割であった。あまり、人をまとめることや、指示を出すことが得意ではなかったため、そういった自分の弱点を克服したいと思い、自らチームのリーダーに立候補した。逆に、今年度は、自分の授業との兼ね合いや、昨年度チームリーダーを経験したことから、チームを支えるポジションに立ちたいと思い、副リーダーに立候補した。2年目のプロジェクト実習を終えて、自分の立ち位置、チームでどれくらい課題解決に貢献できたか、考えたときに自分自身につける

点数は、100点満点中、5点であった。それは、昨年度、リーダーを経験しチームを引っ張ることを経験したこともあり、今年度の副リーダーという立ち位置が最後までうまくつかめなかったからである。副リーダーという立場であり、仕切りすぎず、支える存在になろうと思っていたが、チームのメンバーが全員2年生であり、どれほど口をはさんでいいのかいつも考えながら活動していた。そういったことがきっかけでチームでの活動は消極的になってしまった。チームの課題である、「大学1～3年生に向けたメール・マナーの周知」の達成度は、昨年よりもはるかに達成していると思う。

私は、今年一年間を通し、副リーダーの立場についてずっと考えていた。しかし、今思うことは、立場なんてものは形式上の言葉であり、大切なのは、「どれほどチームのメンバーが一丸となって課題について向き合うこと」ではないかと思う。1年間を振り返り、頭に浮かんでくるのは、あの時こうしていればよかった。という後悔ばかりである。しかし、後悔ばかりしていてもどうしようもない。後悔も多いが学んだことも多かった。私は、この一年間を通して、自分が何かの役職に就いたときに、立ち位置や立場を考え行動するのではなく、チーム全体でどう課題に向き合っていくかということを知ることができた。後悔の多い1年間であったが、ここで学んだことを忘れずに将来に活かしていきたいと思う。

## 私を変える1年間

茨城大学2年 入江 美穂

私がこのプロジェクト実習の授業を履修した理由は、1年生の時の何気なく日々を過ごしていた自分を少しでも変えたいと思ったからである。それにプラスして、将来のこと考えた上で、何か社会に出てから役に立つ経験をした我也想っていた。そのため、プロジェクト実習を受講した。また、私はこの1年間会計という役割をチーム内で担っていた。私は別のサークルにも所属しており、そこでも1年間会計の仕事をしていた。なので、プロジェクト実習でもチームの役に立てるのではないかと思い志願した。

私は参加するにあたって一つの小さな目標を持っていた。それは、自分の持っている意見を人の前で発言できるようにすることだった。今までの私は、きちんと考えた上で自分の意見を用意していても、周囲の雰囲気にも飲まれて最後まで発言出来ないことが多々あった。プロジェクト実習では、チーム内での話し合いが多いためこれを克服できるのではないかと考えたのだ。実際、話し合いの機会を重ねるごとに少しずつ発言することができるようになってきた。そして、メンバーから言われた新たな発見もあった。今まで、瞬時に意見を述べることができないことは自分の短所、弱点であると認識していた。しかし、それは、自分の持っている意見を、他人の意見を聞き、吸収した上でより良い意見を出し、バラバラになったチームの意見をまとめることができているという長所にもなっているのではないかという点だ。このようなとらえ方は今までの私にはなかったもので長所にもなることに驚いた。目標を完全に達成できたかについてはまだ足りていない点が多々あると



図: インターンシップにて

思う。それでも、少しずつ変わったのではないかと自分では感じている。その他にも課題を見つけてそれを解決する手段を見つけること、メールマナーなど就職し、社会人になってからも必要となってくる能力を少しではあるが身に付けることができた。

初めてのプロジェクト実習は、今までの大学のほかの講義とは形式から何から何まで全く違うものであり、戸惑うことが多々あった。また、チームでの活動であるため参加できない日が多いとチームに迷惑もかかる。特に私は、別のサークルとの兼ね合いで参加できないことが多く、チームに迷惑をかけてしまうことが多かった。それでも、メンバーの力も借りてどうにか1年間プロジェクト実習を続けることができた。ありがとうございました。

## 一年間の活動で学んだこと

### －チームでの活動、先進地実地研修を通して－

茨城大学 2年 佐藤 宇輝

本授業は、先生が生徒に教えるだけの従来の授業の形式でなくアクティブラーニングという形式がとられている。そういった授業では自分で何を考えそこで何を学んだかが求められる。そこでここでは最初に自分の目標としてあげていた課題解決をする力、状況把握力と実行力という点からチームの活動を振り返ってみようと思う。また、先進地実地研修は12月の最終報告会にて発表を本授業履修生を代表して担当した。そちらについても触れる。

まず課題解決能力についてだが、本授業は、チームで自分たちの最初に課題を設定するところから始まる。私たちのチームが発足してすぐの時期には、目標をはっきり決めていない状態で講演会を開きたいといった形ばかりどうするかを話し合ってしまった。協力してくださった企業の方との打ち合わせやメールからまず課題を作ってそこから手段や方法を考えていくと誰に向けたものなのかどんな方法がいいのかが浮かび上がってきて、こういった仕事を進めるプロセスを経験できたのは貴重であったと思う。また、行っている活動になぜを繰り返し問いて行くということも教わった。このプロジェクトを行った理由、なぜアンケートをとるのかといったことを示すことを強く意識するようになり、数字で示して見る人を納得させることの重要性を学んだ。私は、協力してくださった方のアドバイスを生かして、この活動の必要性を示すことやアンケートの内容や対象といった点では深く活動に関わりチームを先導できていたと思う。次に状況把握能力に関することは、チームでの役割を考えることができたように思う。もともと、これはリーダーが主に仕事を割り振ったりして

分担ができていたからというところが大きいと思う。先ほど課題解決においては深く関わったと述べたが、そういうことからこの仕事がいいだろうと与えられた仕事もあった。リーダーは人それぞれの適性を判断することは重要であると思った。情報の共有もメールなどからできていたと思う。学んだこととは違うかもしれないが、チームとしてそれぞれ気持ちよく仕事できていたということで、よい経験だった。三つ目の実行力という点では、Webを作成したりした後半の時期があまり行動できていなかった。実際の仕事もリーフレットやWebを作って終わりということはないのだろう。モチベーションの持ち方やスケジュール管理を改善していきたい。また、活動の成果の測定の仕方がはっきりしていなかった点を挙げたい。Webはアクセス数だけでなく反応を見ながら変えていったりすることができる点を生かせなかったと考えている。これからの活動につなげていければと思っている。

先進地実地研修については、観光系の授業を履修する学生の活動の発表をみて、かなりプロジェクトの規模が大きく発表の仕方も上手なところがあり刺激を受けた。私たちが自ら学んだことを重視するプロジェクト実習とは趣旨が異なり報告会の内容は苦勞した。伝えたい内容がぼやけてしまっていてあまりインパクトのあるものにできなかった。短い時間のなかで、これは伝えたいということをもってそれに合わせて作っていくべきだと思った。その上でPPTといった発表の見せ方の部分が生きてくるということも学んだ。

## 就業力を鍛えることができた「プロジェクト実習」

－成長できたこと－

茨城大学 2 年 波崎大知

私たち、コミュニケーションチームは「コミュニケーショントラブルをなくそう」という課題に一年間かけて取り組んできた。この課題提供者である株式会社 NTT コミュニケーションズの方からある言葉をいただいた。「実は、皆さんに取り組んで頂いた内容は、サービス開発プロセスをなぞっています。サービスというのは、お客様の課題を解決して対価を頂くものです。そのために、課題の分析や打ち手の検討、予算や人的稼働、技術の優位性等のリソースを考え、提供することを具体化します。さらに、デリバリー（お届けする）方法も考えます。」私はこの言葉から、確かにこのようなことに取り組んできたなと手応えをつかむことができた。この言葉を見て自分たちがやってきたことを思い返すことができる。私はプロジェクト実習を通して社会に出て会社で行うことの一部を実践的に体験することができたと思う。

私がこのプロジェクトで心掛けていたことは積極的に動くことだ。何かやることがあったら進んで引き受けることを意識していた。そのおかげで自分のスケジュール管理がうまくできるようになった。これはとても重要なことだと思う。プロジェクト実習を履修するうえで多くの時間を要することになる。また、急に人手が必要になることや緊急事態が起こる可能性もあり得る。そんな時になるべくすぐ動けるように他の授業の課題などやることには早めに取り組み余裕を作っておく。実際、小さな要件から大事な

要件まですぐ取り掛かることができた。リーフレットの納品を確認しにいく、企業の方に礼状を書く、Web サイトを作成する、ポスター作りなどたくさんを経験することができた。チーム内では積極的に動くほか、バックアップパーとして役割を果たすことができたと思う。

ただ、プレゼンテーションなど人の前で何かを発信することがあまりできなかったのが課題である。機会はあったのだが、論理的にスムーズに進めることができなかった。先進地実地研修などで同世代の優れたプレゼンを見る機会があったので参考にしながらこれから経験を積み重ねていきたい。

このプロジェクトはたくさんの協力者がいて成り立ったものだ。指導していただいた先生方、一緒にプロジェクトを進めたチームのメンバーには感謝したい。特に株式会社 NTT コミュニケーションズの方々には遠距離にもかかわらず、懇切なアドバイスをしていただき、欠かせない存在であった。プロジェクトをゼロから作り上げていくのは大変なことだった。しかし、一つ一つ可能性を検討しながらアドバイスを基に、まるで会社で企画を進めるかのようにプロジェクトを進めていくことができたのはとても良い経験だった。実践をしながら学んでいく。このプロジェクト実習でしかこのようなことは学べないだろう。本当に就業力を鍛えることができた一年間だった。この経験を生かしてこれからも挑戦を続けたい。

## アドバイザーの1年間

### —メンバーから得た学び—

茨城大学 4年 猪狩 彩夏・磯貝 麻菜

「NTT チームのアドバイザーをやってほしい」、昨年度 NTT チームで活動していた私達にそんな依頼が飛び込んできた。アドバイザーとは何ぞや、プロジェクト実習においてそのようなポジションは初めて耳にした。どうやら昨年スタートを切ったばかりで発足間もない NTT チームに、昨年度の活動の流れやノウハウを教える役目を担って欲しいとのことであった。昨年度、思うように活動を進められず不完全燃焼気味であった私達にとって、それは願ってもない話で、一も二もなく引き受けさせてもらった。

しかし、4年生の私達は春先、就職活動に卒業論文にと、なかなかプロジェクトには顔を出せない始末。プロジェクトの現状はプロジェクトメンバーや先生から CC で送られるメールのやり取りにて把握していたが、そのような状態の私達が一体このプロジェクトの力になれるのか甚だ疑問に感じていた。

その矢先、プロジェクトチームから「リーフレットの作り方を教えて欲しい」との連絡をもらった。私達が昨年実施したリーフレット配布や Web の制作を今年度も踏襲してくれるとのことで、自分達の活動が無駄ではなかったことを嬉しく思った。同時に、今までこれといった活動に関われなかった私達が、突然顔を出したところで受け入れてもらえるのだろうかという不安に駆られた。メールの文面から察するに非常に丁寧で、悪い子達ではないと分かった。しかしやはり、直接顔を合わせてみなければ安心はできない。それまでずっと苦勞して積み上げてきただろう活動に飛び入りで参加することに少々の後ろめたさも感じており、私達は初めての顔合わせに緊張していた。

だが、そんな不安や緊張は杞憂に終わった。迎えてくれたプロジェクトメンバーは想像通り、真面目で丁寧な子達で、溶け込むのにそう時間はかからなかった。当初不安材料でもあった学年差も障壁にはならなかった。それは、彼らがきちんと意思表示してくれたことが大きいと感じる。

彼らはプロジェクトのために良い意味で私達アドバ

イザーを活用してくれた。私達にできるのは、リーフレット・Web の作り方を指南するくらいで、特別何かを提案することはできなかった。だが、彼らは私達にこんなふうに作りたい、こうしてみてもうだろうか、こんなことはできるだろうか、自分達がやりたいことや分からないことをその都度伝えてくれた。私達も彼らの期待に応えるべく、手法を調べたり、指示を出したり、いつの間にか活動に取り込まれていた。自分の要望を伝えることや質問することの難しさはこの 22 年で強く感じている。それを難なくやってのける彼らに尊敬の念すら抱いた。

さらに、彼らのすごいところは私達に教えるを乞う傍らで、自らの活動に対し努力を怠らない部分である。ただ漫然と教えられるがままではなく、分からなかった部分を自分なりに調べてその手を休めない。そうして彼らは私達が指導した以上のものを仕上げてくれた。このように人からの教えを吸収でき、努力を続けられる人間は伸びると改めて実感させられた。

プロジェクトの助けになればと思って始めたアドバイザーという役割。しかし、寧ろ私達がメンバーから学びを得ることのほうが大きかったように感じる。分からないことは恥ずかしいものではない。できないことなら人に頼る。至極当然のことであるが、年を重ねるにつれ、こんな簡単なこともできないのは許されないのではと見えないプレッシャーを感じるようになる。そんな不安やしがらみで腰が重くなりがちな私達にとって、彼らの素直さは尊く感じた。

直接顔を合わせて活動する機会こそ少なかったが、プロジェクトの実績に深く関わる活動に参加させてもらうことができ、非常に嬉しく思う。また、こうして異なる学年と活動する機会を恵んでいただき、先生方やプロジェクトメンバーには心より感謝している。4月からの社会人生活では、異なる世代とともに仕事をするのが当たり前となる。人から学びを得るといふ貴重な経験は、これからの新生活において大いに役立ってくれるであろうと期待している。



## 7:おわりに

森本 真由

チームのメンバーがどのような想いでこのプロジェクトに参加し、何を目標に活動してきたかはそれぞれ異なると思うが、想いや目標が違うメンバーが集まり、同じテーマーで活動していくことこそがグループ活動の醍醐味なのだと1年を振り返って感じた。私たちは最初のチームでの話し合いに全員で集まること以前に、連絡を取ることもできなかった。きっとチーム全員が、このチームで大丈夫なのだろうかと感じていたはずである。それでも私たちはたくさんの方々からのアドバイスをいただきながら1年間活動することができた。大変なこともあって、逃げ出したいと思ったこともあるが、その逃げ出したい気持ちに勝って、今無事に活動を終えることができたよかったと思うと同時に、ひとりも欠けずに活動してくれたチームに感謝したい。

そして最後になってしまうが、この場を借りて、お世話になった方々へお礼を申し上げたい。私たちが立ち止まってしまっても、暖かく見守ってくださったNTTコミュニケーションズ株式会社のアプリケーションサービス部門第五グループ（第二チーム）担当課長吉川昌吾様、同じくアプリケーションサービス部門第五グループ（第二チーム）川口高弘様、リーフレットを印刷する際お世話になった人文学部学務係波多野様、同じく石川様、そして最後にプロジェクト実習担当教員である鈴木先生・神田先生、本当にありがとうございました。

# 7 : こみっとフェスティバルチーム

## プロジェクト実習D

リーダー	: 佐藤 李咲	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	3年
副リーダー	: 鈴木 千尋	同上	2年
書記	: 小野瀬莉央	茨城大学人文学部社会科学科	3年
書記	: 山口紗奈子	茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科	2年
書記	: 井上 知美	茨城大学人文学部社会科学科	2年
会計	: 塚本 莉沙	同上	3年

主担当教員 : 鈴木 敦 茨城大学人文学部 教授  
副担当教員 : 神田大吾 茨城大学人文学部准教授

2016年度  
茨城大学人文学部 プロジェクト実習D  
「こみっとフェスティバルチーム」活動報告

## 1:はじめに

佐藤 李咲

私たち「こみっとフェスティバルチーム」は、水戸市役所市民生活課様から「こみっとフェスティバル」というイベントを学生の感性や発想を生かしてよりよいものにして欲しい」とお題提供をいただき、プロジェクト実習Dの一チームとして結成された。昨年度からの継続者である三年生3名と、新たにプロジェクト実習を受講した二年生3名の、計6名からなるチームで、2017年2月25日に開催されたイベント「こみっとフェスティバル」の成功に向けて、一年間活動してきた。

ここで、こみっとフェスティバルとは一体どういったイベントなのか、紹介する。こみっとフェスティバルとは、水戸市内で活動する市民活動団体（NPO法人・ボランティア団体など）の存在を、もっと市民の方々に知ってもらうこと、また、市民活動団体同士のつながりを強めること、などを目的に、活動展示やステージ発表を行なうイベントになっている。

私たちのプロジェクトは、「こみっとフェスティバル開催」という大きな目標があらかじめ定められており、そこに向けて自分たちは何ができるのか、どうすれば貢献できるのか、を常に考えながら活動して行くことになった。毎月行われる実行委員会会議への参加や、水戸市役所市民生活課でのインターンシップ、夏季中のボランティア参加、各イベント等でのPR活動など、たくさんの取り組みを通じて、イベントの運営や広報活動の大変さ・大切さを知り、成長し、最終的にこみっとフェスティバルに上手く繋げることができたのではないかと感じている。

私たちのチームは、学年、学科、出身など、本当にバラバラな6人が集まった。しかし、私たちは常に、プロジェクトに対して前向きに全員が取り組んでいた。昨年度の経験を踏まえて活動した部分もあれば、それに加えて今年度初めて行なった活動もあり、日程的にかなり厳しい時期もあった。それでもお互いに尊重し、助け合いながら進めていくことで、誰も途中で投げ出すことなく活動できたし、チームとしても個人としても成長できた、そんな一年になったのではないだろうか。また、バラバラな6人だからこそ、話し合いの中で新しいアイデアが生まれたり、様々な観点から物事を考えるきっかけになったりと、活動をしていく上でプラスになることも多くあった。

この授業を受講した理由は様々にあり、またこのプロジェクトで身につけたものも人それぞれにあることと思う。しかし、長いようで短い大学生活のうちの一年間を、こみっとフェスティバル開催に向けて全力で取り組んできた成果は、この6人全員で作上げたものであるし、その経験は今後の人生に必ず生きてくるものだと思う。

そんな私たち「こみっとフェスティバルチーム」の今年度取り組んできた活動の成果を、これから記していこうと思う。

## 2:活動の目的・目標と概要

チーム一同

### (1)活動目的・目標

水戸市内で活動する NPO 法人・ボランティア団体の皆さまが主催する「こみっとフェスティバル」を成功させるために協働をする。また、開催に向けて様々な場面で周知活動を行う。

### (2)活動の概要

#### ①ボランティア活動への参加

目的:「こみっとフェスティバル」で水戸市内のボランティアを紹介するにあたって、自らがボランティアの内容や役割などを学ぶ必要があるとして、夏季休業を利用しボランティアに参加させていただいた。

a : 7月31日 第3回小中学生英語スピーチ大会 (茨城県世界青少年コミュニケーションクラブ様)

内容: 会場設営、運営補助

b : 8月21日 歴史館まつり (カプラ) (水戸こどもの劇場様)

内容: 子供と一緒に遊ぶ、運営補助

c : 8月25日 老人ホーム訪問 (はつらつサークル様)

内容: レクリエーションの参加・補助

d : 9月3日 子ども食堂 (にこにこ食堂) (茨城保健生活協同組合様)

内容: 活動の様子を見学、実食

成果: ・様々なボランティア活動の現場を肌で感じることで、“親子の交流の場となる” “生活をより豊かにする” 等といった活動の実態・役割を知ることができた。

・実行委員会の方々と交流を持つことができた。

#### ②水戸まちなかフェスティバル

目的: こみっとフェスティバルの周知と宣伝。フリーペーパー作成のための資金調達。

内容: ・石に絵を描く体験コーナー

・手作り小物の販売

・展示やチラシ配布によるこみフェスの宣伝

結果: 体験コーナー126名が来場

成果: こみフェスの手作りチラシを袋に入れて手渡すことで十分な周知活動が出来たと考えられる。

#### ③茨苑祭 (茨城大学 学園祭)

目的: こみっとフェスティバルの周知と宣伝を行うため。

内容: 1日目 連鶴・折り紙体験 (協力 はつらつサークル様)

2日目 カプラ (積み木) 体験 (協力 水戸こどもの劇場様)

両日ともに展示、チラシ・フリーペーパーの配布

結果: 2日間で121名が来場

成果: ・市民活動団体・来場者の方はもちろん、参加したプロジェクト実習の他チームとも交流をする良い機会となった。

・今年度初の試みであるフリーペーパーを配布するなど、来場者の方々にボランティアをより身近に感じてもらうような働きかけを行うことが出来た。

・企画自体は昨年度と同じような内容だったため、新しいことに挑戦できなかったという反省点も挙げられる。

#### ④こみっとフェスティバル

目的：市民の方に市民活動団体の活動を知ってもらい、さらに団体同士の交流を図るため。

内容：・展示

- ・中継案内、記念事業係
- ・記録係

成果：・イベントが滞りなく進められるよう運営に貢献出来た。

- ・市民活動団体の方々やお客さんと交流することが出来た。
- ・若い世代にボランティアへ興味を持ってもらう目標があったが、達成できなかった。もっと働きかける活動ができたのではないだろうか。

### 3:活動記録と会計報告

#### (1)活動記録

井上 知美

	日時	場所	活動内容	出席者
1	2016年6月2日 11:00~11:20	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	顔合わせ、構想発表の打ち合わせ	塚本、井上
2	2016年6月29日 15:00~16:00	水戸市役所三の丸臨時 庁舎3階会議室	水戸まちなかフェスティバル 第1回イベント部会	井上、山口
3	2016年7月20日 14:00~15:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	第1回こみっとフェスティバル 実行委員会	小野瀬、佐藤、塚本 井上、山口
4	2016年7月31日 12:30~16:00	水戸市国際交流センター	「第3回小中学生英語スピー チ大会」ボランティア	佐藤、井上
5	2016年8月21日 9:00~16:00	県立歴史館	「歴史館まつり」ボランティア	佐藤、塚本、鈴木
6	2016年8月24日 14:00~16:00	水戸市役所本庁舎前 プレハブ会議室	第2回こみっとフェスティバル 実行委員会	小野瀬、佐藤、塚本 鈴木
7	2016年8月25日 13:30~15:30	介護老人保健施設 ナーシングホーム かたくり	老人ホームでのボランティア 活動	小野瀬、塚本、山口
8	2016年8月31日 8:30~17:15	水戸市役所市民生活課	インターンシップ	小野瀬、塚本、鈴木
9	2016年9月3日 12:00~13:00	茨城保健生協組合員ホ ール	「こども食堂(にこにこ食堂)」 ボランティア	小野瀬、佐藤、山口
10	2016年9月12日 8:30~17:15	水戸市役所市民生活課	インターンシップ	佐藤、井上、山口
11	2016年9月13日 8:30~17:15	水戸市役所市民生活課	インターンシップ	佐藤、井上、山口
12	2016年9月25日 8:00~17:00	泉町会館前	第5回水戸まちなかフェステ ィバル	小野瀬、佐藤、塚本 井上、鈴木
13	2016年9月28日 14:00~15:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	第3回こみっとフェスティバル 実行委員会	佐藤、塚本
14	2016年10月26日 14:00~15:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	第4回こみっとフェスティバ ル実行委員会	佐藤、塚本

15	2016年10月27日 8:55~9:15	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	フリーペーパーについて打ち 合わせ	佐藤、塚本
16	2016年11月7日 10:00~10:40	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	フリーペーパーについて打ち 合わせ	佐藤
17	2016年11月12日 8:30~18:00	人文講義棟23番教室	茨苑祭(折り紙)	小野瀬、佐藤、塚本 鈴木、山口
18	2016年11月13日 8:30~18:00	人文講義棟23番教室	茨苑祭(カプラ)	小野瀬、佐藤、塚本 井上、鈴木、山口
19	2016年11月16日 14:00~15:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	第5回こみっとフェスティバ ル実行委員会	小野瀬、佐藤、塚本 鈴木
20	2016年12月21日 14:00~15:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	第6回こみっとフェスティバ ル実行委員会	小野瀬、佐藤、塚本
21	2016年1月25日 14:00~16:00	水戸市役所本庁舎東側 臨時庁舎会議室	第7回こみっとフェスティバ ル実行委員会	小野瀬、佐藤、塚本 鈴木
22	2017年2月25日 8:00~17:00	イオンモール水戸内原	こみっとフェスティバル2017	小野瀬、佐藤、塚本 井上、鈴木、山口

(2)会計報告

塚本 莉沙

品名	単価	数量	合計
のりパネ	1,000	6	6,000
ポスカ 中字丸芯 8色セット	1,728	2	3,456
ハイマッキー 8色セット	1,296	2	2,586
普通紙	400	1	400
養生テープ	478	2	956
インクタンク	4,000	2	8,000
透明ゴミ袋	168	1	168
茨苑祭負担金	4,676	1	4,676
スケッチブック A4	324	1	324
SDメモリーカード	1,300	1	1,300
		総計	27,866

## 4:活動トピック

チーム一同

- (1)水戸まちなかフェスティバル 2016年9月25日(日)開催  
<http://www.facebook.com/mitofes>

### ①イベント内容

「水戸まちなかフェスティバル」とは今年度で5回目の開催となるイベントである。水戸市中心市街地の一部を歩行者天国とし、そこで様々な団体がイベントを催した。私たちは泉町二丁目商店街振興組合・宮本紘太郎様からお声掛けいただき、泉町二丁目商店街振興組合様、いばらきワイン産業連絡協議会様、水戸農業高等学校様とともに泉町二丁目商店街振興組合様の区画を一部お借りし出店した。当日のこみっとフェスティバルチームの出店内容としては、石に絵を描くお絵かき体験と、手作り小物の販売を行なった。お絵かき体験とは、一つの石につき100円の参加料をいただき、その石に自由に絵を描いたりシールを貼ったりしてオリジナルの置物を作るといったものである。(図1・2)



図1:お絵かき体験の受付



図2:手作り小物の販売風景

### ②活動内容

今回のこみっとフェスティバルチームの出店目的は二つある。一つ目は私たちのチームのピーク行事であるこみっとフェスティバルの周知のためである。二つ目は活動資金を調達するためである。この資金は茨城大学の学生に水戸市の市民活動団体について知ってもらうためのパンフレットを制作する際に使用した。これからこの目的のために行った活動について述べていく。

#### a : こみっとフェスティバルの周知

まず一つ目のこみっとフェスティバルの周知活動についてある。私たちこみっとフェスティバルチームは昨年同イベントに出店した(図3)。その出展内容はバルーンアートである。こみっとフェスティバルの周知を目的に、ターゲットを親子連れに定めておこなった。企画は大変ご好評をいただき、水戸まちなかフェスティバルの終了時間より約2時間早く終了してしまうほどであった。しかしその一方で、バルーンアートの説明や運営に手一杯になってしまい目的のこみっとフェスティバルの周知が疎かになってしまった、という反省点が挙げられた。そこで、今年は作品を持ち帰る袋に予め、こみっとフェスティバル宣伝のチラシ(図4)を入れておくことと、石に飾るシールの中にこみっとフェスティバルのロゴが書かれたものを入れておくことで家に帰ってからも宣伝効果があるような対策をした。



図 3: 集合写真



図 4: 宣伝チラシ

b : 活動資金の調達—パンフレット

次に二つ目の活動資金の調達についてだ。水戸まちなかフェスティバルを通して十分な活動資金を得ることができた。そこで茨城大学の学生を対象としたパンフレットを作成した。「水戸市にあるボランティア団体を知らない」という茨城大学の学生の声からスタートし、水戸市で活躍する市民活動団体にどのようなものがあるのか、ボランティアについて何も知らない初心者のための三つ折りパンフレットを作成した(図5・6)。



図 5: パンフレット(表面)



図 6: パンフレット(裏面)



## (2) 茨苑祭

体験ブースを設け、連鶴・折り紙体験（図7）とカプラ（積み木）体験（図8）のワークショップを開き、来場者にチラシとフリーペーパーを配布して、こみっとフェスティバルの宣伝を行った。



図7:連鶴体験



図8:連鶴体験

## (3) こみっとフェスティバル 2017年2月25日(土) 開催

「こみっとフェスティバル」とは今年度で開催5回目を迎えるイベントである。「つなげよう 広げよう こみっとの輪 ～ボランティアをわかってください。あなたのために！～」をスローガンに、イオンモール水戸内原で開催された。市民の方々に、水戸市内で活動するNPO・ボランティア団体などの市民活動団体を知ってもらい、ボランティアの輪を広げていくことを目的としている。またこの機に団体同士の交流を図り、より活発的な活動を広げていくことを目指している。

### ① イベント内容

1階メインコートはステージ発表コーナー（図9）で、市民活動団体による演奏会などの発表、高校生によるダンス等が行われた。

2階ブリッジには中継案内所と物販コーナー。ここは1階メインコートと2階イオンホールをつなぐ役割をもつ。市民活動団体による物販も行われた。

2階イオンホールは手作り品や物産品を販売する物販コーナー、カプラやおもちゃ作りができる体験コーナー、市民活動団体との相談・交流・展示コーナーの三つに分かれる。（図10）

また、会場内の3か所に設置されたスタンプを集めると「みとちゃんバッジ」がもらえるスタンプラリーや、今回でイベントが5回目という節目に当たるために企画された、これからのボランティア活動への目標やこみっとフェスティバルに参加した感想などについて、5年後の自分や仲間へ向けたメッセージを書いてもらう記念事業タイムカプセルも実施された。（図11～13）



図9:1階メインコート



図10:2階イオンホール



図 11:スタンプラリーに参加する親子

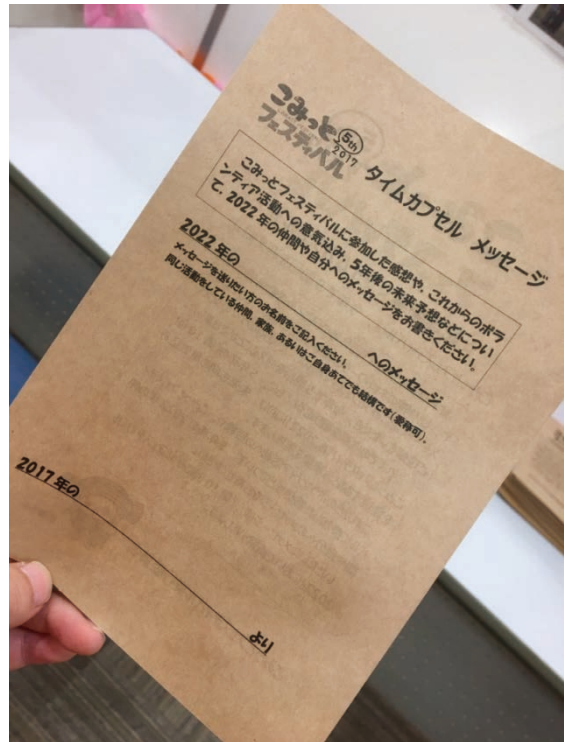


図 12:タイムカプセルメッセージ記入用紙



図 13:5年間のあゆみ展示

## ②活動内容

私たちは、こみっとフェスティバルの運営に実行委員として携わることで、イベントの成功に向けて様々な取り組みをしてきた。ここからは、その活動の主たる部分を抜粋して詳しく述べていく。

### a : こみっとフェスティバル実行委員会会議

開催に向けて、毎月開かれる実行委員会会議に出席した。実行委員は、委員として参加希望のあった市内のNPO・ボランティア団体から、活動分野のバランスを考慮して選出された団体と、運営事務局である水戸市市民生活課とで構成されている。当日までの企画・運営を考えていく中で、実行委員のなかで「ステージ発表」「相談・交流・物販・体験」「広報」の三つの分科会を結成し、私たちは広報分科会のリーダーを務めた。分科会リーダーとしての主な活動は、毎回、分科会で話し合った内容を全体会議で発表し、各分科会同士の情報共有を図るものであった。また、広報分科会として、ラジオ・テレビでの宣伝活動にも取り組んだ。

### b : PR 活動

広報分科会として、他の実行委員の皆さまにもご協力いただきながら、テレビ・ラジオに出演し、こみっとフェスティバルのPR活動を行った。

【テレビ】2月22日(水)NHK 県域デジタル「いばっチャオ！」

出演：小野瀬、佐藤、塚本、鈴木、山口

【ラジオ】2月7日(火)茨城放送「磯山純の Love yourself」

出演：小野瀬、山口

2月18日(土)FM ばるるん「ほっと！HOT！スクウェア」

出演：佐藤、井上

2月13日(月)茨城放送「HAPPYパンチ！」 出演：小野瀬

2月17日(金)FM ばるるん「週刊ミトノート」 出演：塚本、鈴木

### c : 映像企画

こみっとフェスティバルでは、私たちこみフェスチームの展示企画として学生のボランティア経験者にインタビューをした映像作品を作成し、当日放映した。映像を作成するにあたって、取材班と編集班に分かれた。取材班は取材可能な方に交渉し、インタビューを随時行なった。1月12日（木）に映像作品の出展を決定し、2月13日以降の映像編集の開始を目指し、計18名の茨大生に取材を行った。

#### 【取材スケジュール】

- 1月17日（火）個人的にボランティア活動をしている方 3年 2名
- 1月18日（水）個人的にボランティア活動をしている方 4年 1名
- 1月23日（月）赤十字奉仕団 2年 2名  
茨城大学東北ボランティア Fleur 1年・2年 2名
- 1月24日（火）個人的にボランティア活動をしている方 4年 1名
- 1月27日（金）児童文化研究会 1年 2名
- 1月30日（月）集中曝涼ボランティアをした方 3年 2名
- 2月1日（水）集中曝涼ボランティアをした方 3年 3名
- 2月2日（木）茨城史料ネット 院生2年 2名
- 2月9日（木）個人的にボランティア活動をしている方 1名

取材に協力してくださった方々のボランティア活動の内容は、子ども、町づくり、災害、福祉、歴史、教育支援、健康、復興支援など、様々である。取材交渉の際に質問内容や注意事項の事前通知を行った。質問内容としては、「どんなボランティア活動を行っているか」「ボランティアをするきっかけ」「ボランティアを行う前と後で変化したこと」「ボランティアをしたことがない人へ向けてメッセージ」の4項目。

編集班は取材班が撮影した映像を質問内容ごとに分け、必要な部分を編集した。また映像の最後には、当日ボランティアとして協力してくれるプロジェクト実習他チームのさとみ・あいチームと合同でダンス練習を行なった際の「みとちゃんダンス」の映像をつけて編集した。

### d : こみっとフェスティバル当日

イオンホールの展示、中継案内係、記録係に2人ずつ分かれてローテーション方式で、イベントの運営に関わる活動を行った。

#### 【イオンホールの展示】

活動報告会で使用したパネルを展示し、来場者へ自分たちの活動を説明した。テレビでは映像作品を流した（図14）。また、画用紙に1階メインコートのステージ発表の進行状況を書くことで離れた場所でもステージの状況がわかるよう工夫した。

図 14: イオンホール展示



#### 【中継案内係】

お客さんへパンフレットを配布し、声をかけることでイオンホールへの誘導を行った。私たちの中継案内所（図15）はスタンプラリーのスタンプ設置場所でもあったため、お客さんとのコミュニケーション

を取った。また、1階メインコートのステージ発表のタイムスケジュールを書いたパネルを作製し、今ステージで何が行われているのかわかりやすいよう工夫した（図16）。実際にお客さんからわかりやすいとの声もいただき、パネルは成功であった。

【記録係】

イオンホールやブリッジを撮影する人、ステージ発表を撮影する人に分け、交代しながら写真を撮った。



図 15:2 階ブリッジ中継案内所



図 16:タイムスケジュールパネル

## 「社会人」を学ぶインターンシップ

水戸市役所 市民生活課 協働係

2016年9月12日～13日

佐藤 李咲（3年）



### 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

私は、昨年度もプロジェクト実習を履修し、今年度と同様のプロジェクトを一年間かけて取り組んだ。その中で、リーダーという役割を引き受け、外部の方々との打ち合わせやプレゼンといった、貴重な機会を何度も経験し、もっと自分自身のスキルをアップさせていきたいと感じ、今年度も履修することを決めた。

また、私は将来、地域に深く関わって行けるような仕事に就きたいと考えており、その点において、インターンシップに参加することで行政の地域に対する関わり方や、水戸市の現状等を知ることができると思ったことも、プロジェクト実習 D を履修したきっかけとなった。

### 2. プロジェクトの概要と担当

私が取り組んでいるプロジェクトは、「こみっとフェスティバル」というイベントの成功を目指したものである。こみっとフェスティバルとは、水戸市で活動している NPO やボランティア団体といった市民活動団体が集まり自分たちの活動を紹介するイベントで、市民活動団体の存在を知ってもらい利用を促進すること、市民活動団体間での交流を促すこと、の二つを大きな目標として開催される。私たちのチームは、こみっとフェスティバルの実行委員会に入り、様々な広報活動や当日の運営に携わっている。

私はチームの中でリーダーを担当している。昨年度もこのプロジェクトでリーダーを担当し、チームをまとめることのむずかしさを感じたと共に、やりがいも感じた。昨年度活動して得た経験を、今年度のチームにもしっかりと伝えていくことがリーダーだった私の役割だと思ったので、再びリーダーを引き受けることにした。

### 3. 派遣先の概要

派遣先の市民生活課は、水戸市役所の市民協働部の中の一つの課で、私はその中の協働係でインターンシップをさせていただいた。協働係は、市民との協働の推進にかかる企画調整や、NPO・ボランティア政策の企画調整に関することを主な業務としている。私たちがプロジェクトとして取り組んでいる「こみっとフェスティバル」も、協働係が主となっている。月一回行なわれるこみっとフェスティバル実行委員会では、市民活動団体と行政が協働して会議を進めている。

### 4. 派遣先での活動内容

一日目は、まず水戸市の協働事業について資料を用いながら、水戸市の取り組みを説明していただいた。その後、プロジェクト関連の打ち合わせや、広報活動として参加する「水戸まちなかフェスティバル」において配布するチラシの作製を行なった。午後には、三の丸臨時庁舎に設置してある「市民活動情報コーナー」というパンフレットやチラシを置くスペースを改善したい、ということで、現地調査をし、イメージをつかんだところで市民生活課に戻って、案内等を作成した。

二日目は、一日目で作成した市民活動情報コーナー用の作成物を実際に三の丸臨時庁舎へ行って設置し、整備をした(図1)。その後は、市民生活課へ戻り、こみっとフェスティバル第三回実行委員会の資料作成や、市民活動調査のとりまとめ・集計表作成などといった事務作業を中心に行なった。

### 5. エピソード

一日目のプロジェクト関連の打ち合わせの中で、こみっとフェスティバルのチラシデザインの作成を担当して下さる市民活動団体の方との打ち合わせに同席させていただいたのだが、打ち合わせ終了後に、市役所の担当の方が「メールや電話だとどうしても表情が見えないから、なるべくこうやって顔を合わせる事が大切で、そうすることでいい関係を築ける」という事を話してくれたことが印象に残っている。協働係という、市民の方と関わる事が多い仕事場だからこそ、社会人としての心がけの部分を知ることが出来て、これからの私たちの活動にも役に立つと感じ、意識していきたいと思った。

### 6. わかったこと、学んだこと

私は今回のインターンシップが二度目の経験となったが、前は市役所内の研修等を主に体験したのに対し、今回はより日常の事務作業を中心に体験させていただいて、より市役所の仕事というものを実感することが出来た。また、エピソードに書いたような、行政と市民が協働していく上での工夫や、仕事をしていく上で気をつけることなどを、作業の合間等にも色々と話していただいて、とてもためになることが多かった。

### 7. 後輩へのアドバイス

私は、今回インターンシップを経験してみて、社会人の働く立場からのアドバイスや体験談など、普段の大学生活のなかではなかなか聞けない話もたくさん聞かせていただくことができました。それは、将来何の職業に就くことになっても、必ず生きてくる経験だと思います。是非、インターンシップに積極的に参加してみると、自分の就きたい職うんぬんに関わらず得られるものがあると思います。将来に悩んでいる人や、反対に明確なビジョンを持っている人も含め、一度インターンシップに行ってみると自分の視野や考え方を広げてみてはどうでしょうか。自分の新たな一面や、大学生活では得られない刺激を感じることができますよ。



図：市民活動コーナー整備時の集合写真

## 市民活動団体の重要性を知る

水戸市役所 市民生活課 協働係

2016年8月31日

鈴木 千尋 (2年)



### 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

もともと地域との連携で活動しているプロジェクト活動に興味があった。2年になって初めてプロジェクト実習という授業を受け、地域活動のサポートだけでなく、自分の弱点や潜在能力を見つけたいと思った。特にプロジェクト実習Dのこみっとフェスティバルの運営は、行政という大きな組織とどう関わっていくのか気になった。私は県外から人間なので、市民生活課の方々が市民の生活を具体的にどのようにサポートしているのかを知り、学生であり市民である私たちができることを考えたいと思った。

### 2. プロジェクトの概要と担当

私が取り組むプロジェクトは「こみっとフェスティバル」を成功させるために、大きなイベントを通して宣伝などの広報を行っている。これまでの活動では、水戸市の市民活動団体に関するアンケートを茨城大学の学生 294 名に行った。他には月一回行われるこみっとフェスティバル実行委員会会議で、こみっとフェスティバルの企画内容、参加団体に関する話し合いに参加させていただいている。こみっとフェスティバルの広報をさせていただくうえで、市民活動団体の実態を知るために夏休みに参加させていただいた。この後は水戸まちなかフェスティバルや茨苑祭での宣伝活動のためのチラシづくりや、今回初めて行うフリーペーパーの配布を行う予定である。

私はチームの中で副リーダーを担当している。今回チームに所属するうえでチームリーダーをサポートする役割である。今回初めてプロジェクトに所属してリーダーの責任の大きさを傍から見て、自分にできることは何かを常に考える習慣が身についてきたように思う。

### 3. 派遣先の概要

水戸市市民生活課は、市民協働部の中の一つの課で、主に地域コミュニティや地縁団体、市民との協働事業など市民の生活に携わる業務を担っている。今回お世話になった協働係では、市民生活団体との協働事業を行う際の調整や、私たちチームが関わっている「こみっとフェスティバル」のようなボランティア団体・NPO 団体との協働のイベントの企画に携わっている。水戸市では市民と行政との協働都市宣言を掲げており、市民生活課はその中心となる。

### 4. 派遣先での活動内容

前日 30 日は、台風の影響で中止となり、31 日のみ行うこととなった。場所は東日本大震災の影響により甚大な被害を受けた本庁舎の代わりである、臨時庁舎で行われた。

先ず担当の橋崎様から、水戸市の概要として名前の由来や歴史、未来の方向性について学んだ。水戸市は市民と行政との協働都市宣言をしており、これからは市民と行政が協力してまちづくりを行うことが必要になるという。次に、水戸まちなかフェスで配るタイプと、PDF に載せるタイプのコミフェスのチラシを作成した。昼食後、総合教育研究所で協働事業団体の Play\_Park310 さんや生涯学習課、公園緑地課の方々の打ち合わせに同席させていただいた。本部に戻ってからはチラシ作りの続きを行い、作業終了後、市民生活課の方々にご挨拶して終了した。

### 5. エピソード

昼食後に行われた協働事業団体の Play\_Park310 さんとの打ち合わせは、わくわくプロジェクトという、市の課題を市民活動団体との協働でまちづくりを行うための先駆けの事業の一環に関するものである。主に生涯学習課と公園緑地課の方が合同で行っているのだが、7月31日に双葉台公園で子供たちが自然と触れ合える機会を作ったところ、多くの人が車で来たため、駐車場の問題に関して市民生活課との協力も必要になった。駐車場の貸し借りにもルールがあり、人情だけでは済まされない、きわめて判断が難しいものだとわかった。役所の手続きの複雑さを知ってはいたが、今回初めて行政の視点を体験することができた。

### 6. わかったこと、学んだこと

今回全体を通して学んだことは「ボランティア団体や NPO 法人などは、市民の人々にとってどういう位置にあるべきか」ということだ。始めの橋崎様からの説明の中で、「現在は行政だけではまかなうことのできないサービスが増えているため、市民活動団体の方々と協力していくことが必要になる」というお話を聞いて、この理念をすてきに思ったと同時に、この理念を知る市民の方々はどれほどいるのだろうかと思った。協働係と市民活動団体との密接な交流に、市民活動団体の重要性を感じた。また今回のインターンシップを通して市役所のイメージが変わった。デスクワークはもちろんあるが、常に電話が鳴っている状態で、相手は市役所内部からと市民の半々だという。どちらに関しても丁寧に受け答えをしているのが印象的だった。市民生活課は市民活動団体との打ち合わせが多く、わくわくプロジェクトでは、他の部署との合同での打ち合わせが多いことがわかった。

「市民の人々にとっての市民活動団体の存在」「こみフェスのどこをアプローチするか」「市民生活課の具体的な仕事内容から市民活動団体の重要性」が見え、こみフェスが市民にとってどういう行事であつたらよいかを考えるきっかけになった。

### 7. 後輩へのアドバイス

今回参加させていただいて、市役所のイメージが良い意味で変わりました。私たち市民が知らない光景がたくさん見られると思います。行政の立場を体感することで、これまでの市役所との関わりが全く異なって見えるはずです。そこから学生や市民としてどう活動することができるか考えてプロジェクトにも生かしてほしいと思います。またインターンシップは、社会人としてのマナーの重要性をととても感じました。自分の視野を広げ、潜在能力を引き出す良い機会になると思います。



## 体験することの大切さ

水戸市役所 市民協働部 市民生活課

2016年9月12日～13日

井上 知美（2年）



### 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

プロジェクト実習への参加を決めた動機は、学生の時に市民と関わる活動がしたいと考えたからです。「こみっとフェスティバル」（以下「こみフェス」）プロジェクトでは、イベントの運営に携わることを通して市民の方々との関りがもてると考え希望しました。また、私は将来市役所職員として働きたいと考えています。このプロジェクトでは市役所でのインターンシップが経験できることも、選んだ理由の一つです。2日間と短い期間ではありますが、実際に市役所の業務を経験し、職場の雰囲気や職員の方の働く姿を近くで見ることで、今後の進路選択に活かしていきたいと考えました。

### 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは、水戸市で開催される「こみフェス」の成功に向けて、実行委員としてその運営に関わり、学生の視点を活かして「こみフェス」をより良いものにすることが目的です。水戸市の他のイベントや茨城大学内でも「こみフェス」の宣伝を行い、イベントや水戸市で活動するNPO、ボランティア団体の存在の認知を広げます。

「こみフェス」とは、水戸市内で活動するNPOやボランティア団体などの市民活動団体が、自らの活動情報を展示・発表、相談・体験をすることにより、市民に協働の意識を醸成し、活動への参加を促すほか、市民活動団体間の横のつながりの構築を図ることが目的のイベントです。

### 3. 派遣先の概要

水戸市役所市民協働部は市民生活課、地域安全課、文化交流課、文化交流課新市民会館整備係、スポーツ課、体育施設整備課、男女平等参画課、市民課の7つの課にわかれています。そのなかで私たちは市民生活課に2日間派遣されました。市民生活課はさらに地域コミュニティ、地縁団体、消費生活などの業務を行う市民活動・消費生活係、市民センターなどに関する業務を行う施設係、市民との協働の推進などに関する業務を行う協働係の3つの係にわかれています。



図：市民活動コーナーにて

### 4. 派遣先での活動内容

1日目の午前、水戸市の協働事業について説明をしていただきました。そのあとは、「こみフェス」ちらしデザインについて、市民の方と市役所職員方の打ち合わせに参加させていただきました。打ち合わせのあとは、私たちが参加し「こみっとフェスティバル」の宣伝を行う「みとまちなかフェスティバル」で配るちらしを作成しました。午後は、三の丸臨時庁舎に設置されている市民活動情報コーナーをより良くするための現地調査を行いました。現地調査でみえた改善点をメンバーと話し合い、市民活動情報コーナーの案内を作りました。2日目は、午前は Word で次回の「こみフェス」実行委員会で配布する資料の作成、午後は県内のほかの市や他県に行った市民活動調査のとりまとめを行いました。

### 5. エピソード

1日目に市民の方との打ち合わせに参加させていただいた際に、職員の方に「相手との距離感が大切」と教えていただきました。今回は、市役所側が市民の方に依頼をした件についての打ち合わせだったのですが、相手が言いたいことを言える雰囲気をつくるのが大切だとおっしゃっていました。電話やメールでのやり取りが多く、相手と直接会って、電話やメールではわからない相手の表情を見て話すことができる機会は貴重です。そんななかで初めて会う相手との距離感を図りながら、失礼のないように、相手も主張できる雰囲気をつくることは難しいと思いました。

1・2日目にちらしや資料を作成した際には、職員の方から何度もご指摘をいただきました。市役所の名前で資料を作成する以上、情報や文字に間違いがあってははいけません。また、誰が読んでもわかりやすい表現・構成が求められます。私が作成した資料には誤字が多く、時間もかかってしまい、パソコンのスキルや短時間で正確に物事をこなす能力が欠けているとわかりました。

### 6. わかったこと、学んだこと

市役所でのインターンシップは二度目ですが事務仕事をさせていただいたことは初めてだった為、普段の市役所職員の仕事を体験できたことはとても貴重な経験となりました。また、市役所職員は市民の方と触れ合うことの多い職業です。今回はその難しさも感じました。

短い期間でしたが、実際に市役所で職場の雰囲気や職員の方が働く姿を見られたことは、今後の進路選択の上で良い経験となりました。インターンシップを通して、市役所職員になりたいという気持ちは高まりました。

### 7. 後輩へのアドバイス

インターンシップにはぜひ参加してほしいと思います。実際に見て体験をすることは、これから自分の将来を考える上で非常に役立つと思います。また、2年生から参加することもお勧めします。

プロジェクト実習 D のインターンシップの特徴は、グループでインターンシップに参加することだと思います。私は、私を含め三人で派遣されました。ちらしや市民活動情報コーナーの改善をする際にはメンバーとアイデアを出し合いながら、時には役割分担をして作業を行いました。出来上がりを見て、これは私一人では絶対に作成することはできなかったと思った時、グループでこのインターンシップに参加できてよかったと感じました。また、仲間が周りにいることで緊張も和らぎます。プロジェクト実習 D のインターンシップは比較的参加しやすいのではないかと思います。

# 見えていたつもりのものが見えた

水戸市役所市民生活課

2016年8月30日

小野瀬 莉央 (3年)



## 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

昨年、2年生の時にプロジェクト実習 D を履修し、プロジェクトの進め方や外部の方とのメールマナーなど大学生活を送る中ではなかなか学ぶことのできないことを学ぶことが出来たと感じた。これは社会に出てからも大切になる能力だと思われるためさらに伸ばすために今年度も履修しようと思った。また昨年度、ご意見番となる先輩の存在が活動を進める中でとても大きく支えとなっていたため、今年度は私とその立場に立ちチームを支えたいと思ったことも動機の一つである。

## 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトはこみっとフェスティバルを成功させることが最も大きな目標である。こみっとフェスティバルとは水戸市で活躍する市民活動団体が集まるイベントのことで、市民と市民活動団体のつながり、市民活動団体同士のつながり等のつながりを作り太くすることを目的としている。具体的な内容としてはこみっとフェスティバルの宣伝、ボランティア団体をはじめとする市民活動団体の周知が挙げられる。

チーム内での担当は書記を務めている。昨年度は副リーダーとしてチームの進む先のことを主に考えていたが今年度は書記としてチームの中の流れを記録し、内部の意見をよく汲み取るように心がけている。

## 3. 派遣先の概要

市民生活課は市民協働部に所属しており、他に地域安全課、文化交流課、スポーツ課、体育施設整備課、男女平等参画課、市民課がある。さらに市民生活課は市民活動・消費生活係、施設係、協働係の三つに分かれている。市民活動・消費生活係では地域コミュニティの推進や消費生活に関する業務をおこなっている。町内会など住んでいる地域を良くしようと動いている団体と協力してより良い水戸市を目指している。施設係は市内に32ヶ所ある市民センターの管理などをおこなっている。協働係では市民との協働の推進などをおこなっている。こみっとフェスティバルは協働係が中心となって進められている。

## 4. 派遣先での活動内容

本来は二日間行われる予定だったが台風の影響により交通機関が麻痺する事、市役所全体で台風に向けて

対策をしなければいけないことから1日目は中止となり、31日に1日だけおこなうこととなった。

活動内容としては主に水戸まちなかフェスティバルに向けてポスター作りをおこなった。お昼ごろには水戸市協働事業提案制度に採用された市民活動団体、公園緑地課、生涯学習課の方々との打ち合わせに同席させていただいた。

### 5. エピソード

1日目は台風のため中止となったが職員の方々は市役所に泊まり込み、土嚢の準備や電話の対応をしたと聞き、日常はもちろんだが災害が起こった時の非常事態でも市民の方々の生活を成り立たせるために市役所の仕事は不可欠なものなのだと改めて感じた。

2日目は協働事業団体の方と打合せをしたとき厳しい意見があったり他との兼ね合いで実現不可能な要求があったりして、市民の方々と距離が近いゆえに様々な意見を聞くことは出来るが実際には実現できないことも多く歯がゆい思いをすることが少なくないのだということを実感した。

### 6. わかったこと、学んだこと

昨年は実際に市役所の職員の方が受けている研修を受けたり水戸市協働事業提案制度に採用された事業が行われているところを見学させていただいたり今学んでいることや取り組んでいることがどのように活かされていくのかを学ぶことができたが今年には実際にどのように取り組み、どのように進めているのかについて学ぶことができた。特に協働事業団体の方との打合せをする際に学ぶことができた。こちらにこうしてほしいという要望があっても押し付けてはならず、意見を引きだししっかり聞くことが大切で、事業をおこなう人の心を大事にしなければならないという言葉が印象に残った。押し付けで事業をおこなっても事業をおこなう人の心がその事業を続けたいと思わなければたった1回きりで終わってしまうこともあり得るし負担ばかりを感じてしまう可能性もあるからだ。

市役所の仕事は誰にとっても必要なもので様々な意見が集まる。市民の方と距離が近い行政機関であるが故に多くの声を聞くことができるが中には調整が必要なもの、調整しても実現できないものがある。他と調整し必要があれば代替案を考え、提案してようやく事業を開始させることができる。私は将来、市民の方と距離が近い市役所で働き、市民の方の声を大切にしていきたいと思っている。しかし時には意見をいただいてもお断りしたり調整したりしなければいけないこともある。それは分かっているつもりになっていたことで実際にこれをするためにはとてつもない時間と労力を使うものなのだと痛感した。

### 7. 後輩へのアドバイス

インターンシップを経験することで職場の雰囲気や仕事とはどういうものか、またそれまで持っていた職業へのイメージとのギャップを感じることもできる。これらは就職活動をする上で重要な判断要素となるだろう。さらに、インターンシップを通して自分自身を見つめなおすこともできる。自分の短所・長所、今後の学生生活において伸ばすべきところなど気づくことは少なくないはずだ。もしインターンシップに挑戦するか悩んでいるのであればぜひ挑戦してほしいと思う。

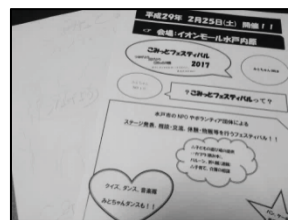


図: 宣伝チラシ

## インターンシップを終えて

水戸市役所市民生活課

2016年8月31日

塚本 莉沙 (3年)



### 1. プロジェクト実習D履修の動機

プロジェクト実習D履修の動機として2つある。私は昨年度もプロジェクト実習を履修し、座学の授業だけでは出来ないような事を経験できた。そのことは、私の中で大きな自信へとつながった。しかし、昨年を振り返ると反省点がある。昨年のチームは2年生が多く、手探り状態での活動だったため自分達で考えた独自の活動が出来なかったという反省が出てきた。そこで、今年は昨年できなかった自分達で独自の活動を考えプロジェクトをより良いものにしたいと思った。これがプロジェクト実習Dを履修した動機の1つである。

また2つ目に、単純に昨年度までの活動を引き継いで行いたいという思いがあったからである。積み上げてきた活動を1年間で終わらせるのは勿体無いとい気持ちがあった。そこで、今年も継続して行うことでより質の高い活動になると考え、そこで得られる経験も昨年とは違ったものになるのではないかと思った。こういった動機から今年もプロジェクト実習を履修したのである。

### 2. プロジェクトの概要と担当

私たちは、2月に行われる「こみっとフェスティバル」というイベントに向けて1年間活動をしている。こみっとフェスティバルとは、水戸市にあるNPOやボランティア団体が水戸市と協力して開催するイベントの事である。このイベントでは、NPOやボランティア団体の方がダンスや音楽等のステージ発表を行ったり、ケーキや手芸品等の物販やカプラや連鶴といった体験を行っている。また相談コーナー等も設けられている。イベントを開催する目的として団体同士の繋がりをつくったり、市民の方にNPOやボランティア団体の存在を知ってもらい活用してもらうことを目標に開催している。これらのことを踏まえ月に1回開催する実行委員会に参加したり、イベントを周知させていくことが私たちの主な活動となっている。

また、私はチームでの役割は会計と市役所の方との連絡係である。会計では周知活動の際に必要なものを買ったりする。また、連絡係は外部の方の関わりは多い私たちのチームでは、外部の方との連絡は1人に全て任せるのではなく分担している。

### 3. 派遣先の概要

「市民生活課」は、その課の中でも「市民活動・消費生活係」「施設係」「協働係」と3つの係に分かれている。

その中でも今回私がお世話になったのは「協働係」である。「協働係」は市民との協働の推進等を行っており、私たちの活動であるこみっとフェスティバルもこの協働系の業務の一環となっている。また、「市民活動・消費生活係」は、地域コミュニティや地縁団体、消費生活等を主な業務としてやおり、「施設係」は市民センター等を主な業務としてやっている。

### 4. 派遣先での活動内容

本来2日間のインターンシップであったが、1日目は台風のため中止となってしまったため1日だけとなってしまった。しかし、その1日はとても濃い内容の1日となった。活動内容として、午前中はガイダンスとして水戸市の概要や協働係事業についての説明をうけた。その後、9月25日に開催される水戸まちなかフェスティバルで配るこみっとフェスティバルの宣伝用のチラシを作成した。午後は、協働事業団体との打ち合わせを見学した。ここでは、「Play\_Park310」という団体の方と市役所の市民生活課、生涯学習課、公園緑地課の方が打ち合わせを行っていた。また、この打ち合わせの後はチラシ作りを行った。

### 5. エピソード

午前中のガイダンスでは、なぜ協働が必要なのか実感した。それにより、こみっとフェスティバルの開催の必要性を改めて理解することができ、より活動を充実させていきたいと思った。また、チラシづくりでは、どうすれば人の目に留まり読んでくれるかを1から考えながら作ることが難しかった。しかし、私はチラシ作りの経験がほとんどなかったため、よい経験となった。

午後の協働事業団体との打ち合わせでは、市の考えと市民団体との考えではギャップがあった。そのギャップをどういう風に埋めていくかが市に求められることだと感じた。

### 6. わかったこと、学んだこと

市役所の仕事のイメージというとデスクワークばかりということが真っ先に浮かんでくる。しかし、実際は市民の方との打ち合わせや台風への対応、また電話対応等も業務の一環となっている。課ごとに業務内容に違いはあれどもデスクワークだけではない、市に関わる多様な仕事を行っていることを肌で感じた。これは実際の現場に行かなければ知らなかったことだ。

1日だけのインターンシップになってしまったが、その1日からは学び取ることは多かった。市役所に就職することも考えるようになったことが今回インターンシップに行った大きな収穫である。

### 7. 後輩へのアドバイス

就きたい職業が決まっている人いない人どちらにも関わらず、インターンシップはいった方がいいと思う。実際にいって感じることもあると思うからである。私が実際にそうである。市役所に行ってそれまで持っていたイメージが変わった。もし、インターンシップに自分から応募するハードルが高いという人はプロジェクト実習Dを利用して行くことも1つの手段であると思う。インターンシップ以外にも1年を通して関わるので、また違った面を見られると思う。まずは、行動してみることが大切なのではないかと思います。

## 市役所 is 「縁の下の力持ち」

水戸市役所市民生活課

2016年9月12日～13日

山口 紗奈子 (2年)



### 1. プロジェクト実習 D 履修の動機

もともとボランティア活動に興味があり、プロジェクト実習の授業を通して様々なボランティア活動に参加できると思い、履修することを決めた。

また、市役所でのインターンに参加できることも魅力的であった。市役所という場で日々どのような仕事をしているのか知らなかったのが、将来の進路の一つとして公務員を考えている私にとって大変良い機会となった。

学生ならではの視点や発想でこれからの経験として活かしたいと思うのと同時に、自分の視野を広げたいと考え、プロジェクトに臨んだ。

### 2. プロジェクトの概要と担当

私たちのプロジェクトは水戸市内に存在するボランティア団体が主催する「水戸こみっとフェスティバル」において、市民の方々にもっとボランティアを知って、輪を広げてもらうということを目標に活動している。特に今年度は大学生にもっとボランティアに興味を持ってもらうことを艇にしているため、活動前と後で行うアンケート調査によって私たちの活動がどれだけ茨城大学の学生に広まったかを調査したいと考えている。私自身は書記係と兼ねて市民ボランティア団体の方々との連絡係を受け持っている。

### 3. 派遣先の概要

水戸市市民生活課は、市民活動団体とのかかわりが多い課を中心に配置される「協働推進員」の一つである。協働推進員の役割として、「①NPO やボランティア団体などの市民活動団体から、市と共同で提案があった時に最初の窓口となって受け付ける。②市から、市民活動団体への共同事業を呼びかける際に、窓口となる。③複数の課にまたがって共同事業に取り組む場合に、調整を行う。④協働マニュアル「協働おたすけナビ」について、課内で周知する。」を掲げた活動を行っている。

### 4. 派遣先での活動内容

1日目は水戸市役所の街づくりに関する方針や水戸市の共同事業について説明頂いた後、こみっとフェステ

ィバルのチラシデザインについて、市民の方との打ち合わせに参加した。その後は水戸まちなかフェスティバルで配布するこみフェスのチラシ作りと、市役所 Web サイトに記載するこみフェスの紹介ページを作成した。午後は三の丸臨時庁舎 1 階の市民活動情報コーナーを視察し、より市民の方が情報を得やすくするために置き場の改善点を調査し、この現地調査をもとに案内等の作成を行った。

2 日目は昨日の情報コーナーの案内作成の続きから行き、三の丸臨時庁舎の情報コーナーへ設置した。その後こみっとフェスティバル第 3 回実行委員会の準備として、こみフェスの広報を行うイベントの内訳とこみフェスでの各団体の参加希望分野の内訳を行い、資料を作成した。資料作りが終了後、水戸まちなかフェスティバルで配布予定のこみフェスのチラシを印刷し、その後は事務作業のお手伝い、ならびに水戸まちなかフェスティバルの準備をさせていただいた。

## 5. エピソード

1 日目午後に行った三の丸臨時庁舎 1 階の市民活動情報コーナーの展示を改善しようという活動が市役所の仕事だと知って驚いた。しかし出来上がった掲示を見て、小さなことでも気に掛けることで一人でも多くの方の目が掲示に行き、ボランティア団体と市民のつながりを結ぶことが出来るのだと思い、こうした小さな行動が市役所の取柄なのと思った。また、掲示を作る際に他の場所の展示の仕方を参考にした。市民生活課の橋崎さんは、より良いものを作るには一つの所のみでなく、いろいろなところを参考にして考えることを心掛けているとおっしゃっていた。

2 日目に行ったこみっとフェスティバルの委員会用資料作りでは、言葉の言い回しや、表示の仕方、必要最低限の情報など、資料を作るにあたっての必要事項を教えていただいた。多くの方に提示するため、誰が見ても理解しやすいような記載を心掛ける必要があり、過不足なく情報を載せる必要性を学んだ。

## 6. わかったこと、学んだこと

今回、実際に業務を経験してみて、普段何気なく過ごしている場にこそ市役所の人々の心掛けが存在するのだということを知った。こうした心掛けにより、私たちは様々な機会を提供され、コミュニティを広げられる、という意識を持つことが出来た。また、市民の方と直接会ってお話することでお互いの信頼を築き、より市民の声を受け取りやすくしている。間接的、直接的に市民の方のニーズに答えていくことでより良い街作りを行っていることを学んだ。

## 7. 後輩へのアドバイス

こうした機会を通して、自らの進路選択の一つとしてだけでなく、社会で働く人の例として、大変勉強となった。今まで学校というコミュニティに留まっていた私たちが社会で働き始めれば、知らない出来事や社会の常識というものが必ず生まれてくる。大学生のうちにこうした機会を得ることで、その世界で生きる大人たちにいろいろな助言を頂けるため、有意義な経験となると思う。「百聞は一見に如かず」。聞くだけでなく、自らの目で現場を見ることは将来を考えるうえで、大きな糧となる。「授業の機会」に行く程度の意識で十分なので 1 度行くことをお勧めします。

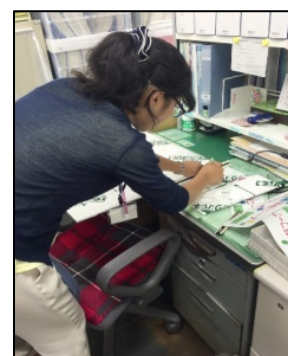


図: 仕事中の一コマ



5: 年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

### こみっとフェスティバル

メンバー: 佐藤李咲・塚本莉紗・小野瀬莉央  
鈴木千尋・井上知美・山口紗奈子

**活動概要**


私たちこみっとフェスティバルチームは、2017年2月25日に行われる「こみっとフェスティバル2017」の成功を目指して、水戸市役所・水戸市で活動されている市民活動団体の方々と協力して活動しています。

**1. ボランティア活動**

○概要  
本活動で市民活動団体の方と関わるにあたりまずは私たちがその現状を知るため、活動に参加させていただきました。

7月31日 第3回小中学生英語スピーチ大会 (茨城県世界青少年コミュニケーションクラブ)  
8月21日 歴史館まつり (水戸こどもの劇場)  
8月25日 老人ホームの訪問 (はつらつサークル)  
9月3日 子ども食堂 (にこにこ食堂) (茨城保険生活協同組合)

○結果  
市民活動団体の活動に参加することで理解を深め、様々な活動があることを知ることができました。またボランティア活動の現場を肌で感じることで、親子の交流の場となる・生活をより豊かにする等その役割を知ることができました。



**2. こみっとフェスティバルの周知**

○水戸まちなかフェスティバル  
日時: 9月25日(日) 10:00~16:00  
内容: 自然の物を用いた工作体験コーナー /物販/チラシ配布

○茨苑祭  
日時: 11月12日(土)、13日(日) 9:30~15:30  
1日目: 連鶴体験 (はつらつサークル様協力)  
2日目: カブラ (水戸こどもの劇場様協力)  
☆フリーペーパーの配布

○結果  
どちらも多くの方々に参加していただきこみっとフェスティバルの周知を進めることが出来ました。また市民活動団体・来場者・プロジェクト実習他チームらと交流する機会ともなり、有意義な活動となりました。

	来場者数
水戸まちなかフェスティバル (体験コーナー)	126人
茨苑祭	121人

**まとめ**

こみっとフェスティバルチームは結成して今年度で3年目となります。継続して取り組んできたことにより計画・日程調整等のノウハウを培い活動に活かすことができました。また、昨年の活動を冷静に分析し、どうすれば良かったのかをチームで徹底的に話し合っ今年度につなげることができました。しかしその一方で新しいことに挑戦する一歩がなかなか踏み出せなかったことが課題として挙げられます。最後に、2017年2月25日(土)内原イオンにてこみっとフェスティバルが開催されます。水戸市の市民活動団体について知ることのできるチャンスです。是非お越しください。

図 17: ポスターパネル(1/16 縮小)



図 18: 活動報告会での発表風景

## 6:最終レポート

### きっかけと成長

#### ーリーダーとして活動してー

茨城大学 3年 佐藤 李咲

私は、昨年度に引き続きこの授業を履修し、二年間チームリーダーとして活動した。昨年度は初めての事だらけで、どう進めたら上手くいくのか、終始不安を抱えながら活動していた。しかし今年度は年間通して落ち着いて、冷静に活動することができたと感じている。

とは言え、決して順風満帆な日々ではなかった。まず、お題提供者も担当教員も今年度から新しい担当者に変わり、プロジェクト自体は変わらないものの周りの環境はずいぶんと変化した。チームも新しくなった中で、私は昨年度の経験者+チームリーダーという二つの立場から、いかに昨年度の活動を相手に伝えながら今年度やりたいことをはっきり示せるか、という点で、非常に苦労した。新しく入ったチームメンバーに伝えるときと、市役所の担当の方々に相談するとき、また先生に報告するときとは、伝えたい内容が同じでも表現の仕方を変えなければ、相手に伝わる言葉にはならない。その点で、昨年度も一緒に活動した三年生の2人にずいぶんと助けられた。どこまで説明・連絡するべきか迷ったとき、的確な助言をくれて、そのおかげで私は何とかこの新しい環境の中でも、落ち着いて活動を進める事ができた。

活動は、夏休みに入った頃から本格的に動くことになった。ボランティア活動への参加や、水戸まちなかフェスティバルへの出店から始まり、フリーペーパー作成、茨城大学の文化祭である茨苑祭への参加、と、怒涛の日々を送ることになった。特に、水戸まちなかフェスティバルについては、ほぼ自分たちだけで当日の催しを立案し、準備を行なっただけに、苦労と達成感を味わうことができた。それぞれの予定が合わず、なかなか全員そろえることができない中で、手分けをして準備を進めたり、情報共有を徹底したりすることの大切さを改めて学んだ。当日には、たくさんの人に来てもらうことができ、関係者の方々からも「大成功だね」とお褒めの言葉をたくさんいただいたことで、頑張って準備してきたことが報われた喜びと、チームとして成長しているという実感が持て、その後の活動をより積極的に動かしていくきっ

かけになったと感じている。

私はこのプロジェクトを二年間続けてきて、人として大きく成長できたと思う。私は元々自ら進んで人前に出るタイプの人間ではなく、ましてや大人の中に交じって会議に出たりイベントを作り上げる側の立場になったりするなど、考えられなかった。大学に入る以前から親しくしている友人には、「そういったことやるタイプじゃないのに、なんで？」とまで言われた。しかし、だからこそ、私はこの授業を取ると決めたのだ。ただなんとなく流れていく生活が、もったいなく感じていた。そう感じるだけで、行動に移さない自分を、いい加減変えたい。そんな思いで昨年度受講し、リーダーを務めた。必死に活動していく中で、人とのつながりの温かさを知った。いつしか、苦労や不安は、やりがいと楽しみに変わっていたように思う。その経験を踏まえて今年度は、自分のためだけでなく、チーム全体の事、チームメンバーの事をもっと考えて行動しよう、と決めて活動してきた。中でも一番気をつけていたことは、相手のことを思いやるということだ。メンバー一人ひとりにはそれぞれの大学生活があり、その一部にプロジェクト実習があるにすぎない。過度な負担は、やる気を削いでしまうし、チーム全体の空気を壊す。グループ活動のいい所は、1人ではないということだ。無理だと思ったら、他の誰かを頼ればいい。そして、誰かがつらそうだったら、今度は自分が手を差し伸べればいい。そういった信頼関係を、私は常に意識して活動することができたと思う。

もしプロジェクト実習を受講していなかったら、私は今も、人前に出ることを避け、相手の都合など考えずに物事を進める人のままだったかもしれない。プロジェクト実習に出会って、様々な経験をして、自分を変えられることができた。今後の人生にも、この経験は必ず活きると思うし、活かしていきたいと思う。

最後に、今年度一緒に活動してくれたメンバー五人に感謝したい。支えてくれてありがとう。

## プロジェクト実習から得たこと

### — 自信と弱点を見つける —

茨城大学 2年 鈴木 千尋

私は今回プロジェクト実習を受講して、自分の長所・短所を意識しながらアクションを起こすことの重要性を学んだ。自分にできることやできないこと、得意なことや苦手なことを、活動や日常生活の中で意識するようにし、その時々状況から判断し、無理せず行動して活動に貢献するようにした。自分だけ大変に感じた時もあったし、自分だけ何もやっていないように感じる時もあったが、身体を壊すほどの過労にはならなかったのも、そこは良かったと思う。また、一人の行動がチーム全体や外部にまで影響を及ぼすことを何度も経験し、責任の大きさを感じた一年だった。性格上取り掛かるのに時間がかかるため、チームに迷惑をかけたことが多かったと思う。なかなか直せないのだが、プロジェクトの活動だけでなく、日常生活にも支障をきたすことなので、対策を考えなければならぬと思った。

チームの役割としては副リーダーを担当していた。リーダーを助け、チーム全体に気を配る役目だが、果たして上手くできたかという、できなかったと思う。スタッフとしてしか働けなかったと思う。原因としては、初めての活動で不慣れなことが多かったこと。そして自分のことで精一杯で全体を見る余裕がなかったことが挙げられる。実際のところ、副リーダーという立場の役割がよく分かっていないというものもある。これと断言できるものがリーダーやチームの「サポート」だと思う。いまだにこれといったものが見つからないが、今回の活動を通して、周りを気にかける余裕を持つために、自分の仕事以外にも目を向けることが副リーダーの役目の一つなのではないかと思った。自分が思う副リーダーを見つける必要があると思う。

今回の活動を通して自信を持つことができたものがあった。それはプレゼン発表である。プレゼン発表は一番苦手としていて、できればやりたくなくて、自分からは積極的にやることはなかった。活動報告会の発表でも副リーダーという立場のために引き受けることにした。

昨年の報告はなるべく上を向いて話すようにしていたと聞いて、暗記しないと駄目なのかと思い、暗記を頑張ろうとしたが、自分たちのプロジェクトの内容を聞く人が聞きたいと思うプレゼンとはどんなものだろうと思った。そこで、自分たちが作成したPPT(パワーポイント)をもう一度じっくり見返すことにした。そうすると、今までの活動の様子を思い出すうちに、やってきた活動に自信を持ち、それを伝えたいと思う気持ちが大事だと気が付いた。今までの私のプレゼンは自分の作ったものに自信がなかったといえる。このことが分かって、これからはチーム内での情報共有に積極的にかかわり、活動の全体像を把握できるようにしようと思った。報告会のプレゼンを経験して、とても緊張したし、人に分かりやすく伝えることの難しさを感じたが、苦手意識はなくなったように思う。今度は積極的に取り組みたい。

今回初めてプロジェクトに携わって、将来仕事をするときはこんな感じになるのかなと思った。チームメンバーそれぞれが仕事を抱え、自分のそのときの状況からメンバーの仕事を手伝う余裕があるかどうか判断し、チームで活動する以上、メンバーも自分の一部であることを忘れずに、責任を持って果たすことを実感した。自分の元々の性質を踏まえ、最低限の努力をしつつ、新たな挑戦をしていくことが今後の課題だろう。活動を通して、メンバーの活動の様子を見て、勉強になることがたくさんあり、自分の向上心が上がったのはメンバーのおかげである。自分ができないところはメンバーにやってもらうことも多くあり、とても助かった。ご一緒した先輩方や先生方、外部の方から教えていただいたことはたくさんあり、人との交流の楽しさを知ることができ、もっと関わっていきたくと思った。プロジェクト実習を自発的に受講して、自分の能力や協調性の重要性を知り、とても良かった。先輩方から教えていただいたことを忘れずに、新たなメンバーとのプロジェクトに取り組みたいと思っている。

## 人とのつながり

### こみフェスチームの一員として

茨城大学2年 井上知美

私は学生の間にたくさんの人と関わり様々な考え方を吸収したいと思い、市役所や市民の方々と関わる事ができるこのプロジェクトを選んだ。1年間こみフェスチームの一員として、様々な活動を通してたくさんの人と関わる事ができた。

夏休みに参加した水戸市役所でのインターンシップでは、市役所の方と市民活動団体の方との打ち合わせに同席させていただき、社会人としての相手との関わり方やマナーを学んだ。インターンシップの中で特に印象に残っている活動は、市役所内に設置されている市民活動情報コーナーの整備をしたことである。私たちこみフェスチームもこみっとフェスティバル宣伝のチラシ作りを経験している。載せる情報からデザインまで、どうすれば見た人に内容が伝わりやすいか、興味を持ってもらえるかなどいろいろ考えて作成した。そんな市民の方々が思いを込めて作ったチラシを置く場所だから、どうすれば多くの人にこのコーナーを見てもらえるか、手に取ってもらえるか考えて整備をした。この考え方は、このプロジェクトでチラシ作成の経験をしたから、そして市民の方々と関わりがあったからこそだろう。

9月にはこみっとフェスティバルの宣伝を目的に「水戸まちなかフェスティバル」に参加した。このイベントでは私たちが一から企画を考え、スペースをお借りして出店した。泉町二丁目商店街振興組合の宮本様にはビジネスの視点からアドバイスをいただきとても勉強になった。このイベントでの成功は、このこみっとフェスティバルのプロジェクトが結成3年目であること、そして今年度のグループに昨年もこのプロジェクトに参加していた3年生がいたことも大きかったと思う。スケジュールの組み立て、昨年の反省点から企画内容や宣伝方法の見直しなど先輩方がいたからこそ成功だった。この点でこみフェスチームは恵まれていた。

そして、2月のこみっとフェスティバル。私たちはお客様を会場へ案内する役割だった。このイベントは団体間の横のつながりを作ることも目的としている。せっか

くなら私ももっと出展団体の方々とコミュニケーションを取り、学生の活動をアピールすることができればよかった。

1年間を振り返って、反省点も多くある。私はプロジェクトの始めに「個人の目標達成ルーブリック」で『物事に進んで取り組む力』と『自分の意見をわかりやすく伝える力』を育成することを目標とした。しかし、この2つの力は1年前と大して変えることができなかったと感じている。前述のように、私にとってこみフェスチームは恵まれたチームだった。そして私はそのことに甘えすぎていたと思う。3年生について頼ってしまい、自分から行動することができなかったことを反省している。自分の意見をわかりやすく伝える力は、先進地実地研修で人のプレゼンを客観的に評価したことはとても勉強になったが、自分のものにするにはまだまだだった。この力はグループ活動を行う上でも必要だった。

1年間こみフェスチームとして活動して、たくさんの方々と関わり、ボランティアやイベント運営について学ぶことができた。また、プレゼンの方法や社会人のマナーを教えてくれた、受講しなければ経験することができなかった多くの体験をさせてくれたこの授業には感謝している。



図:こみっとフェスティバルの展示

## 2年目の学び

### —昨年度と比較して—

茨城大学 3年 小野瀬 莉央

私にとって今年度のプロジェクト実習は2年目となる。昨年度、何か新しいことに挑戦したいと思い履修したこの授業。今年度は昨年の反省点を活かし行動すること、そして昨年ご意見番という立場から私たちを見守ってくださった先輩の立場を引き継ぐことを目標に履修を決めた。

一年を振り返ってみて、目標は大方達成できたのではないかと思う。まず一つ目の目標である昨年の反省をもとに改善できたことの一つとして茨苑祭のチラシが挙げられる。昨年はチラシを見てもらうことに重きを置いて情報量を多くしてしまったが、今年は来てもらうことに重きを置いて作成した。2案提示してメンバーに選んでもらうなど相談しながら進めることができた。するとわずかではあるが昨年より来場者数が増えた。準備日が雨だと当日の来場者数が減ると言われている中で天候の悪条件にも関わらず増加したということは効果があったということだろう。人々に何かを伝えるときは伝えたいことを絞ること、そしていくつか案を出してそこから意見を聞いたほうがより具体的な改善案を得られるということを学んだ。さらに昨年度は見えていなかったことを発見して活動に反映させることができた。昨年は市民活動団体と市役所、水戸市の市民しか見ることができていなかった。しかし今年は水戸市のボランティアの担い手として茨城大学の学生も考えられるのではないかと思い、パンフレット作成や学生の声を集めた映像企画の提案をした。これらを行う前段階として学生にアンケートを行い、実態を調査することにした。このアンケートでは別の授業で質問紙調査について勉強していたことを生かすことができた。

次に、二つ目の目標である昨年の活動のノウハウを引き継ぐということについては、昨年の活動内容を参考にできるようにSNSで共有したり、どの活動がどれくらいの労力が必要かを伝えたりして今年度の活動のヒントとなるようにした。しかしその一方で先輩という立場に立って初めて持つ悩みに直面した。昨年はほぼ同学年の

みだったが今年は2年生と3年生が半数ずつのため昨年とは構成が異なる。経験者と新規メンバーの持つイメージの差を感じてしまい、全体で話す前に相談する相手として話しやすさから昨年の経験者ばかり選んでしまった。また全体でも発言をしすぎて、2年生が意見を言う機会を潰してしまったかもしれないと感じた。後半はこの反省から2年生に積極的に話を振って意見を聞くようにした。すると質問すればしっかりとした答えが返ってくる。このことから、意見を発しづらい会議となっているのではないだろうかと考えた。先輩は後輩が自由に意見を言える環境を整備し、主体的に動けるようなサポートをすべきだと考えている。先輩・後輩という立場が生まれた中での後輩の立場についてもっとよく考えるべきだった。

最後にこみっとフェスティバルチームのピーク行事であるこみっとフェスティバルについて述べていく。昨年の何をすべきか掴みきれず上手く動けなかったという反省点から、周りをよく見て足りないことはないかよく考えるようにした。そのため、市民活動団体の方や高校生ボランティアの方とコミュニケーションを積極的に取り状況把握に努めた。しかし情報共有が不十分だったために休憩時間の調整が上手くいかず困ってしまったことがあった。情報共有の大切さを痛感した。

全体を通して2年間のプロジェクト実習で、座学では学ぶことのできない外部の方との連絡の仕方や課題と方針を絞り込む難しさ等多くのことを学ぶことができた。その中でも特に多くの人と協力して物事を進める大変さと楽しさについて学ぶことができた。人が集まると予定を調整したり意見が対立したりするといったリスクがある。一方で協力することで大きな力が生まれたり様々な角度の知見を得られたりするなどリスクを上回るメリットがある。そして何より助け合うことができる。このチームはそれができていたと思う。そんなメンバーたちに心から感謝する。この学びを今後活かしていきたいと思う。

## 反省と挑戦

### －2年目の活動－

茨城大学 3年 塚本 莉沙

昨年に引き続きプロジェクト実習を受講し、今年も「こみっとフェスティバルチーム」として1年間活動をしてきた。私達の活動は、平成29年2月25日に開催される「こみっとフェスティバル2017」に向けて主にイベントの企画・運営や宣伝活動を行っている。そもそもプロジェクト実習を履修した動機は、今までやったことのない新しいことにチャレンジしたかったからである。実際、昨年を振り返ると座学の授業では出来ないような外部の人と連携しながらプロジェクトを実行していくといった経験をし、その経験は私の中で大きな自信へとつながった。しかし、反省点もあった。昨年のチームは私を含め殆ど2年生だけのチームであったため、手探り状態での活動だった。そのため、元々提案されていた内容の活動だけで手一杯となり、自分達で考えた独自の活動が出来なかったことが反省として残った。そこで、その反省をいかし今年は昨年できなかった自分達の独自の活動を考えプロジェクトをより良いものにしたと思った。これが今年度もプロジェクト実習を履修した動機である。

そして今年、新たな試みとして行ったことが2つある。フリーペーパーと映像作りである。1つ目のフリーペーパー作りの際に気を付けたことは、配布するターゲットとフリーペーパーを作る目的を明確にすることだ。これは昨年の経験から学んだことで、ターゲットや目的を明確にしたことで、分かりやすいまとまったフリーペーパーを作ることができた。また、昨年の経験で役立ったことがもう1つある。スケジュール管理だ。昨年の活動経験を活かし1年間の細かいスケジュール調整をすることで、早くからフリーペーパー作りを始めることができた。そのため7月には大学生へ水戸市のボランティア団体についての意識調査をし、それに基づいて作ったものを11月の茨苑祭で配布することができた。このように今までの経験を活かした活動ができたと思う。

新たな試みの2つ目は、こみっとフェスティバル当日に流す映像を作るということだ。これは、チームとしても個人的にも新たな挑戦となった。今年こみっとフ

ェスティバルの開催が5回目ということもあり、なにか記念となるものを作ることにした。そこで私達のチームではボランティア活動に参加したことがある学生にボランティアを通じて感じたことをインタビューし、その映像をイベント当日に流すことにした。この映像を流す目的は、映像をみて同じくらいの年齢の人に少しでもボランティアに興味を持ってもらうことや、学生はボランティア活動をどう思っているのかNPOやボランティア団体の人に知ってもらうことだ。作る際には取材班と映像編集班に分担した。私は映像編集の方を担当したが、初めて映像編集をやったのでとても苦戦したが1つの映像にすることが出来た。当日も、数人のボランティア団体の方に声をかけられ、映像の内容や私達の活動について興味を持ってもらった。しかし、反省点として残るのは若い人に足を止めてもらえなかったことだ。映像自体、少し堅苦しいものになってしまったので、若い人にも興味を持ってもらえるようなものにすればよかったということが反省点として挙げられる。

私は2年この活動に携わって、市の職員とNPOやボランティア団体といった市民の両方の視点から活動に対する思いを間近で接することが出来た。活動に携わったことで、これまであまり知らなかったボランティアについての理解も深まった。また、ラジオに出演するといった普段体験できないことも経験できた。こういった経験が出来るのはありがたいことであると共に自身の成長にもつながった。このプロジェクト実習を通じて得られたものはたくさんある。ここで培った経験をこれからも活かしていきたいと思う。



図：こみっとフェスティバル会場での展示

## 社会を支える力

### ーボランティア、市役所を通して見る「縁の下の力持ち」ー

茨城大学 2年 山口 紗奈子

もともとボランティア活動に興味があった私は、水戸市で活躍されている市民活動団体の皆さんと一緒に活動ができると思い、このプロジェクトに参加した。ボランティアというと一般的に想像しやすいのが、災害時などに現地に赴くものや子どもの教育などの福祉関係のものが多い。しかし、今回実際にボランティアの現地に赴き分かったのは、決して私たちが一般的に考えるボランティアの形だけでなく、それよりも多くの種類のボランティアが存在するということだ。老人ホームを訪問し、介護のお手伝いをしながら折り紙を教えたり、家族が家におらず一人で過ごす子どもたちの居場所を作ったり、様々な場面でのボランティアの“形”というものを見ることが出来た。

11月に行われた茨苑祭では、2日間にわたりボランティア団体の方にお手伝いに来ていただいた。1日目は折り紙を教えていただき、簡単にできる作品からプロの方の作品まで幅広い世界を教えていただき、大変興味深かった。また教えてもらった折り紙をお客さんに教えながらお話しをすることでお客さんとも仲が良くなり、こみっとフェスティバルへの招致へと繋げることが出来た。2日目はカプラというフランスの積み木を教えていただいた。私も今回初めて遊ばせていただいたが、子どもから大人まで楽しめる遊びでとても楽しかった。施設やイベントなどに赴き、多くの方に様々な遊びを教えている市民活動団体の魅力を伺うことが出来た。

またこみっとフェスティバルを成功させるために、市役所と協力したり、インターンシップに行かせていただいたりしたことにより、市役所という場所の社会的役割やリアルな仕事現場を見させていただく機会となった。今回大変お世話になった水戸市市民生活課では、市民の方を市役所と繋ぎ、市民団体等の活動をより活性化させることを目標にしている部署である。しかし、当初はそ

の仕事内容が想像しにくかった。そもそも市役所で日頃何が行われているのかあまり考えたことがなかった私にとって、その課名からは具体的な業務内容は想像しにくく、ただ軽い興味を持ったぐらいであった。しかし一年間のこみっとフェスティバル実行員会や夏休み中に行われた2日間のインターンシップを通して、市役所の仕事ぶりを間近で伺うことが出来た。市民の要望に応えるべく、様々な形で広報や資料を作り、またそれに伴いいろいろな方の立場を考えながら進めていく作業は難しいものであった。インターンシップを経て、一人でも多くの方を市民活動団体と繋げるため、小さなところから気に掛けることが市役所の大切な役割だということに気づかされた。

こみっとフェスティバルでは大学生がどのようなボランティアに携わっているのかをビデオに収め、ブースで流した。学生だからこそ、他分野でのボランティアに積極的に参加することができ、新しく得るものが多い。学生の声を多くの人に届けられたことにとても喜ばしく思う。

こみっとフェスティバルを経て、障害を持っている・持っていない、社会的ハンデを持っている・持っていないに関わらず体験コーナーや物販を行うことでみんなが平等に生きていることを実感させられた。またこうした支援をする市民活動団体や、さらに彼らを支援しようとする行政があつてのこみっとフェスティバルであった。街を盛り上げ、また豊かにするのは市民であり、行政であるということが分かった。これからは多くのボランティアに携わり、より生活を豊かにしていきたい。



図:こみっとフェスティバル

## 7:おわりに

鈴木 千尋

このプロジェクトを通して、私たちは様々なことを学び、自らの成果だけでなく、課題も得ることが出来た。

まず学んだ事として、主に積極的な働きかけをすることの大切さ、計画的に進めることの大切さ、新しいことに挑戦することの大切さの三つを挙げる。プロジェクトを進めるうえで役割分担を行い、自分の役割だけでなく、他の仕事を引き受けたり、市民活動団体からのイベントのお誘いを持ち出して提案したりと、自発的な行動を心がけ、チームメンバーとの交流を大事にするようにした。積極的な働きかけにより、メンバー同士の関係も親密になった。また4月頃に仮の年間スケジュールを立て、今年の新しい試みであったフリーペーパー作りを行うために、流れを考えながら行動するようにした。計画をしっかりと立てたことで、フリーペーパーを茨苑祭までに完成し、配布することが出来た。フリーペーパーは、水戸の市民活動団体の存在やこみっとフェスティバルに関する周知を目的として作成していった。こみっとフェスティバル当日は、5周年の記念事業を盛り上げる姿勢が見られ、多くの方々に参加していただきたいという思いから積極的な呼び込みや、展示物を見やすくする工夫を自ら行うことができた。個人的にはこみフェスの強みをより理解した上で宣伝をしていきたいと思った。また、学生の出し物として作ったインタビュー映像を多くの人に見てもらうために、積極的な働きかけが必要だと思った。積極性に関してはもう少し伸ばせるのではないかと思う。

最後になりますが、この一年間多くの方々にご協力いただいてプロジェクトを進めることが出来ました。この場をお借りして感謝を申し上げます。プロジェクトを提案していただいた、水戸市役所市民生活課 橋崎様、沼田様、水戸まちなかフェスティバルの際にお世話になりました、泉町二丁目商店街振興組合の宮本様、夏休みのボランティアや茨苑祭、こみっとフェスティバルでお世話になりました、実行委員会委員の皆様、さとみ・あいチームをはじめ他プロジェクト実習チームの皆様、そして最後にプロジェクト実習の担当教員である鈴木先生・神田先生、本当にありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。



## IV：先進地実地研修

- 1：趣旨
- 2：痛恨の片肺運用
- 3：先進地実地研修（近郊）

2016年度産学連携ツーリズムセミナー

- 4：御礼ならびに今後に向けて

## IV: 先進地実地研修

神田 大吾

### 1: 趣旨

プロジェクト実習では、授業の一環として 2013 年度から、

プロジェクト実習と親和性の高い目的・内容・形態で実施されている、他大学並びに先進地域の取り組みを参観し、これまでの自らの取り組みと比較検証することを通じて、プロジェクト実習は勿論、今後の勉学・諸活動に活かすべき<学び>を得ること。併せて、その学びを他のメンバーにフィードバックすること

という目的を掲げて「先進地実地研修」を実施して来た。2013 年度の小規模な試行を経て、2014 年度からは以下の 2 カテゴリーで正式に運用している。

#### ①先進地実地研修（近郊）

東京或いはその近傍に日帰り。プロジェクト実習 A～D 履修生全員の参加を原則として実施する。

#### ②先進地実地研修（遠郊）

東北地方～近畿地方に宿泊込み。プロジェクト実習 A～D 履修生の代表若干名の参加で実施する。

いずれも、もしも学生が漫然と参加したのでは、どれほど優れた研修地を選んでも、単なる「遠足」に墮する。このため、両カテゴリ共通で「レポートの作成」と「年度末活動報告会での報告」の 2 つを課している。いずれも「参加者本人のリフレクション活動」であると同時に、「研修で得た学びを他のメンバーにフィードバックすること」が目的である。

このように学生が「先進地に出掛けて直接学ぶ」機会は極めて貴重であるが、実現のためには、交通費や宿泊費を大学予算で賄う体制を構築し、学生の個人負担を最小限に抑えることがポイントとなる。「近郊」が、バスをチャーターするという既存の予算執行の枠組み内で対応出来るのに対し、学生個人単位で宿泊費及び交通費を支給する必要がある「遠郊」にはクリアすべきハードルが多い。

### 2: 痛恨の片肺運用

先進地実地研修は、「近郊」と「遠郊」のセットで教育効果を上げることを目指して設計されている。年々厳しさを増す予算状況に鑑み、本授業担当教員は昨年度報告書（神田大吾他編『2015 年度根力育成プログラム プロジェクト実習活動報告書』根力育成プログラム小委員会 2016 年 3 月刊）第Ⅲ章末尾において以下のように述べている。

本学就業力育成支援事業の裏付けであった文部科学省補助金の交付期間は終了し、大学運営費交付金の大幅削減や 2017 年 4 月を期しての本学の大規模な組織改編等、先進地実地研修は勿論、プロジェクト実習そのものを巡る環境が大きく変化しつつある。教員の担当体制以前に予算の先行きの不透明さから、2016 年度の先進地実地研修実施の可否は全く不明という状況である。この「芽」が大きく育つか立ち枯れてしまうか、これからが勝負所であろう。引き続きのご支援を、どうか宜しく御願ひ申し上げます。

これに対して今年度、人文学部は最大限の支援をして下さった。すなわち、予算状況が逼迫し各委員会予算を軒並み削減する中で、プロジェクト実習の後ろ盾となる「根力育成プログラム小委員会」に新たに予算を配分し、工夫を凝らせば何とか「近郊と遠郊の二本立て運用」が可能になるだけの条件を整えて下さったのである。勿論、申請額と配分額の間には落差がある。これを埋める手立てとして、学部 HP の中にプロジェクト実習のページを作って戴き、2016 年度活動報告書を電子媒体で掲載することを企てた。し

かし、折悪しく組織改編の年に当たっていたことから HP の改編は 2017 年度の実現を目指すこととなり、果たせなかった。また、予定していた「遠郊」の催事が本学の定期試験期間と重なり学生が参加できない等の不測の事態に見舞われる内に実施のタイミングを逸してしまい、2016 年度は「近郊」のみの実施に留まり、痛恨の片肺運用となってしまった。「この『芽』が大きく育つか立ち枯れてしまうかの正念場」と訴え、学部には最大限に応えて戴きながら、担当教員側の工夫不足と運用の不備からこのような結果を招いてしまい、深く反省している。誠に申し訳ございませんでした。

### 3: 先進地実地研修(近郊) 2016 年度産学連携ツーリズムセミナー

#### (1) 実施に至る経緯

先進地実地研修(近郊)は、2013年12月15日に学生2名を引率して、公益社団法人日本観光振興協会の「産学連携オープンセミナー予選会」に参加したことに始まる。同セミナーは、その後関西地区で年度末に開催される形式となり、日程・開催場所共に「近郊」の対象から外れてしまっていた。

今年度は、ツーリズム EXPO ジャパン(以下「ツーリズム EXPO」)に合わせて9月23日に東京ビッグサイトにおいて「2016 年度産学連携ツーリズムセミナー」(以下「ツーリズムセミナー」)として開催されることとなり、3年振りに復活となった(図1)。

ツーリズム EXPO : <http://www.t-expo.jp/biz/>

ツーリズムセミナー : <http://www.nihon-kankou.or.jp/home/committees/report/event/20160923.pdf>

ツーリズム EXPO は、「業界・プレス関係者限定日(9月22・23日)」と「一般公開日(9月24・25日)」の二段構えで開催された。ツーリズムセミナーは前者の一環として開催され、かつ参加者は(本来、一般学生は参観できない)業界・プレス限定の EXPO 本体も参観させて戴けるというありがたい設定であった。ツーリズムセミナーにおける学生発表に加えて実際の商談会の様子を参観できたことは、観光業界への関心の有無に関わらず、ビジネスの最前線を目の当たりにする貴重な経験になった。

入場は無料です

目録せ観光大団 日本!

ツーリズム EXPO ジャパンに合わせて開催

2016 年度産学連携ツーリズムセミナー

開催概要

■開催日時: 2016年9月23日(金)14時~17時  
 ■開催場所: 東京ビッグサイト 会議場6 第607・608 (東京都江東区有明3-11-1)  
 ■参加対象: ツーリズム産業に関心の高い学生、ツーリズム産業に従事する団体・企業の社員、一般社会人、マスコミ関係者

■参加特典  
 当セミナーに参加される学生の方は、9月23日当日に「ツーリズム EXPO ジャパン」に無料でご入場いただけます。

■参加人数: 300名(先着順)  
 ■申込受付: 2016年9月16日(金)  
 (詳細)2016年9月16日(金)  
 ①Web(日本観光振興協会)での申込み  
 下記URLから申込フォームにアクセス  
<http://www.nihon-kankou.or.jp/home/committees/report/event/20160923.html>  
 \*印刷物はプリントして当日ご持参下さい。  
 ②Eメールでの申込み  
[sangaku-tokyo@nihon-kankou.or.jp](mailto:sangaku-tokyo@nihon-kankou.or.jp)  
 \*氏名、学校(学部・学科)、勤務先(部署・役職)、連絡先(TEL)を記載して下さい。  
 ③Faxでの申込み 申込先 Fax: 03-8435-8921 (詳細がFax申込書となっております。)

プログラム

□主催者挨拶 山口 隆雄 公益社団法人日本観光振興協会 会長  
 □来賓挨拶 西海 進和 氏 国土交通省観光庁観光産業課 課長  
 □共同挨拶 川口 準人 氏 日本学生観光連盟 代表

■第1部 学生による観光振興に関するアイデア・研究発表

■第2部 パネルディスカッション  
 > テーマ 「観光大団実現のために必要とされる人材」  
 > コーディネーター 矢野 学 氏 横浜国立大学商学部観光マネジメント学科 教授

> パネリスト  
 柏 龍之 氏 日本経済株式会社 執行役員  
 金本 有一 氏 株式会社オンクルランド 執行役員  
 渡邊 郁代 氏 株式会社JTB総合研究所 執行役員  
 川口 準人 氏 日本学生観光連盟代表 東海大学観光学部3年生

■第3部 学生からの研究発表の表彰と総括  
 > 審査委員  
 岡本 純也 氏 一橋大学大学院商学研究科 准教授  
 西海 進和 氏 国土交通省観光庁観光産業課 課長  
 久保 成人 氏 公益社団法人日本観光振興協会 理事長

図1: ツーリズムセミナーのチラシ

#### (2) 事前準備

事前準備として、「研修の趣旨」「社会人基礎力と根力の関係の確認」「発表を聞くに当たっての基本姿勢」を周知すると共に、

- ①採点表フォームを配付しての作業指示
- ②事後レポート課題のアナウンス
- ③12月10日に本学水戸キャンパスで開催予定のプロジェクト実習活動報告会での報告担当者決定

を行った。教員側では当日のスケジュールや留意点等を網羅した「しおり」(図2)を作成し、参加学生に当日配布した。

2016年度のプロジェクト実習は、茨城キリスト教大学から4名・常磐大学から1名が単位互換生として履修している。当日は、茨城キリスト教大学から履修生3名が参加した。また、常磐大学からは2名の非履修生参加者をご紹介戴けた。両学のご協力に感謝申し上げます。

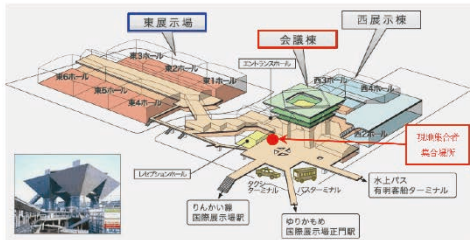
#### (3) 研修活動概要

2016年度の先進地実地研修(近郊)は、履修生24名・非履修生参加者2名・引率教員3名で実施した。当日は、前記「しおり」の「II: 全体日程表」に沿って諸事滞りなく活動できた。

## 2016年度 プロジェクト実習 先進地実地研修(近郊)

### 2016年度産学連携ツーリズムセミナー (ツーリズム EXPO ジャパン共催)

<http://www.nihon-kankou.or.jp/home/committees/report/event/20160208.pdf>  
[http://www.t-expo.jp/?utm\\_source=google&utm\\_medium=cpc&utm\\_term=kw631&utm\\_campaign=2016](http://www.t-expo.jp/?utm_source=google&utm_medium=cpc&utm_term=kw631&utm_campaign=2016)



2016年9月23日  
 東京ビックサイト  
 EXPO: 東展示場・セミナー: 会議棟 6F

### I: 趣旨説明

#### 1: 目的

先進地実地研修は、プロジェクト実習の一環として2013年度から実施しています。プロジェクト実習履修生の全員参加を原則として東京近郊で実施する「近郊」と、履修生代表者若干名により東北地方～近畿地方で実施する「遠郊」の、二種類が準備されています。そのいずれも、目的とする所は

プロジェクト実習と親和性の高い目的・内容・形態で実施されている他大学の取り組みを参観し、これまでの自らの取り組みと比較検証することを通じて、プロジェクト実習は勿論、各人の今後の勉学・諸活動に活かすべく「学び」を得ること

にあります。

このしおりの「III: 担当教員より」にも記しているように、漠然と眺めていたのでは効果がありません。「他校の取り組みを自らの取り組みと比較検証する」という姿勢で参観する事が重要です。

#### 2: 今年度の参観対象

2016年度の先進地実地研修(近郊)では、東京ビックサイトで開催される「2016年度産学連携ツーリズムセミナー」の参観を行います。以下にチラシを掲載します。

<http://www.nihon-kankou.or.jp/home/committees/report/event/20160208.pdf>

<略>

また、セミナー参観に先立ち、同セミナーの母体であるツーリズム EXPO ジャパンについても短時間ながら参観を行います。

[http://www.t-expo.jp/?utm\\_source=google&utm\\_medium=cpc&utm\\_term=kw631&utm\\_campaign=2016](http://www.t-expo.jp/?utm_source=google&utm_medium=cpc&utm_term=kw631&utm_campaign=2016)

1

### II: 全体日程表

- 9:30 茨城大学水戸キャンパス発
  - \* 水戸キャンパス乗車者は、9:20までに生協前周辺に集合
- 9:45 JR赤塚駅北口発
  - \* JR赤塚駅北口乗車者は、9:35までに指定の場所(次ページ参照)に集合
- 12:30頃 東京ビックサイトに着
- 12:30~13:50 昼食ならびにツーリズム EXPO ジャパン参観(東展示場)
  - \* EXPOは、最初に全体で入場手続をします。その後は自由行動となります。13:50までにセミナー会場に入ってください。
  - \* セミナーは、各人で事前に申し込めをすることになっています。既に完了しているとは思いますが、念のためもう一度確認しておいて下さい。
  - \* 東京ビックサイトにはコンビニならびに食売がありますが、混雑が予想されますので可能であればバスの中で昼食を済ませておくことをお勧めします。  
<http://www.bigsight.jp/services/shop/>
- 14:00~17:00 2016年度産学連携ツーリズムセミナー(会議棟 6F 607・608会議室)
  - \* 万一セミナー終了が予定時刻より遅れる場合は、中座して帰途に就きます。その際は失礼にならないよう、静かに退出して下さい。
- 17:00頃 東京ビックサイト発
  - 19:45頃 JR赤塚駅着
  - \* JR赤塚駅降車者は解散
  - 20:00頃 茨城大学水戸キャンパス着
  - \* 完全解散
- \* バスは大学前まで準備しますので、茨城大学～赤塚駅～東京ビックサイト間の足代は不要です。(バスを利用しない場合は、個人負担となります。)
- \* 食事代等は、各自の負担となります。
- \* 昼食は各自持参し、車中～セミナー開始前に適宜済ませて下さい。夕食については、解散前に戻る/戻らないを含めて、各自の自由とします。
- \* 移動の途中、サービスエリア等でトイレ休憩を取ります。短時間ではありますが、その際に弁当等を購入することは可能です。

\* 当日の緊急連絡は、鈴木教の携帯(XXX-XXXX-XXXX)へお願いします。

参加者名簿・乗降地一覧<略>

赤塚駅北口乗降地地図(赤丸の付近に集合して下さい)<略>

2

### III: 担当教員より

#### 1: 当日のスムーズな活動のために

当日は団体で行動します。遅刻や無断欠席等の無いよう、お願いします。当日、緊急時の連絡は、下記鈴木教の携帯へお願いします。  
 鈴木教携帯電話番号: XXX-XXXX-XXXX  
 車に乗りやすい人は、乗車時にその旨伝えて下さい。前寄りの席を手配します。

#### 2: 学びのために

いくら優れた取り組みでも、漠然と眺めていたのでは学びは得られません。学びを活性化させる「しかけ」として、以下の2点をお願いします。折角の機会です。アクティブに取り組んで下さい。

##### (1) 採点表の記入・提出

① 採点表の記入(当日・紙媒体)  
 次ページに採点表を組み込んでいます。それぞれの発表を聴きながら、同時進行で記入して行って下さい。  
 「コメント」欄は、できるだけ詳しく記入して下さい。但し、「コメント」欄に記入している内に次の発表を聞き出した。となると本末転倒ですので、時間がなければメモ程度でも構いません。採点・コメントとも、あんまりあれこれ考えすぎると、却って上手くいきません。真感で、「エイヤッ!」と書いてしまうのがコツです。

##### ② 採点表の提出(後日・電子媒体)

\* プロジェクト実習履修生の方(必須)  
 ガルーンの「プロジェクト実習(全体)」課題欄 06に、採点表のフォームをアップしてあります。これに上記①のメモを転記して、10月3日の23:00までに同欄にアップして下さい。極端の下に学号番号・氏名を記入する欄があります。忘れずに記入して下さい。  
 \* プロジェクト実習履修生以外の方(できれば)  
 「できれば」提出して下さい。別途メールでフォームをお送りしますので、鈴木教(XXX@vc.ibaraki.ac.jp)宛に添付ファイルをお願いします。

##### (2) ミニレポートの作成・提出

\* プロジェクト実習履修生の方(必須)  
 ガルーンの「プロジェクト実習(全体)」課題欄 07に、ミニレポート作成指示書をアップしてあります(この冊子の7頁にも掲載してあります)。指示に従って、10月11日の23:00までに同欄にアップして下さい。  
 \* プロジェクト実習履修生以外の方(できれば)  
 「できれば」提出して下さい。鈴木教(XXX@vc.ibaraki.ac.jp)宛に添付ファイルをお願いします。

3

20160923先進地実地研修(近郊)  
2016年度産学連携ワークショップセミナー 研究発表採点表

学籍番号: \_\_\_\_\_ 氏名: \_\_\_\_\_

NO	大学名	採点 (1=最低...5=最高の、5段階評価)							合計	
		発表	発表内容	発表内容	発表内容	発表内容	発表内容	発表内容		
		PPT	ハンドアウト	プレゼン	質疑応答	準備時間	プランニング	発表内容の整理	発表内容の整理	学び
1	山口県立大学 国際文化学部									0
	コメント									
2	東洋大学 国際地域学部									0
	コメント									
3	摂南大学 経済学部									0
	コメント									
4	文教大学 国際学部									0
	コメント									

採点に当たって  
4校の発表は、必ずしも完璧にプロジェクト案のようなPBL授業がある訳ではありません。しかし今回は、「プロジェクト実習と同様に、学生が教員や学外者の協力を得ながら自発的に取り組んだプロジェクトの成果発表であった」として採点して下さい。

採点欄: 1(=最低)~5(=最高)で記入  
\*「ハンドアウト」欄は、ハンドアウトが配付されない場合は一律「0」を記入  
\*「学び」欄は、「発表者達が、今回の活動を通じてどの程度学びを得たと思われるか」についての採点者の推測合計欄:入力時に自動計算されます

20160923 先進地実地研修(近郊) ミニレポート作成指示書

ミニレポートは、以下の要領で作成して下さい。  
1: レイアウト・布字・字数等  
ワードでA4タテ・横書き  
余白は上下左右各 23・21・20・20  
45字/行 48行/ページ  
基本的にMS明朝・10.5ポイントとするが、必要に応じて変更可。  
\*要するに、この指示書の体裁と同じです。  
必要に応じて写真・図表等を盛り込む  
写真・図表等を除いて「400字以上・上限無し」(「校閲」→「文字カウント」で確認して下さい)  
\*題名・氏名も文字数に加えます。

2: ファイル名・送信先・締切等  
ファイル名: 2016先進地実地研修(氏名)  
提出先: レナンディ「プロジェクト実習(全体)」の「課題」の07番  
締切: 2016年10月11日23:00

3: レポート冒頭の体裁について  
(1)第一行に<中央揃え>で題名を記して下さい。  
\*文章の内容に沿った題名を考えて下さい。「先進地実地研修に参加して」式の、<小学生の夏休みの日記のような>「(^.^)」。題名は取付けて下さい。  
(2)第二行に学籍番号氏名を<右寄せ>で記して下さい。  
(3)第三行から本文を記して下さい。

4: 内容  
他大学の発表を聞いて、「これを学んだ・今後活かしたい」ということを記して下さい。  
(1)「素晴らしいから見習いたい」「反面教師として活かしたい」。のどちらからでも/両方からでも結構です。  
(2)記述対象は、「取り組み内容」「プレゼンの仕方」のどちらからでも/両方でも/それらを踏まえてより踏み込んだ内容でも結構です。  
(3)取り上げる発表は一枚でも、複数校でも結構です。  
(4)記述は、なるべく具体的にお願いします。  
悪い例「発表してくれた大学は、みんなすごいなー、見習わなくちゃいけないーと思いましたよ」  
よい例「〇〇大学の取り組みにおいて、メンバーは××というプロジェクトに取り組み中で△△という問題に直面し、◎◎という対応をすることでこれを解決した。類似の問題は、今年度の自分のチームでも発生したが・・・」  
「〇〇大学のプレゼンは、使用したPPT・ハンドアウトの見やすさもさることながら、発表時のアイコンタクトが・・・」  
「〇〇大学の発表は、内容・プレゼン共に素晴らしいが、特別積極的な一名が一人で切り回して来たな、ということがありありと伝わって来た。チームでの活動を前提とするプロジェクトで・・・」  
「〇〇大学の発表は、内容・プレゼン共に素晴らしいが、教員や学外協力者が徹底的にお慮立てをして学生はただそれに乗っかって動いているように感じられた。学生自身の学びという点から言えば・・・」

図 2: 先進地実地研修「しおり」(1/4 縮小)



図 3: ツーリズム EXPO



図 4: セミナー会場



図 5: 茨城キリスト教大学生も参加



図 6: 常盤大学生も参加

(4) 研修終了後の活動

① 採点表

採点表は、当日配布の「しおり」に綴じ込まれた紙媒体のフォームに手書きで記入し、後日電子媒体に記入し直して提出する形を採った。一例を、大学名を A～D に置き換えて図 7 に示す。

採点欄の内「質疑応答」については、当日の発表が全て質疑応答の時間無しで行われたため、一律に採点の対象外とした。

図 7: 採点表記入例(茨城大学 3 年 佐藤 李咲)

No.	大学名	採点 (最低・5=最高 の、5段階評価)								合計	
		発表				活動内容					学び
		PPT	ハンドアウト	プレゼン	質疑応答	着眼点切り口	プランニング	具体的取り組み	計画の達成度		
1	A大学	4	3	4	0	5	4	5	3	3	31
コメント	ジェスチャーや観客への問いかけを積極的に行なっていて引き付けられる発表だと感じた。また、ゆっくりとした口調も聞き取りやすく、内容が比較的スムーズに入ってきた。 全体的にすっきりとした構成で、PPT・ハンドアウト共に写真の配置や文字の大きさ等、見やすかった。PPTの枚数が17枚で、4枚で1ページのハンドアウトにすると一枚余ってしまう点が気になった。また、最後のページの出典一覧がただURLを羅列しただけで、情報が少なく書き方が雑だと感じた。 活動の内容としては、きちんと振り返りをした上で次の活動に活かしている点がとても良いと思った。										
2	B大学	3	2	2	0	3	4	2	1	1	18
コメント	全体的に、「知っている」前提で話が進められていった印象。話の軸になる単語くらいはきちんと説明を入れてほしかった。(「ミレニアル世代」など、知っている人は分かるが、知らない人にとってはどの世代なのか単語だけでは想像しにくい) PPTの情報量が少なく、口頭での説明がほとんど、といった印象で、もっとPPTに入れこんでほしかった。また、口頭での説明がメインになってしまっているせいか、聞いている側からするとどのタイミングでPPTが先に進んだのか分かりにくく、内容もいまいち入ってこなかった。PPT自体は、グラフや文字の大きさもとても見やすく、シンプルで見やすかった。 SNSという切り口は今どき平凡だな、と少し感じてしまった。もう一步踏み込んだ提案が聞いてみたかった。										
3	C大学	1	2	4	0	4	4	5	4	4	28
コメント	あまりにもつくり過ぎた発表の仕方、プレゼンというより演説のような印象を持った。途中発表に熱が入りすぎて(きっとそれも作ったものだろうと思うが)そのせいで内容が入ってこない部分があった。 PPTがほぼ写真、あるいは単語一つのみ、といった感じで、情報量が少なすぎると感じた。これはこれで一つの魅せ方だとは感じたが、やはりプレゼンである以上、もう少し情報を入れてほしかった。ハンドアウトだとPPTが1枚余っていた。 発表内容としては、キャンプという学生らしい視点からの提案で面白いと感じた。また、しっかりと計画を客観的に見て、一方的に提案するのではなく、住民らの視点も考慮して具体的に行動していた点は素晴らしいと思った。										
4	D大学	2	1	3	0	4	5	4	4	4	27
コメント	PPTの枚数がとにかく多い。とても時間内に説明できる量とは思えず、案の定早口になっており、進行も速くハンドアウトを見ながらと今どこを説明しているのか全く追いつけないまま発表が終わってしまった、という印象。PPT一枚一枚を見ると丁寧に作ってあっただけに、とてももったいないと感じた。 PPTとハンドアウトを一緒にデータからつくと、アニメーションが被った部分はハンドアウトだと後ろの部分が見えなくなり、何が書いてあったのか見返せなくなっていた。ハンドアウト用に別のデータを用意する等、工夫があると良かった。 発表内容としては、事前調査をしっかりとしたうえで提案に持っていつている点は良いと思った。										

② 事後レポート

事後レポートについては、作成指示書をあらかじめ配布し、研修の「しおり」最終ページ(図 2-p.5)に折り込む形で再配布した。学生はこの指示に従って執筆する。履修生 24 名中 22 名が提出した。以下、提出された全てのレポートを示す。図 7 の採点表同様、文章内の個別大学名を順に A～LL に機械的に置き換えた(図 8)。

### 先進地実地研修から学ぶこと

茨城大学2年 跡辺 朱理

実地研修での学生の発表を聞いていて、これは本当に学生なのかと思うほど完成度が高いことに驚かされた。内容もプレゼンも、圧倒的に私たちよりも素晴らしい。どのような点が素晴らしいと感じたのかを以下に述べる。

まず内容であるが、これに関してはA大学さんが一番魅力のある企画をしていると思った。町への愛着や誇りを感じたし、それを活かすためにどうしたらいいかと頭を悩ませているのは私たちまちづくりチームと同じである。しかし活かすためにとる手法が私たちよりも地域の良さを引き出しているし、なにより楽しそうであると思った。その地域の食を取り上げるというのは思いつくものだが、それだけでは集客にはならない。そこに「楽しそうだな、参加したいな」と思えるようなプラスアルファが加えられている。アイデアも斬新で、そしてそれを実行するための計画もしっかりしていて、大変参考になった。私たちのチームは今年が初めてで、活動の見通しははっきり立っていないという状況だが、来年に向けてこのA大学さんのプランを参考にしていきたいと思う。

次にプレゼンに関してだが、全チームが素晴らしいのでとてもレベルの高い発表の場になっていた。さきほどのA大学さんもPPTが見やすくデザインも親しみが持ちやすいものであるが、一番聞き入ってしまったのはB大学さんの発表である。PPTは若干地味なように見えたが、決して見えにくい・理解しにくいというわけではなく、むしろ写真がよく見えてイメージを持ちやすかった。以前プレゼンテーションの講義を履修したとき、八の字目線、ゆっくり話すなどのテクニックを教わったが、それらのほとんどをしっかりと使いこなしていた。そして何よりも語り口がとても特徴的で、ユーモアもあり、堂々としていた。発表者全員が同じクオリティで発表できるのは練習の成果であると思うし、わたしたちもこのように会場を沸かせるような発表をしたいと思うような模範であった。

最後に、私が全チームを見て採点する際に困ったのが「学び」の欄である。自分たちがこれを通して何を学んだのか。何を学んだのか。ということについては全チームを通してあまり伝わってこなかったように感じる。発想、プラン、具体性などについてははっきりしていてわかりやすいが、何を学んだかということについては明示されなかった。想像することはできるがきっと想像以上のものを得ていると思うし、制限時間がある中で説明するのも難しいとは思う。だが質疑応答の時間を頂ければぜひ聞いてみたかったと思う。来年もまたぜひ参加して、いろんなアイデアを取り入れていきたいと思う。

-----

### 他大学のプレゼンを聞いてみて

茨城キリスト教大学2年 安藤 沙彩

各大学のプレゼンを聞いて思ったことが二つある。

まず一つ目は、発表の姿勢だ。どの大学も内容が濃くてすばらしかったが、ともに発表の姿勢がとてもよかった。特に、C大学とD大学が印象に残った。C大学は何回も練習しているのが伝わった。チームで声を合わせるところ、それぞれが伝えたいところをはっきりと、強弱をつけて発表していたため、内容がすんなり頭に入ってきて、聞きやすかった。D大学は発表のリズムがとてもよかった。さらに自分の言葉で説明していたので内容が把握しやすく、もっと聞きたいと感じた。このような点から内容も重要だが、発表の練習も重要だと学んだ。私は今まで、発表するにあたって内容に重点をおいて、発表する練習をまともにせず、本番に臨んでいた。きっと相手に聞いてほしいという気持ちが足りなかったからだと思う。この気持ち、発表はすばらしいので見習いたいと思った。

二つ目はハンドアウトの見易さだ。パワーポイントに書いてあることも簡潔にまとまっていて、図表や写真等を用いて見てすぐに分かるハンドアウトだった。更に外国の使用例を用いて発表していたので広範囲をしっかりと調べていて、根拠に満ちた発表だと感じた。

私たちもこれから活動発表という舞台があるので、今回発表していた他大学のやり方を参考にして、自分

たちの活動を相手に伝えられるようにしたいと思う。今回学んだことは将来に必ず役立つことだと思うので、発表する際の参考にしたいと思った。

-+-+-+-+-+-+-+  
**プレゼン力につながるもの**

茨城大学 2年 飯塚 子都香

最も印象に残った発表は、「グランピューラ」というキャッチーな言葉で心を掴んだE大学のプレゼンである。ハンドアウトは、PPTと同じ内容だったため、写真が多く、これを見ただけでは内容を掴めないと感じたが、それを補う以上のプレゼン力であった。メンバーは三人いたが、発表者が変わってもそのプレゼン力は変わることなく、惹きつけられた。実際に授業の中で発表をした時のことを思い出すと、話す内容が決まっても、いざ前に立つと、たじたじしてしまい、思うように話すことができなかった。彼らの発表は、三名とも迷いがなく、聞いていて緊張などを感じさせる要素はなかった。メンバー全員の中で、目的が明確になっているからこそ全員が迷うことなくプレゼンできるのだろう。メンバーの中で意思疎通ができているということも感じられる。

また、プレゼンもさることながら、発表内容も素晴らしかった。近頃話題になっているというグランピングを取り入れたという点も話題性があり面白い。空き家を利用した宿泊施設、というのはその土地のもったいない、と言える点を活かすことのできる内容であり、学生が主体で始まるが住民が主体になっていくという、巻き込み方も素晴らしいと感じた。更に、ターゲット層が明確であり、海岸を一望できるような所に建てよう、などその地域の特色を活かすものになっている。また、空き家が増えている地域は多いと思うので、他地域においても活用可能なプランであると考えている。

実際にこのプランを実施するにあたって、既存のグランピング施設の支配人の方に話を聞きにいき、また住民の方々と議論するにあたって、全て学生が考え議論のファシリテーターとして活動するなど、具体的取り組みも的確であると感じた。

そもそもこのプランの目的は何か、というのを全員が把握し、そのために必要な行動は何か、と考えられていて、原因・目的・方法という流れが確立しており、プロジェクト実習の授業の中で重要だけれどもつい忘れがちになってしまう点でもあるため、非常に学びになった。その点がしっかりしているからこそ自信を持ってプレゼンできるのだろう。私たちもグループ内で今一度、目的を確認し、そのための方法を考えていくべきだと感じた。

-+-+-+-+-+-+-+  
**実際の行動に移るということ**

茨城大学 2年 石橋 翔太郎

今回のスピーチを聞いて自分たちのプロジェクトに足りないものがたくさん見えてきた。中でも大きなことは、多くのチームが実際に催し物をしたりして行動に移っているということだ。自分たちのチームは夏休みの終わりに差し掛かっている現在に至るまで、実際に行動に移したことがほとんどなかった。なぜなのか、理由は明白である。それはどんな目的で何をするかを設定し、それを達成するための計画を立てなかったからである。スピーチを行ったチームの多くはチームが発足した当初から数か月先の予定を具体的な形で決めていた。しかし自分たちを見てみるとどうだろうか。PR活動と体験会をするといったはいいが、何をすればよいかまたどんな理由とするのかというのが明確に決まっていなかった。不透明なままプロジェクトを続けていたので後々いろいろな点を宮本さんやほかの人たちに指摘され、結局何も行わないほうが良いという結果になってしまった。

現在のチームの状況はなかなか芳しいとは言えない。みんなの士気が下がり、メンバーも自分を含め会議などに参加できなくなっている。なのでここで一度チームの計画を見直して最後の報告会で有意義な発表をしたいと思う。



-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

## 見て、比べて、学ぶ

茨城大学 2年 井上 知美

プレゼンの仕方では、F大学が最も良かった。誰も原稿を見ず、適当な間、身振り手振りを交えながらの発表はとても聞きやすかった。原稿の見過ぎであったり、間も空けず淡々と読みあげる大学は、聞き手も内容が頭に入ってこず、プレゼンをしている学生も本当に内容を理解しているのだろうか疑問に思うことがあった。今回の発表会とは少し異なるが、私がプロジェクト実習の中間発表を行った際には、早口に原稿を読みあげていた。他大学と比べながら、採点をしながら見ることでプレゼンの良い点・悪い点がはっきりとし、勉強になった。また、F大学とG大学はプロジェクトの課題を提示している点が良いと感じた。

PPT・ハンドアウトでは、H大学が最も良かった。PPTでアニメーションをつけていたためハンドアウトでは文字が読めなくなってしまっていたり、後で見返したときに何について書かれているかわからない資料もあったが、H大学のPPT・ハンドアウトは図も多く見やすかった。また、プロジェクトをステップ化することで、このプロジェクトを他所でも真似しやすくするという考えが良いと思った。自分のプロジェクト(成果)を相手に伝えるだけでなく、広げようという考えは私にはなかったため、勉強になった。一方で、H大学のハンドアウトには入っていなかったが、G大学・I大学のように始めに目次を入れている点は良いと感じた。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

## 地域にかかわる難しさ

茨城大学 2年 岩崎 彩

私はこの先進地実地研修に参加して、地域と密接にかかわり、計画していくことの難しさを改めて感じた。なぜならセミナーで行われた発表は、どの大学も鋭い着眼点を持ち、綿密な計画、それによる効果を詳細に述べていたものの、いくつかの大学では「どうしてその地域で行うのか」というその地域でプロジェクトを行うために必要な、その地域独特の性質を生かした着眼点が計画の内容にもっと多く含まれていればよいと感じたからだ。

もちろん発表した学生は私たちと全く同じ立ち位置ではなく、このセミナーもあくまでプロジェクトの提案が主であった。加えて、プロジェクトの根幹をなす内容が制限時間内で上手く伝わってこないということも多々見受けられた。それらによって計画の全貌を見ることができず、地域に根差した着眼点が薄く感じられる可能性も否定できないが、今回はプロジェクトの内容は発表内のものを参考とする。

一例を取り上げると、J大学ではJ県柳井市の白壁通りをプロジェクトの対象地域とし、そこで行われる「一味同心」プロジェクトを計画した。これは歴史的街並みを生かし、地域住民とも協力し伝統料理の「共食」に重点をおいたものであった。しかしこの歴史的街並みは日本中の市街で見られるものであり、他の町でも計画を丸ごと利用できる可能性もある。私は、この計画により多くの、ほかの地域には見られない「白壁通り」らしさを加えることができればよいと感じた。例えば、歴史的街並みと一口に言うのではなく、どのような歴史的街並みかを考えることもよいのではないだろうか。またそれは、どうしてプロジェクトの対象地に白壁通りを選んだのかに繋がると考えた。そのような要素を含むことができれば、地域住民のモチベーションに繋がり一体感が強まる。また、この地域の特色を前面に提示することで訪れる人に印象を与えることができる。

同時に私は、自分が参加するプロジェクトにもそのような地域独特の要素を取り入れることができているか考えた。私たちのプロジェクトも、地域に関連した特産品を扱ったりはしているものの、計画自体はその地域以外でも実行可能な内容が主であると振り返った。現在実行中のプロジェクトではあるが、このセミナーに参加し、このことに気付くことができたことを契機に地域にもっと視線を向けるよう努力したい。

地域に関連した計画の実行はその地域に住んでいる人々、地域住民の方々との協力が必要不可欠である。しかし、地域に密接にかかわることは、それに加えて私たち自身で地域を見つめ、発見をしていかななくてはならない。ただ惰性でプロジェクトを実行するのではなく、常に新しい視線で地域を見つめることが大切だと感じた。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

## プレゼンで楽しませる

茨城大学2年 岩出 夏輝

数ある中から選ばれたチームであるから。発表する内容に関してはどこも画期的で面白味があった。ここでは自分たちの活動をいかに聴衆に伝えるかにたけていたチームを取り上げ、参考になった点を挙げ今後に生かしたい。

K大学のデンケンを発表したチームは見た目から楽しませてくれた。もちろん内容にも計画性や実行力があり素晴らしかったが、それに負けないプレゼンのインパクトがあった。「コンセプトにあったプレゼン」、「学生らしさ」がこのチームの強みだったと思う。特定の地域の昔の料理を再現するというコンセプトがあり、衣装や小道具にその地域性や活動内容を取り込んでいたことが視覚に訴えてきた。全員が元気よく声をそろえて発表したりというスタイル、おそらくあれが30歳の社会人であれば成立しないと思う。学生ならではの若々しさを十分に生かした発表だったと思う。カフェによるまちづくりをコンセプトにしている我々はこの手法を参考にできると感じた。シャツにエプロン姿で、聴衆がカフェに来店したかのような発表ができれば面白いと思う。

L大学のグランピューラはとにかく口が達者だった。それも口がうまい1人にゆだねるのではなく、3人が交代で話すことによって、自分のパートにより集中できていたし、何より1人1人の個性も含めて楽しむことができた。この手法は簡単にまねできるものではなく、さすが大阪の大学という印象だった。しかし個人的にはこんな風な発表をしてみたい。デンケンチームが完成されたプレゼンを見せる演劇だとするならば、こちらのチームは会場の場も含めて自分のプレゼンにしてしまう漫才のようだった。

おそらく我々のチームに活かすならデンケンチームがあっていると思う。またグランピューラチームも大変面白く、堂々とした喋りや会場を楽しませる点は大いに見習うことができると感じた。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

## 「さとみ・あい」を育てる先進地研修

茨城大学3年 大枝 俊貴

今回学んだ点を以下の二つの観点から述べていきたい。一つ目は、発表の仕方において、参考に出来るという点だ。プロジェクト実習において、私たちは最終報告会を控えている。報告会において、いかに実績が重ねられていたとしても、報告の仕方によって印象が異なってくるだろう。そこを、プラスの印象に持っていくため、重要な要素を述べていきたい。二つ目は、プロジェクト実習において、活動していく上で参考にできる点。今回、提案とそれに対する実績を発表していたが、これはプロジェクト実習、さらには、地域振興を目的のひとつとして掲げる「さとみあい」にとって大変親和性が高い。ここから学び取るべきことは多いはずだ。以上、二点について着目し述べていきたい。

まずは、発表の仕方について参考にできる点について述べていく。全体を通して、どこの大学も堂々とした発表であった。何がそのような印象を与えるのか観察してみるといくつか重要な要素が見えてきた。第一に、声の張りである。ある程度、滑舌が思わしくなくても声が堂々としていて、聞き取りやすけ発表の説得力に支障はないということが見て取れた。滑舌やイントネーションに自身のない私であったが、声の張りという磨けば光る分野の重要性を感じ、希望を持った。ただし、磨けばの話である。相応の努力の必要を感じた。また、発表は、登場から退場まで一連の過程が評価の対象となり得ることを感じた。第一印象は、最後まで引きずる。今回の発表の中でも、登場の仕方が緩慢としていて、その後の発表において、良い印象を持つことができなかつた班があった。はじめと終わりを締めりあるものにするすることで、発表全体の印象をプラスにもっていくことができるのではと思う。

次に、活動に際して参考に出来ることについて述べていく。今回の発表では、全体的に成果の表し方が弱いように感じた。もちろん、プロジェクト実習において、成果が第一義になることに危惧は持たなければならないが、成果が出るに越したことはない。ただ、その成果の表現の仕方は、客観的である必要がある。「声」という形で、少数の意見を取り入れることは、具体性があるという点では評価すべきである。しかし、同時に、発表を聴く人に自己満足感を与えてしまうことが考えられる。数字での成果の評価や継続的な評価を拘

泥しない範囲で考えていかなければならない。例えば、今回の発表の中に、アンケートを使用した成果の測定があった。成果の考えるには、活動立案の時点からこのような成果を念頭に置いた、活動の仕方が必要になるのではないかと考える。

また、M大学では、住民を主体とした町づくりについて述べていた。これは、私たちさとみあいの活動として、親和性が大変高い。中でも、住民によるワークショップが目を引いた。住民と余所者の目、ふたつの観点からの「ニーズ」の掘り起こしや、魅力再発見という点で、大変有意義な活動であると感じた。しかし、このような活動は、いまやほとんどの自治体で当たり前のように行われている。身近なところでいえば、常陸太田市のお宝発見事業などがそれに当たるだろう。既存の取り組みといかに差別化を計るかが重要となってくる。そのためには、既存の取り組みについて、知る必要がある。そういった意味で、定期的によりすぐりの地域系の取り組みを享受することができる、今回のような機会は大変意義深いものであるといえる。

以上が私が今回の先進地実地研修で学んだことであった。学びをこれからの活動に生かしていきたい。学び多きこの研修が次の代にも続いていくことを願うばかりである。

-----

### 効果的なプレゼンテーション

茨城キリスト教大学2年 大野 愛恵

産学連携ツーリズムセミナーで他大学の発表から学んだことを、N大学「歴食をたのしむ「一味同心」プロジェクト～街道をロングテーブルでおもしろくする～」の発表を取り上げて述べようと思います。

発表は、メンバー一人ひとりが自身を持って取り組んでいた印象を強く受けました。他大学の発表とは異なる工夫（プロジェクトの舞台であるN県柳井市で有名な金魚提灯を各メンバーが首から掲げる、発表最後の方言での挨拶）がなされていて、聴衆の関心を惹きつけ、プロジェクトの舞台である柳井市の印象を強く残していたと感じます。この工夫は、私たち E-girls チームが後期に企画している「小学校国際理解活動」に活用できると感じました（海外に触れ始めた子供たちに、海外を印象付ける効果的な工夫。例えば、国旗を大々的に提示する・英語での挨拶を取り入れる）。PPT とハンドアウトは写真とグラフを効果的に用いた見やすいもので、発表中は内容を理解するための十分な補助材料となり、発表後でも内容を鮮明に思い出すことができました。取り組み内容に関しては、重要伝統的建造物群保存地区の景観と地域の伝統食を掛け合わせるという斬新なアイデアでした。地域の伝統食を再現するに当たって、メンバーたちは過去の資料だけを頼りに探るのではなく、地域の方との交流（対話+試作）もしていました。その取り組みによって、このプロジェクトは学生のプロジェクトの一部としてだけではなく、地域の方とも一体となったプロジェクトへ成長できるのではないかと思います。

これら学んだ点を、後期のプロジェクト実習で大いに活用したいと思います。

-----

### 相違から見つめなおす

茨城大学3年 小野瀬 莉央

2016年度産学連携ツーリズムセミナーでの発表を聞いて、まず前提となる活動目的が異なるとその内容もやはり変わってくるのだなと感じた。今回発表していた大学の学生たちは「学生による観光振興に関するアイデア・研究発表」を求められてこの発表に臨んでいた。着眼点やプランニングはどれも優れていたが何を学んだかは語られない。一方私たちはあるプロジェクトに取り組み、そこで何を得られたかが重要になってくる。一見類似している発表を見ることで自分たちの活動目的を問い直すことができた。

次に発表内容について見ると、先ほども述べたとおり全体を通して言えることは着眼点・プランニングが優れていることだ。目的をきちんと見据えてそれを達成するためにはどうすれば良いかが明確であった。特にO大学は「観光大国実現に貢献できる人材育成」という目標のために道案内ボランティアからプレゼン大会まで第一段階、第二段階...のように分かりやすく整理してあった。私たちこみっとフェスティバルチームの目標は「こみっとフェスティバルを成功させるためにはどうすれば良いか」というものであり、「成功」の定義があいまいで目標がぶれやすい傾向にある。しかし目標を常に共有しておくことでプランニングのはっきりし、一体感も高まると思うため定期的に何度も確認して各人の中で目的がずれていかないように目的の

再確認と共有をすべきだろうと改めて考えた。

続いて発表に関して、全体的に声の大きさと速さはちょうどよく聞き取りやすかった。特にP大学を聞いていて思ったが、声のトーンや声質も発表に適したものと感じた。人間には聞き取りやすい声のトーンの幅があるようだ。余力があればそういった所も気に掛けることができればより良い発表になりそうだ。また、身振り手振りに関してQ大学が腕をのばして「1 つ目」、「2 つ目」と示していたのは分かりやすかった。会場が傾斜のない平らな会場だったため体全体を使っての発表は後方の席の人にも見えやすいものだっただろう。体の動きに気を付けると同時にR大学のような語りかける発表の仕方も面白い。やはりまずは自分が心からプロジェクトを理解し、納得して伝えたいとなければ人に伝わるプレゼンにならないだろう。

さらにパワーポイントとハンドアウトについて、この点については正直なところ私たちの方が上手く作れているのではないかと感じた。目次のないパワーポイントも数校あったが、やはり目次はあった方が、初めて聞く人にとってはどういった理論・手順で活動しているのか理解しやすいと感じた。さらに文字が多すぎたり逆に少なすぎたり、小さかったりカラフルすぎたりと見やすいパワーポイントを作ることの難しさを改めて感じた。また、表やグラフを利用したとき調査の対象年齢層を明確に示していないことは不親切で調査の正当性も揺らいでしまうなど感じた。さらに参考文献について、インターネットの情報を参考にすることは構わないと思うが、出典表示が URL だけで、アクセス日を書いていないチームが多くて驚いた。基本的なところもきちんと押さえてこそ良い発表が成り立つのではないだろうか。

以上のように多くのことを学ぶことができた。今後今回学んだことを念頭に精一杯プロジェクトに取り組んでいきたいと思う。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

### 先進地実地研修から学ぶこと

茨城大学2年 栗原 将也

S大学地域文化創造研究室の発表は、プレゼンの内容・構想から先ず興味をそそられるような素晴らしいものであった。具体的に言えば「伝統的建造物群保存地区」を「デンケン」と略し、より親しみを持てるような、より興味を持てるような形で紹介しているようなところである。さらに、「一味同心」という地域が同じ目的を以て団結し魅力ある町づくりをしていくという目標を分かりやすく表現している点にも感銘を受けた。また、データの裏付けや統計も説得力のあるものであり、我がプロジェクトの活動においても非常に参考になる点が多かった。

また彼らは、プロジェクトを立ち上げ、それを「継続」、「存続」させられるための構想や、将来の展望、それを実現するための段階を明確に示していた。私はこうしたプロジェクトとなると目標や展望が壮大に聞こえてしまうと今まで思っていたが、考えが大きく変わった。彼らの取り組みを参考にして今後の活動に活かしていきたいと思った。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

### 問題意識とその取り組み

茨城大学2年 佐藤 宇輝

先進地実地研修として産学連携ツーリズムセミナーに参加して四大学の取り組みの発表を見学した。特に大切だと思ったことが、問題意識を持ちプロジェクトに取り組んでいくことである。

発表した大学生はそれぞれのチームで問いを立て解決に向けて活動していたと思うがその中でもT大学とU大学の発表は明確な問題意識を持って取り組んでいると感じるものであった。前者は、その地区に宿泊施設が足りないという問題を提供型キャンピング形式のグランピングに着目して解決しようとしていた。これだけ言うと簡単なことに感じられてしまうかもしれない。しかし、データを用い、問題を丁寧に表示しており、問題意識が伝わりやすかった。後者は、観光人材に求められる力を自ら定義して、プロジェクトの段階ごとにその求められる力を当てはめていた。こうした工夫は、問題意識が取り組みに結びついていることがはっきりとわかりその取り組みは説得力があり意味のあることだと思えた。

私たちが今年度のプロジェクトに取り組んできて問題意識をはっきり持っておらず、行きづまることがあった。具体的にはメールマナーの講演を行うことが目標になっており、なぜコミュニケーションリスクの中

でメールを取り上げるのかと、伝えたいことなどがはっきりしていなかった。私たちは目標をまず大学生に向けてメールでのトラブルを減らすようにするという考え直したことによってこれを解決した。今回見学してみて私たちがこのようなプロセスを踏んだのも有意義であると思った。また、問題意識に基づき取り組んでいるということを明確に伝えることはプロジェクトの必要性を伝えることにおいて重要であるということを感じた。

-+-+-+-+-+-+-+

### 真逆の発表方法から学ぶこと

茨城大学3年 佐藤 李咲

今年度の先進地実地研修の近郊は、2016年度産学連携ツーリズムセミナーの観覧ということで、全部で4校のチームの研究発表がおこなわれた。どのチームも、この発表に向けてたくさんの準備をして迎えたことが窺えたが、反面、ゼミの教授や科目担当の先生方の手が増えられている点も多く見受けられた。私は今回、もしこの発表が自分たちだったらどうするか、ということ念頭に置いて考察した。

まず、どのチームにも共通して言えるのが、基本的なプレゼン資料が整っていない点に気がなった。特に、参考文献の書き方が雑で誤っていたり、ハンドアウトにした時のPPTの枚数が一枚余って余計にページを割いてしまっていたりと、私たちが普段から茨大の授業で教えられていたことが出来ていないチームの資料を見て、すっきりしない気持ち悪さを味わった。いくら発表の練習を重ねても、肝心の資料作りが疎かになってしまっただけで、元も子もないと思う。実際に、発表を聞いていてもハンドアウトやPPTの違和感が気になって内容があまり伝わってこない場面が多々あったのが残念だった。それと同時に、私たちが発表の際には、PPTやハンドアウトを丁寧に、見やすく作りこんでいく作業がまず大切になると学ぶことが出来た。

次に、発表のプレゼンの仕方についても、学ぶ所が多々あった。まず、どのチームも、いい意味でも悪い意味でも「作りこまれた」プレゼンだったように思う。おそらく、教員の指導がより濃く入っていたのだろう。そこに学生らしさはなかったように思う。セミナーでの企業審査員に向けたプレゼン、という点において、それが正解なのか不正解なのかは分からないが、私たちプロジェクト実習で置き換えると、今回のような作られたプレゼン方法は目指すべきではないと感じた。私たちは、あくまで学生が主体で、学生ならではの視点、行動力、チームワークをもとに活動してきたわけであって、プロジェクト実習では、そういった学生ならではの雰囲気、素直に伝えることが求められると思う。それでこそ自分たちの活動にリアリティが増すと私は考えている。

総じて、今回のセミナーでの学生発表はある意味プロジェクト実習とは真逆の発表方法だったかもしれない。しかし、だからこそ刺激をたくさん受けることができ、今後の中間報告、活動報告にむけて改めて気を引き締めるいい機会となった。今回学んだ事を、活かしていきたいと思う。

-+-+-+-+-+-+-+

### 見つめなおすべきこと

茨城大学2年 佐野 智太

今回、私は2016年度産学連携ツーリズムセミナーでの学生の発表を聞き、印象的な発表はV大学の発表であった。

V大学では観光振興を通じた地域活性化を目指した活動を提案していたが、その内容は、和歌山県由良町の特色を十分に生かしたものであった。きれいな景色のある町でのグランピングや資金調達をクラウドファンディングに頼るところなど、ユニークな提案でありながら具体性があり、実践段階に進んでいるというのは、素晴らしいと感じた。特に、学生、行政、住民、観光事業者を交えたワークショップを行い、協議していくことは、ユニークな発想に現実味を持たせながらも、4つのグループの連帯感を強める働きがあるように思える。

プレゼンにおいては、しゃべり方やタイミングなど、計算されたようなわざとらしい発表の仕方であったが、内容が分かりやすく、不快ではなかった。強みだけでなく、聞き手が疑問に思うであろう部分に関しても発表の中で答えているところも、抜け目なく作りこんであるように思えた。

我々Domaine MITOチームも地域振興を目指しており、地域の特色を生かしながらワインを売り出してい

きたいのだが、我々のチームに関しては、Domaine MITO とのやり取りが多いにもかかわらず我々学生から Domaine MITO に対してあまり提案できてない節がある。お題が提案でありながら、実行段階まで進んでいるチームがある一方で、お題が実践でありながら提案ができていないチームがある、その違いをよく考察する必要がある強く感じた。また、活動においてしっかりと地域の特徴をとらえ生かしていく姿勢や、プレゼンにおいて聞き手の疑問に聞かれなくても答えていく姿勢など、我々 Domaine MITO チームが見習うべきことが多く詰まっていた発表であった。

-----

### 提案と実践の違い

茨城大学 3 年 助川 実咲

昨年の社会人基礎力育成グランプリと比較すると、観光学に精通した学生や企業の方々が多く、非常に学術的な研究発表を聞くことができた。しかし、その反面、地域活性化のための方法を提案しているだけにすぎず、机上の空論ではないかと思う部分もあった。特にW大学の学生の研究発表では、観光人材の育成や地域の観光イノベーションの推進を図るプロジェクトで、その効果や問題について綿密に考察されていることが感じられた。しかし、連携先まで提案されているにも関わらず、実際に打診している様子がなかったことがとても残念である。ただ提案するのではなく、自分たちでそのプロジェクトを動かしてみても初めて気付くことがあるはずだ。さとみ・あいの活動でも複数の連携先があり、お世話になっているが、私はその「連携」という部分が一番難しいと考えている。相手方の都合や利益を考量しながら自分たちの目的を達成させるのは簡単なことではないからだ。

今回の研究発表では全体的に提案型が多く、実践という面での学びは少なかったものの、観光学という視点での地域活性化について知ることができたことは有意義であった。

-----

### 研修で感じた大きな刺激

茨城大学 3 年 鈴木 美緒

私はこの PBL 授業を履修して二年目であるが、このように他大学の学生のプレゼンテーションを聞くのは初めてで、とても楽しみにしていた。テーマの設定から調査方法、発表方法まで、盗める知識や工夫はすべて盗んでこようと意気込みで参加した。

私がこの研修に参加し、一番に驚いたのが、各大学の発表方法であった。どのチームも用意した原稿を丸読みしているところは一つもなかった。特に、X大学国際学部でのプレゼンテーションでは、きちんと聞いている人の目を見て、自分たちの言葉で話しており、説得力が増しているように感じた。身振り手振りを加えたり、聞いている人の反応を見ながらプレゼンテーションを進めることが出来ていたのも、しっかりと原稿や流れが、頭に入っていたからだと思う。

各チームの調査の進め方も、非現実的ではなく、きちんと実現できるように流れが出来ていて、学生が主体で考えたとは思えないものばかりだった。ふるさと納税やクラウドファンディングを利用しているチームもあり、財源の面でもしっかりと見通しを立てて計画を進めていることにも、また驚いた。

今回の研修に参加し、どのチームも素晴らしく、正直自分たちの至らなさばかりが目についてしまった。同じ大学生でもここまで違うのかと、ショックを受けた。しかし、今回学んだことや、感じた刺激をプラスに考え、今後の活動に生かしていければと思う。

-----

### 私たちがこれから目指すべきもの

茨城キリスト教大学 2 年 高場 菜央

私は、先進地実地研修に参加し、大きな刺激を受けた。どの学校も自分たちの発表に自信を持っていて、ほとんどの学生が多く観客がいるにも関わらず、冷静で堂々とプレゼンを行っていた。

トップバッターのY大学は、服装を揃え、堂々とした話し方、振る舞い方で私たちを魅了した。日本だけではなく、海外にも目を向けて調査を行い、より説得力のあるプレゼンにしようと思う彼女らの気持ちが伝わ

ってきた。私が特に感銘を受けたのは、提案だけでなく、実際にイベントを開催するまでに至ったということである。他大学は提案型のプレゼンが多かったが、実際に企画し、宣伝までに至る行動力にこの企画にかける熱い思いが伝わってきた。スライド一枚一枚に重さを感じ、教員などの支えが非常に大きかったのではないかと感じたが、それでも素晴らしい発表で今後の活動の参考になった。審査員が講評で掲げていた「オリジナリティー」、「実現可能性」、「インパクト」に当てはまる発表であったと思う。

Z大学は、発表は彼らオリジナルの考えで非常に良かったが、最初の自己紹介でスムーズに行えていなかった。プレゼンやスピーチを行う上で大切なのは第一印象である。第一印象は最初の発言が非常に肝心であり、観客の心をつかめるかの大事な材料になる。この部分については反面教師として今後の活動に活かしていきたいと思う。

今回この研修に参加して、私は異文化プロジェクトチームの一員として何ができるのか再考するよい機会となった。まだまだ自分たちは力不足でもっと周りに目を向けていかなければいけないのだなと感じた。今後の活動をより良いものにするためにこれからも邁進していきたいと思う。

-----

### 「相手に伝える」プレゼンテーション

茨城大学2年 高山 直人

今回の産学連携ツーリズムセミナーで行われた、学生による観光振興に関する研究発表では、いずれの学校においても聞く人にわかりやすいプレゼンテーションが行われていたと感じた。それは、いずれの学校のプレゼンテーションでも、論理的な展開によって説明が進められたからではないかと考える。例えば、AA大学の発表では、問題提起、問題解決のための具体的取り組みの紹介、その取り組みの有効性を補強するための同様の成功事例の紹介、という論理的な展開がきちんと行われていた。このようなプレゼンテーションの組み立て方は、自分たちが伝えたいことを伝えるための方法として重要であると考えられる。また、相手の興味を引くということもプレゼンテーションにおいて重要である。例えば、BB大学による発表では、発表の際に感情を込めた説明を行ったり、アイコンタクトをとったりして、聞く人の興味をうまく引き出していると感じた。どれほど良い資料を用意しても、相手が興味を持ってくれなければ、内容を伝えることはできない。その点においても、今回発表を行った4校は優れていると感じた。我々も、プロジェクト実習の報告会では、今回発表を行った4校の優れているところを参考により良い発表を行いたいと考える。

-----

### これからの活動に向けて

茨城大学3年 塚本 莉沙

昨年の先進地実地研修では自分達の活動の成果を発表するといった、自分達の活動と近いものがあった。しかし、今年に参加先ではプロジェクトを提案しこれから活動に向けて取り組んでいく形の発表が多いことや、コンセプトが観光ということで私達のチームではしないような内容・やり方で新鮮に感じると共に自身の視野が広がった。

発表を聞いて学ぶべき点は沢山ある。特にCC大学で行っていた、プロジェクトを段階ごとに分ける方法は自分達の活動にも活かそうで見習いたいと思った。CC大学で行っていたものは自身が行っているプロジェクトに5段階の目標を定め、1段階ごとに達成していくということを行っていた。つまりこれは、大きい達成目標を細分化しスモール目標を作ると同じものだと感じた。スモール目標を作ることによって目標達成までの道筋が明確になり、ただ漠然と目標に向かって活動していくより、より充実した活動ができる。スモール目標の立て方が、CC大学では目標が段階ごとに分けてあったため分かりやすかった。

また発表を見て、残念に思ったと同時に自分達も気をつけなければならないと思ったことがある。今回4校の発表を聞いて全体的に、少し分かりにくい発表内容だった。なぜならば、用語が分からなかった為に内容がぼやっとしてしまい、どういったプロジェクト内容なのか理解するのに時間がかかったからだ。例の1つとして、DD大学ではカルチュラル・オリンピアドをテーマに扱っていたが、カルチュラル・オリンピアドについて自分にはあまり馴染みのないものだったため発表内容も聞いていてぼんやりとしか理解が出来なかった。多分観光に携わっている人なら知っていて当たり前知識かもしれないし、単に自分の知識不

足のせいでもあるが、普段使わないような言葉には簡単な説明がある方が良いように感じた。実際にパネルディスカッションの際、波瀾さんがミレニアム世代の話題を話している時があったが、波瀾さんはミレニアム世代について簡単な説明をしていたため分かりやすい内容だったのを覚えている。自分達のチームでは当たり前のこととなっていることでも、他の人には当たり前の事ではないかもしれないということを自身も発表の際は気を付けたい。

今回、人の発表を聞く事で自分達のことでも客観的に考える良い機会になった。貴重な経験をしたと共に充実した先進地実地研修になった。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

### 良いプロジェクトにするには

茨城大学 2年 長澤 賢司

今回の先進地実地研修では4大学の発表を聞くことができ、それぞれの発表に感心するとともに、今後の自分たちの活動のいい教材であると感じた。その中でも、最初に発表したEE大学国際文化学部の「歴食を楽しむ一味同心プロジェクト」がとても印象に残っている。まず、素晴らしいと思ったのはプロジェクトの着眼点である。デンケンといった地域のモノを利用し、地域を活性化するために歴食という要素をプラスするというのが地域の特色を非常に上手に活用し、また、プロジェクトの実現性を高めていると感じた。発表の姿勢においては、発表者ひとりひとりが、自分たちのしてきた活動に自信を持っていることが声の大きさや、身振り手振りからも感じれた。この点は、今後の活動報告会で大いに真似していきたい。

EE大学の発表から自分たちの活動に立ち返ると、地域産のモノをうまくつかい色々な人たちを巻き込みながら地域を活性化させようとしている点は近いと感じた。その具体的なプランの立て方や着眼点が自分たちと違い、非常に勉強になったし、とても有意義な時間だった。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

### 論理的説明ができること

茨城大学 2年 波崎 大知

今回の先進地実地研修で一番大事だと思ったことが論理的に説明するということである。私たちコミュニケーションチームのご協力先であるNTTコミュニケーションズ株式会社様からも論理的に説明することの重要性を教えていただいていたので、今回改めて学ぶことができた。

特にFF大学国際文化学部のチームとGG大学国際学部のチームの発表は論理的に構成されていて聞いていて何がしたいのかがしっかり伝わってきたし分かりやすかった。

前者は三つのキーワードを用いることで全体を上手くまとめていた。また、なぜこの考えに至ったか結論が出たのかを歴史やデータを基に説明してくれたので誰が聞いても理解できる内容になっていたと思う。さらに実現に至るまでの五つのステップを構成し、プロジェクトを継続する仕組みまでも考察していて、プロジェクトの具体性、実現性、将来性を見ることができた。

後者は最初にOutlineを提示したうえで現状、データ→疑問→提案と発表の流れがスムーズだった。また、プロジェクトの内容はこちらも五段階で構成されていた。それぞれの段階に目標があり、チームメンバーの経験、実体験を基に説明してくれたので内容がイメージしやすかったし気持ちが伝わってきた。

私たちのチームもこれらのチームのように論理的に説明し、伝えたい事を確実に伝えられるようにしたいと思った。先進地実地研修でほかの大学の発表を聞いて参考になったし刺激を受けたので参加して良かったと感じた。

-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/-/

### 説得させる工夫を

茨城大学 2年 森本 真由

他大学の発表を聞ける機会はない。それが県外の大学の発表となるとなおさらだ。だから、今回のそうそう接点がない四大学が、発表のために参加した、先進地実地研修に参加させていただいたことは、私にとってとても貴重な経験になった。



四大学の発表はどれも素晴らしかったが、素晴らしいと思った要素、見習いたいと思った要素は異なっていた。

まずは HH 大学国際学部の発表を聞いた感想を述べたい。ここの大学の発表は、話すスピードや、間の取り方、声の高さなど、聴覚から受ける情報はとても受け取りやすかった。焦っている様子もなく、聞いている人を意識した発表だと思った。だが、話とは打って変わって、スライドを進める速さは少々早いと感じた。PPT やハンドアウト自体や話すスピードには問題はなかったが、スライドの移り変わりが早かったため、聞いている方の手元にあるハンドアウトをせかせかめくらはなければならなかったり、一度か二度、スライドを戻したときにはその分まためくらはなければならなかったりした。そういう意味では、聞いている人への配慮が欠けてしまったのではないかと思った。これらを改善するには、与えられた発表時間に対して、スライドの数は適当か、スライドを戻す必要のない順番になっているかなど、事前に気を付けて工夫しなければならぬと思い、同時に、私のこれからのプレゼンに活かしたい。

次に JJ 大学国際地域学部の発表についてだが、いきなり「ミレニアム世代」を絡めてプロジェクトについて説明をしていたが、最初の方に「ミレニアム世代」についてももう少し説明していれば、そのあとの具体的な説明にもついて行けたと感じた。こちらの大学については、予め基礎として、口頭でもいいから説明すべきだったと思った。

KK 大学経済学部は他の三チームと違う雰囲気を出していた。それもそのはず、他の三大学の学部に注目すると、国際学部、国際地域学部、国際文化学部、とどれも「国際」という文字が付くが、KK 大学から代表として出ている学部は経済学部である。聞いている側からすると、観光を経済学部の視点からアプローチするのを比較して聞くことができ、面白かった。プレゼン自体については、スライドやハンドアウトに文字が少なかった印象を受けた。確かに本番のスピーチを聞いていけば特に問題はないかもしれないが、あとで見返したときや、質疑応答の時に参考にするものがない。文字が少ない分、写真が多かったが、それも白黒印刷になってしまい、見づらかったというのが正直な印象である。

最後に LL 大学国際文化学部についてだが、ここは優勝したチームでもある。やはり、優勝しただけあって、発表の仕方はとても印象に残るものだった。まず、声のトーンが違う。「人の印象に残りたい」という考えが感じ取れる、明瞭な声だった。それに伴い、声の大きさも大きすぎず小さすぎずでちょうどよかった。発表の順番が1番目で、緊張がないわけではなかったと思うが、あれだけ堂々と発表されてしまうと、聞いている方は、ちゃんと聞こうという態度に自然となってしまう。また、スライドがとても見やすかった。写真と文字のバランスや、配色のバランス、目標や今までの成果をステップにしているところが、見ていてはとても見やすく、内容が頭に入りやすかった。自分が今まで作ってきたスライドには、ステップにする工夫はしたことがなかったので、見習いたい工夫だった。

全体を通して、よかった点、欠けていた点が異なっていて面白いと感じたし、勉強になった。そもそも、茨城から出て東京で、関西の大学の発表を聞くこと自体が、私にとってはとても刺激的な経験だった。今回のことを忘れないように、普段からのプレゼンに今回のことを取り入れていきたい。

最後に、今回このような素晴らしい機会を与えてくださり、準備して下さった全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、非履修生2名はレポートを自大学に提出し、大学 HP（常磐大学総合政策学部経営学科ニュース「産学連携ツーリズムツアーに経営学科の学生が参加」）に掲載されている（図9）。

<http://www.tokiwa.ac.jp/department/university/administration/management/news/2016/0923/index.html>

本書の方針により、大学名は記号に置き換えている

### プレゼンに必要なこと

経営学科 2年 金田裕樹

数ある学校から勝ち抜いた4校ということもあり、全てのプレゼンが素晴らしい。まず、4校共通して発表の際、みんな自信をもって発表していた。今の自分は、大勢が見ている中であんなに堂々とプレゼンするのはできないので、同じ学生として負けてはられないと感じた。

私は、初めにプレゼンをした A 大学は、まず着眼点がすごいと感じた。外国のあまり知られていない文化に目をつけ、それを日本流に置き換えて行うというのは、よく考えられていると感じた。私も外国のことを日本流にアレンジできるような、応用力を身に着けたいと感じた。また、このプロジェクトは、内容が濃いにも関わらず参加費が1万5千円でとてもリーズナブルな値段で実現可能だと驚きだ。プロジェクト実現のため、広い視野を持ち入れ値なども試行錯誤しながら計画されたのだと感じた。

三番目にプレゼンをした B 大学は、グランピングという大きなプロジェクトをこれなら実現できるのではないかと思わせる計画性がすごいと感じた。グランピングは宿泊施設の中でも安価でできるとしても、維持コストがどうしてもかかってしまう。だが、ふるさと納税やクラウドファンディングに目をつけ解決した。また B 大学は、観光事業所や地域住民の協力を募るなどプロジェクト実現のため根回しもしっかり行っており計画力が高いと感じた。プロジェクト実現のためにはここまで綿密な計画が必要なのだと思った。

### 今後の私のプレゼンテーションのための経験値

経営学科 2年 小池海斗

今回、茨城大学の先進地実地研修に参加して私は他大学のプレゼンテーションや発表のレベルの高さに驚き、見習いたいと思った。

どのグループの発表も何回も練習を繰り返してきたのだと分かるほどしっかりと発表されていた。全てのグループに共通して言えることだが、パワーポイントには余計な説明文を入れず、写真やイメージのみで構成しており、実際に言葉で内容を説明していた。私はプレゼンテーションをするときパワーポイントに余計な説明を入れすぎている、イメージ図を使用していないなど感じこれでは今回発表していた他大学の学生に社会に出たときに競うことができないと感じた。それゆえ、これからのパワーポイントの作成に今回の発表者たちのパワーポイントづくりに活かしていきたいと思った。

C 大学のプレゼンテーションでは、男子が大きな声で発表を開始したため、会場全体がプレゼンテーションを聞く姿勢になっていた。声のトーンでプレゼンテーションをより有利に進めていくための技術なのだと感じました。相手に聞きやすい、相手の心を掴むような発表の仕方が自分のアイデアを相手に伝えるためには必要な技術であり、是非私も実践していこうと思った。

さらに、どのグループにも当てはまることなのだが、相手に興味を持たせる手法としてカタカナを使用するということがある。私自身、無知なだけかもしれないのだが聞いたことのないようなカタカナを多く耳にした。そう言ったカタカナを使用することでプレゼンテーション内での響きがかつこよく聞こえるため、聴き手も楽しく・興味を持って聞くことができているのだと感じた。

今回のイベントに参加したことにより、私自身プレゼンテーションの幅を広げることができるいい機会となった。



産学連携ツーリズムセミナーで学生の発表を参観する金田さんと小池さん

③2016年度プロジェクト実習「年度末活動報告会」報告

2016年度先進地実地研修（近郊）の報告は、2016年12月10日に本学水戸キャンパスで開催された「年度末活動報告会」（第V章）の中で行われた。その報告発表PPTが図10である。

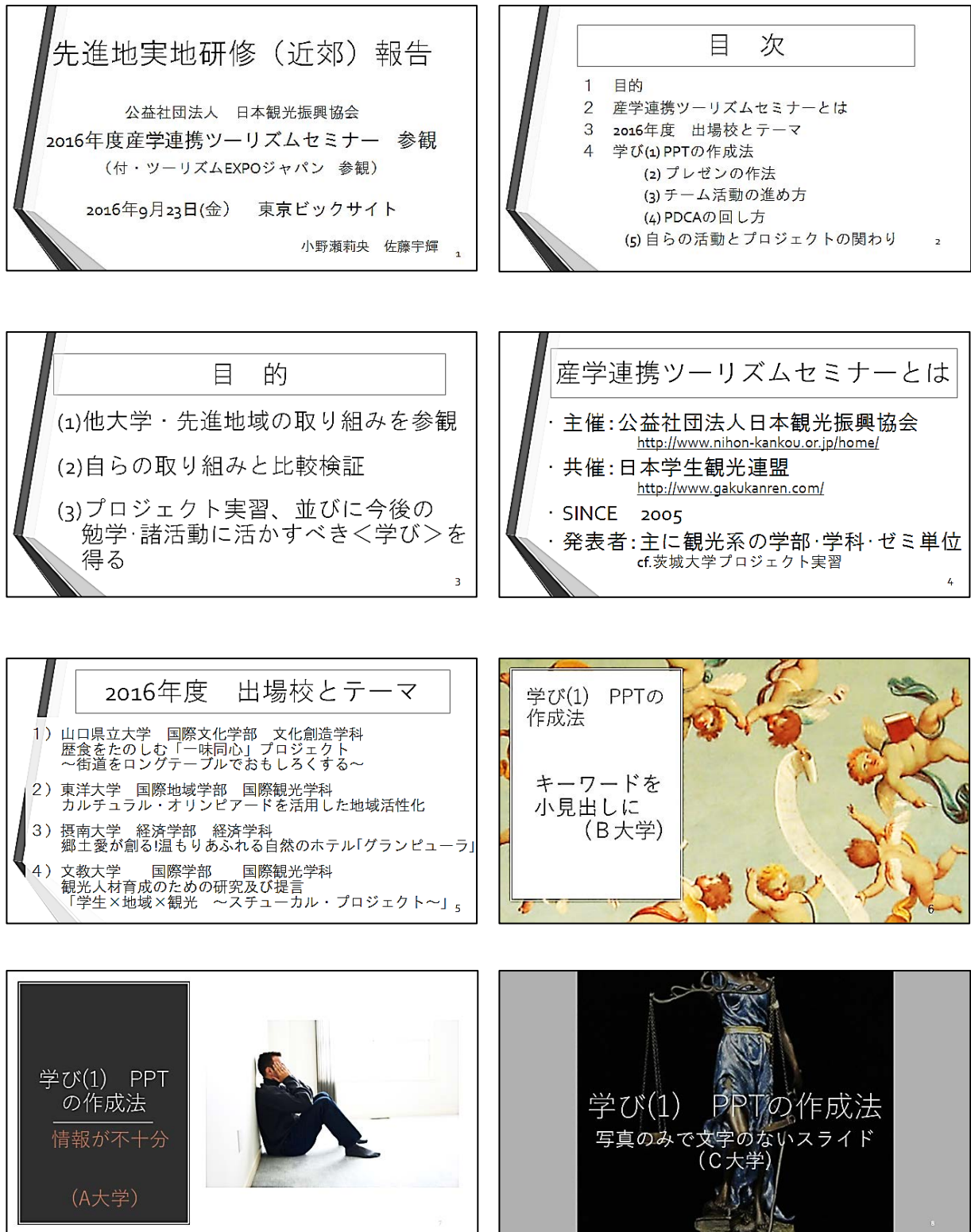




図 10: 先進地実地研修(近郊)活動報告 PPT

学び(2) プレゼンの作法

相手の興味を引く





伝える努力を惜しまない

9

学び(2) プレゼンの作法

キーワードを利用  
(B大学)




発表の軸を提示する→理解がスムーズに

10

学び(3) チーム活動の進め方

専門知識や得意分野を生かした役割分担  
(B大学)



多様性or課題を様々な角度からみる

11

学び(4) PDCAの回し方

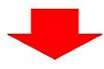
Plan	(計画)
Do	(実行)
Check	(評価)
Action	(改善)

12

学び(5) 自らの課題とプロジェクトの関わり①

Plan  
Do

問題—目標の関係がしっかり



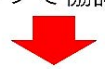
プロセスがはっきりする

13

学び(5) 自らの課題とプロジェクトの関わり②

Check  
Action

ワークショップで協議を繰り返した  
(C大学)



結果を確認・修正していく重要性

14



ご清聴ありがとうございました

15

スライド上の文字数は敢えて少なく抑えられている。文字数が多いとそれを読むことに気を取られ、口頭での発表の要点を聞き逃し兼ねないという、実地研修から得た学びがよく反映されている。その上で、発表技術 ((1)PPT と(2)プレゼン) と活動内容 ((3)チーム活動と(4) PDCA) の両面から(5)何を学んだかが整然とまとめられている。活動報告会 (第V章) での口頭発表そのものについても、聴衆に語りかけるように会場全体を随時見廻しながら時間どおりに話し終え、たいへんよく出来た発表であった。先進地実地研修による学習成果が十分に表れたと言えよう。

#### 4:御礼ならびに今後に向けて

先進地実地研修（近郊）については、2016年度は無事に実施することができた。予算の確保と執行、研修先の検討と決定、事前調整と当日の運用、さらには種々の事後手続きと、この間にたいへん多くの方々にご支援を戴いた。篤く御礼申し上げます。

プロジェクト実習では、6月初めに構想報告、7月半ばに前期末中間報告、10月に後期キックオフ報告と三回のチーム報告を重ねた上で、12月の年度末活動報告（第Ⅲ章）を迎えることとなっている。チームで活動した内容をメンバー同士で意見交換しながらPPTに簡潔にまとめること、他チームの報告を聞くこと、発表について質疑応答をすること等、多様な「学び合い」の場を設定しているが、クラス内で行うだけではどうしても限界もある。今回、先進地での研修が学生たちにとって衝撃の連続であり、多くを学び、それを自分たちの活動に活かそうとしたことは事後レポート（図8）から読み取れる。また、学んだことを実際にどれだけ活かしたかは、活動報告会での報告（図10）からよく分かる。そして、年度末活動報告が各チームとも実に充実した内容の発表であったことは、発表後に来場者からこれまでになく多くの質問が寄せられ、活発な意見交換が行われたことから明らかである。年度半ばから右肩上がりの成長ぶりを見せる彼らの姿を目にした担当教員としては、先進地実地研修の重要さを再認識した次第である。

他方、先進地実地研修（遠郊）については諸般の事情から実施できず、担当教員としては痛恨の極みである。他大学との学年歴の違い等のやむをえない事情が関係したにせよ、担当教員の努力と工夫が足りなかったことに弁解の余地がない。今年度に得た教訓を必ずや次年度に活かす決意を新たにしておりますので、枉げてご容赦いただけますようお願い申し上げます。

百聞は一見にしかずと言われる。「プロジェクト実習」の眼目であるPBL授業の先進地において、学生が他大学の「自分と同じ年齢の学生」がすぐれた発表をする立派な姿をじかに目にしたり、また実際の活動に参加して受ける衝撃は大きく、教育効果は極めて高い。大学運営交付金の大幅削減を受け、本学の財政状況には厳しさが増すばかりではあるが、担当教員は今年度のもろもろの反省を踏まえ、来年度は先進地実地研修の「近郊」と「遠郊」の両輪を再び実現するべく努力を続ける所存でありますので、引き続きのご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

# V : 年度末活動報告会

- 1 : 趣旨と経緯
- 2 : 2016 年度活動報告会のテーマ設定とその理由
- 3 : 2016 年度活動報告会の構成
- 4 : ミニ・オープンキャンパス
- 5 : ポスターセッション
- 6 : 活動報告会

## V:年度末活動報告会

鈴木 敦

### 1:趣旨と経緯

プロジェクト実習では、2012年度の初開講以来、年度末に本学水戸キャンパスにおいて学外の方にもご参加戴く形で活動報告会（以下「全体報告会」）を開催している。また、プロジェクト実習「B」に関してはさらに、主たるフィールドである常陸太田市里美地区においてお世話になった地元の方々にご参加戴き、別途活動報告会（以下「現地報告会」）を開催している。いずれも、意図する所は、以下の4点である。

- ①履修生のリフレクションとプレゼンテーション実習
- ②教員による授業運営と授業改善の報告
- ③お世話になった方々への御礼
- ④学内と学外への情報発信（広報）

両報告会とも、前半は「履修学生がどんな活動を行い、そこから何を学んだか」の発表と質疑応答、後半は年ごとにテーマを設定してトークセッションや交流会等を行い、特色を出すことに努めてきた。因みに昨年度のテーマは、全体報告会が「4年目をに向けたプロジェクト実習・質保証に向けた改善への取り組み」、現地報告会が「里美製品の試食会と関係者スピーチープロジェクト実習パーティーinさとみー」とした。詳細は、神田大吾他編『2015年度根力育成プログラム プロジェクト実習活動報告書』根力育成プログラム小委員会 2016年3月刊 第IV章を参照されたい。

### 2:2016年度活動報告会のテーマ設定とその理由

2016年度は、活動報告会全体のテーマを「様々な連携の実践」とし、特に「高大連携」を前面に押し出すこととした。これは、以下の2つの動きを踏まえての判断である。

- ①1990年代に次ぐ、高大連携の第二の高まり
- ②プロジェクト実習BならびにCで進めて来た高大連携事業が、一定の実績を蓄積して来たこと。特に茨城県立水戸農業高等学校（以下「水戸農業高等学校」）との連携第一期生が今春卒業を迎えること  
いずれも、詳細は第II章を参照されたい。「高校と大学が個別に運用しているPBLを、如何にして一貫した教育体系として整備していくか」が問われる中、本学プロジェクト実習においては第II章で「催事参加型」「直接参画型」と称したタイプの連携において既に一定の蓄積を有するという実績を踏まえ、「その先」の高大連携を模索するスタートにしたいと企てた次第である。その結果、「教育プログラム組込型」と称すべき新たな可能性への気づきが得られたこともまた、第II章に記した通りである。

### 3:2016年度活動報告会の構成

上記を踏まえて、2016年度の活動報告会は以下の構成で開催することとした。

- ①全体報告会と現地報告会を一括して、2016年12月10日に本学水戸キャンパスで開催する
- ②午前の部として「異文化交流フォーラム協力校の高校生」「里美地区在住の高校生」をご招待しての「ミニ・オープンキャンパス」を追加
- ③午後の部は例年通り「ポスターセッション」「活動報告会」とするが、司会担当や活動報告時間の潤沢な割り当て等で水戸農業高等学校生徒の活躍の場を強化  
以下、時系列に沿って記す。

### 4:ミニ・オープンキャンパス

ミニ・オープンキャンパスは、「施設見学」「学食体験」「新学部説明会」の3つからなる。

プロジェクト実習Cで蓄積して来た「催事参加型高大連携」の裾野をさらに広げるべく、「異文化交流フォーラム協力校の高校生」「里美地区在住の高校生」をご招待して開催した。参加高校生の募集に当たっては、異文化交流フォーラム協力校については各校の先生方にご尽力戴いた。以下に記して感謝申し上げます。

す。(いずれも所在地に基づき北→南の順)

- ・日立北高等学校 : 三本松孝之先生
- ・日立第二高等学校 : 坂本八穂先生
- ・茨城キリスト教学園高等学校 : 大川通昭先生・戸坂卓裕先生
- ・常磐大学高等学校 : 高橋大輔先生
- ・水戸桜ノ牧高等学校 : 市原英輔先生

里美地区在住高校生については、(里美地区には窓口となる高校が存在しないため)里美地区在住の高校生の殆どが集う「FUMI 英語塾」塾長の井坂文彦先生にご尽力を戴いた。記して感謝申し上げます。なお、生徒達の所属校は以下の通りである。

- ・明秀学園日立高等学校
- ・多賀高等学校
- ・太田第一高等学校
- ・佐竹高等学校
- ・茨城キリスト教学園高等学校
- ・水戸第三高等学校

### (1)施設見学

人文学部棟、教育学部棟、図書館、福利センター(茨城大学生活協同組合)の4施設を紹介した。

当初想定を大幅に上回る72名の高校生にお申し込みを戴けたため、大集団での参観・説明では、折角の機会を有効に活用できないと判断し、参加者を3グループに分けて異なるルートで巡回することとし、一カ所に集中しないよう工夫した(図1)。また建物間の案内を担当する学生には、極力、案内される高校生にとっての先輩(卒業生)または2016年度の「プロジェクト実習」で面識のあったメンバーが当たるように割り振りを工夫した(本章6-(9))。

共通	グループA	グループB	グループC
955	図書館玄関集合・点呼	教育学部B棟玄関集合・点呼	人文学部A棟玄関集合・点呼
1000~1025	図書館参観	教育学部参観	人文学部参観
1025~1030	人文学部A棟玄関へ移動	図書館玄関へ移動	教育学部B棟玄関へ移動
1030~1055	人文学部参観	図書館参観	教育学部参観
1055~1100	教育学部B棟玄関へ移動	人文学部A棟玄関へ移動	図書館玄関へ移動
1100~1125	教育学部参観	人文学部参観	図書館参観
1125~1130	生協2Fへ移動	生協1Fへ移動	生協食堂へ移動
	1130~1145 生協2F→1F参観→食堂	1130~1135 生協1F参観→食堂	1130~1140 注文・着席
		1135~1145 注文・着席	1140~1205 食事
	1145~1155 注文・着席	1145~1210 食事	1205~1220 生協2F→1F参観
	1155~1220 食事	1210~1220 生協2F参観	
1220~1225	人文講義棟14番教室に移動		
1225~1230	受付 資料配付 (←般参観者とは別に、14番教室内で実施)		
1230~1250	学部長による新学部説明		
1250~1310	ポスターセッション参観(任意)~10番教室で着席 余裕を持ってスペース確保)		
* 食事は、準備が出来た方から順次始めて下さい * ポスターセッションは1230~1310 人文講義棟・東側~北側廊下、報告会は1315~1625 人文講義棟10番教室です			

図1:ミニ・オープンキャンパス グループ別タイムテーブル

人文学部棟と教育学部棟では、似通った施設も多い。紹介する施設の選択に当たっては、教育学部施設の御案内をご担当下さる同学部の岩佐淳一教授と相談の上、「両学部のコントラストが出やすいラインナップ」となるよう、意を用いた。

人文学部では、「学生の多様な興味関心に応える多彩な専門分野を揃え、卒業後の活躍の場もまた多様である」ことを伝えるべく、①心理学実験室(図2)、②文化遺産実習工房(図3)、③人文図書室(内外の学術雑誌等を収蔵)を紹介した。





図 2: 人文学部(心理学実験室図)  
佐川泰弘人文学部長による説明



図 3: 人文学部(文化遺産実習工房)  
田中裕人文学部副学部長による説明

教育学部では、「教員を志望する学生が、教員の素養として不可欠な学問的知識と実践的な技能について、教育の現場に即して深く学ぶ」ことを伝えるべく、①小学校の教室を模した模擬授業室(図4)、②図書室(小中学校などの教科書や指導書を収蔵)、③普通講義室、④選修別共同研究室(図5)を紹介した。



図 4: 教育学部(模擬教室)  
岩佐淳一教育学部教授による説明



図 5: 教育学部(共同研究室)  
岩佐淳一教育学部教授による説明

図書館では、松土真由美情報課長補佐のご協力を得て、①閲覧室、②開架並びに閉架書庫(図6)、③「検索端末」等、「従来型の図書館」の中核施設と併せ、アクティブ・ラーニングの展開をハード面から保証するものとして2014年に新設された④ラーニング・commons(図7)等を紹介した。



図 6: 図書館(書庫)  
松土真由美情報課長補佐による説明で稠密書架を操作



図 7: 図書館(ラーニングcommons)  
松土真由美情報課長補佐による説明

福利センター（図8・9）では、①書籍部、②購買部を参観し、③学生食堂での学食体験へと進んだ。



図8:福利センターに移動

和やかにかつ素早く…先導者のウデの見せ所



図9:福利センター(玄関ホール)

島田祐一 協水戸購買部店長による説明

## (2)学食体験

参加生徒一人当たり 500 円をお渡しして、福利センター1 階の学生食堂で自由に食事をして貰う形で実施した（図 10）。施設と料理を知って貰うだけでなく、「学食での 500 円の重み」を体感して貰うことを意図した。時間が限られる中、学食初体験の 70 余名に一斉に料理を選び、支払いをし、食事をしてもらうというのは、大人数の収容を前提とする学食であってもハードルの高い課題である。店長の小山浩明様のご協力により、事前に利用方法を説明する資料（図 11）を作成・送付し、高校生専用席として 90 席を確保し、臨時のレジを開設して戴く等の対策を採った結果、遅滞なく終えることができた。

なお、予算については昨年度の里美地区現地報告会での試食会と同様に、筆者のポケットマネーで賄うことを覚悟していたが、佐川学部長の差配により別途予算を調達して戴けた。記して感謝致します。



図 10:学食体験

何にしようかな…

### 学生食堂の利用方法について

茨城大学水戸キャンパス内には、三カ所に食堂があります。当日は、一番規模が大きい大学生協 1F の食堂に御案内します。以下、利用方法を記します。

- 1：お一人当たり 500 円をお渡しします  
\*料金が 500 円未満でも返却の必要はありません。また、500 円を超えての自費での追加も自由です
- 2：サンプルを見て、メニューを決めます  
\*サンプルは、食堂入口（模型）・食堂内（出食口等に画像を掲示）の両方で見ることが出来ます  
\*おかずの内、小皿・小鉢は、店内のケースに並べられている実物を各自で取っていく形です  
\*麦茶（熱い・冷たい）は備え付けの湯飲みでご自由どうぞ
- 3：入口でトレーを取ります
- 4：注文と精算の手順は、以下の通りです  
①ご飯+おかず（食堂床面に赤色の線が引かれています） ②丼物・カレー（同・黄色線）と ③麺類（同・緑色線）とで、精算の順番が違います。

- (1)ごはん+おかず と 丼物・カレー
- i：それぞれ床面の赤線・黄色線に沿って、それぞれの出食窓口に並び、注文します。
  - ii：食事を受け取ります
  - iii：レジで精算します
  - iv：食べ終わったら、食器類は食堂奥・右手の返却口へ

- (2)：麺類
- i：レジで食券を買います
  - ii：床面の緑色線に沿って、出食窓口に並び、食券を出して注文します。
  - iii：食事を受け取ります
  - iv：食べ終わったら、食器類は食堂奥・右手の返却口へ

\*以下、メニューの一部と値段を記します。参考にして下さい。

- ・ご飯：小 (64 円)・中 (97 円)・大 (129 円)
- ・味噌汁：32 円
- ・豚汁：86 円
- ・おかずプレート各種：302 円
- ・小皿各種：108 円～194 円
- ・小鉢各種：43 円～86 円
- ・丼物各種：378 円～496 円（小・中・大あります）
- ・カレー：小 (226 円)・中 (259 円)・大 (345 円)
- ・カツカレー：小 (378 円)・中 (410 円)・大 (496 円)
- ・かき揚げ（そば・うどん）：313 円（大 378 円）
- ・釜玉（そば・うどん）：313 円（大 378 円）
- ・豚汁（そば・うどん）：410 円（大 475 円）
- ・カルポうどん：410 円（大 475 円）
- ・ラーメン（醤油・味噌・辛味噌）：256 円（大 421 円）
- ・濃厚煮干しラーメン：432 円（大 496 円）
- \*ラーメンは、そば・うどんよりも時間がかかります
- ・デザート：ケーキ 108 円・X'mas ケーキ 226 円

図 11:高校生向け利用法説明書

### (3) 新学部説明会

2017年4月から発足する「人文社会科学部」の詳細を、佐川学部長がPPTと配布資料を用いて説明した(図12・13)。

生徒達は、和やかな学食体験から一転して真剣に耳を傾けてくれていた。



右 図12:説明会風景

下 図13:新学部説明スライド

**新しい文系学部が誕生**

**人文社会科学部を紹介します**

地域の次の時代を担える「地域経営力」を身に付けよう!

茨城大学  
Saitama University

2016年12月

受験生のみなさんへ

- 国立大学・本学部で学ぶことのメリットをぜひ知って下さい。学費が安いだけではありません!
- 教育学部は教員養成重視に。人文社会科学部でしか学べない分野(心理学など)が増えます。
- 何を専門に学びたいかをしっかり考え、進路(就職)も少し意識した上で、受験する学科を決めてください。
- みなさんは世界のどこかの「地域」で住み、働きます。そこで、どういことをやれる人になってほしいですか?

大学で学ぶこと:いろいろな人と関わりながら「考える」

- ①問いに対する正解を記憶することではありません。世の中は教員でもわからないことだらけです。
- ②問いや課題に対する自分の答えを見だし、データや根拠を示しながら説明できる力を身につけることが、大学での学びです。
- ③そのために、人々がこれまでどう考え、何を行い、どこで行き詰まっているのか、情報を集め、分析する必要があります。その情報は検索サイトのトップではヒットしません。=だから本や論文を読む必要があります。

大学で学ぶこと:いろいろな人と関わりながら「考える」

- ④国内外の「現場」に出る課題解決型教育を重視します。そこでいろいろな地域や世代の人と関わり、話しながら、問題の実際の核心をとらえ、課題の解決策を探ります。=これで、意識しなくてもコミュニケーション力は向上します。
- ⑤説明、表現する。PPTスライドを用いる。長い文章を書く。

茨城県太田市里見地区でのプロジェクト実習

### (4) ミニ・オープンキャンパスを終えて

今回は初めての試みであり、かつ予想外に多くの高校生に参加して戴けたこともあり、嬉しい悲鳴と本当の悲鳴が相半ばする中での準備となった。幸いにして多くの方々にご支援を戴き、成功裏に終えることができました。本文中にお名前を記すことが出来ませんでした。人文学部ベースの催しにも関わらず快くご協力を戴きました教育学部学部長越生先生、並びに人文図書室の紹介資料を準備戴いた松澤志津代先生・木戸之都子先生、ありがとうございます。その他、紙幅の制約から逐一お名前を記すことができない方々にお詫び申し上げますと共に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

終了後、複数の高校から参加者の感想文や参観レポートをお送り戴いた。そこから得た重要な示唆については第Ⅱ章に詳述している。ここでは、参加者から「普通のオープンキャンパスでは得られない、踏み込んだ体験ができた。」との感想を戴いたことをご紹介したい。今回の催しは、正規のオープンキャンパスとは比べものにならない「ミニ」な催しではあったが、ミニなるが故に提供できる事柄もあったのだと、正しく報われた気持ちになったものである。この喜びを、ご協力戴いた全ての方々と共に共有したい。

## 5：ポスターセッション

活動報告会の開会に先立ち、人文学部講義棟廊下において恒例のポスターセッションを行った。例年、各チームがA1判2枚組でポスターパネルを作成して張り出すと共に長机に成果物を並べ、参観者に自チームの活動を紹介するという形式である。活動報告会本体での、広い会場で制限時間を気にしながらのプレゼンテーションとは対極にある、聞き手と「近い」位置で詳しいご説明をさせて戴ける貴重な機会となっている（図14）。

ポスターは、①学生がワードで作成し、②人文学部の大型プリンタでプリントアウトしたものを、③市販ののり付きパネルに貼って作成する。活動報告会本体でのプレゼン準備で忙しい時期に、結構な負担となり予算もかかる作業である。情報を伝えるだけであれば、模造紙に手書きして段ボールに貼っただけでも用は足りよう。しかし、このような形で「きちんとした物を作って伝える」経験を積むことは重要と考え、この形に拘って来た。

パネル作成は、制作に習熟している歴史・文化遺産コースの大学院生の指導の下、「のりパネ」を使って各チームメンバーが作成した（図15・16）。



図14:ポスターと成果物(2015年度)



図15:大学院生による製作方法の実演  
日本近現代史専攻・有蘭舟仁君の名人芸！



図16:今度は自分で、慎重に・・・  
ミス一回で、損害 ン千円！

2016年度の活動報告会には、過去最多の181人のご参加を戴けた。このためポスターセッションもいつになく大盛況となった。ポスターセッションの時間帯は、同時に活動報告会開会におけるプレゼンのリハーサル時間帯でもあることから、履修生達は昼食もそこそこに対応に追われた。

今年度のポスターセッションで特筆すべきは、プロジェクト実習履修6チームに加えて、水戸農業高等学校食品化学科チームにも出展して戴いたことである。高校の授業時間との兼ね合いで、ポスターパネルの製作だけは本学側で行ったが、ポスター原稿の製作から成果物の展示、会場での説明まで、大学生チームに互して立派にこなしてくれた。

各チームが作成したポスターは、本書Ⅲ-2～7のチーム別報告文の項にそれぞれ「5：ポスターセッションと活動報告」に、また水戸農業高等学校生徒が作成したポスターは、本章図27に収載している。なお、このような収載形態をとった事情についてはⅢ-1-(4)を参照されたい。

また、生徒達がこの日のために里川カボチャのパイを準備してくれてきたことは、忘れられない嬉しいサプライズであった。生徒達は、この3年間、里川カボチャの特性を活かした様々なスイーツを研究・作成してくれた。このパイは連携初年度の試作品4種の一つ（Ⅱ-図5）であり、試食会の際に里川カボチャの特徴である「カボチャ自身の甘さ」が最もよく表現されている品目として、筆者が絶賛したものである。残念ながら、手間がかかること並びに他のスイーツより大ぶりにならざるを得ないことから、学園祭

用としては高価になりすぎてしまい、実際の販売に至らなかった。3年近く前のことであったにも拘わらず、生徒達はその経緯を覚えていて卒業年度の活動報告会に合わせて再度調理して来てくれたのである。しかも業務用の大きな菓子箱一杯という量である。高校生達の気遣いと、投入してくれた時間・労力を思うと、感謝の言葉も見つからない。

早速、履修生達にも声をかけて空き教室に入り込み、嬉しく美味しく戴いた。ふと気付いてみれば、教室の外はポスターセッションの真っ最中である。折角作ってくれた物を・・・と若干躊躇したが、来場者に里川カボチャで作ったスイーツの美味しさを知って戴くには絶好の機会である。いくつかを細かく切って、水戸農業高等学校のポスターの前で急遽来場者向けの試食会を開いた。大好評を博したこと、言うまでもない。

加えて、わざわざ里美からお越し下さった里川カボチャ研究会長荷見誠様ご夫妻が、奥様お手製の里川カボチャのプリンをご持参下さった。新鋭・水戸農業高等学校食品化学科生徒作のパイと円熟の荷見カツ子様お手製のプリンで、空き教室は時ならぬ里川カボチャパーティーの様相を呈し、活動報告会開会直前の緊張感からひととき解放され、至福の時となったのである。

甚だ残念でならないのは、ポスターセッション並びに里川カボチャパーティーの際に撮影した数十枚分の写真データを、撮影者である筆者自身が誤って消去してしまっていたことである。図 14 として 2015 年度の写真に掲載せねばならず、またこの段の記述に図が一切無いのは、この回復不能のミスのなせる技である。悔やんでも悔やみきれない失敗であった。

## 6：活動報告会

活動報告会は、例年通り人文学部 10 番教室で開催した。

内容確定後速やかに大学の HP ( <http://www.ibaraki.ac.jp/events/2016/11/151426.html> ) に掲載すると共に、教育学部・岩佐淳一教授を介して情報文化課程アート文化コースの藤本早耶香さんにチラシ(図 18)を作成して戴き、広報に努めた。

また、会場設営と運営・撤収についても例年通り人文学部歴史・文化遺産コースの院生・学生にアルバイトで協力して戴いた。この仕事は「素人」にはお願いできない。毎年の重要なコース行事である「地域史シンポジウム」( <http://www.ibaraki.ac.jp/events/2017/01/061323.html> ) を運営して来た経験と、先輩から後輩へと代々受け継がれてきたノウハウの蓄積があって初めて可能となる。今年も全くの「お任せ」であったにも関わらず、リーダーの修士 1 年・今川裕喜君以下危なげなく対応してくれ、各種準備に追われる身としては非常に助かった。皆さん、いつもありがとう！

人文学部総務係からも、例年通りの手厚いご支援を戴けた。今年度の人文学部において特記すべきは、学部長以下学部執行部のご支援である。例年、執行部には報告会の挨拶等でご支援を戴いているが、今年度はこれに加えて午前のミニ・オープンキャンパスにおける施設紹介もご担当戴いた(図 2・3)。世にオープンキャンパスは数あれど、学部長・副学部長が自ら高校生を案内するというのはまず無いのではなからうか。記して感謝申し上げます。

報告会は、ミニ・オープンキャンパスから続けて参加してくれた高校生諸君による人数押し上げもあり、過去最多の 181 名の参加者を得て開会となった(図 17)。以下、式次第(図 18)に沿って列記する。なお、式次第 3 の「先進地実地研修」に関しては独立して第 IV 章を立てているため、本章では省略している。併せて第 IV 章もご参照戴ければ幸である。

図 17: 大教室一杯の参加者  
ありがとうございました！



図 18: 活動報告会チラシ並びに式次第

右: チラシ(表面)

下: 式次第(チラシ裏面データ)



平成 28 年度 プロジェクト実習 活動報告会	
0: ポスターセッション(人文講義棟)	12:30-13:10
1: 開会挨拶 田中裕(人文学部副学部長・評議員)	13:15-13:20
2: 趣旨説明 鈴木敦(プロジェクト実習担当教員)	13:20-13:35
3: 先進地実地研修(近郊)報告 小野瀬莉央(茨城大学3年)・佐藤宇輝(茨城大学2年) 司会: 塚本莉沙(茨城大学3年)・高場菜央(茨城キリスト教大学2年)	13:35-13:45
4: プロジェクト実習活動報告第一部 (1) カフェ×まちづくりチーム (2) さとみ・あいチーム (3) E-girls チーム 司会: 高山直人(茨城大学2年)・浅野恵萌(県立水戸農業高等学校3年)	13:45-14:35
5: 休憩	14:35-14:45
6: プロジェクト実習活動報告第二部 (4) Drain MTOチーム (5) コミュニケーションチーム (6) こみフェスチーム 司会: 岩本有彩(茨城大学2年)・石川蓮(県立水戸農業高等学校3年)	14:45-15:35
7: 水戸農業高等学校活動報告 (1) 新堀俊博(食品化学科教諭) (2) 食品化学科生徒	15:35-16:00
8: 来賓講評 金原榮(金原PR企画研究所 代表)	16:00-16:15
9: 2017年度プロジェクト実習のご紹介 神田大吾(プロジェクト実習担当教員)	16:15-16:20
10: 総括と閉会挨拶 佐川泰弘(人文学部学部長) 司会: 森本真由(茨城大学2年)・榊田桃子(常磐大学2年)	16:20-16:25

## (1) 式次第 1： 開会挨拶

田中副学部長の開会挨拶は単なる挨拶に留まらず、プロジェクト実習の意義と位置づけならびに今後の展開に関する簡潔で当を得たご紹介であった。ここに録音から文字化した全文を収載する。



図 19: 田中副学部長挨拶

田中 裕（人文学部副学部長・評議員）

皆様、こんにちは。

本日は、本当にお日柄もよく、このような日にプロジェクト実習の活動報告会を開催できることを大変喜んでおります。

ただいまご紹介にあずかりました、人文学部副学部長、教育改革担当で、この学部の共通プログラム運営委員会の統括役である私より開会のご挨拶を申し上げます。

本プロジェクト実習ですが、平成 22 年度に文部科学省の大学生の就業力育成支援事業が採択をされまして、それを契機に置かれました「根力育成プログラム」の一環で置かれた中核的な科目でございます。

この就業力というのは就職力とは違いまして、就職の後に社会人として活躍していくために必要な知識や技能は当然ですが、課題解決能力や職業観、それから人生観までより広く深い力をつけるというものでございます。

そのようなものを育てるために、茨城大学は全学を挙げてこのプログラムを置いてきた所でございまして「根力育成プログラム」の要素と申しますと、基礎的な素養は当然ですが社会生活力とか行動力とか思考力、それからチームワーキング能力といった所を育てていくということを掲げて、これまで 8 年間にわたって行ってきた活動でございます。

したがって、このプログラムでは、大学に入ってからすぐに、最初のフレッシュマンゼミナールという、どういうふうな力をつけていったらいいのかといったガイダンスを含む科目から始めて、幅広く科目が置かれてきたわけですが、その中でも、特に、先ほどのべたチームワーキング能力、課題解決能力といったようなところを鍛えるという科目が、このプロジェクト実習でございます。プロジェクトベースドラニング、例えば、企画を考えてそれを遂行していくとか、地域に参画して、そこの問題を認識して課題を解決していくということを、授業の中で、自ら進んで考えて行っていくという形の授業でございまして、実際に現実の地域社会において問題を認識して課題を発見し、そしていかに課題解決に導くか、実際に地域の実態に触れ、さまざまな人々と考えて、共に歩んでいくという積極性が必要となってまいります。

その意味で、プロジェクト実習は、まさにこの社会においてみんなと共に生き抜いていくために必要な能力を養うという授業となっております。

ここで皆様に重要なお知らせがございます。来年度、平成 29 年度より茨城大学は全学的に生まれ変わるようになっております。本人文学部も新たに、人文社会科学部として生まれ変わります。

新たに誕生する人文社会科学部ですが、文系の学習を通じて、地域の持続的発展に積極的に関わり、活躍できる人材を幅広く養成するというのを到達目標として掲げました。

全学的な動きの中で、これまでご紹介してきた根力育成プログラムも本年度の入学生を以て終了することになりますが、これまで積み重ねてきたこのプロジェクト実習を始めとする様々な取り組みとその実績を生かしまして、新たなプログラムを人文社会科学部の中に置くことといたしました。それは学部の「地域志向教育プログラム」でございます。

新学部では、主専攻としてメジャーというものを勉強していきますが、そのほかに副専攻としてサブメジャーというものを組み合わせて、その 2 つが卒業要件となる画期的なカリキュラムとなっております。

「人文社会科学部地域志向教育プログラム」は、卒業要件として一つは選択しなければならないサブメジャープログラムのうちのひとつということになります。したがって、これからは学部という身の丈にあった運営になりますが、これまで以上に大学教育の中にはっきりと組み込まれてくるということになりますので、私どもは、より発展的な位置づけになったと考えております。

これまで多くの方に支えていただきまして、このプログラム、プロジェクト実習を運営させていただいてまいりましたが、これまで以上に高配を賜りますようお願い申し上げます、開会のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

(2)式次第 2 趣旨説明：プロジェクト実習担当教員 鈴木敦

各チームの活動報告に先立ち、プロジェクト実習の概要紹介と 2016 年度活動報告会の趣旨説明を行った。使用した PPT を以下に収載する (図 20)。

スライドを極力簡素化するために、No.8 及び 10 は会場配付資料との組み合わせとした。配付資料の 1 は第 I 章図 3、同 3 は第 VII 章全体、同 5 は第 IV 章図 2 に収載している。配付資料の 2 はプロジェクト実習の趣旨説明 PPT であり、本スライドの No.3~7 の詳細版である。また配付資料の 4 は先進地実地研修の趣旨説明であり、本書 IV-1 を PPT 化したものである。

図 20:プロジェクト実習の概要紹介と 2016 年度活動報告会の趣旨説明 PPT


平成28年度 プロジェクト実習  
授業紹介と報告会趣旨説明

プロジェクト実習担当教員 鈴木 敦  
Atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp

1

プロジェクト実習  
開講の背景

文部科学省(2010~2014)  
「大学生の就業力育成支援事業」



事業の中核授業として  
2012年度より開講

2

PBL授業・プロジェクト実習  
PBL授業 とは

**P**roject **B**ased **L**earning  
(課題解決型学習)

アクティブ・ラーニングの一種  
(負荷・効果とも大)

3

プロジェクト実習の構造

授業科目名		プロジェクト実習 A	プロジェクト実習 B	プロジェクト実習 C	プロジェクト実習 D
テーマ		総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
段階	対象 学年	総合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
根拠強化 プログラム	2-4年	プロジェクト 実習A スタッフ編	プロジェクト 実習B スタッフ編	プロジェクト 実習C スタッフ編	プロジェクト 実習D スタッフ編
	3-4年	プロジェクト 実習A リーダー編	プロジェクト 実習B リーダー編	プロジェクト 実習C リーダー編	プロジェクト 実習D リーダー編
	4年	プロジェクト 実習A メンター編	プロジェクト 実習B メンター編	プロジェクト 実習C メンター編	プロジェクト 実習D メンター編

4

プロジェクト実習  
別の角度から見れば

アクティブ・ラーニングの実践  
地域連携・高大連携・異文化理解活動

就業力育成の結果としての、各種連携  
各種連携の結果としての、就業力育成

5

プロジェクト実習の目的

プロジェクトへの取り組みを通じた

実践的・多面的 **学び**

6

プロジェクト実習  
教員・課題提案者のスタンス

~~指導者?~~

**伴走者**

7

プロジェクト実習概要(1) 前期

- (1)プロジェクト課題提案
- (2)課題選択・チーム結成
- (3)チーム活動開始
- (4)履修目的の明確化
- (5)各種スキルの学習
- (6)特別講演(金原榮先生)
- (7)PJ構想報告会
- (8)PJ中間報告会

お手元の資料を  
ご覧下さい

8



## PJ課題から具体的PJへ

**PJ課題: 水戸市の公共交通活性化**

列車・バス・タクシー・・・バス  
 高速バス・市内バス・観光バス・・・市内バス  
 茨城交通バス・関東鉄道バス・・・茨城交通  
 広報・料金・行政・使いやすさ・・・使いやすさ  
 路線・本数・車両・停留所・時刻表・・・時刻表

**具体的PJ: 茨城交通・市内バスの  
時刻表改善案の提言**

9

## プロジェクト実習概要(2) 後期

- (9) チーム活動継続
- (10) 先進地実地研修(近郊・遠郊)
- (11) PJ中間報告会
- (12) チーム別・ピーク活動
- (13) 活動報告会
- (14) リフレクション
- (15) 報告書作成

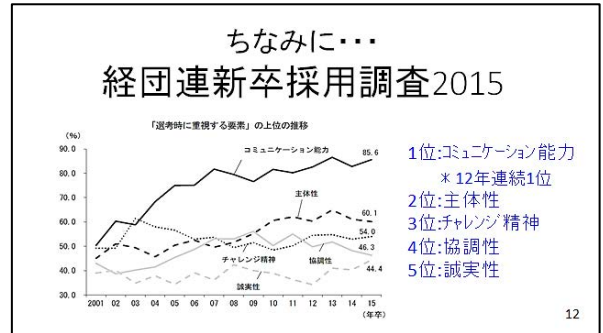
お手元の資料を  
ご覧ください

10

## プロジェクト実習 養成される(筈の)能力

- (1) 未知の世界に踏み出す **チャレンジ精神**
- (2) 自ら考えて行動する **主体性**
- (3) 自らの役割をきちんと果たす **誠実性**
- (4) チームの一員としての **協調性**
- (5) 学内・学外の様々な立場の方々と、しっかり意思疎通できる **コミュニケーション能力**

11



## プロジェクト実習 活動報告会開催の趣旨

- (1) 活動の総括
- (2) ご支援下さった皆様へのご報告と御礼
- (3) 対学内・対学外広報

13

## プロジェクト実習 活動報告会開催の趣旨

(4) 各年度の(隠れ)テーマ

- 2012年度: PJ実習、3大学連携で始動!
- 2013年度: 受講生のコンピテンシー向上
- 2014年度: 学外からのご支援の拡大
- 2015年度: 授業改善の取り組み

14

## 2016年度は・・・ 高大連携

午前の部: ミニ・キャンパスツアー+学食体験  
10校・71名

午後の部: 水戸農業高等学校食品化学科3年生  
ポスターセッション参加  
過去3年間の活動報告と司会

15

最後に、ここだけの話ですが・・・ f(^\_^);

PJ実習参加の水農食化生が  
茨城キリスト教大学文学部  
**合格!**

水農食品化学科 ➡ 茨キリ文学部

➡ **単位互換** ➡ **茨大プロジェクト実習**

16

## では・・・ スタート!

17

## ご清聴 感謝申し上げます

18

(3)式次第 4・6：プロジェクト実習活動報告

2016年度プロジェクト実習履修6チームが、プロジェクト実習A→Dの順で活動報告を行った。使用したPPTを以下に収載する(図21~26)。

活動報告会での持ち時間は1チーム当たり12分と非常に限られる。加えて「時系列に沿った活動内容報告」が主眼ではなく「活動を通じて何を学んだか」に軸足を置いた報告が求められている。このため下記PPTは必ずしも具体的な活動の全てを紹介するものではない。活動の全容についてはⅢ-2~7のチーム別活動報告を参照されたい。また、学生の報告に対する金原榮先生のご講評については、本章6-(6)に収載している。併せてご参照戴くことで「具体的活動」「学生の学び」「活動と学びに関する第三者評価」の三者が揃うという構成である(Ⅲ-1-(4))。

図21:カフェ×まちづくりチーム PPT

プロジェクト実習A  
カフェ×まちづくり  
活動報告

2016.12.10  
岩本 有彩 栗原 将也  
坂口 芹奈 跡辺 朱理  
岩出 夏輝 肥後 亮志

目次

- カフェ×まちづくり 目標
- 今年度 活動報告
- まとめ

カフェ×まちづくり 目標

活動支援者  
地域のカフェ?  
他

地域のカフェにご協力をお願いし、地域と、大学とを様々なアプローチでつなげる。

プロジェクト実習A

水戸市、笠間市  
他

地域へ  
大学をよみ地域に根付いたものにし、地域と大学の連携を促す。

自らへ  
地域に根付いた活動の体験から、地域感を育み、地域社会への参画体験をする。

活動報告  
0.某県内コーヒーチェーン店様とのコラボレーション

5月31日  
ご協力の依頼

6月末  
商品開発案提出

9月  
水戸農業高校様にて、22日に試食会を設定

ご快諾  
→コラボレーション開始

7月中旬  
第1審査 通過  
8月末日  
最終審査 通過

9月16日  
本社より協力できないとのご連絡、コラボレーション中止。

活動報告  
1.里川かぼちゃ スイーツ開発

[目的]

- ・特産品のおいしさをより多くの人に知って頂く
- ・地域の方々との交流を深める

[活動内容]

- ・里川かぼちゃ 収穫祭へ参加
- ・常陸太田市 里美地区の農家様より里川かぼちゃをお譲り頂く。
- ・水戸農業高校 食品化学科の生徒様のご協力で、里川かぼちゃのスイーツのレシピを考案していただく。

収穫祭の様子(2016.10.15)

たくさん収穫できました!

試食会の様子(2016.9.22)



・かぼちゃのタルト  
・かぼちゃのパイ  
・かぼちゃのシフォン  
ケーキ  
かぼちゃのミル  
フィーユ  
の4種類

7

当初→県内コーヒーチェーン店様とのコラボレーションで使用するスイーツとしての開発。

シフト!

**提携先を変える**

地域のカフェで、かぼちゃのスイーツを楽しんでいただく。

8

活動報告  
2.豊作祭 試食コーナー  
with さとみ・あいチーム

[参加の目的]

- ・里美地区の方々への感謝の気持ちをお伝えする
- ・特産品を使用したスイーツを、地域の皆様と楽しむ。

[活動内容]

- ・豊作祭
- ・里川かぼちゃのスイーツ作成、試食

9

豊作祭の様子



10

良かったこと・反省点

[良かったこと]

- ・かぼちゃのスイーツを通して皆様と交流することができた。
- ・作成にも関わることができた。

[反省点]

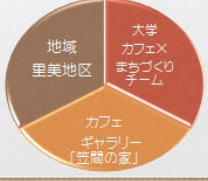
- ・日程調整がうまくいかず、参加するメンバーがあまり確保できなかった。

11

活動報告  
3.笠間の家 スイーツ提供

[概要]

ギャラリー「笠間の家」オーナー様のご厚意で、ギャラリー併設の小さなカフェにて、里川かぼちゃを使用したスイーツの提供をする。



大学  
カフェX  
まごづくり  
チーム

地域  
里美地区

カフェ  
ギャラリー  
「笠間の家」

大学と地域をつなぐ!

12



12月1日より提供開始!

13

反省点(年間を通して)

- ・レシピ開発や実際の作成には関わらず、一任になってしまった。
- ・メンバーの日程調整がうまくいかず、全体の活動を通して参加人数があまり確保できなかった。
- ・チーム内での情報共有が遅れ、情報量に偏りがあり、しばしば混乱してしまっただ。
- ・チーム内での役割分担がうまくいかず、活動量にも偏りが出てしまった。

14

## 良かったこと・学んだこと

- 地域の農家様や生徒様たちと**ふれあう**ことができた。
- 茨城の**自然**を感じた上で、スイーツになることでその喜びが**一層高まった**。
- プロジェクト一年目ということもあり、数々の挫折を経験したが、「**提案先を変える**」という形に迅速にシフトし、活動を継続することに成功した。
- 持ち前の**チームワーク**と**地域の方々からの幅広い支援**の賜物
- 危機に直面した時に**素早く頭を切り替え、次の策へと移ることが重要だと学んだ**。

15

## 今後の展望

- 「笠間の家」スイーツ提供 広報活動  
→より多くの方に味わっていただきたい。
- 提携先の拡大  
→大学と地域の輪を広げていきたい。

16


## お世話になった方々

- 茨城県立水戸農業高校
  - 食品科学科 生徒の皆さま
  - 食品科学科 新堀 俊博先生
- ギャラリー「笠間の家」 田代 卓様
- 荷見様および常陸太田市 里美地区の皆さま
- プロジェクト実習 さとみ・あいチームの皆さま

本当にありがとうございました！

17

## ご清聴ありがとうございました。



18

図 22:さとみ・あいチーム PPT

# さとみ・あいの プロジェクト実習



1

## 目次

- さとみ・あい活動目的
- メンバー紹介
- (今年の)さとみ・あいのモットー
- 今年の活動
- さとみ・あいの強み
- 学んだこと
- 反省

2

## さとみ・あい活動目的

学生視点で里美の魅力をPRする  
里美を外の人に知ってもらう  
里美との新たなつながりづくりのお手伝いをする

3

## メンバー紹介



4

## (今年の) さとみ・あい motto

- ・楽しき中に成果有り。
- ・親しき仲にも礼儀有り。
- ・歴史の中に今が有り、

5

## 今年の主な活動

- さとみの魅力を実感する  
さとみ・清喫DAY  
味覚祭
- さとみの葉のブランド化  
わら納豆プロジェクト
- 「里川カボチャ」を中心とした魅力発信  
ときわ祭  
豊作祭

6

## さとみ・あいの強み

- ・多様な連携先
- ・個性豊かなメンバーたち
- ・成果の可視化



7

## 多様な連携先

- ・「わら納豆プロジェクト」  
教育学部岩佐淳一教授  
里美倶楽部様
- ・里川カボチャ研究会 荷見誠様 荷見カツ子様御夫妻
- ・「ときわ祭」  
水戸農業高校食品化学科様  
里美ふるさと振興公社様
- ・「豊作祭」  
プロジェクト実習の皆様



8

## 新たな連携先

- ・常盤大学プロジェクト科目の皆様



9

## 個性豊かなメンバー

- 「豊作祭」「ときわ祭」
- ・動画担当
- ・演出担当
- ・調理担当
- ・司会担当
- ・渉外担当
- ・デザイン担当
- ・グレイ担当
- ・お目付担当



10

## 成果の可視化

- ・茨城新聞 (2016年10月1日付)
- ・所さんの目がテン (2016年10月22日放送回)
- ・日本農業新聞(2016年11月2日付)



11

## 学んだこと

- ・革新と継続のバランス
- ・潮目



12

## 潮目

- ・それぞれの「強み」を活かすことで、可能性が広がる。
- ・「ワザ」と「権威」  
→自分たちが持つものをどう活かすか?  
→自分たちにはないものをどう用意するか?

13

## 革新と継続のバランス

- ・茨苑祭未出店 と ときわ祭出店
- ※どんなプロジェクトにも通ずるのではないかな。

14

反省

- 甘え

連携先に対する「甘え」

目的達成に対する「甘え」

さとみ・あいの  
プロジェクト実習

お世話になった方々

数知れず。

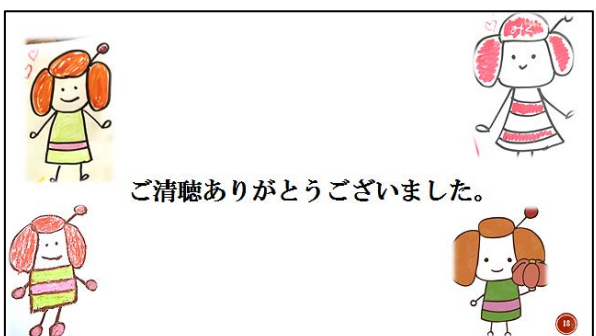


図 23: E-girls チーム PPT

IC×IU=E-girlsチーム

## 異文化交流プロジェクト 活動報告会

茨城キリスト教大学2年 安藤 沙彩  
飯村 祐美  
大野 愛恵  
高場 菜央  
茨城大学3年 鈴木 美緒

1

### 異文化交流プロジェクト 2016

茨城キリスト教大学 (日本人学生と留学生)  
茨城大学の留学生  
水戸市又は日立市 近郊の高校生

たとえば・・・

- 1.留学生と高校生、大学生が交流するフォーラムを開く
- 2.大学文化祭や小学校で異文化を紹介する など

プロジェクト実習C Since2012

日立市教育委員会

茨城キリスト教大学 茨城大学(茨苑会館)

地域へ

高校と大学の連携 異文化理解の促進

自らへ

留学生と日本人との交流活動を通じ、自らも異文化理解を深める

## チーム概要

二大学連携  
茨城キリスト教大学(IC) × 茨城大学(IU)

English + 5girls

└───┬───> E-girls

3

## 目次

1. 現状
2. プロジェクト概要
3. 企画内容
4. アンケート結果
5. 良かった点・改善点
6. 全体を通して学んだこと
7. 今後の活動
8. 御礼

4

### 現状

グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である  
文部科学省より  
 (http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)

観光立国を目指す日本

↓

多くの外国人が日本を訪れる

↓

外国人に対応できる人材を育成しなければならない

5

### 現状

文化の面から興味を持ってもらう

↓

## 異文化交流プロジェクト

6

### プロジェクト概要

〈異文化交流プロジェクト〉

日時: 平成28年7月18日(月・祝)  
 場所: 茨城キリスト教大学3号館  
 参加者: 高校生33名  
 (茨城キリスト教学園高等学校様, 日立第二高等学校様, 水戸第二高等学校様)  
 留学生10名  
 (茨城キリスト教大学, 茨城大学)  
 日本人大学生5名  
 (茨城キリスト教大学, 茨城大学)

7

### プロジェクト概要

イベント企画

↓

高校生・留学生の確保

↓

会場設営

↓

イベント開催

8

### 企画内容

アイスブレイク(名前ゲーム)



9

### 企画内容

フリートーク



10

### 企画内容

ダンス *It's a small world* (俵田来未さん)



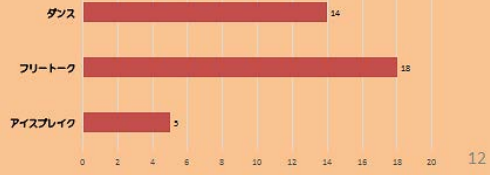
11

### アンケート結果

回答者: 参加者33名

Q: 今回参加していかがでしたか?  
 楽しかった 33人 普通 0人 楽しくなかった 0人

Q: 一番楽しかった企画は何ですか?



企画内容	人数
ダンス	14
フリートーク	18
アイスブレイク	1

12

## アンケート結果

### 〈分析〉

- ・フリートークが楽しかった。  
→留学生と直接お話ししたいと考える生徒が多いことが分かった
- ・国は違っても言葉が違うだけだなと感じた。私も英語をもっと頑張る。  
→プロジェクトに参加したことで英語に対する意識が高まった生徒が多い

13

## アンケート結果

- ・英語を日常会話レベルで話せればもっと楽しめるのではないかと思う。英語を極めていきたい。  
→英語に対するイメージに変化が見られた
- ・アイスブレイクやフリートークではまだコミュニケーションが少なかったけどダンスで距離を縮められたと思う。  
→ダンスをすることによって、積極的に留学生に話しかけようとする生徒が見られた

14

## 良かった点・改善点

### 〈良かった点〉

- ・高校生に楽しんでもらえるような企画ができた
- ・アクシデントが起こった際によりよい対応ができるように努力した

### 〈改善点〉

- ・準備が直前になってしまったので、計画的に準備するべきだった
- ・2大学間での連携に欠けたところがあったため、情報共有を徹底するべきだった

## 全体を通して学んだこと

- (1) 二大学連携の難しさ
- (2) 社会人としての基礎力知識の修得
- (3) アクシデントへの対応力

## 全体を通して学んだこと

- (1) 二大学連携の難しさ  
5人そろって集まる機会が少なかった  
→一人ひとりの活動量に偏りが出てしまった  
情報共有ができなかった
- ### 〈改善点〉
- ①Skypeを有効活用するべきだった
  - ②仕事の分担を適切に行うべきだった

## 全体を通して学んだこと

- (2) 社会人としての基礎力知識の修得
- ・議事録, 活動録
  - ・メールのやり取り
  - ・渉外
  - ・ソフトの操作法
- ビジネス能力

↓  
社会人として求められる最低限の能力を身につけることができた

## 全体を通して学んだこと

- (3) アクシデントへの対応力
- ・予想外の出来事に対して機転を利かせた
  - ・今ある状況に留まらず別の方法を模索した
  - ・あきらめることなく問題解決に尽力した

↓  
「ピンチはチャンス」「失敗は成功の母」

## 今後の活動

- ①「小学校国際理解活動」  
期間: 平成28年12月中旬～平成29年2月上旬  
対象: 日立市内の小学校  
内容: 異文化の紹介  
(アメリカ・ウクライナ, イギリス・キルギス)
- ②「New Year's party for international students」  
日時: 平成28年1月21日(土) 〈予定〉  
対象: 留学生  
内容: 日本文化の体験



## 御礼

大川通昭教頭先生をはじめ、  
茨城キリスト教学園高等学校の皆さま  
坂本八穂先生をはじめ、  
日立第二高等学校の皆さま  
谷萩淳子先生をはじめ、  
水戸第二高等学校の皆さま  
茨城キリスト教大学 入試広報部の皆さま  
茨城キリスト教大学 国際理解センターの皆さま  
茨城大学、茨城キリスト教大学留学生の皆さま



図 24: Domaine MITO チーム

## Domaine MITOチーム活動報告

鈴木勇希(リーダー) 石橋翔太郎(副リーダー)  
佐野智太(会計) 飯塚子都音(書記)  
高山直人 三角裕斗  
長澤賢司

## 目次

- > チーム紹介・活動目的
- > Domaine MITO・まちなかワイナリーについて
- > 活動内容
  - ...醸造体験
  - ...インターンシップ  
(ランドネきたかんマルシェ、水戸まちなかフェスティバル)
  - ...サイト作成
- > 今後の予定
- > 一年を振り返って

1

## チーム紹介・活動目的

〈Domaine MITOチーム〉

- ・茨城大学の人文学部2年生7人のプロジェクトチーム
- ・Domaine MITO株式会社様の協力のもとで活動

〈活動の目的〉

- ・学生視点でのDomaine MITO株式会社様のPR
- ・水戸市の中心市街地活性化への貢献

2

## Domaine MITO(ドメヌ水戸)

—2015年に設立され、今年「泉町会館」でまちなかワイナリーをオープン

栽培

収穫

醸造

販売・体験会

水戸の活性化

3

## まちなかワイナリーとは？

まちなかワイナリー		一般的なワイナリー	
街の中にある	手軽に体験ができる	農村にある	畑と隣接している
地域のコミュニティの場になる	全国的に珍しい	風景が楽しめる	車の移動が主

4

## 醸造体験

【日時】主に夏季休業中の数日間  
【場所】泉町会館(ワイナリー)  
【活動内容】つくばのワイナリーでのぶどう収穫  
泉町会館で醸造、びん詰、ラベル貼りを体験

〈成果〉

- ・まちなかワイナリーの魅力を認識をすることができた
- ・実際に体験し、それまでの醸造に対するあやふやだったイメージを固めることができた

5



### インターンシップ:ランドネきたかんマルシェ

【日時】2016年9月18日～20日の三日間  
 【場所】新宿駅西ロイイベントコーナー  
 【活動内容】Domaine MITOの赤ワインとロゼワインの先行販売のサポート

北関東4市(宇都宮、前橋、水戸、高崎)の共同で初めて開催された物産フェア

### 成果と反省点

イベント後にアンケート調査などの結果分析、反省会を実施  
 〈成果〉

- ・チームで情報共有ができた
- ・お客様に商品をアピールすることの難しさを知ることができた
- ・ターゲット層の事前リサーチ不足
- ・ワインボトルの縮小化が検討
- ・販売の役割分担が曖昧だった

8



### インターンシップ:水戸まちなかフェスティバル

【日時】2016年9月25日10時～16時  
 【場所】水戸中心市街地(国道50号沿い)  
 【活動内容】・泉町二丁目商店街振興組合様のブースにてDomaine MITO株式会社様のカップワイン販売のサポート  
 ・Domaine MITO株式会社様が主催したブドウ収穫ツアーに添乗員として参加

10



### 成果と反省点

〈成果〉

- ・たくさんのお客様の生の声を聞くことができた
- ・お客様との会話の中でニーズを把握することができた
- ・体験型であることの重要性を再認識できた
- ・チームの役割分担がうまくできた

多くの成果を得ることができ、目立った反省点はなかった

12

### サイト作成

【目的】プロジェクトチームがどのような活動をし、Domaine MITO株式会社様に関わってきたかを紹介する。

【方法】プラスデザインズ・カワノへ様にサイトの作成を依頼し、Domaine MITO株式会社様のHPに「学生の活動」のページとして組み込んでいただきました。

【費用】「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」を活用し、事業計画書の提出、プレゼン行い13万5千円の補助金をいただきました。

13

### 活動を振り返って

- ・業務にまぢかに関わり、手元にある商品をいかに活用するかを学ぶことができた。
- ・様々な場面に同行させていただき、貴重な体験が多くできた。
- ・学外の人との交流を通して社会人としてのマナーを学んだ
- ・チーム内の情報共有がうまくいかなかった場面があった。
- ・学生だけでは力不足で実行できることに制限がかかってしまった

14

### 今後の予定

- ・笠間焼プロジェクト  
20代から40代のビジネスパーソンをターゲットとしたワインの販売方法を検討中

「いつもよりちょっといいワイン」を友達や家族と楽しめる販売方法

- ・サイトの更新

15

## お世話になった皆様

- ・Domaine MITO株式会社 宮本結太郎様、皆様
- ・いばらきワイン産業連絡協議会 会長 西村勝男様
- ・プラスデザインズ・カワノベ 川野辺悦子様

16

## ご清聴ありがとうございました。

Domaine MITOチーム

17

図 25:コミュニケーションチーム PPT

1

# コミュニケーショントラブル をなくそうプロジェクト ～最終報告～

◆コミュニケーションチーム◆

リーダー：森本真由	書記：波崎大知
副リーダー：森遥香	会計：入江美穂
副リーダー：佐藤宇輝	アドバイザー：猪狩彩夏
	アドバイザー：磯貝麻菜

コミュニケーションチーム

2016/12/10

2

## 〈目次〉

1. 目標設定までの経緯
2. 目標に向けた各ツールの連携
3. これまでの活動
4. 茨城大学生へのアンケート&クイズ
5. インターン
6. リーフレット
7. twitter
8. Web
9. コミュニケーションチームとしての活動を通して
10. お世話になった方々

コミュニケーションチーム

2016/12/10

3

## 1.目標設定までの経緯

コミュニケーショントラブルとは？

↓

大学生である私たちにとって身近なコミュニケーションツールは？

LINE      twitter      メール

↓

それらのツールによるトラブルは？

SNS上での炎上      メールマナーの欠如

↓

大学生のニーズに合うものは？

大学生生活や就活にも使えるメールマナーの周知

コミュニケーションチーム

2016/12/10

4

## 2.目標に向けた各ツールの連携

目標：茨城大学の1～3年生に向け、社会でコミュニケーションをとる上でのメールマナーの周知

Webへ誘導

【Web】

- ・リーフレット/Twitterから誘導された学生に対し、以下の内容を案内
- 就職活動大学での活動の参考としてもらう(コンテンツ内容)
- ・メールマナーの基礎
- ・メールの送る場合別の例文

【リーフレット】

- ・学内で配布
- ・注意喚起を目的とし、Webへ誘導(内容)
- ・アンケート結果、クイズ
- ・WebのURL

【Twitter】

- ・SNSの特徴である拡散機能を活用
- ・プロジェクト活動の存在を告知し、Webへ誘導(内容)
- ・WebのURL

コミュニケーションチーム

2016/12/10

5

## 3.これまでの活動

<p><b>(プロジェクトスタート)</b></p> <p>6月2日：チームの役割決定</p> <p>6月10日：構想発表</p> <p>6月24日：打ち合わせ@茨城大学 -NITコミュニケーションズ株式会社 吉川様</p>	<p><b>成果・感想等</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・メンバーがなかなか集まらないまま構想発表を迎えてしまった。</li> <li>・吉川様にアドバイスをいただき、何とか方向性がまとまった。</li> </ul>
<p><b>(事前調査)</b></p> <p>6月25日 ～6月30日：アンケート設計-実施対象・方法、内容</p> <p>7月1日 ～7月4日：先生方への相談-実施案の具体化</p> <p>7月5日：アンケート実施</p>	<p><b>成果・感想等</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートを作成、配布。約200の回答を得ることができた。</li> <li>・アンケートの作成が簡単なことではないことを知った。</li> </ul>

▲中間発表会①(7月15日)

2016/12/10

<p><b>(取り組みの具体化)</b></p> <p>7月19日 ～8月19日：成果の手順の検討</p> <p>8月9日：打ち合わせ@茨城大学 -NITコミュニケーションズ株式会社 吉川様</p>	<p><b>成果・感想等</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中間発表の反省点などの話し合い</li> <li>→振り返りを行うことで今後につなげることができた。</li> <li>・何をやるにしても、筋が通った理由づけがないといけない。</li> </ul>
<p><b>(インターンシップ)</b></p> <p>8月18、19日：内容はスライドNo.14 @NITコミュニケーションズ株式会社</p>	<p><b>成果・感想等</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Webデザインを学ぶことができた。</li> <li>・働いている方のご意見が聞けて、今後キャリアを考えていくうえで参考になった。</li> </ul>
<p><b>(取り組みの実施)</b></p> <p>8月23日：第2回アンケート実施 @社会人に必要なIT・インターネット基礎力</p> <p>9月1日 ～9月30日：リーフレット&amp;Web作成</p> <p>10月19日：学務からリーフレットの印刷を発注</p>	<p><b>成果・感想等</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートで約300もの回答が得られた。</li> <li>・アドバイザーの職員さんのお力添えもあって、チームオリジナルのリーフレットとWebを作成することができた。</li> <li>・鈴木先生、人文学部の学務の方のお力添えにより、無事発注できた。</li> </ul>

▲中間発表会②(10月14日)

2016/12/10

**(リーフレット配布・Web配信スタート)**  
9月30日：ホームページ開設

10月25日：リーフレット納品

11月1日  
11月4日  
11月9日 } リーフレット配布

**(最終報告会に向けて)**  
11月28日  
~11月30日：ポスター制作

12月2日~：パネル作成

**成果・感想**  
・リーフレット配布の許可を自分たちでいただかなければならなかった。  
・先生方とうまく連絡が取れないこともあった。  
・配布は分担していたが、担当通りにいかないこともあって焦ることもあったが、無事に配布することができた。

**成果・感想**  
・今までやってきたものを文章にすることでこれまでの活動や成果を振り返ることができた。

**最終報告会当日**

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 4-1.茨城大学生へのアンケート&クイズ

「メール利用に関する大学生の意識調査」

～第1回実施～  
▶ 7月5日 (火)  
▶ 対象：火曜5限  
▶ 『社会人入門』  
▶ 受講者 男女 188人

～第2回実施～  
▶ 8月23日 (火) 実施  
▶ 対象：集中講義  
▶ 『社会人に必要なIT・インターネット基礎力』  
▶ 受講者 男女 116人

アンケート総数  
188+116=304

ご協力いただいた方々  
NIT コミュニケーションズ  
アプリケーションサービ部門 第五グループ (第二チーム) 担当課長 吉川昌吾様  
アプリケーションサービ部門 第五グループ (第二チーム) 川口高弘様

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 4-2.アンケート結果

メールに不安はありますか？

誰にメールを送りますか？

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 4-3.クイズの結果

クイズ5問の正答率

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 5. インターンシップ

1日目(8/18)	担当	内容
13:15	吉川様・川口様	・講義のオンラインワークシート到着中が受付 (4022授業室)
13:15-13:30	吉川様・川口様	・オリエンテーション
13:30-13:50	川口様	・会社案内 ・NITコミュニケーションズとアプリケーション&コンテンツサービス部の事業について (説明)
13:50-14:15	吉川様	・『リノベーション事業紹介』 ・CGMグループのCSRソリューション事例
14:15-17:15	吉川様・川口様	・自由発表 ・自由発表の発表の発表
17:15		・解散

8/18～19日の日程で東京・田町グランパークタワーにて実施

通信業界やNTT  
コムの実業についての説明

グループ課題  
▶ 目標を大学生に  
▶ メールのマナーやルールをわかりやすく手軽な方法で伝える  
▶ 設定Webリーフレット、Twitterのアカウントの作成を決定

2日目(8/19)

担当	内容	
9:30-10:30	・グループ課題 →グループでNITのWebサイトで検索する内容について講義	
10:30-12:00	川口様	・『英語検定研究』 (説明)
12:00-13:00	・昼食	
13:00-14:00	吉川様	・Webマーケティングの講義
14:00-15:30	吉川様・川口様	・グループ課題 →Web編での検索方法、今後の実施内容、スケジュール確認
15:30-17:00	吉川様・川口様	・発表 (2分発表) を受け、お互いにコメント →最終的なアドバイス
17:00	・解散	

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 6. リーフレット

Webにつなげる手段

- ▶ 不安を掻き立てる
  - ・ 全体的に暗いイメージで
  - ▶ 不安になる根拠が必要
  - ▶ アンケートの結果を提示
  - ▶ QRコードにたどり着かせる
  - ・ 読者の不安を文字にする
  - ・ Webが不安の解消になるかも?...と思わせる

Webにアクセスさせるために...

- 1) 載せる情報の取捨選択
- 2) 読者に共感してもらうためのコメントの内容

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 7. twitter

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 8. Web①

**目的**

Webサイトを立ち上げそこでメールマナーについて発信することで大学生にメールを送る時のルール、マナーを分かりやすく伝えること

↓

1 アポイント 2 基礎 3 研究室訪問  
4 欠席・遅刻 5 提出物忘れ 6 英語のメール

状況別にテンプレートを作成

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 8. Web②

http://communicationbaraki.web.fc2.com/index.html

コミュニケーションチーム 2016/12/10

### 8. Web③

シンプルかつメールの画面を意識したテンプレートを作成

コミュニケーションチーム 2016/12/10



- ### 9. コミュニケーションチームとしての活動を通して①
- ▶ アンケート・リーフレット・Web の作成にあたって
    - ▶ 自分たちが必要としている情報を見つける。
      - 自分たちの活動の趣向となるデータを得るには？
      - 質問の聞き方（単回答・複数回答・自由記述...など）
    - ▶ 読者や閲覧者が何を求めているかを考えながら作成する難しさ。
      - 情報の多すぎ・少なすぎ、ずれているものは×。
      - 必要なものを必要な人に。
    - ▶ 自分たちに知識・技術がないからこそ、教えていただけるありがたさを知った。
      - アドバイザーに作成方法を1から親身に教えていただいた。
      - 先生方や人文学部の手帳の方に発注手続きの手順を教えていただいた。
      - お力を借りるということは、その方のお時間をいただくということ。

- ### 9. コミュニケーションチームとしての活動を通して②
- ▶ チームとして
    - ▶ リーダーは常に自分のチームにかかわることを把握しておかなければ、連携が取れない。
    - ▶ 緊急事態の時に誰かがカバーできるように準備しておくことが必要。
      - チーム全員がお互いの行動等を確認しておくことが望ましい。
    - ▶ 慎重になることも大事だが、思い切って次のステップに進むことも大切。
  - ▶ 民間企業の方との協力を通して
    - ▶ 誰かに提案・発表するときは、筋が通った理由づけが必要。
      - 数字が一番説得力がある。
    - ▶ メールで連絡を取る際は、内容を簡潔にわかりやすくまとめる。
      - 今後のスケジュールを伝えておく、相互に把握・行動しやすい。
    - ▶ 遠方から打ち合わせに来ていただけたありがたさ。
- コミュニケーションチーム\* お忙しい中、お時間をいただいている以上、真のある打ち合わせを。

### 10. お世話になった方々

NTT コミュニケーションズ  
 アプリケーションサービス部門 第五グループ（第二チーム）担当課長 吉川昌吾様  
 アプリケーションサービス部門 第五グループ（第二チーム）川口高弘様  
 人文学部学務係  
 波多野様  
 石川様

ありがとうございました

### 21

ご清聴ありがとうございました。

コミュニケーションチーム

図 26: こみっとフェスティバルチーム PPT

## プロジェクト実習D こみっとフェスティバルチーム

**メンバー**

リーダー 佐藤李咲	副リーダー 鈴木千尋
書記 小野瀬莉央	書記 井上知美
書記 山口紗奈子	会計 塚本莉沙

## 目次

1. チーム紹介
2. こみっとフェスティバルとは？
3. 活動報告
  - ・主な活動
  - ・ボランティア活動への参加
  - ・水戸まちなかフェスティバル
  - ・茨苑祭
  - ・フリーペーパー作成
4. 今後の予定:こみっとフェスティバル
5. 謝辞

## チーム紹介

- 水戸市役所 市民生活課協働係 橋崎様 沼田様
- こみっとフェスティバルの成功のために...
  - ・様々な場面での**宣伝活動**
  - ・イベントの運営に携わり、**学生の視点**を活かしてよりよいものに

3

## こみっとフェスティバル (こみフェス) とは？

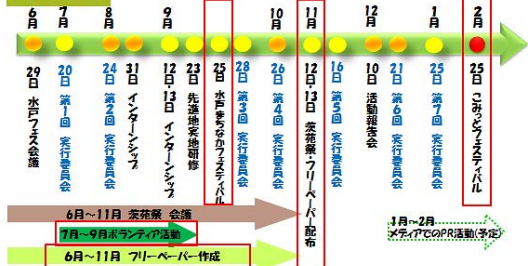
・水戸市で活動する市民活動団体(NPO・ボランティア団体等)が集まり、活動展示やステージ発表の他、相談や体験ができるイベント！

- 【目的】
- ・市民の方々に市民活動団体の活動を知って身近に感じてもらうこと
  - ・団体同士の交流を図ること



4

## 活動報告 主な活動



5

## 活動報告 ボランティア活動への参加

### 【参加の目的】

私たちが市民活動団体のことを知らないままでは、説得力がない

実際に活動に参加して体感することで、  
理解を深める  
実行委員会の方々と交流を持つことで、  
関係性をつくる

6

## 活動報告 ボランティア活動への参加

### 【活動】

7月31日 第3回小中学生英語スピーチ大会  
(茨城県世界青少年コミュニケーションクラブ 様)  
【内容】会場設営、運営補助



8月21日 歴史館まつり (カブラ)  
(水戸子どもの劇場 様)  
【内容】子供と一緒に遊ぶ、運営補助



7

## 活動報告 ボランティア活動への参加

8月25日 老人ホーム訪問

(はつらつサークル 様)  
【内容】レクリエーションの参加・補助



9月3日 子ども食堂 (にここ食堂)

(茨城保健生活協同組合 様)  
【内容】活動の様子を見学、実食



8

## 活動報告 ボランティア活動への参加

### 【活動の成果】

- ボランティアにも様々な活動があることを知った
- 活動の実態や役割を知った
- 実行委員会の方々と交流を持つことができた

9

## 活動報告 水戸まちなかフェスティバル

### 【参加の目的】

こみっとフェスティバルの周知・宣伝  
活動資金の調達

### 【活動】

9月25日(日)10:00~16:00  
泉町二丁目商店街振興組合 様のスペースを一部お借りして出店  
【内容】  
・石に絵を描く体験コーナー  
・手作り小物の販売  
・展示やチラシ配布によるこみフェスの宣伝



10

## 活動報告 水戸まちなかフェスティバル

### 【活動の成果】

- 体験コーナー：126名の参加者
- 昨年度の反省点の改善  
昨年度→運営に精一杯で本来の目的である**宣伝が疎か**に...  
今年度→**袋に、こみフェスに関する手作りチラシを入れて渡す**



周知活動ができた

11

## 活動報告 茨苑祭 (茨城大学 学園祭)

### 【参加の目的】

こみっとフェスティバルの周知・宣伝

### 【活動】

11月12日(土)、13日(日)9:30~15:30  
茨城大学人文講義棟23番教室  
【内容】  
1日目 連鶴・折り紙体験 (協力:はつらつサークル 様)  
2日目 カブラ(積み木)体験 (協力:水戸子どもの劇場 様)  
両日 展示、チラシ・フリーペーパーの配布



12

### 活動報告 茨苑祭（茨城大学 学園祭）

**【活動の成果】**

- 2日間で**121名**の来場者
- 市民活動団体・来場者・他チームとの交流
- フリーペーパーを配布**する→ボランティアをより身近に

一方で・・・  
企画自体は昨年度の活動と一緒に、  
新しいことに挑戦できなかったという反省点も

13

### 活動報告 フリーペーパー作成

**【活動の背景】**

- ・市民活動団体の存在を知ってもらうこと
- ・少しでもボランティア活動に興味を持ってもらうこと

を目指して、フリーペーパーを作成


**意識調査(アンケート)を実施**

14

### 活動報告 フリーペーパー作成

**【意識調査】**

調査対象者:茨城大学の学生294名  
実施日:6月21日(火)5限  
7月1日(月)3限




15

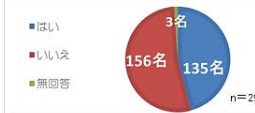
### 活動報告 フリーペーパー作成

**【結果】**

あなたは市民活動団体(ボランティア団体、NPO法人等)が水戸市にあることを知っていますか？



市民活動団体に参加することに興味はありますか？



16

### 活動報告 フリーペーパー作成

**【結果】**

市民活動団体について知りたいこと・悩んでいることをご自由にお書き下さい。

- ・参加するための手続きは何かが必要ですか
- ・どのくらいの頻度で活動していますか
- ・サイト名を知りたい
- ・参加したいが、時間がかかるので、大変

17

### 活動報告 フリーペーパー作成

**【活動の成果】**

- 意識調査で得た結果 + 活動の経験
- 打ち合わせを重ねることで、より良いものになってきた
- 茨苑祭までに完成、来場者の方々に配布することができた

今後・・・  
**学生への周知活動を進めていく予定**

18

### まとめ

- ・客観的に自己分析→フィードバック
- ・継続の力→計画・日程調整のノウハウ
- ・行政の視点・市民の視点・学生の視点

19

### 今後の予定 最終目標:こみっとフェスティバル

## こみっとフェスティバル2017

つなげよう 広げよう こみっとの輪  
ボランティアをわかってください、あなたのために！

日時:2017年2月25日(土)  
10:00~16:00

会場:イオンモール水戸内原  
1Fメインコート 2Fイオンホール



20

### 謝辞

- 水戸市市民協働部 市民生活課 協働係 橋崎様・沼田様・皆さま
- 茨城県世界青少年コミュニケーションクラブ 谷萩様・皆さま
- 水戸こどもの劇場 榎塚様・皆さま
- はつらつサークル 平沼様・皆さま
- 茨城保健生活協同組合 橋本様・皆さま
- 水戸市環境保全会議 高橋様・皆さま
- M・T・O21 梶崎様・皆さま
- 虹の会 稲田様・皆さま
- ひと・まちなつとわーく 栗田様・皆さま
- 朗読ボランティア「コスモス」 呼野様・皆さま
- ぼるーん・レインボー 馬場様・皆さま
- 手話サークル さくらんぼ 青木様・皆さま
- 泉町2丁目商店街振興組合 宮本様・皆さま
- その他、私たちの活動に関わってくださったすべてのの方々

**誠にありがとうございました！！**

21



**ご清聴ありがとうございました**

22

(4)式次第 7：水戸農業高等学校活動報告

## ピンク色のかぼちゃ知ってますか。


茨城県立水戸農業高等学校 教諭：新堀俊博

食品化学科：石川 蓮・大倉勝太郎・中丸 彪  
横須賀隆・浅野 恵萌・田中 綾香  
西島 美紀・吉井 瑞保

**里川かぼちゃを活かし、地域活性化に貢献する**

私たち水戸農業高校食品科学部は、H26年度より里美地区の活性化するため、特産物である里川かぼちゃを使用したスイーツを「さとみ・あい」チームとともに提案してきました。様々な販売の機会を頂き、多くの方に里川かぼちゃを知って頂くことができました。

1. 水農祭&茨苑祭
  - H27 かぼちゃのタルト
  - H28 かぼちゃのタルトと  
かぼちゃのマドレーヌ
2. ときわ祭
  - H28 かぼちゃのカステラ
3. 水農祭
  - H28 かぼちゃのパイ
4. 各学校祭以外での提供
  - H27水戸まちなかフェスティバル  
(スイートパンプキン)
  - H27泉美Cafe  
(かぼちゃのジェラード  
かぼちゃのクッキー添え)
  - H27活動報告会  
(かぼちゃのシュークリーム  
かぼちゃのマドレーヌ)

### 5. スイーツコンテスト 優秀賞！！

平成27年度12月に行われた「第1回学校産・地場産食材を使ったスイーツコンテスト」でかぼちゃのモンブランを制作出品し、優秀賞を頂くことができました。また、この機会でも私たちは常陸太田市里美地区をPRすることができたと考えております。

### 6. 第68回茨城県学校農業クラブ連盟大会

#### プロジェクト発表 Ⅲ類 優秀賞

1年：里川かぼちゃの栽培環境を含め、里川かぼちゃの特徴を調査する。

2年次…1年生の時に得た里川かぼちゃの特徴を生かしたスイーツを提案する。

3年次…提案したスイーツについて調査・改善をし、提供の機会を増やす。

このような流れでプレゼンテーションを行いました。結果は、優秀賞を頂くことができました。

#### まとめ

私たちは、里川カボチャを使ったスイーツを数多く提案し、たくさんの方々に里美地区でつくられた里川カボチャを知って頂くことができましたのではないかと感じています。また、このような機会を頂き、食品加工の知識・技術の向上と地域食材の再発見、さらには地域への興味関心を高めることができた実感しています。今後も、ここで学んだことを後輩たちへ伝えていきます。

図 27:ポスターパネル(掲示は各 A1 判)



図 28:活動報告会での発表風景





水戸農業高等学校からは、まず食品化学科教諭の新堀俊博先生が「農業高校におけるプロジェクト学習～里川カボチャを事例に～」と題して、高校側の取り組みの背景についてご説明下さった(図29・30)。次いで、生徒達が過去3年間の取り組みを総括する発表を行った(図31)。

左 図29:水戸農業高等学校 新堀先生のご説明

下 図30:水戸農業高等学校 新堀先生 PPT

## 農業高校におけるプロジェクト学習 ～里川カボチャを事例に～

茨城県立水戸農業高等学校 食品化学科 新堀俊博

1

### 県内の農業関連高校の所在地



2

### 農業関連高校における農業を学べる学科

学校名	設置学科
大子清流	森林科学科・総合学科(農業系列)
水戸農業	農業科・畜産科・園芸科・生活科学科・農業土木科・食品化学科・農業経済科 定時制農業科
鉦田農業	農業科・食品技術科・流通情報科
石岡第一	園芸科・造園科
真壁	農業科・環境緑地科・食品科学科
板東総合	総合学科(生物資源系列・環境デザイン系列)
江戸崎総合	総合学科(グリーンテクノ系列)

※総合学科は、2年生から農業に関する科目を学んでいきます

3

### 文部科学省 高等学校学習指導要領 (平成21年3月告示)

各教科	各教科に属する科目
農業	農業と環境・課題研究・総合実習・農業情報処理 作物・野菜・果樹・草花・畜産・農業経営・農業機械・食品製造・食品科学・微生物利用・植物バイオテクノロジー・動物バイオテクノロジー・農業経済・食品流通・森林科学・森林経営・林産物利用・農業土木設計・農業土木施工・水循環・造園計画・造園技術・環境緑化材料・測量・生物活用・グリーンライフ

※上記以外でも、各高校において必要と判断した科目については、「学校設定科目」として実施

4

### 高等学校学習指導要領解説 農業編(平成22年6月)

○第2節 教科の目標

- ・第一に、目標をもった意欲的な学習を通して、農業に関する知識、技術の定着を図り、将来のスペシャリストの育成に必要な専門性の基礎・基本を身に付けること。
- ・第二に、学習に取り組む主体的な態度や合理的な思考及び倫理的な姿勢を身に付けた、将来の地域を支える人間性豊かな職業人を育成すること。
- ・第三に、農林業の多様化・高度化・精密化、安全な食料の生産と供給、地球規模での環境保全及び地域資源の活用など、社会の変化や農業教育の広領域化へ対応すること。

上記の三つの目標(視点)を基本とし、各教科を通して横断的な展開を図る。

5

### 課題解決(プロジェクト)学習について

- プロジェクト学習とは  
生徒が主体的に学習する学習方法、教員は助言者
- プロジェクト学習の流れ  
課題の設定→計画の立案→実施→反省・評価→改善
- プロジェクト学習で得られる教育的効果  
学習に対する面白さ・楽しさを実感  
チーム等のグループの仲間意識の向上  
企画力・実践力の育成・向上  
“わかる”の実感

6

### 里川カボチャの商品開発に携わる経緯

○平成26年6月  
株式会社JTB関東法人営業水戸支店  
水戸誘客促進・活性化事業担当 西島佳子様

○平成26年7月  
茨城大学 人文学部 鈴木 敦先生

食品化学科食品科学部の活動の記録をお聞かせください!

7

図 31:水戸農業高等学校食品化学科生徒チーム PPT

## きっかけ

- 魅力のある常陸太田市里美地区を多くの人々に知っていただきたい。
- 商品開発に興味があった。
- 珍しい里川カボチャに興味を持った。

1



## 実習目標

1年次・・・里川カボチャの栽培環境を含め、里川カボチャの特徴を調査する。

2年次・・・1年生の時に得た里川カボチャの特徴を活かしたスイーツを提案する。

3年次・・・提案したスイーツについて調査・改善をし、提供の機会を増やす。

3

## これまでに行ってきたこと ～1年次～

- 茨城大学の学生とのミーティング。
- 里川カボチャの栽培地へ行き合宿を行い現地の人に説明を受けた。
- 合宿で得た情報を元に、カボチャと合うスイーツの試作を行った。
- 水農祭・茨城大学の茨苑祭でのスイーツの販売。
- プロジェクト実習B活動報告会での発表。

4

## ～2年次～

- 茨城大学の学生とのミーティング。
- 里川カボチャの収穫。
- 茨城大学のプロジェクトとの連携。
- 水農祭・茨城大学の茨苑祭でのスイーツの販売。
- 第1回スイーツコンテストへの出場。
- 水戸まちなかフェスティバルでの販売。
- 泉美Caféでの販売。
- プロジェクト実習B活動報告会での発表。

5

## ～3年次～

- 茨城大学の学生たちとのミーティング。
- 里川カボチャの大福の作成&試食会。
- 里川かぼちゃのカステラをさとみ・あいチームと作成し、ときわ祭に出品。
- 最後の水農祭に、里川かぼちゃのパイを出品。
- 茨城大学で行われる活動報告会で展示するポスターセッションの作成。

6

## 研究内容

①茨城大学の方とのミーティング～販売まで

平成26年 8月4日	茨城大学の鈴木教授、学生さんたちとの打ち合わせ
10月12日	試食会(タルト・パイ・けんぴ・スコーン・クッキー・羊羹)
11月 8日・9日	水農祭・茨苑祭でのタルトの販売

7

## ミーティングの様子

## 里川カボチャの収穫

8

## 研究内容

①茨城大学の方とのミーティング～販売まで

平成26年 8月4日	茨城大学の鈴木教授、学生さんたちとの打ち合わせ
10月12日	試食会(タルト・パイ・けんぴ・スコーン・クッキー・羊羹)
11月 8日・9日	水農祭・茨苑祭でのタルトの販売

9

## 試食会



10

## 研究内容

①茨城大学の方とのミーティング～販売まで

平成26年 8月4日	茨城大学の鈴木教授、学生さんたちとの打ち合わせ
10月12日	試食会(タルト・パイ・けんぴ・スコーン・クッキー・羊羹)
11月 8日・9日	水農祭・茨苑祭でのタルトの販売

11

## 水農祭・茨苑祭で販売したカボチャのタルト



12

## ②里川カボチャをいろいろな方に、味わっていただく&これまでの活動報告

平成27年 9月23日	泉美Caféでのジェラート・クッキーの販売
10月23日	水戸まちなかフェスティバルでのスイートパンプキンの販売
11月 14日・15日	水農祭・茨苑祭でのタルト・マドレーヌの販売
12月16日	第1回スイーツコンテスト出場 里川カボチャのモンブランの出品
平成28年 1月30日	「2015年度プロジェクト実習B活動報告会」での発表

13

## 泉美Caféに提供したカボチャのジェラートとクッキー



14

## ②里川カボチャをいろいろな方に、味わっていただく&これまでの活動報告

平成27年 9月23日	泉美Caféでのジェラート・クッキーの販売
10月23日	水戸まちなかフェスティバルでのスイートパンプキンの販売
11月 14日・15日	水農祭・茨苑祭でのタルト・マドレーヌの販売
12月16日	第1回スイーツコンテスト出場 里川カボチャのモンブランの出品
平成28年 1月30日	「2015年度プロジェクト実習B活動報告会」での発表

15

## 水戸まちなかフェスティバルで販売したスイートパンプキン



16

**②里川カボチャをいろいろな方に、  
味わっていただく&これまでの活動報告**

平成27年 9月23日	泉美Caféでのジェラート・クッキーの 販売
10月23日	水戸まちなかフェスティバルでのス ウィートパンプキンの販売
11月 14日・15日	水農祭・茨苑祭でのタルト・マドレー ヌの販売
12月16日	第1回スイーツコンテスト出場 里川カボチャのモンブランの出品
平成28年 1月30日	「2015年度プロジェクト実習B活動 報告会」での発表

17

**水農祭・茨苑祭で販売した  
カボチャのタルトとマドレーヌ**



18

**②里川カボチャをいろいろな方に、  
味わっていただく&これまでの活動報告**

平成27年 9月23日	泉美Caféでのジェラート・クッキーの 販売
10月23日	水戸まちなかフェスティバルでのス ウィートパンプキンの販売
11月 14日・15日	水農祭・茨苑祭でのタルト・マドレー ヌの販売
12月16日	第1回スイーツコンテスト出場 里川カボチャのモンブランの出品
平成28年 1月30日	「2015年度プロジェクト実習B活動 報告会」での発表

19

**スイーツコンテストに  
出品したカボチャのモンブラン**



20

**②里川カボチャをいろいろな方に、  
味わっていただく&これまでの活動報告**

平成27年 9月23日	泉美Caféでのジェラート・クッキーの 販売
10月23日	水戸まちなかフェスティバルでのス ウィートパンプキンの販売
11月 14日・15日	水農祭・茨苑祭でのタルト・マドレー ヌの販売
12月16日	第1回スイーツコンテスト出場 里川カボチャのモンブランの出品
平成28年 1月30日	「2015年度プロジェクト実習B活動 報告会」での発表

21

**合宿の様子**



22

**プロジェクト実習B活動報告会での発表の様子と  
試食していただいた  
カボチャのシュークリームとマドレーヌ**



23

6月29日  
茨城大学の方とのミーティング

10月12日  
大福の作成 & 試食会

24

11月19, 20日  
水農祭

10月21日  
茨城大学の方とのカステラの作成

10月22, 23日  
ときわ祭

25

## まとめ・考察

- ・どのスイーツもまだまだ改善すべき点があると感じた。
- ・味や見た目だけではなく、商品として大切な価格やパッケージなどにも気を使い、常陸太田市里美地区でお客さんに販売しても恥ずかしくないものを作っていきたい。

26

## まとめ・考察

- ・里川カボチャのスイーツを作っていく毎に特徴を理解し、良いスイーツが作れるようになった。
- ・最初から成功してしまうよりも、失敗を積み重ねたからこそ、より多くのことを学べた。

27



私たちの活動を通して少しでも常陸太田市里美地区をより多くの人々に知っていただけたら嬉しいです。

28

### (5) 質疑応答

毎年、各チームの報告の後には質疑応答の時間を設定している。しかし会場が300人収容の大教室ということもあってか、例年なかなか活発な遣り取りとはならない。今年はどうかと心配していたのだが、全くの杞憂に終わった。高校生を含め会場のあちこちから手が上がり、報告者も概して落ち着いたよい応答をしてくれた。予定の質問時間を超過してもなお活発な質疑が続き、主催者としてはタイムマネジメントの観点からそわそわするという、これもまた今年初めての経験をする事となった(図32・33)。質問が出るのは熱心にお聞き下さったからであり、熱心に聞いて戴けるのは報告がそれなりの水準に達していたからのことだろうと、我田引水を自覚しつつも誇らしく思ったものである。

大人数の観衆の前で報告をすることはそれ自体大きな勉強になるが、質問を受け(たとえ脂汗をかきながらでも!)逃げずにお答えしたという経験は、今後の大きな糧となるに違いない。年末の休日にご参集戴いたのみならず、学生達にまたとない学びの場をご提供下さった皆様に、心より感謝申し上げます。



図 32: 高校生から質問です!



図 33: 金沢工業大学・古屋栄彦先生のご質問

(6) 式次第 8 : 来賓講評

2016年度の授業改善の柱として「社会人特別講義」を新設した。新設第一号の講師は金原 PR 企画研究所代表の金原榮先生にお願いし、6月17日の授業でご講義とワークショップをお願いした（I-2-(3)）。これとセットをなす形で、年度末の活動報告会では学生の最終発表に対するご講評を戴いた。「その道のプロ」にとっては甚だ稚拙な内容の報告の連続であったものと拝察しているが、最後まで熱心に耳を傾けて下さっていたお姿が強く印象に残っている。ご講評ではプロならではの鋭く厳しいご指摘が続いたが、終始にこやかに、時に報告者の学生に語りかけながらコメントされるお姿には、学生を育てようというお気持ちが溢れていた。来年度も引き続きプロジェクト実習を受講する学生は勿論、今年度限りで受講を終了する学生にとっても大きな糧になったものと思う。ここに録音から文字化した全文を収載する。金原先生、ありがとうございました。

金原 榮（金原 PR 企画研究所代表）



図 34: 金原先生ご講評

金原でございます。どうぞよろしく申し上げます。

長時間にわたりましてありがとうございました。

時間がちょっと押しているようなので、簡単に講評させていただきます。

ただいまの水戸農業高等学校の里川カボチャからお話しさせていただきます。非常に素晴らしいですね。着眼点が非常によかったと思います。特に、1年次、2年次、3年次と、目標が、調査、提案、提供とステップアップしていくところがすごくよかったですね。それと、実売にまで持っていっているところです。しかも完売したということ。

ところで、価格は幾らだったのでしょうかね。非常に興味深いところなのですけれどもね。後で結構ですけれども、教えてください。素晴らしいと思います。

それと、最後にお話しされた失敗から多くを学ぶということ。我々も実際の実業の世界でなかなかそういうことを言える大人って少ないのですが、高校生からそういうお話が出てくるとは思わなかったので、これを今の年齢でおっしゃっているということがすばらしかったです。茨城県には茨城マルシェとか道の駅がたくさん展開していますから、そういうところで今後販路を拡大していけるように頑張っていたいただきたいなと思いました。

里川だけではなくて、制服スイーツなんかもいいのではないかなと思いました。

私は実業の世界にいますので、今日は学業で講評をさせていただきたいのですが、一番最初の先進地研究は、プレゼンの大切さというのが、今、たくさんの方々が見ておわかりになったと思います。パワポのお話がありました。パワーポイントの大切さもそうですが、私もこうやって話していますが、話し手のキャラクターというのもとても大切ですよ。だから、パワポと話し手がどうきちんとミックスするかということが大切だなということを感じました。

それから、カフェ×まちづくりは、地域と大学の連携ということなのでしょうけれども、9月16日に本社からの突然の中止の話があったということですが、これはどういう理由だったのでしょうか？プロジェクトの方、どんな理由でしょうか？

●学生：コーヒーチェーン店様のブランドの質に、外部からの手を一切入れることができないということです。

ああ、なるほどね。ビジネスの世界ではこういう突然の中止がよくあることなのです。だから、そこをよく耐えたなということです。こういうアクシデントに耐えて、どういうふうにやっていくかということ、今回のこのプロジェクトの中でよくそういう事例に遭遇したなということで、ある意味ではよかったのかなと思います。

その後、カボチャのスイーツの販売を含めて、広報活動を展開していくとおっしゃっていましたが、今後、どういった活動をしていくのかということに私は着目していきたいなと思いました。ぜひ頑張ってください。

それから、さとみ・あいでは、里美のわら、これは私個人の話なので大変恐縮なのですが、このわら納豆プロジェクトにはとても着目します。結論として、触れ合いのすばらしさということプレゼンをされた方がおっしゃってしま

たが、これも本当にすばらしいなということで、愛があふれているプレゼンだったと思いました。

カフェ×まちづくりさんにしても、さとみ・あいさんにしても、ちょっと学生さんのお二人に厳しい言い方をしますが、どうしても欠けているのは、お客様視点が不在です。だから、お客様の立場をもう少し考えた商品開発をしていかないとまずいのではないかなと思います。ぜひもう少し掘り下げてください。

E-girls さんですが、イベント企画からイベント開催までの期間が、実際はどのくらいだったのでしょうか。

●学生：2カ月程度です。

2カ月ですか。それで何人集まりました。

●学生：33名です。

33名ですか。わかりました。

その辺がちょっと気になったのと、どちらかという、交流プロジェクトというよりも、単発のイベントという感じがしました。講評なので厳しい言い方をしています。プロジェクトにしていくためには、今後、後輩に引き継いでいくときには、もう少し継続性を考えていくべきではないかなと思いました。

小学校の国際理解活動とか、ニュー・イヤー・パーティみたいな交流活動ですばらしいものが出てきましたから、そういう継続性のあるものを、今後、課題活動としてディスカッションの場にどんどん進めていくのがいいのではないかなということ、最後のほうに出てきましたので、これをもっともっと掘り下げていってもらえるとすごくいいなと。一番最後のページに出てきたものが私には光って見えました。

それから、コミュニケーショントラブル。アンケートで、メールを送る相手の65%が大学の先生という結果が出てきたとおっしゃっていますが、これはもっともなことで、今、文章が書けない若者のほうが多いのです。ツイッターとかラインということで、ツイッターは140文字ですよ。ラインは本当に短文で、本とか新聞を読まない学生さんが多いですから、これは教授もおっしゃっていましたが、ろくな文章が書けない人たちが多くなってしまって、本当に日本の文字文化はどうなってしまうのかなと思います。私も、この間、学校の先生になりたての人にお話ししてきましたが、本を年間に10冊読まないで先生になろうとする人が多い世の中になってきてしまっています。ぜひ皆さん、新聞とか本をたくさん読んで、文章を書いて、まともなメール交換、手紙交換をやるようになってほしいなという気がしました。

ホームページのアクセス数の222って少ないです。これで頑張っていますとってはだめです。ネットの世界で200台というのは全然いっていない。2千、2万といかないとだめです。ちょっと厳しくお話しさせていただいています。

コミュニケーションは、特にネットの世界ではクイックレスポンスが一番大切ですから、来たらすぐ返すということがコミュニケーションの一番の大切さというふうに考えたほうがいいかなと思います。

Domaine MITO さんについては、宮本酒造さんというスーパープロフェッショナルの力を借りているので、それに乗っかってしまっているというものでしょう。ですから、ちょっと評価のしようがないですけれどもね。笠間焼の器とのコラボレーションの展開が楽しみです。この器が実際どうなのかな、香りがどうなのかなということも少しありますけれどもね。そういう個人的な楽しみがあります。

ただ、これも販路とか価格が幾らなのかなという部分をしっかりと見極めていかないといけないのではないかなと思います。

最後のコミットフェスティバルさんは、学生の視点を生かしてというのが目的だと思うのですが、水戸市役所の担当者さんがそもそも一番求めているのは、若い人をもっと集めたいということではないのでしょうか。だから、一番の成果だったのは、ここでもおっしゃっていたように、袋にこみフェスのチラシを入れたという成果ですよ。ですから、あの成果と同じようなものを展開させていくということが今後も大切なのではないかなと思います。

個人的に聞いていて私の耳にこのプレゼンテーションがすんなりと入ってきました。だから、プレゼン自体は、このこみフェスが一番すばしかったと感じました。

以上でございます。ありがとうございました。

(7)式次第9 2017年度プロジェクト実習のご紹介：プロジェクト実習担当教員 神田大吾

プロジェクト実習は、学内・学外の沢山の方々のご支援を得て運営されている。式次第9では、現時点で戴いているご支援について簡潔にご報告した上で、現在準備を進めている2017年度の更なる強化策についてご紹介した。強化策の柱は、「新たな協力教員」とプロジェクト実習を通じて養成すべきスキルを踏まえての実技系科目（仮に「プロジェクト実習・補強科目」と称しておいた）の充実である（図35）。

「新たな協力教員」としては、既に今年度から教育学部の岩佐淳一先生が「プロジェクト実習B」にご参加下さっていることに加えて、茨城キリスト教大学文学部のジャブコ・ユリア先生が同学「プロジェクト実習」に、本学人文学部の杉本妙子先生が本学「プロジェクト実習C」にご参加下さることとなった。「事実上の両学共同開講授業」として重要性を増すプロジェクト実習C（Ⅱ-3-(3)）への、願ってもないタイミングでの新戦力加入である。先生方のご支援に心より感謝申し上げます。

「プロジェクト実習・補強科目」としては、2014年度以来ネット社会に必要な基礎的スキル養成を目指す「情報活用技術論」を半期2単位で継続的に開講している。2017年度は、これに加えて語彙・読解力と時事知識の涵養を目指して「読解力・時事知識養成講座」を根力育成プログラム「実践連携科目」として半期2単位で開講する。また、単なるPPTの操作法にとどまらず、「考えのまとめ方」や「効果的なプレゼンの手法」・「ビジネスマナー」等を総合的に学ぶ「プレゼン力養成講座」を、プロジェクト実習の授業の中に組み込んで開講する。いずれもその道の専門家を非常勤講師としてお招きしての、本格的な講座である。非常勤講師枠の確保が極めて厳しい中、配分下さった人文学部執行部に篤く御礼申し上げます。

図 35: 2017 年度プロジェクト実習のご紹介 PPT

<p>2017年度 プロジェクト実習のご紹介</p> <p>プロジェクト実習担当教員 神田大吾 daigo.kanda.8139@vc.ibaraki.ac.jp</p> <p>1</p>	<p>現時点で既にプロジェクト課題を戴いている 地域・組織様</p> <p>(1) 常陸太田市里美地区 様 (2) 茨城キリスト教大学 様 (3) 泉町二丁目商店街振興組合 様 (4) Domaine MITO株式会社 様 (5) 水戸市役所 様</p> <p>2</p>
<p>新 戦 力</p> <p>2016年度～ 茨城大学教育学部 岩佐淳一教授</p> <p>2017年度～ 茨城キリスト教大学文学部 ジャブコ・ユリア助教 茨城大学人文学部 杉本妙子教授</p> <p>3</p>	<p>プロジェクト実習 養成すべきスキル</p> <p>(A)課題分析・問題解決の手法 [PJ実習内対応済] (B)ネット利用のルールとマナー (C)読解力・時事知識 (D)フォーマルなメールならびに文章作成能力 (E)単なるPPT操作法に留まらないプレゼンの技法 (F)掲示物・冊子等を編集作成するための基礎知識 (G)効果的な動画撮影ならびに編集の基本技術 など</p> <p>4</p>
<p>2017年度開講決定 プロジェクト実習・補強科目群</p> <p>(1)情報活用技術論(2014～) …(B)(D) * .comマスター(BASIC)資格対応 <a href="http://www.com-master.jp/">http://www.com-master.jp/</a></p> <p>(2)読解力・時事知識養成講座…(C) * 語彙・読解力検定(2級)資格対応 <a href="http://www.goi-dokkai.jp/">http://www.goi-dokkai.jp/</a></p> <p>(3)プレゼン力養成講座 …(E)</p> <p>5</p>	<p>ご清聴、感謝申し上げます</p> <p>6</p>



(8)式次第 10：総括と閉会挨拶

佐川学部長の総括は、プロジェクト実習を巡る諸事に様々な角度から切り込むものであり、最高の締めくくりとなった（図 36・37）。会場には、年齢も立場も様々な方々が集うが「やりっぱなしはダメ。しかし、反省は懺悔ではない」との言は、全ての参加者をエンカレッジするものであったと思う。ここに録音から文字化した全文を収載する。

佐川 泰弘（人文学部学部長）



上 図 36: 佐川学部長総括

右 図 37: 佐川学部長 PPT

- ・「事業」ではなく授業。それ故の難しさ。  
目的の共有。+アルファの授業。学生だからといって暇なわけではない。
- ・継承されているプロジェクト。マンネリに陥らず、進化させる意識。
- ・“プロジェクト型授業”だが、あわよくば事業化のために。
  - ①経営の観点。ニーズ、経費、収支を考える。
  - ②情報の出し方をどうするか。どうすれば人々の目にとまるのか。
  - ③行政上の規制をどうすればクリア、突破できるか。
- ・やりっぱなしはダメ。しかし、反省は懺悔ではない。  
自分はどう成長できたのか具体的に。経験の普遍化、一般化。
- ・教育改革、教育上の意義 ⇄ 運営コスト

非常に長時間にわたり、皆様どうもありがとうございました。

改めまして、実習中にご協力いただきました皆様、本日午前中からご参加いただきました高校生の皆さん、それから市民の皆様、発表報告を行った各大学の学生・高校生の皆さん並びに金原先生ほか他大学の教員の皆様、大変ありがとうございました。

金原さんのお話とも重複してしまうのですが、講評もということでありましたので、一言だけ、言い訳も含めてお話しさせていただきます。

まず、このプロジェクト実習という授業についてでございますが、学生たちは、これのみをやっているというわけでは決してなくて、あるいは、これを事業、ビジネスでやっているわけではありません。一つの授業なのです。それゆえの難しさ、非常に重いところがございます。つまり、何か初めからこういう目的があって集められたメンバーで、こういうことを考えろというところから出発しているのではなくて、たまたま縁があり集まった学生たちの初対面のところから始まるというところがなかなか難しい。それから、卒業に関係する必須の授業ということではなくて、プラスアルファの授業として履修するのだという強い希望、意思を持った学生が来ているということであることです。

もう少しかみ砕いて言いますと、今、地方創生の中で、学生の力、若い力が求められているのだけれども、かといって学生も決して暇で暇でということではないというような状況もございます。そういう中でやっているということもございまして、学生には非常に努力をいただいている。あるいは、担当教員にも本来の専門ではないところでやっていただいているわけで、学部としても苦しみながらというところが当然あるという状況です。

これがまず前置きなのですが、その上で、今年の報告を聞いた上での感想、コメントを、若干述べます。

一つは、今年の印象としては、地域との関係でも非常にうまく継承されてきているプロジェクトが増えてきた、多いということです。その中で、実際に研究をやっている学生の皆さんも、マンネリに陥らず、去年やってきたことをどう進化させようかという意識を、あるいは意欲を非常に強く感じられてよかったです。

その上で、ここは金原さんからの厳しいコメントもございましたが、これを授業でとりあえずやってみたとあるもの、できれば、もうちょっと即効的に、こうやればうまくいくよねというところまで提案できればそれに越したことはないという観点からすれば、ビジネス化をしていくには何が必要かという観点は常に持っていたきたいということがあります。つまり、ニーズってどうなのだろう。アイデアとしてはこうやったらおもしろいよねというはあるのだけれども、そういうニーズってありそうですかねということです。大学も改革をするときに、世の中にどんなニーズがあるのか示せとさんざん文科省から言われるわけなのですが、これは愚痴なので要りませんが、とにかく事業を進めていくというときに、サービスとか商品を事業化したらお金を出してでも買ってくれる人が世の中に果たしているの、いないの、あるいはどういう人が買ってくれるの、そういう視点もやはり必要だし、それから、今は大学から財政的な支援があるかもしれないけれども、実際これを自分たちでやるとしたらどういう経費が必要で、果たしてコストをかけてやっていけるのかどうかということも、さらに進化させていくためには、少し視野に入れていただきたいということです。

2つ目に、情報に関してですが、今回も幾つかのプロジェクトで、「広めていく」、「知らせる」ということが視野に入ってきたかなと思っています。これは非常に大きな進歩、進化だと思います。例えば、世の中を見ていて、自分が消費者の立場の時は、行政がやっていることはさっぱりわからないよねという話をしていたと思います。しかし、行政は一生懸命ホームページに載せて宣伝しているつもりなんですよ。実際にやってみるとようやくわかってくるものがたくさんありますよね。そういう中で、悩ましいとは思いますが、どうすればもっと人々の目にとまるのか、次はそういう作戦をぜひ考えてもらえれば、より深まるかなということです。

3つ目に、学生さんのところであまり問題にならなかったかもしれませんが、いろいろなことをやっていくときには、行政が定めた、ややこしいルールがいっぱいあるのです。おそらく関係している教員とか大人の方々が裏で走り回って、それをクリアするということをやっていたと思うのですが、そういう行政上のルールや規制などを実際はどうすればクリアできるのか、突破できるのかみたいなことも課題になってきます。ここにも踏み込んでもらったら、もう大人として社会に出ていけば即戦力として通用していくのではないかと思います。

さらに、次の点です。PDCA というのはどこのチームでも非常に意識をされていて、やりっぱなしではだめで、振り返ってどうだったかということはそれぞれお話の中にあつたのですが、反省は別に懺悔ではないので、懺悔する必要はありません。

では、PDCA の C のところで何をやったらいいのというところで、特に申し上げておきたいのは、自分はこれを1年間やってみてどう成長したのか、それを具体的に表現してくださいということです。

それから、「さとみ・あい」のところは非常にこういうところは強かったと思うのですが、では自分たちでやってできたことをもう少し相対化するとか一般化するとか、そういうところを意識してもらって、語れば就職活動などを考えても恐いことはもう何もないという世界にいけるのではないかと思います。

というところで、ここ何年か学部長という立場で見させていただいていますが、毎年、継承もされて、確実に進歩をしていると私は思っておりますので、これがぜひ次の世代にも引き継がれていくことを期待しております。

最後に、ここにご参加の大人の皆様にちょっと一言、お願いしたいことがあります。現在、大学では、ただこういう教室で教員が一方的にしゃべって授業をやるというのは、ないことはないのですが、学生をどんどん外に出していくということにも力を入れております。そういう教育改革をやって、今日ご覧いただいたような形で、教育上の意義があるということももちろんですし、成果もあるのだということも少しでもわかっていただければ幸いです。

もう一点、国立大学に国から配分されるお金はすごい勢いで今減らされておまして、例えば、学生が外に行く交通費をどうするのだとか、そんなこと一つ取っても、お金がない、お金がないという騒ぎを大学の中ではしているところでございます。

茨城大学でも、できれば社会の皆様から寄附をいただきたいということで、茨城大学基金というのを今年の10月に立ち上げてございます。きょうは資料までは用意していませんが、茨城大学のトップページをご覧いただければ基金のページがございます。ちょっと手続きは面倒なのですが、税控除等もございますので、財政面でのご支援も賜れば非常にありがたく存じます、最後にこのことをお願い申し上げて、締め挨拶とさせていただきます。

今日は本当に長い時間にわたりましてどうもありがとうございました。

### (9) ミニ・オープンキャンパスにおける高校生先導と報告会における司会担当

活動報告会は、本来履修生自身で全てを運用するのが理想である。しかし、限られた人数で活動報告自体の準備と並行して大規模な催事を準備するのは難しい。そこで、本節冒頭に記した通り例年会場の設営と運用、撤収を歴史・文化遺産コースの学生に委託して履修生の負担軽減を図っている。

一方で、会場での報告者は通常1チーム当たり2名程度に限られるため、メンバー間で「報告会に参画した」という実感にバラツキが生じてしまうという問題があった。歴代の先進地実地研修（近郊）の学生レポートには、「報告者は少数でもチームメンバー全員が壇上に立ち、かつ表情や所作が報告者とリンクしており、チームとしての一体感が感じられた」という旨の記述が散見する。そこで、「全てのメンバーが参画し、それぞれに重要な役割を担う」体制を強化すべく、2016年度の報告会では以下の体制を採ることとした。

- ①活動報告では、チーム全員が壇上に立つことで統一（Ⅲ-2~7各5）
- ②各チームから計8名を選出し、「ミニ・オープンキャンパスにおける高校生の先導者」もしくは「報告会の司会」を担当する
- ③先導者はただの道案内ではなく、「高校生をリラックスさせる声かけ」「施設見学の際の説明者の補助」「写真撮影」等に積極的に取り組む
- ④司会者は、ただ「次は〇〇の発表です」の繰り返しではなく、チーム発表が終わる度に報告を踏まえたコメントを加える
- ⑤司会者は、茨城大学学生1名と茨城キリスト教大学・常磐大学・水戸農業高等学校の学生・生徒のペアで行うこととし、特に高校生とペアを組んだ学生はそのエスコートに意を用いる

まず先導並びに司会要員として、全6チームから8名を選出して貰った。選出に当たっては、「茨城キリスト教大学と常磐大学から各一名を含むこと」「メンバーの数はチームごとに異なるので、選出に当たっては母集団の人数にも配慮すること」の2点に留意するよう求めた。

学生の自発的取り組みを基本とするPBL授業の趣旨に照らせば、「誰を選ぶか」だけでなく「誰が何を担当するか」の判断も学生達に任せるべき所である。しかし「先導役には、ご招待した高校生にとって縁のある学生・院生を宛がうようにする」「司会は茨城大学4名、常磐大学・茨城キリスト教大学各1名、水戸農業高等学校2名という構成にする」という計画を踏まえて、敢えて筆者が割り振りを決定した。

先導役には、上記8名の中からさとみ・あいチームメンバーでご招待高校の一つである水戸市内の高校のOGである助川実咲さん、県外出身者ながらE-girlsチームの一員として招待高校の多くと接点のある鈴木美緒さんの2名を指名した。加えて、プロジェクト実習のTA（Teaching assistant 大学院生による授業補助者）でご招待高校の一つである日立市内の高校の出身者である今川裕喜君にも別途依頼し、3名体制とした。

先導役の仕事を「勝手知ったる自大学の中を案内するだけ」と見る向きもあろう。しかし、初対面の20余名の高校生の集団を限られた時間であちこち案内するというのは、実はかなり大変な作業である。3グループが錯綜するルートで見学して回る（図1）ので遅延は許されず、キビキビと動いて貰うように「指示」しなければならない。一方で上記②に記した通り「おもてなし役」としての気配り、さらに説明者の補助からカメラマン役までこなさねばならないという、実際には非常に難度の高い役割なのである。心配もしたが、滞りなく全ての職務をこなしてくれた（図38）。因みに本章の図4~7は、彼らが撮影してくれた写真を使用している。

高校生は、大学生に、それも一部の生徒にとっては「自分の高校の直接の先輩」に案内して貰って、どのように感じただろうか。「親しみ」と同時に「まぶしさ」も感じてくれて、（茨城大学に限らず）大学への思いを高めてくれたとすれば嬉しく思う。



図 38: 集合場所にて  
お早う！初めまして。担当の助川です！

司会は、前記 8 名の「チームからの選出者」の内の 6 名と、水戸農業高等学校から選出された 2 名とで計 4 組のペアを作り、報告会を 4 ブロックに区切って順次担当するという体制とした。

年度末の活動報告会が 1 年間の成果が問われる場であることは、学生にとっても教員にとっても同様である。加えて 2016 年度の活動報告会は、「全体報告会と現地報告会の統合実施」「高大連携活動の一環としてのミニ・オープンキャンパス実施」「過去最多の 181 人の参加者」といった例年にない要素も加わり、担当教員にとってもプレッシャーのかかる状況となった(第Ⅲ章)。大教室で 200 人余と対峙する司会担当者となれば、尚更であろう。

同じ司会担当でも、どのブロックを担当するかで責務の質も異なる。PBL 授業の趣旨に照らせば、ペアも担当ブロックもまた学生自身の考えに委ねるのが筋であろう。しかし、文字通り「会を司る」司会者に不手際が生じれば、報告会全体の運営に重大な支障を来す。そこで、ここでも敢えて筆者が「各ブロックの特性」と「各人の個性」を勘案して、以下のように割り振った。果たして各人が期待通りの活躍してくれた。以下、筆者の主観的寸評を添えて記す。式次第の詳細は、図 18-1 を参照されたい。

#### 第一ブロック（開会～先進地実地研修）

責務：会のスタートであり会全体に関わる連絡事項も多いが、遅刻入場者もあって冒頭はざわついている。開会直後は会場の雰囲気も硬い。「明確な開会宣言並びに確実な情報伝達」と「会場のアイスブレイク」という、相反する責務を同時並行でこなさねばならない。

担当：塚本莉沙（茨城大学 3 年）・高場菜央（茨城キリスト教大学 2 年）

寸評：司会者中唯一の 3 年生である塚本さんが「くっきりと」口火を切り、高場さんが「はんなりと」受けて、スムーズに会を起動してくれた。



図 39: 左 塚本さん  
右 高場さん

#### 第二ブロック（プロジェクト実習活動報告第一部）

責務：会場の雰囲気は和らいできている。一方で、3 チームそれぞれの報告の勘所をその場で理解し・ペアの高校生をエスコートしつつ・当を得たコメントを出さねばならない。

担当：高山直人（茨城大学 2 年）・浅野恵萌（水戸農業高等学校 3 年）

寸評：「機転と気働きの人」高山君と、高校生ながら「堂々の受け答え」の浅野さんとで、期待以上の安定感を示してくれた。

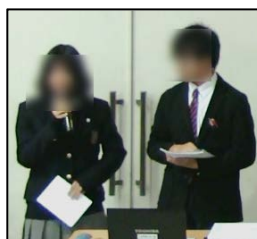


図 40: 左 浅野さん  
右 高山君

#### 第三ブロック（プロジェクト実習活動報告第二部）

責務：休憩を挟み、「第二の開会」とも言える。会場には、ややダレが出てくるタイミングでもある。その中で「会の再起動」並びに第二ブロックと同様に「報告内容の即時理解・エスコート・然るべきコメント」という大役を担うことになる。

担当：岩本有彩（茨城大学 2 年）・石川蓮（水戸農業高等学校 3 年）

寸評：「えれがんとお姫様」岩本さんのリードに、淡々と・平常心で応える「石川少年」という構図が、微笑ましい・いいアジを出していた。



図 41: 左 石川君  
右 岩本さん

#### 第四ブロック（水戸農業高等学校活動報告～学部長総括と閉会挨拶）

責務：会全体の締めくくりであり、登壇者も概して「肩書きが重い」。会場にも疲れが見えてくる中、会の終了時刻を睨んで時間調整を強く意識した臨機応変の差配が求められる。

担当：森本真由（茨城大学 2 年）・榎田桃子（常磐大学 2 年）

寸評：アナウンス経験者の森本さんが、できうる限りの時間調整を試みつつ「Cool!」に捌き、「堅実さ一番」の榎田さんが着実に応じてくれた。



図 42: 左 森本さん  
右 榎田さん

司会者は3大学1高校に跨がるため、当初は教員側で打合せの場を設定する計画であった。しかし最後まで日程の調整がつかず、結局当日の昼に初めて顔合わせということになってしまった。課されたミッションの重さに加えて、十分な打合せができないという悪条件下にも拘わらず、しっかりとこなしてくれた皆さんに、この場を借りてお詫びと御礼を申し上げます。

#### (10) 卒業生・在学生の参加

会の企画者としては参加者に何らかの「サプライズ」を提供できないかと腐心するものであるが、2016年度の活動報告会では、プロジェクト実習履修生のOB・OGが何人も参加してくれるという「企画者にとってのサプライズ」を戴いた。

井上紗希さん、白土一哉君、清野絢さん、高松賢君、星野由季菜さん。就職した者・大学院に進学した者、引き続き水戸近辺に居住している者・遠方に引っ越した者、卒業後僅かの間にかつてのメンバーは様々な進路に散っている。皆、新たな活躍の場で新人としてさぞかし忙しい日々を送っているであろう中、わざわざ大学まで足を運んでくれ後輩の学びを見届けてくれたことは、本当に嬉しくありがたいことであった。一般のゼミがそうであるように、プロジェクト実習も卒業生が誕生し・節目に顔を出してくれるようになると存在に拡がりが出て、学びの場としての「力」が格段に増す。初開講から丸5年を経てプロジェクト実習も漸く「ホンモノ」になって来たかな、と感慨深い出来事であった。この繋がりを大切に育てていきたいと思う。

久しぶりにお話出来ることが嬉しく、写真を撮るのをすっかり忘れてしまいました。

卒業生の皆さん、どうもありがとうございます！これからも宜しく願い致します。

また、在学中のプロジェクト実習OB・OGも参加してくれました。茨城キリスト教大学の高大詩織さん・栗原大地君、茨城大学の藤堂みさ都さん、どうもありがとうございます！

#### (11) タイムマネジメントの重要性

「定刻終了」は言うまでもなく催事の基本であるが、今年度は予定を30分余りも超過してしまった。まず最初に、ご迷惑をおかけしてしまった方々にお詫び申し上げます。

今回の遅延の遠因は、以下の3点にまとめられよう。

- ①発表者による時間超過
- ②発表者交替の際の時間ロス
- ③質疑応答の、予想外の活況

①については、リハーサルをこれまで以上に入念に行うよう指示すると共に、(会場がせわしなくなって好きではないのだが)ベルの導入も考えたい。

②については、今年度から学生が司会を担当しかつコメントも行うこととした時点で、仮に発表者交替に若干もたつきが出て司会者のコメント時間の内であり、昨年度までのような「単純なロス」にはならないことは自明であった。それにも関わらず発表者の交代時間を従来通りの短時間に設定していた、筆者のミスである。幸いにして、学生による司会はいい形で定着させることが出来そうである。来年度は、予め然るべき時間を割り当てるようにしたい。

③は、遅延を招いたこと自体は「困ったこと」であるが、報告会の本質に鑑みてこれほどありがたいことはない。②同様、来年度は当初設計段階で質疑応答の時間を十分組み込み、活発な意見交換を楽しめる環境を整えたい。

#### (12) 報告会を終えて

今年度の活動報告会も、多くの方々のご支援を戴いて盛況の内に終わることができました。皆様に篤く御礼申し上げますと共に、タイムマネジメントの拙劣さでご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

ここでは、本節中でお名前を挙げるができなかった方々に御礼を申し上げたいと存じます。

連携大学からは、常磐大学から今年も国際学部経営学科長の村山元理先生にお越し戴きました。茨城キリスト教大学からは、折悪しくAO入試とバッティングしてしまった中、来年度からプロジェクト実習にご参加下さる文学部ジャブコ・ユリア先生ならびに地域連携センターの青木則行様にご参加下さいました。

連携校の皆様の、いつもながらのお気遣いに篤く御礼申し上げます。

プロジェクト課題（I-図3）ご提案者として、宮本紘太郎様（Domaine MITO チーム）、吉川昌吾様（コミュニケーションチーム）、橋崎真哉様（こみフェスチーム）にお越し戴きました。また、西島佳子様には折角ご提案を戴きながらチーム不成立であったにも関わらずお越し戴きました。ご提案とご指導に加え、成果報告の場にもお運び戴き、誠にありがとうございました。

各チームが活動を通じて直接お世話になりました、里川カボチャ研究会長荷見誠様・奥様、並びに常陸太田市少子化・人口減少対策課長福田洋昭様、茨城県納豆商工業協同組合理事長・だるま食品株式会社代表取締役高野正巳様（さとみ・あいチーム）、大好きいばらき県民会議上田よし江様（Domaine MITO チーム）、こみっとフェスティバル実行委員長谷萩紀行様（こみフェスチーム）、大変お世話になりました。来年度もどうぞ宜しく願い申し上げます（図43）。



図 43:会場風景(来賓席)

奥・前列:宮本様 後列:吉川様・荷見様ご夫妻  
手前・前列:村山先生・佐川学部長 後列:金原先生・ジャブコ先生

また、はるばる石川県から金沢工業大学基礎教育部基礎実技教育課程プロジェクト教育センターの伊藤隆夫先生・古屋栄彦先生・坂本宗明先生にお越し戴きました（図33）。金沢工業大学は、アクティブ・ラーニング等、近年の新しいタイプの大学教育を引っ張ってこられたことで夙に知られています。「先進地実地研修（遠郊）」（第IV章）の候補地の一つとして意識しながら未だ伺ったことのなかった大学から、思いがけずお運び戴き大変光栄に存じます、ありがとうございました。

横浜国立大学の長谷川紀幸様は、プロジェクト実習の前身とも言うべき2008年6月の「学生自主企画文字をさわろう！展」にお運び戴いて以来、お付き合いを戴いています（岡沙織他『学生自主企画文字をさわろう！展 全記録』歴史・文化遺産コース2009年5月刊）。今年もまたお越し戴き、鋭い質問をお寄せ戴きました。ありがとうございます。今後ともどうぞ宜しく願い申し上げます。

まだまだ御礼を申し述べねばならない方々が多いが、もはや紙幅も尽きた。大学に長く籍を置いていると「四年一巡」というサイクルが無意識に染みつくのかも知れない。しかしそれを差し引いても、開講5年目となる今年度の活動報告会は、学生の活動・報告の質においてもまた会場の有り様においても、プロジェクト実習が新しい段階に入ったのではないかと感じさせることが多かった。いわゆる「属人的授業」としての足元の弱さ・先行きの不透明さという不安はあるが、誠に幸いなことに学内・学外の沢山の方々のご支援がある。引き続き、地道な取り組みを続けて行きたい。

## VI：成果と課題

- 1：履修人数を巡って
- 2：履修生の多様化の萌芽
- 3：マンパワー問題
- 4：授業改善 —「教員による実施」から「学生への浸透」へ—
- 5：リフレクション期間の確保
- 6：成績評価手法の未整備
- 7：「その先」の高大連携を目指して

## VI: 成果と課題

鈴木 敦

神田大吾他編『2015年度根力育成プログラム プロジェクト実習活動報告書』根力育成プログラム小委員会 2016年3月刊(以下『2015年度報告書』)第VI章「成果と課題」では、成果と課題を下記の6項目に分類して記述している。2016年度についてもまずはこの分類に沿って記述することとする。

- ①履修人数を巡って
- ②履修生の多様化の萌芽
- ③マンパワー問題 ―大学への期待―
- ④授業改善 ―「教員による実施」から「学生への浸透」へ―
- ⑤リフレクション期間の確保
- ⑥成績評価手法の未整備

### 1: 履修人数を巡って

2016年度の履修生数は41名(茨城キリスト教大学学生・常磐大学学生を含む)と、引き続き前年度比「微増」が維持された。2017年度も着実な増加に期待したい。

プロジェクト実習の中核をなす茨城大学人文学部は、1学年当たり約400人の学生を有する。2~4年生向けの科目であるから、単純計算で人文学部のみで約1,200人の「母集団」を有していることになる。他学部・他大学の学生を含めても履修生が40人前後に留まっている原因は種々考えられるが、ここでは「学生の負荷」と「カリキュラム的断絶」について記しておきたい。

#### (1) 学生の負荷

プロジェクト実習は、人文学部が開講している「授業」の一つに過ぎない。しかし、PBL技法自体のもつ必然的な負荷の重さ(I-1)に加えて「事業」的性格も有する(V-6-(8))が故に、学生が熱心に取り組みプロジェクトの完成度を上げようとすればするほど無限に負荷が増大するという構造を持っている。PBL授業なるが故に教員は極力手を出さないことが求められる(V-6-(2))が、常に目配りをしていて極端なオーバーワークに陥る前にブレーキをかける必要がある。

しかし、実際にはそのタイミングを計ることが非常に難しい。教員側ならびにプロジェクト課題提案者は、常々「困ったことがあれば相談を」と呼びかけてはいる。しかし相談に及ぶ「呼吸」を掴みかねるのか「チームの殻の中に籠もって何とか自力で解決を図ろうとする」傾向があり、状況が把握しにくい。とりわけ、偶々チーム全員が新規履修者となったチームにおいて顕著であり、教員側がたまりかねて「殻」に穴を開けて覗いてみると、メンバーは「殻の中で干涸らびて」という事態を招いてしまうことがある。

全てのチームが「殻の中で干涸らびる」ようであれば、PBL授業の理想をある程度犠牲にしても教員の関与をもっと強めた構造に「授業改善」することが考えられる。しかし決してそのようなことはなく、「殻の中で干涸らびる」チームが毎年のように発生する一方で、「明るく元気に」活動しているチームも多い。

専門ゼミにおける指導教員とゼミ生のような密接な関係であれば、たとえ40余名を相手にしてもそれなりの「近さ」を醸し出すことも可能であろう。残念ながら、プロジェクト実習は一年単位で開講される一授業に過ぎない。通常の授業における「教員と学生の距離」よりは「近く」にいるのではないかと自負してはいるが、お互いが「十分な近さ」を感じるためには担当教員個人の努力と共に担当教員の人数そのものの増強を考えねばならないだろう。しかし同時に、昨今の情勢に照らしてそれが難しい状況にあることも承知している。何とも悩ましい、しかしプロジェクト実習という授業の根幹に直結する課題である。

#### (2) カリキュラムとしての「断絶」

文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/shugyou/1292891.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/shugyou/1292891.htm)

に基づく本学の「就業力育成支援事業」は2016年度入学生を以て廃止となり、プロジェクト実習の背景と



なる「根力育成プログラム」も同学年の卒業を以て終了することとなった（V-6-(1)）。

これと相前後して、本学では文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」（以下、「COC 事業」）

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/coc/1337841.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/1337841.htm)

に基づく「茨城と向き合い、地域の未来づくりに参画できる人材の育成事業」がスタートし、新設された本学 COC 統括機構による差配の下、「地域志向教育プログラム」が構築されつつある。

<http://www.coc.ibaraki.ac.jp/coc/>

この流れを受けて、プロジェクト実習は「地域志向教育プログラム」を構成する PBL 授業の一つとして改めて位置づけられることとなった（V-6-(1)）。現行の「就業力育成を目指して地域と関わりながら活動する」プロジェクト実習は、2018 年度の 2 年生から「地域と関わる活動の結果、就業力も身につく」プロジェクト実習へと変身する訳であるが、これは「卵が先か鶏が先か」に類する問題であり、根本的な変質にはならないだろうと判断している。

「地域志向教育プログラム」のスタートとして、2015 年度から地元茨城を多角的に学ぶ「茨城学」という授業が、1 年次向け全学必修科目科目（半期 2 単位）として開講されている。

<http://www.coc.ibaraki.ac.jp/coc/%E3%80%8C%E8%8C%A8%E5%9F%8E%E5%AD%A6%E3%80%8D%E9%96%8B%E8%AC%9B%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F/>

かねてよりプロジェクト実習の履修者が少数に留まる原因の一つとして、1 年次生への広報不足が指摘されてきた。「茨城学」は、その趣旨ならびに 1 年次生全学必修という開講形態に照らして、広報不足問題を一挙に解決する物として大いに期待された。しかし現実には、「茨城学」受講第一期生が 2 年次に進級してきた本年度においても受講生数に目立った増加は見られなかった。プロジェクト実習履修の 2 年次生に受講のきっかけを尋ねてみた所、年初の学部ガイダンス（I-2）やシラバスで初めてその存在を知ったという学生が殆どであった。大きな期待にも拘わらず、状況は前年度と何ら変わっていなかったのである。

共に「地域志向教育プログラム」を構成する授業科目でありながら、COC 統括機構が新規開講し直接管轄する「茨城学」と、人文学部の既存科目を組み込んだ「プロジェクト実習」との間では、全く連携がとれていなかった。この状態は「茨城学」開講 2 年目となる 2016 年度においても何ら改善されていない。「茨城学」の受講を終えて「その先」を考える学生達に対して、「プロジェクト実習」その他各学部で開講されている「2 年次以上向けの地域連携系科目」や課程外の様々な活動を「体系的に」提示し、学生に「選択しうるオプションの全貌」を示すのは、大学としての義務であろう。2017 年度も引き続き改善に向けて努力して行きたい。

## 2: 履修生の多様化の萌芽

2015 年度は、若干名ながら本学他学部からも履修生があり「多様化の芽」が見られたが、2016 年度は再び人文学部生のみとなってしまった。一方で学外においては、以下のような前進が見られた。

①常磐大学からの受講生の復活（III-3）

②茨城キリスト教大学からの履修生の維持（III-4）と、事実上の共同開講授業に繋がる動き（II-3-3）、V-6-(7)）

③既存の高大連携の維持・拡大（II-3、II-5）と、新たな可能性（II-4、II-6）

なお高校生はプロジェクト実習の正規の「履修生」ではないが、特に「直接参画型」の連携形態においては履修生に匹敵する存在感を有することから、①②と共にこの場で③として記すことが適切と判断した。

2017 年度以降の展開が非常に楽しみである。「多様化の芽」が大きく育つよう、学内向けも含めて引き続き努力を続けて行きたい。

## 3: マンパワー問題

こちらについても、大きな前進が見られた。具体的には以下の通りである（V-6-(7)）。

①本学「プロジェクト実習 B」への、教育学部・岩佐淳一先生のご参加（2016 年度～）

②茨城キリスト教大学「プロジェクト実習」への、ジャブコ・ユリア先生のご参加（2017 年度～）

③本学「プロジェクト実習 C」への、人文学部・杉本妙子先生のご参加（2017 年度～）

しかし、①③即ち本学側の前進は、専ら「現行のプロジェクト実習担当教員が個人的にお願いした結果」

である。『2015年度活動報告書』に記した「大学の、組織としての対応の進展」は、2016年度も果たされなかった。財政面や事務職員の支援において、人文学部執行部のご支援には心より感謝している。しかし、プロジェクト実習は2017年度から「卒業要件の一つであるサブメジャープログラム」に組み込まれ、従来の「卒業要件外の選択授業」以上に、大学教育の中にはっきりと組み込まれることとなった（V-6-(1)。「組織としての教育コンテンツを個人の努力で維持し続ける」現在の形態を改め、組織的な運用体制を整えて戴けるよう、改めてお願いしたい。

#### 4:授業改善 –「教員による実施」から「学生への浸透」へ–

プロジェクト実習開講初期は、学生も、また教員自身も「プロジェクトを動かし貫徹すること」に迫られ、プロジェクト自体が目的になってしまう傾向が強かった。その反省から、2015年度は「プロジェクトを通じて何を学ぶのか」を強く意識させるべく、主として4月～5月の立ち上がり期間の授業内容に対して各種の改善を行った（『2015年度報告書』第I章）。その結果学生の意識は間違いなく向上したものの、なお「年度末に至ってこれらの改善が学生に十分根付いていなかったことが判明した」（『2015年度報告書』pp. 211～212）と総括せざるをえないレベルに留まっていた。

プロジェクト実習における授業改善は、初開講以来5年目を迎えて「教員による実施の有無」が問われる段階から「学生への浸透の程度」が問われる段階に来ていると自覚している。かくして2016年度に追加した新たな授業改善は、「改善策の浸透」を基軸としたものとなった（I-2）。また、2013年度の授業改善策の一つとして開始された「先進地実地研修」も2016年度で4年目を迎えた（第IV章）。『2015年度報告書』III-4では、同年度の先進地実地研修報告の締めくくりとして「研修の成果が浸透し、参加者個人ならびにプロジェクト実習全体に明確なレベルアップが見られるようになるまで、まだ暫く時間がかかることであろう。（中略）どうか長い目で見守って戴きたいと願う」と記している。その思いは、勿論今でも変わらない。しかし大きな予算支出を伴う授業コンテンツであるだけに、そろそろ某かの「目に見える効果」が期待されるのもまた無理からぬ所であった。

浸透の程度が問われるのは年度末の活動報告会であったが、幸いにして神田・筆者共に浸透を実感できる結果となった。詳細はIV-4・V-6-(12)を参照されたい。

一方で、今年度の授業運営を通じて新たな課題も浮かんできた。

その第一は、4月～5月の立ち上がり時期の授業スケジュールの過密化とプロジェクト構想の絞り込み不足による活動の停頓である。

これまでの授業改善は、主として立ち上がり時期のコンテンツについて行われてきた。かくして上述の如く一定の成果を上げるに至った訳であるが、結果的に立ち上がり時期のコンテンツが肥大しすぎてしまい、「チーム活動の開始時期が遅れる」「プロジェクト構想の絞り込みが不十分なままに走り出すことになり、時にその後の活動を停頓させる原因となる」という結果を招いてしまった。

2016年度の各回の授業内容はIII-1-(3)に、2015年度段階での教材はVII章に、2016年度に追加した教材はI-2に収載している。プロジェクト実習の当該年度立ち上がり時期の内容が如何に過密になってしまっているかをご理解戴けると思う。解決策としては、これらの内プロジェクト実習履修生以外にも広く需要が見込まれるコンテンツをプロジェクト実習から切り出して、別立ての授業としていくことが考えられる。V-6-(7)でご紹介している、2017年度に開講が決定した3科目を「プロジェクト実習・補強科目群」と仮称しているのは、そのような意図もあってのことである。但しこれには以下の問題があり、おいそれと推進できるものではない。

2017プロジェクト実習 プロジェクト構想			
			作成 年 月 日
*必要に応じて、適宜特筆大/追加して記入して下さい*			
1.チーム名			
2.チームメンバー			
担当	氏名	アドレス (e)	備考
リーダー			
副リーダー			
書記			
会計			
3.プロジェクト名			
第一行にプロジェクト名、必要があれば第二行に副題			
4.プロジェクトの目的 ①) プロジェクトとして何をやるか/達成するか			
簡潔・端的に記す			
5.プロジェクトの目的 ②) プロジェクトを通じて、チームとして何を覚えるか/学ぶか			
言わば「個人の達成目標(ルーブリック)の(チーム版)」と言うべきもの。8)に直結			
簡潔・端的に記す			
6.プロジェクトの概要			
「いつ」「どこで」「なにを」「だれと」「どうやって」を整理して、できるだけ具体的に記す			
文章に加えて、概要を示すフローチャート等があれば理想的			
7.年間スケジュール			
*できるだけ7/10前キ/後半/夜まで校內で記す			
*実地大学の2017年度夏休みは8/12～9/29 実地数は11/11～12 冬休みは12/27～1/5 春休みは2/24～3/31			
*プロジェクト実習の前期中間報告会は夏休み直前・後期キックオフ報告会は後期初週のそれぞれ金、活動報告会プレゼンハーサ			
4は12/2午後・本番は12/9の予定			
8.成果の検証方法・成功の基準			
個人の達成目標ではなく、チームとしてのプロジェクトの成果の検証。4+5を補って、どのような結果が得られれば、このプロジェクトは「成功」と判断できるか?			
9.主な支出項目と予算の調達方法(現時点で想定される支出項目と、そのズレ(0)・赤字(金額))			
支出項目	金額(千円)	調達方法	総予算の調達の計画
		支給	
		支給	
		後日調達	
		外部補助金調達/支給費等での「稼ぎ」etc.	
[項目・金額等に關する補足説明]			
*「支給」は、茨城大学支給のチーム予算 それ以外は「各自調達」			

図 1:2017 年度プロジェクト実習教材「プロジェクト構想書」作成フォーム(案)

- ①選択科目であるプロジェクト実習の、そのまた補強科目をどれほどの学生が受講するか
- ②独立科目として開講するに足るコンテンツを提供しようとすれば、自ずと質的向上・量的増大が必要となり、非常勤講師の支援が必要となる。現状で既に最大限の対応をして戴いており、これ以上の拡充要求は非現実的である。

もう一つの解決策は、コンテンツはそのままに教材や授業運営を工夫して、少ないコマ数でも確実に提供できるようにすることである。これもまた言うは易く行うは難い事柄であるが、上記「プロジェクト構想の絞り込みが不十分なままに走り出す」という現実を踏まえ、2017年度は「構想策定を補助する教材」を準備中である(図1)。2017年度は、現行のコンテンツを圧縮し教材を精選する一方で、教室外でも運用できるこの種のツールを工夫することで、年度始め2ヶ月の過密スケジュールの改善を試みたい。

## 5:リフレクション期間の確保

2017年度は、「高大連携をテーマとしての、活動報告会の水戸地区一括開催」という全く異なる文脈ながら活動報告会が12月10日に終了し(V-1~3)、早い段階で殆どのチームがリフレクション期間に入ることができた。しかしこれはあくまで2017年度の特例事情である。地域連携・地域貢献を掲げるプロジェクト実習B(III-3)としては、現地活動報告会を廃止するという訳にはいかないだろう。また、こみフェスチームは「こみっとフェスティバル」の開催が今年度も2月下旬となったため、授業期間終了後にピーク行事開催という変則日程とならざるを得なかった(III-7)。「大部分のチームは、12月中旬からリフレクション期間に入る」という形に向けて前進したのは収穫であったが、「なお若干のチームは、年度末にリフレクションとピーク行事が錯綜してしまう」という問題は、依然として解消していない。

問題の性質上、完全な解消は不可能である。取り組むべきは、上記「錯綜してしまうチーム」に対して「どのような形でリフレクションに取り組む手段を提供するか」の工夫である。引き続き改善努力を続けて行く。

## 6:成績評価手法の未整備

アクティブ・ラーニング、とりわけPBL授業における成績評価手法はどの大学においても難題であるらしく、PBL授業の普及が全国的に進んだここ1・2年で、当該問題を扱う研究会やワークショップの類は急速に増えたようである。筆者は、本学の就業力育成支援事業の一環としてプロジェクト実習を設計することになった2011年度段階から、積極的にこの種の活動の場に参加して多くの知見を得てきた。しかし、理論としてはともかく「PBL授業の現場(多くは筆者のように専門分野の異なる教員が担当している)で容易に運用できる、精度の高い成績評価手法」には、なかなか巡り会えないでいた。

そんな中、2016年8月19日~21日にかけて東京で開催された有料の「PBLアドバイザー養成講座」を受講した。「PBL授業の評価に纏わる自らの知識・経験を、体系的に整理する場」と期待し、今年度用に学部予算から戴いた「情報収集出張費」の殆どを投入しての参加であった。しかし評価部分の担当予定者の急病により、(評価以外の部分では得る所も多かったが)所期の目的を果たせなかった。その後も成績評価に関する模索が続けたが、結局今年度は目立った改善には至らなかった。『2015年度報告書』第VI章「成果と課題」に記した状況は、方法論的には何ら改善されていない。

一方で、プロジェクト実習の評価手法の重要な柱として位置づけてきた「複数の目による評価」という点に関して申せば、来年度に向けて希望の持てる展開になりつつある。本章の第3節で述べた、新たにプロジェクト実習にご協力下さる先生方の登場である。もとより「これ一発で全て解決」などという手法は存在し得ない。先生方のご支援を仰ぎつつ、些かなりとも評価の精度を上げていく努力を続けて行きたい。

## 7:「その先」の高大連携を目指して

最後に、高大連携の今後について言及しておきたい。高大連携の重要性が改めて注目される中(II-1)、従来型の連携に加えてより広汎な連携—「その先」の高大連携—の可能性が見え始めている(第二章、第五章)。未だ萌芽的と言える部分も多いが、まずは現場を担う者同士での連携の可能性模索から始めて無理のない形で実績を積み上げ、近い将来に予想される動きに備えて行きたい。近隣の高等学校の先生方のご協力を戴ければ幸である。

## VII：資料編

2015年度に教室内での一斉授業で使用した教材。

2016年度もそのまま使ったので、ここに収載する。

但し資料3は、2016年度は「中間評価欄」を加えた改良版を使った（本書I—2—(2)）。

資料1：根力の構成要素ルーブリック

資料2：マインドマップ簡易マニュアル

資料3：個人の達成目標ルーブリック 2015

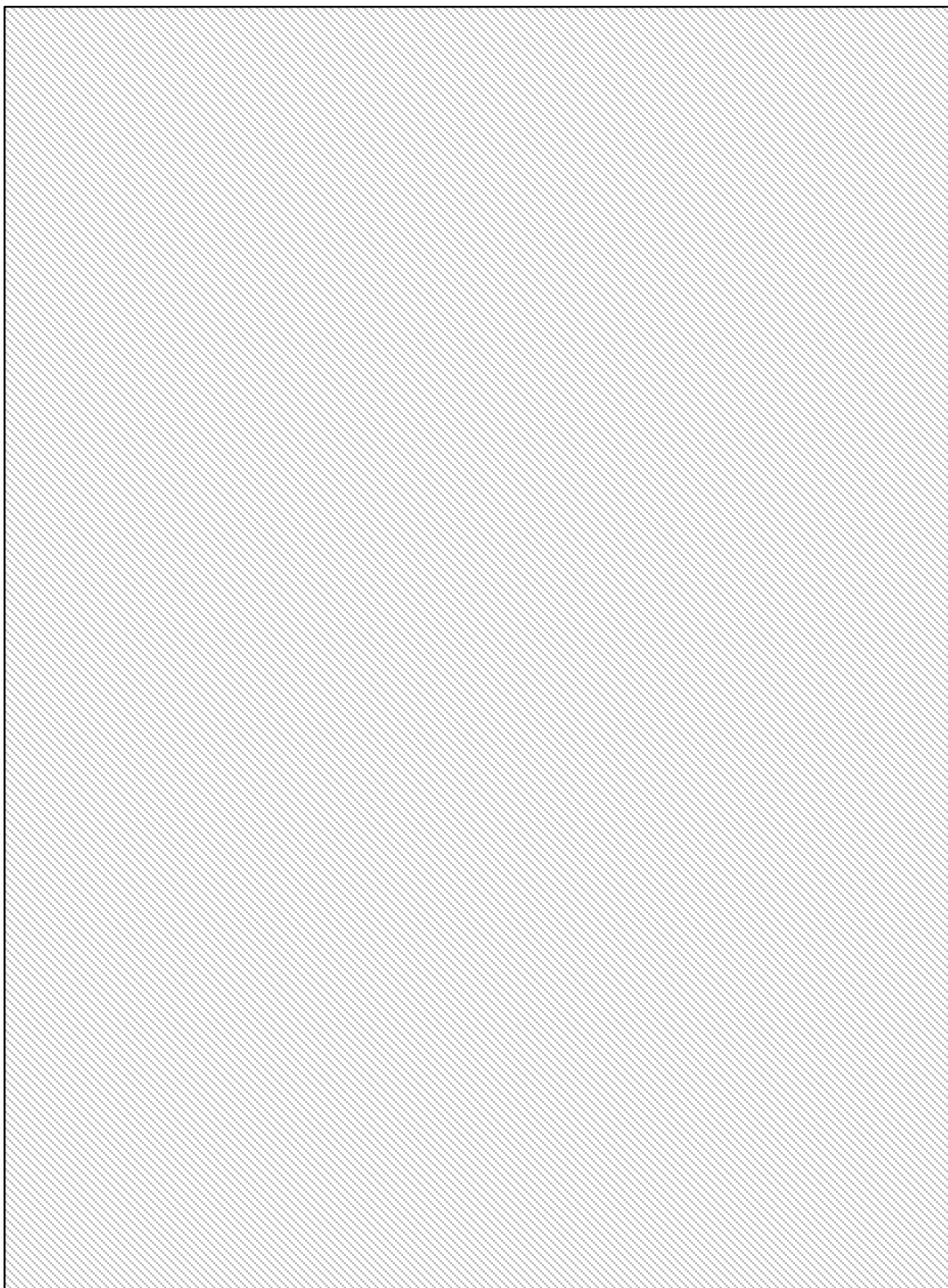
資料4：ブレインストーミングとKJ法

資料5：事例シナリオと課題（学生用）

資料6：事例シナリオ学習の運用と教材の作成（教員用）

資料1:根力の構成要素ルーブリック (1/2 縮小)

根力の構成要素		4	3	2	1	
1 基礎的素養	読み	文章読解能力 論理的思考力 分析力	比較的平易で短い文章であれば、論旨を的確に捉えることができる。筆者の主張を理解・分析し、自らの見解を組み立てることができる	比較的平易で短い文章であれば、ほぼ最後まで読み通し、筆者の主張がある程度までなら理解・分析することができる	比較的平易で短い文章であっても、最後まで読み通すことができない。たとえ読み通せても、筆者の主張を理解・分析することができない	
	書き	文章作成能力 論理的思考力 分析力	特定のテーマについて、論理的に思考・分析することができ、必要な資料をルールを踏まえて提示し、4,000字以上の論旨が明確な文章にまとめることができる	特定のテーマについて、論理的に思考・分析することができ、必要な資料がある程度ルールを踏まえて提示できる。4,000字以上の文章を書き終える経験はない	「つぶやき」的に短い文章を書くことはできるが、論理的な思考や分析を提示することはできない	
	ソロバン	基本的なIT能力	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、初心者に分かりやすく説明することができる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、基本的にマニュアル無しで自力で対応できる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、自力では対応できない	
	話す	説明能力 プレゼンテーション能力 コミュニケーション能力	公の場で、相手の理解度や受け止め方を読み取りながら、説得力のある説明・魅力的なプレゼンができる。質問や批判をコミュニケーションの機会と受け止めることができる	公の場で、論理的な説明やプレゼンができる。アイコンタクト等、聞き手のコミュニケーションに難があり、質問や批判には思わず構構える	ブランクな場では、論理的な説明やプレゼンができる。アイコンタクト等、聞き手のコミュニケーションもとれ、質問にも平穏心で答えられる	親しい人たちとの気楽な会話・コミュニケーションはできるが、第三者への論理的な説明やプレゼンができない
2 社会生活力	自立した生活を実践できる力	起床・食事・登校・各種活動から就寝までの健康的で安定したペースで送ることができる。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなすことができる	起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースが乱れがちである。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなせない(うっかり忘れる)ことがある	起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースがしばしば乱れる。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなせないことが多い	起床・食事・登校・各種活動から就寝までの健康的で安定したペースで送ることができない。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなすことができない	
	人間関係構築力	生活を送る上で必要な、人間関係を円滑にするための力	差別的物言いや不正な対応をしない等の基本ルール、並びに挨拶や場に応じた言葉遣い・態度がとれる等の基本マナーを、常に確実に遵守できる	差別的物言いや不正な対応をしない等の基本ルール、並びに挨拶や場に応じた言葉遣い・態度がとれる等の基本マナーを、時に進めることがある	差別的物言いや不正な対応をしない等の基本ルール、並びに挨拶や場に応じた言葉遣い・態度がとれる等の基本マナーを、遵守できない	
	情報収集力	生活を送る上で必要な情報のありかや、入手方法を把握する力	書籍を含む各種メディアや人脈等を広く活用して、情報の入手方法を的確に把握し、必要な情報を確実に入手できる	情報のありかも情報入手するための新たなルートの開拓方法を把握している。しかし各種メディアの活用や人脈等が不十分で確実性に難がある	生活を送る上で必要な情報のありかはある程度把握している。しかし情報を入手するための新たなルートを開拓する方法は分からない	生活を送る上で必要な情報のありかが分からない。どうしても情報は入手できずかまからない
	主体性	物事に進んで取り組む力	物事を自分の問題として受け止め、指示や命令・切迫した必要などが無くても、自らの定見・計画に基づき、自主的に判断して取り組むことができる	明確な義務を伴う事案については、責任感から率先して取り組むことができる	自らの利害や、興味関心が強い事柄については、自主的に取り組むことができる	指示や命令・切迫した必要があっても、できるだけ他人の後に付いていくことを考え、積極的に取り組むことができない
3 行動力	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	立場の異なる人や初対面の人にも、課題について説得力のある説明をし、協力を促すことができる。また、自分の意見を固執せず全体を纏めることができる	学生同士など、立場の近い人に対しては、さほど親しくなくとも課題を分かりやすく説明し、協力を促すことができる。また他のメンバーへの気配りもできる	親しい友人に対しては、課題について説明し、協力を促すことができる	第三者に対して課題を説明し、協力を促すことができない。或いは、協力は促せるが発言の独り占め・攻撃的言動等で協力者の意欲を阻害させがらである
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	明確な目的を設定し、自分の能力や客観的な諸条件を的確に踏まえた計画を立て、迅速かつ粘り強く行動していることができる	目的を設定し迅速に行動していくことができるが、計画性に難があり、迷走することもある	目的を設定し、行動して行くことができるが、迅速さや粘り強さに難があり、所期の目的を達成できないこともままある	目的を設定できない。あるいは設定してもその達成に向けて確実に行動することができない
	対応力	物事に流されず疑問に思い主体的に対応する力	賛同者の多寡・声の大小に拘わらず、客観性や自らの定見に照らして疑問がある事柄には、関係情報を検討・確認した上で主体的に対応できる	賛同者の多寡・声の大小に拘わらず、自分の意見に合わないものであれば反対の意思表示をすることができる	賛同者の多い意見や、「声の大きい」意見に疑問を感じることもあるが、取敢えず主張することはしない	賛同者の多い意見や、「声の大きい」意見には、疑問を抱かず従ってしまいがちである
	課題発見能力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	現状を分析し、背景や原因を追究した上で、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握し、明確に言語化して第三者にも提示できる	現状を分析し、背景や原因を追究した上で、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握できるが、明確に言語化することができない	現状を分析し、背景や原因を追究することはできるが、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握することができない	現状を、漠然とした諸事象の集合としてしか認識できず、分析や課題発見ができない
4 思考力	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	解決の為にプロセス案を複数用意でき、最善の物を選んで解決までの具体的手順・作業内容・時間配分等を、チーム活動のレベルで構築できる	解決の為にプロセスを立案し、解決までの具体的手順・作業内容・時間配分等を、個人活動のレベルで構築できる	解決の為にプロセスを立案することができない。或いは、立案はできるが解決までの道筋を構想できない	
	想像力	課題が抱える影響課題解決方法の影響等、ものごとをイメージする力	課題自体や解決に向けた取り組みがもたらす影響といった「目に見えない物」について明確なイメージを持ち、その得失を念頭に的確な対応ができる	「目に見えない物」をイメージでき、その得失を念頭に考えるが、イメージの多様性と明確さに難があり、的確な対応策を描けない	「目に見えない物」をイメージし、その得失を念頭に考える必要性は認識しているが、明確なイメージを描けない	課題自体や解決に向けた取り組みの影響といった「目に見えない物」についてイメージすることができない。またイメージする必要性を自覚しない
	課題解決能力	課題の本質を捉え、適切な解決に導く力	課題の本質を捉え、解決のための勘所を明確にした上で、具体的な取り組みに必要な条件を整えて確実に解決に導くことができる	課題の本質を捉えることができ、解決のための勘所を明確にできるが、具体的な取り組みに必要な諸条件の整備に難があり、失敗も多い	情報を客観的に分析して課題の本質を捉えることができるが、解決のための勘所を捉えることができず、適切な解決に導くことができない	周辺情報や個人的利害・感情等に囚われて、課題の本質を捉えることができず、課題解決に取り組めない
	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	自分の意見を、相手の立場や前提となる知識・文化的背景の違い等も視野に入れて整理し、分かりやすく説得力のある内容・話法で伝えることができる	自分の意見を論理的に整理し、知識・文化の共有が乏しい相手に対しては、その共通性に依拠しつつ分かりやすい内容・話法で伝えることができる	自分の意見を、家族や友人等、基盤となる知識・文化を共有する相手に対しては、その共通性に依拠しつつ分かりやすい内容・話法で伝えることができる	自分の意見を整理し、分かりやすい内容・話法で伝えることができない
5 チームワーク・キング能力	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	話者が話しやすい環境を作り、適切なタイミング・内容の質問等で話者の意図を更に引き出しつつ、最後まで集中力を切らさずに聴くことができる	話者が話しやすい環境を作り、最後まで集中力を持って聴くことで、話の筋を正確に把握できる	一見最後まできちんと聴いているが、集中力が続かず、話の筋を正確に把握できない	目を逸らしたり話の腰を折ったりして、話者にとって話しにくい条件を作ったり、注意力を切らして最後まできちんと聴くことができない
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	相手の意見・立場になって考え、「違う」ことを前提に、相手を理解することができる。自分の意見に固執せずアドバイスを進んで受け入れられる	自分と異なる意見・立場があることを認識でき、アドバイスも素直に受け入れることができる	自分と異なる意見・立場への違和感が強く、アドバイスを受け入れることに抵抗感が強い	自分と異なる意見・立場が存在することを許容できない。アドバイスを攻撃と受け止め、受け入れることができない
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	組織における自分の責務を正確に認識し、自分の意思や言動が相手にどう影響するかを考慮しつつ、組織全体を視野に臨機応変な対応ができる	組織における自分の責務を正確に認識し、組織全体を視野に入れて行動しているが、相手への影響を気にしすぎて臨機応変な対応ができない	「組織の構成員としての自分」という意識はあるが、自分の意思や言動が相手にどう影響するかという意識に乏しく、臨機応変な対応ができない	「組織の構成員としての自分」という意識が無く、物事を自分中心にしか考えられないため、臨機応変な対応ができない
	規律性	社会のルールや人の約束を守る力	法令や規則は勿論、チーム内での取り決め等についても、決められたことは不本意でも遵守する。高い倫理観を持ち、自ら公平公正に努める	法令・規則・チーム内の取り決め等、明確に決められたことには従うが、公平公正等、本人の倫理観に拠る事柄への意識は高いとは言えない	罰則を伴う法令や規則等は遵守するが、チーム内の取り決め等は軽視する。公平公正への意識が低く、往々にして我田引水に陥る	時間厳守等、社会常識レベルの取り決めも遵守できない。公平公正への意識が低く、しばしば我田引水に陥る
	ストレスコントロール力	ストレスに発生源に対応する力	ストレスを感じても成長の機会と前向きに捉え、平穏心で冷静な判断を下しつつ課題を遂行できる。また、気晴らしの方法を持っている	ストレスを感じても平穏心で冷静な判断を下しつつ課題を遂行できる。しかし前向きに捉えたり気晴らしをすることはできず、不満を蓄積させる	ストレスを感じても投げ出さず、概ね適切に判断し課題を遂行できる。しかし気晴らしの方法もなく、終始イライラして攻撃的になる	ストレスを感じると、適切な判断や課題遂行ができなくなる。気晴らしの方法もないため、終始イライラして攻撃的になる



個人の達成目標ルーブリック		学籍番号:	氏名:		
(1) 根力の構成要素	(6) 比重	(3) 卒業時の理想像	(5) 2015年度末にできればここまで達成したい	(4) 2015年度末にここまで達成したい	(2) 現状

**\*2015年度のプロジェクト実習の履修を始めるに当たり、現状と年度末の達成目標を文字にして確認しておきましょう**

(1)の水色部分に、根力の構成要素ルーブリックで選んだ「プロジェクト実習履修を通じて強化したい項目」をコピーして下さい  
(2)の黄色部分に、自分の現状を記して下さい。**根力の構成要素ルーブリックの文言を踏まえつつ、自分の言葉で記して下さい**  
(3)の黄色部分に、「2015年度末での実現可能性」とは一切関係なく、「卒業時に、こうなれたら理想・こうなることが目標」という姿を記して下さい  
(4)の黄色部分に、「2015年度末には、ここまで実現したい」という事柄を記して下さい(ハードルが高くなりすぎないように設定するのがコツです)  
(5)の黄色部分に、「2015年度末に、できればここまで実現したい」という事柄を記して下さい(ちょっと大変だけれど、頑張れば何とか・・・というレベルを設定するのがコツです)  
(6)の桃色部分に、それぞれの項目にかける比重を10刻みで全体が100になるように記して下さい(例えば、上から順に「60」「30」「10」という具合にリハビリをつけるのがコツです)

**\*黄緑部分は、年度末のリフレクションで使用します。当面、空欄にしておいて下さい**

資料3: 個人の達成目標ルーブリック (1/2 縮小)

**ブレインストーミング (BS) と KJ 法の心得**

**1: BSはアイデア出し。**  
**難しいことは考えず、とにかく質より量で発言する。**  
**大脳はお休みさせて本能と感性の赴くままに「垂れ流す！」**

そのために

(1)質より量: 一言でも多く発言する  
(2)自由奔放: 他人の目を気にしない。変な見栄や遠慮はNG  
(3)尻馬推奨: 他人の意見を踏まえて「さらにこんなことも・・・」というアイデアを出す  
(3)批判厳禁: BS はひたすらアイデアを出す場面。議論の場ではない。批判は(1)~(3)の障害となり、BS 全体の意義を損なうので厳禁!!

**2: KJ 法は構想の取りまとめ。BS とは打って変わって大脳全開!**

第1ステップ: カードをばらばらに広げる。  
第2ステップ: 関連性のあるカードを重ね、見出をつける。  
第3ステップ: 第2ステップで作った小グループの見出を眺めながら、親近性のあるグループをより大きなグループへとまとめていく。  
第4ステップ: グループ間に論理的な関連性ができるよう大グループのカードの束を並べ替える。→配置の意味する内容を、ストーリーのようにつないでしゃべれるようにする、のがコツ。  
第5ステップ: 大グループごとに、中身を検討。  
第6ステップ: 完成形を記録 (写真等)  
第7ステップ: 記録を見ながら、すべてのグループのうちどれが重要/やりたいと思うかを議論。(上位3~5件を選出する投票も有効) 合意形成へ。

**KJ 法の手順**  
(川喜田二郎『発想法』中公新書、1967年;『続・発想法』中公新書、1970年)

第1ステップ:  
まず、BS等の手法で作られたたくさんカードをばらばらに広げてみます。

第2ステップ:  
カードに記載された「1行見出し」を眺めながら、関連性のあるカードを重ねていきます。最後に、それぞれのグループの内容を簡潔に表す見出し＝「表札」をつけて上に載せます。その上で、それぞれのグループのカードを輪ゴムで束ねます。  
\*第2ステップの作業では、以下の点に注意して下さい。  
・1グループのカードは最初は枚数程度。はじめから大きくまとめようとしない。  
・1枚のまま残る「一匹オオカミ」があってもかまわない。無理に他のグループと一緒にしない。

第3ステップ:  
第2ステップで作った小グループの「表札」を眺めながら、互いに親近性のあるグループを中グループにまとめます。この作業を何度くりかえし、10近くの大グループにまとまったらグループ化作業は終了です。  
大グループにも表札をつけますが、グループ分けがすべて終わってからというのではなく、カード全体の3分の2程度がまとまってきたところで、グループ分け作業と並行して表札作りを進めて下さい。

第4ステップ:  
ここからいよいよ論理的整理の段階に入ります。グループ間に論理的な関連性ができるよう大グループのカードの束を並べ替えます。「空間配置」と呼びます。配置の意味する内容を、ストーリーのようにつないでしゃべれるようにする、というのがコツです。

第5ステップ:  
空間配置ができたら、カード束の間隔を広げ、それぞれ1段下の段階までくくります。その上で、もとのグループの範囲内で、ただし隣接する大グループ(およびその1段下の束)との親近性に注意しながら中グループレベルの空間配置を行います。これでカードの作業は終了です。

第6ステップ:  
カードで作った空間配置を別の紙に写し取るのが次のステップです。その際、上の図のように、グループ間の関連の内容を示す記号を使って、空間配置の論理連絡が分かるようにします。たとえば次のような記号を使います。

第7ステップ:  
いよいよ最後のステップです。図を見ながら、すべてのグループのうちどれが重要と思うか、各自最高5点から1点の幅で点数をつけます(6番目以降は点数をつけない)。総得点が最も高い5つのグループをゼミでのグループ研究のテーマとします。研究にあたっては、KJ法によってえられた中テーマ等が主要な研究項目となるでしょうし、また図解の「因果連鎖」も重要な指針を与えてくれるでしょう。

資料4: ブレインストーミングとKJ法 (1/4 縮小)

資料 5: 事例シナリオと課題 (学生用・1/4 縮小)

### 事例シナリオC

#### 「学外者を巻き込んだ国際交流イベント」

※ Z さん: 水戸第六中学校長。59 歳。自校の教育の国際化に熱心。大学生・留学生と中学生の交流の場を設けて、「海外」「異文化」に目覚めさせたいと強く思っているが、現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z: 中学生は海外といっても実感がありません。貴学の留学生や留学経験者と交流の場を作って、我が校の教育の国際化を進めたい。いいプランを考えてください。

A: 海外とか興味ね。言葉通じねえかつたるんだやね。

B: 留学生や留学経験者との交流で疑似海外体験か。よくあるパターンだね。

C: ピンゴとかあ〜ツイとかあ〜。いろんな国のお料理を作れないかな? かわいい民族衣装、着てみた〜い。

D: よし、じゃあさっそく会場を押さえよう!

A: だりい。ガキンチョ集めてチアパッパなんて、やってらんね。

C: かわいい民族衣装でえ〜。留学生のお自慢料理を出してもらったらあ〜。きつと女の子は大喜びだよ〜。夕方になったらライトアップしてえ〜。お国別にパレードやって〜い。

A: おい、C が一人で TDL 行っちゃってるぜえ〜。

B: そもそもここで言う「国際化」って何なんだ? 経産省じゃないんだから WASP 標準にすり寄ることじゃないよな。それに次女の留学生は中・韓・マレーシアが御三家だし...

D: 早速グーグル! え〜と、まずは「中学」「留学生」「国際化」ってお!

A: そんな検索じゃ、欲しい情報なんて出てこねえじゃね? ややるわあ。かしてみ。

C: じゃあ私、留学生の友達を誘ってくるね〜い。

B: いや、そうじゃなくて! 第一に、この催しでどういう成果が上げられれば Z さんの課題に応えられたことになるかを考えなきゃ。それと留学生に協力してもらう以上、彼らにもメリットがなきゃいけないし... そうだ、Z さんはどういった流れをお望みなんですか?

Z: え? ... いや、その、留学生と交流すれば国際化が進むだろうなあと...

B: 交流会の前と後に、中学側ではどんな授業をお考えですか?

Z: いやあ... 先生方も忙しいから...

A: 調べたの、ここ置いてくぜ。他、バイトあつから先導するわ〜。

D: こらっ、待てえ! みんなで協力して取り組めって言われてっだろ!

A: バ〜イ

B: へ〜。短時間でよくここまで調べたな。まずはこれで情報共有から始めようか?

D: よし、B。お前リーダーやれ。ほら、あるだろ。ブレインストーブとか何とか言うの。

B: ブレインストーミング! でも僕は知的分析者だ。リーダーなんて勘弁してくれ。

### 事例シナリオ課題

(1) 課題 1・3・4 は、課題文の直下に記入して下さい。必要に応じて行を追加して下さい。

(2) 課題 3 は、シナリオに赤字で直接書き加えて下さい。

(3) 5/28・13/30 までに、レナシティ「課題 02 事例シナリオ解答」に提出して下さい。

(4) 5/29 の授業に、プリントアウトを一部持参して下さい。「文字カウントの仕方」部分は不要。

**課題 1**  
シナリオ A~D の中から、自分の所属カテゴリに相当するものを選び、登場人物 A・B・C・D の、それぞれのキャラクター(「良い所」と「悪い所」の両方)を、下記の例を参考に「< >」に記して下さい。

例>  
X: 良い所: 日記り・気配りが得意で名サポーター。  
悪い所: 引っ込み思案で積極性に欠ける。

**課題 2**  
あなたのキャラクターを念頭に「登場人物 E」を設定し、「自分だったら、多分無意識にこういう行動・言動をとるだろう」(＝現状の自己分析)という内容を、このシナリオに 3~4 箇所、書き加えて下さい。

→選択したシナリオの当該箇所を空白行を設け、赤字で書き込んで下さい。

→シナリオには、予め 1 頁当たり 4~6 行の余裕が設けてあります。文言を工夫して、できるだけ 1 頁に収まるように記して下さい。

**課題 3**  
あなたがこのチームの第 5 のメンバーで、かつリーダーに選出され(てしまっ)たとします。「学外者を巻き込んだ国際交流イベント」という課題に、このチームを率いてどのように取り組んでいきますか?

→この下に、黒字で記入して下さい。長さは自由です。

**課題 4**  
あなたが今後このチームの有力な戦力として課題に取り組んでいくためには、どういう風に行動していくべきか(＝行動目標)を、先に規定した「この授業で高めたい能力(ねらから)構成要素」に即して、またあなたがチーム内で実際に担う役割(リーダー・サブリーダー・書記・会計・渉外...)等を踏まえて、400 字程度にまとめて下さい。

→この下に、黒字で記入して下さい。文字カウントの方法については、最終頁を参照して下さい。

資料 6: 事例シナリオ学習の運用と教材の作成 (教員用・1/4 縮小)

### 事例シナリオ学習の運用と教材の作成

事例シナリオを用いた授業は、プロジェクト実習 A~D の履修学生が一堂に会し、各自の所属する A~D のカテゴリ用の「事例シナリオ」を読んで、「事例シナリオ課題 1~4」(以下に収載)に取り組む、最終的に「履修者全員としての答え」を作成するという内容です。

具体的な授業は、以下の手順を進めます。

- (1) 教員側は、プロジェクト実習 A~D それぞれに合わせて 4 種類のシナリオ(＝「事例シナリオ A」「同 B」「同 C」「同 D」)と、A~D に共通の「事例シナリオ課題」を 1 種類準備する
- (2) 学生は、自らの履修するカテゴリのシナリオを選択する
- (3) その上で「事例シナリオ課題」への「個人としての解答」を作成する
- (4) (3) を、プロジェクト実習 A~D のカテゴリごとにグループを組んで議論し、「グループとしての解答」を作成する
- (6) その上で、プロジェクト実習 A~D のカテゴリを越えて、それぞれの「グループとしての解答」を共有・議論し
- (7) 最終的に、「プロジェクト実習履修者全体としての解答」を作成・共有する

意図する所は

- (1) プロジェクト実習履修者がこれらに遭遇するであろう状況を、デフォルメされたキャラクターで構成されたシナリオで疑似体験させ
- (2) チームメンバーそれぞれの個性を分析し
- (3) チーム活動において、個性を異にするメンバーそれぞれの「あるべき姿」を考えさせ・議論させ
- (4) 議論の結果と自らの姿を対比させることで、今後、現実の活動の中で自らが採るべき行動・言動について「あるべき姿」を自覚させる所にあります。

このため、教員が準備する 4 種類の事例シナリオには

- (1) シナリオ中で示される具体的な問題状況は、プロジェクト実習 A~D それぞれの状況を踏まえた・履修者にとって実感が持てる内容であることが必要であると同時に
- (2) 登場人物のキャラクターや、発生する問題が統一的に定義されていることが必要となります。

以上のことから、今年度の「事例シナリオ」は

- (1) 学生 A~D 並びに課題提案者 Z 氏のキャラクターを設定し、「プロジェクト実習 C (異文化交流・国際理解)」で想定される問題状況を念頭に、「事例シナリオ C」[編者注・本章図 17]を作成し
- (2) 事例シナリオ C を雛形とし、「プロジェクト実習 A (総合)」「同 B (地域連携・地域貢献)」「同 D (HPL 型インターシップ)」それぞれで想定される問題状況を念頭に、「事例シナリオ A」「同 C」「同 D」を作成するという手順で作成しています。

※キャラクターは、分かりやすくデフォルメします。

- (1) 学生自身に構想させるため、提案者は「独自の構想を持っていない」キャラクターに設定する。
- (2) プロジェクトメンバー 4 名は、良くも悪くも個性的で協調性に乏しいキャラクターに設定する。  
→提案者は丸投げ状態、プロジェクトメンバーは協調性なしという条件下で、対応を考えることが学びに繋がる。

**プロジェクト実習 A 用**

事例シナリオ A  
「商店街を元気にするプロジェクト」

※ Z さんは水戸市東町四丁目で定食屋を営む 59 歳。従来、人通りの少なくなった商店街の行く先(家)に顔を出さず、昔のうに人に呼びかけ(呼び戻し)と強く思っているが、現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z: 町の大通りでは、昔多く利用者が集まっていたけど、今じゃほとんど人が来ないよ。でも、昔のうに顔を出して、呼び戻して、商店街を元気にしたい。いいプラン考えてほしいよ。

A: じゃ、人助けの心、よろしくね。ね、分りだろ。わかんな〜。

C: 土曜のうにだけ定食屋を営むのやね。週 5 日営業のうに営業を止めて「お国」にみよ〜にするの、どうですか? ちよとっつ、いろいろ食べ歩きをしてみたい〜い。

D: いいんじゃない? 一丁目が四丁目まで、届かばいい。あつたか?

A: イベントで中心街の賑わいを、よさあつた〜。

B: だりい。お前も、お国をいっしょに走らなくか?

Z: だりい。お前も、お国をいっしょに走らなくか? みんなでやれよう。

B: ちよとっつ、届かばいい。俺らが走らんてじゃないよ。商店街の人、みんな顔を出さなくか? それに、...

D: じゃ、アゲてやるわ! え〜と、「イベント」「販促」「店舗」って

A: そんな検索じゃ、ダメなものはわ。俺がやるわ。かしてみ。

C: じゃあ、先週お国に研修先があるか。調べてみて。あつた〜い。

B: いや、あつた。お国をいっしょに「お国」をいっしょに走らなくか? それに、...

Z: え、ええ、まあ... そうでしようね。...

B: この催しの多さいね

Z: いやいね

A: 調べたの、ここ置いてくぜ。他、バイトあつから先導するわ〜。

D: こらっ、待てえ! みんなで協力して取り組めって言われてっだろ!

A: バ〜イ

B: へ〜。短時間でよくここまで調べたな。まずはこれで情報共有から始めようか?

D: よし、B。お前リーダーやれ。ほら、あるだろ。ブレインストーブとか何とか言うの。

B: ブレインストーミング! でも僕は知的分析者だ。リーダーなんて勘弁してくれ。

**事例シナリオ B**  
「奥山カボチャのブランド化」

※ Z さんは提案者。環境・食料に熱心で、奥山村で長年「食糧」販売の仕事を営む。奥山の産物であるカボチャのブランド化を推進している。現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z: 奥山の産物であるカボチャのブランド化を推進している。現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z: 奥山の産物であるカボチャのブランド化を推進している。現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

**事例シナリオ C**  
「フェスティバルを成功させるプロジェクト」

※ Z さんは提案者。環境・食料に熱心で、奥山村で長年「食糧」販売の仕事を営む。奥山の産物であるカボチャのブランド化を推進している。現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z: 奥山の産物であるカボチャのブランド化を推進している。現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

Z: 奥山の産物であるカボチャのブランド化を推進している。現時点では「願望」レベルに留まっており、独自の「情報収集」「分析」「課題設定」「企画」はない。

**【プロジェクト実習 B 用】**



## おわりに

神田 大吾

プロジェクト実習は教室で始まり、教室で終わる。その認識を新たにした一年間であった。

プロジェクト実習は年度当初から 6 回、教室内で講義と実習を行った後、授業時間外でのチーム活動が始まる。キャンパスから外に出て行われる活動では、学外のご協力者の方々にたいへんお世話になった。キャンパス内のチームミーティングに遠路お出でいただくことも数知れず、多岐に亘る活動を最後まで支えて戴いた。毎年変わらず多大なお力添えを戴いている重みを意識すればこそ、教室の中で行われる授業にどれほどの成果があったか、教員は常に自問自答しなければならない。

学生が主体的に学ぶよう促すアクティブ・ラーニングが世間で喧伝されて久しく、あたかも万能の学習方法であるかのように説く書物が次々公刊されてはいるが、教育現場での議論は既に第二段階に入っている。大学教育を研究対象とする全国組織「大学教育学会」でも「アクティブラーニングの効果検証」と題する共同研究が行われている（2015～17年）。アクティブ・ラーニングの長所と短所を直視しながら、現場の教員は前に進んでいかねばならない。プロジェクト実習において、個々の学生の取り組み方には濃淡があり、アクティブに学んで成長する度合いに差があることは否めない。教室内で学生は何をどこまで学び、外での活動を終えて再び戻って来た学生は教室で改めて何を身につけるか。瞳を輝かせて教室に入ってくる学生と、多忙の合間を縫ってご協力くださる皆様のご期待に応えるべく、一年間を振り返り、決意も新たに新年度の授業に臨む覚悟である。

## 後 記

神田 大吾  
鈴木 敦

お陰様で2016年度のプロジェクト実習はつつがなく30回の授業を実施することができました。学生の根力を多面的に育成するという授業の性質上、今年度もまた多くの方々にお世話になりました。本書第I章から第VI章までの文中では紙幅の制約からお名前を挙げることはできませんでしたが、末筆ながらここに記して謝意を表します。個別の事柄で既にお名前を挙げた方々でも、授業全体に戴いたご支援について感謝の意を表したく、重複はご容赦ください。

プロジェクト実習A・B・C・D全般の授業運営に対して

・COC地域志向教育支援プロジェクト経費

から直接的な予算支援を戴きましたことに感謝申し上げます。また、3大学1高校での運営に関して

・上野尚美先生はじめ茨城キリスト教大学教職員の皆様

・村山元理先生はじめ常磐大学・常磐短期大学教職員の皆様

・青砥武夫校長先生・新堀俊博先生はじめ茨城県立水戸農業高等学校教職員の皆様

から戴いたご協力の数々に篤く御礼申し上げます。

授業の基盤をなすプロジェクト課題をご提供くださり、チームが成立すればお仕事の合間を縫って惜しめないご支援を頂戴している

・小林信房様・豊田紀雄様はじめ一般財団法人里美ふるさと振興公社の皆様

・里川カボチャ研究会会長荷見誠様・奥様はじめ常陸太田市里美地区の皆様

・須藤文彦様・橋崎真哉様・沼田望様はじめ水戸市役所の皆様

・宮本紘太郎様はじめDomaineMITO株式会社ならびに泉町二丁目商店街振興組合の皆様

・小島哲夫様・西島佳子様はじめ株式会社JTB関東法人営業水戸支店の皆様

・吉川昌吾様・川口高弘様はじめNTTコミュニケーションズ株式会社の皆様

に深く感謝申し上げます。本学人文学部専門科目としての運営について

・佐川泰弘学部長・田中裕副学部長・石井利男事務長はじめ教職員の皆様

から戴いたご助力に御礼申し上げます。

年度末活動報告会において会の趣旨説明をした鈴木は、プロジェクト実習で今年お世話になった方々のお名前をすべて挙げるならば「それだけで私の発表の持ち時間15分がなくなってしまいます」と述べました。この後記も同じです。2016年度を振り返り、学生の活動の節目節目でお世話になったあの方、この方のお名前を書き記して参りましたが、もはや紙幅が尽きました。皆様方のお力添えに改めて篤く御礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、報告書の体例からは些か外れてしまうかと存じますが、一言、申し上げます。

本学人文学部事務長補佐 廣木康男様におかれましては、本年3月末日を以てご定年を迎えられます。廣木様には、プロジェクト実習の立ち上がり時期より一貫して後ろ盾となって戴きました。予算や施設の確保、催事における実務上のバックアップ等、いわゆる「事務系のお仕事」は言うに及ばず、他学部との連携や学外の協力者のご紹介、更にはプロジェクト実習の運用に関する様々なアイデアのご提供まで、担当教員にとっては「もう一人の担当教員」「相談役」とも言うべきご支援を戴きました。同じ大学に籍を置きながらも、職員と教員とでは職掌は勿論、勤務形態も異なることから思うように連携が出来ないこともままございます。しかしプロジェクト実習においては、お陰様で理想的な教職連携の下、順調に仕事を進めることができました。末尾ながら記して深甚の謝意を表します。ありがとうございました。

2016 年度 根力育成プログラム

「プロジェクト実習」

活動報告書

平成 29 年（2017）3 月 27 日刊行

編集 神田大吾 鈴木敦

発行 茨城大学人文学部根力育成プログラム小委員会

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1

茨城大学人文学部

e-mail [daigo.kanda.8139@vc.ibaraki.ac.jp](mailto:daigo.kanda.8139@vc.ibaraki.ac.jp)

印刷 佐藤印刷株式会社